(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第18集

史　跡
加　納　城　跡　2

2010

岐阜市教育委員会
(財)岐阜市教育文化振興事業団

加納城跡本丸（北東から）

加納城跡本丸（東から）

例　言

1. 本書は岐阜市加納丸之内に所在する史跡加納城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は史跡整備の基礎資料を得るために岐阜市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成15年度から平成21年度まで行われた第2期分が対象で、委託者・岐阜市教育委員会の指導のもと、受託者・(財)岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所が実施した。
4. 平成17年度～21年度の調査は、まちづくり交付金を受けて行った。
5. 各現地調査及び整理作業の期間、調査組織は次のとおりである。

【平成15年度　9次調査】　平成15年7月22日～8月27日

岐阜市教育委員会		**(財)岐阜市教育文化振興事業団**	
教育長	安藤　征治	理事長	佐藤　俊正
社会教育室室長	後藤　敏朗	埋蔵文化財調査事務所所長	今尾　嘉隆
文化財グループ	内堀　信雄	調査担当	恩田　裕之

【平成16年度　10次調査】　平成16年9月24日～11月8日

岐阜市教育委員会		**(財)岐阜市教育文化振興事業団**	
教育長	安藤　征治	理事長	佐藤　俊正
社会教育室室長	後藤　敏朗	埋蔵文化財調査事務所所長	西村　覺良
文化財グループ	内堀　信雄	調査担当	恩田　裕之

【平成17年度　11次調査】　平成17年9月26日～12月16日

岐阜市教育委員会		**(財)岐阜市教育文化振興事業団**	
教育長	安藤　征治	理事長	多田喜代則
社会教育室室長	後藤　敏朗	埋蔵文化財調査事務所所長	西村　覺良
文化財グループ	内堀　信雄	調査担当	恩田　裕之
			山田　宜久

【平成18年度　12次調査】　平成18年9月22日～12月28日

岐阜市教育委員会		**(財)岐阜市教育文化振興事業団**	
教育長	安藤　征治	理事長	河合　　浩
社会教育室室長	後藤　敏朗	埋蔵文化財調査事務所所長	西村　覺良
文化財グループ	内堀　信雄	調査担当	恩田　裕之
			山田　宜久

【平成19年度　13次調査】　平成19年11月26日～平成20年3月17日

岐阜市教育委員会		**(財)岐阜市教育文化振興事業団**	
教育長	安藤　征治	理事長	河合　　浩
社会教育室室長	川瀬　雅男	埋蔵文化財調査事務所所長	薮下　　浩
文化財グループ	内堀　信雄	調査担当	恩田　裕之

【平成20・21年度　14次調査・整理報告】 平成20年９月16日～12月12日

岐阜市教育委員会		(財)岐阜市教育文化振興事業団	
教育長	安藤　征治	理事長	飯沼　隆司
社会教育室室長	川瀬　雅男	埋蔵文化財調査事務所所長	薮下　　浩
文化財グループ	内堀　信雄	調査担当	恩田　裕之

6. 発掘調査参加者は次のとおりである。

調査補助員

川橋靖子・高木優子・沢田伊一郎・棚橋英子・村瀬清則・横井聡子

作業員

安藤久子・江崎隆己・太田美代治・大洞勝巳・大山敏郎・大山幸子・加藤定男・加藤久淳
可児　昇・茅野則治・河合弘公・木村久美雄・小森たまみ・坂井田米子・澤田　勇
澤田順子・澤田富士夫・清水邦夫・清水寿子・鷲見竜雄・田中真美・辻　幸佑・辻　唯人
辻　春美・長井和美・那須勝哉・林　高司・広瀬孝一・伏見信孝・堀　成夫・牧野利治
三島　彰・村井悦子・村瀬　彰・山本禮三・渡辺健一・渡邊重子

7. 整理作業は各年度に随時行い、平成21年度に報告書刊行作業を行った。
8. 本書の編集及び執筆は恩田が行った。
9. 遺物の写真撮影は佐藤右文氏が行った。
10. 現地調査及び整理作業の過程で次の方々及び機関にご指導・ご協力を頂いた(敬称略)。記して謝意を表するものである。

家田　淳一　　尾野　善裕　　藤澤　良祐　　渡辺　博人
梅崎　惠司　　小笠原　清　　筧　真理子　　中井　　均
中嶌　　茂　　八賀　　晋　　平井　　聖
愛知学院大学考古学研究室　加納まちづくり会　岐阜市歴史博物館

11. 調査記録及び出土遺物は岐阜市が保管している。

目　　次

1. 加納城跡の地理的環境と歴史的環境
1-1. 地理的環境 …… 1
1-2. 周辺の遺跡と歴史的環境 …… 1
1-3. 加納城の歴史 …… 5
1-4. 加納城の立地と縄張り …… 7
2. 発掘調査の成果
2-1. 加納城の基本層序と微地形 …… 11
2-2. 「加納城跡」遺跡の出土遺物 …… 13
2-3. 本丸堀跡の調査
2-3-1 本丸北堀 …… 16
2-3-2 本丸大手北堀(9・10・11次調査) …… 17
2-4. 本丸内の調査
2-4-1. 本丸内(12次調査) …… 67
2-4-2. 本丸大手枡形(13・14次調査) …… 82
3. 自然科学分析
3-1. 本丸大手北堀出土の大型植物化石 …… 164
3-2. 本丸大手北堀の花粉化石群集 …… 165
3-3. 本丸大手北堀出土木材の樹種同定 …… 170
3-4. 本丸大手北堀出土漆器の塗膜分析及び樹種同定
3-4-1. 塗膜分析 …… 172
3-4-2. 樹種同定 …… 172
3-5. 本丸大手北堀出土下駄の樹種同定 …… 174
4. 総括
4-1. 近世加納城
4-1-1. 石垣 …… 175
4-1-2. 土塁 …… 175
4-1-3. 堀 …… 177
4-1-4. 整地 …… 179
4-1-5. 火災の痕跡 …… 179
4-1-6. 瓦集積 …… 179
4-1-7. 建物 …… 180
4-2. 中世加納城 …… 180
4-3. 瓦 …… 182
5. 加納城跡を活用したまちづくり活動の記録 …… 202

挿　図　目　次

第１図　岐阜市南部の遺跡分布図
第２図　加納周辺の地形と遺跡の分布
第３図　加納城跡調査位置図
第４図　本丸調査位置図
第５図　加納城跡基本土層図
第６図　本丸大手北堀調査区平面図
第７図　本丸大手北堀土層実測位置図
第８図　本丸大手北堀土層実測図(1)
第９図　本丸大手北堀土層実測図(2)
第10図　本丸大手北堀土層実測図(3)
第11図　障子堀測量図
第12図　石垣SV2実測図
第13図　瓦集積SX14・16・17・18実測図
第14図　瓦集積SX13実測図
第15図　瓦集積SX15・19実測図
第16図　本丸堀の断面図
第17図　本丸大手北堀周辺の平面図
第18図　本丸大手北堀周辺の断面図
第19～45図　堀内出土遺物実測図(1)～(27)
第46図　本丸内調査区(12次A区)平面図
第47図　本丸内調査区(12次A区)土層図(1)
第48図　本丸内調査区(12次A区)土層図(2)
第49図　本丸内調査区(12次B区)平面図
第50図　本丸内調査区(12次B区)土層図(1)
第51図　本丸内調査区(12次B区)土層図(2)
第52～55図　本丸内出土遺物実測図(1)～(4)
第56図　枡形内調査区平面図
第57図　枡形内土層模式図
第58図　枡形櫓門関連遺構実測図
第59図　土塁SA12周辺土層図
第60図　石垣SV12・23実測図
第61図　石垣SV18周辺実測図(1)
第62図　石垣SV18周辺実測図(2)
第63図　石垣SV19実測図
第64図　瓦集積SV24・25実測図
第65図　石垣SV24周辺実測図
第66図　石垣SV24周辺土層図
第67図　枡形内土層図
第68図　f区平面図・土層図
第69図　枡形内検出遺構平面図
第70図　本丸大手枡形平面図
第71～91図　枡形内出土遺物実測図(1)～(21)
第92図　花粉化石分布図
第93図　加納城土塁断面図
第94図　近世加納城堀断面図
第95図　中世加納城関連遺構平面図
第96図　軒平瓦文様分類図(1)
第97図　軒平瓦文様分類図(2)・軒塀瓦・菊丸瓦文様分類図
第98図　軒丸瓦文様分類図(1)
第99図　軒丸瓦文様分類図(2)
第100図　軒平・軒丸瓦出土数グラフ
第101図　瓦技法分類模式図
第102図　軒平瓦法量グラフ
第103図　平・丸瓦法量グラフ
第104図　平瓦法量グラフ
第105図　輪違瓦分類図

表　目　次

第1表	調査歴一覧表
第2・3表	遺構一覧表
第4～11表	遺物観察表(土器類)
第12～19表	遺物観察表(軒平瓦)
第20～27表	遺物観察表(軒丸瓦)
第28～31表	遺物観察表(丸瓦)
第32表	遺物観察表(平瓦)
第33～35表	遺物観察表(その他の瓦)
第36表	花粉化石一覧表
第37表	樹種同定結果
第38表	軒平瓦集計表
第39・40表	軒丸瓦集計表
第41表	軒平・軒丸瓦集計表
第42表	丸瓦集計表

図　版　目　次

巻頭	本丸全景
図版1～8	本丸大手北堀調査(遺構)
図版9	本丸内調査(遺構)
図版10～12	本丸枡形内調査(遺構)
図版13～18	出土遺物(土器類)
図版19	出土遺物(鉄・陶製品・瓦)
図版20～30	出土遺物(瓦)
図版31～33	自然科学分析(花粉)
図版34	自然科学分析(種実)
図版35	自然科学分析(樹種)
図版36	自然科学分析(漆器・下駄)

凡　例

1. 図中の方位は真北を示し、座標は以前の報告書と統一するため、日本測地系国家座標第Ⅶ座標系に準拠した。
2. 遺構実測図の縮尺は1/100、1/50を基本とした。
3. 遺構の略号は以下のとおり用いた。
   SV；石垣・石列　SA；土塁　SK；土坑　SX；瓦集積・その他の遺構
4. 本書中の遺構番号は平成14年度発行『史跡加納城跡』報告書に倣い、また新規に検出されたものは通番としたが、整理作業中においては、その地点ごとに番号を付したため、注記との対応は次のとおりである。

本書の遺構番号	調査次数	注記遺構番号
SX13	9KN～11KN(9～11次)	SX1
SX14	9KN～11KN(9～11次)	SX2
SX15	9KN～11KN(9～11次)	SX3
SX16	9KN～11KN(9～11次)	SX4
SX17	9KN～11KN(9～11次)	SX5
SX18	9KN～11KN(9～11次)	SX6
SX19	9KN～11KN(9～11次)	SX8
SX20	9KN～11KN(9～11次)	SX7
SX21	12KN(12次)	SX1
SX22	12KN(12次)	SX2
SX23	12KN(12次)	SX3

5. 遺物実測図の縮尺は瓦は1/4、その他は1/3を原則とした。
6. 遺物実測図中の一点鎖線は施釉範囲を示した。
7. 土師器皿の実測図中、トーンはタール痕、実線はヨコナデ調整の範囲を示す。また断面のみの図には引出線で示した。
8. 出土遺物の分類・編年は以下の文献に依拠する。

須恵器　渡辺博人「美濃須衛古窯跡群における須恵器編年」
『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会　1984
灰釉陶器　尾野善裕「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会　2008
山茶碗　藤澤良祐「山茶碗の現状と課題」『研究紀要』第3号(財)三重県埋蔵文化財センター　1994
古瀬戸　藤澤良祐「古瀬戸古窯跡群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X　1991
土師器皿　井川祥子「岐阜市域の15世紀から17世紀の土師器皿」
『城之内遺跡-長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査』岐阜市教育委員会　1999
大窯　藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯　2002
連房　藤澤良祐『瀬戸市史　陶磁史編6』瀬戸市
肥前　『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会　2000
瓦　本書「4-3. 瓦」

1. 加納城跡の地理的環境と歴史的環境

1-1. 地理的環境

岐阜市の地勢は南部の濃尾平野と北部の山地に大別できる。岐阜市のほぼ中央にその境界があり、山地を流れてきた長良川が広範囲に扇状地を形成している。左岸に形成された扇状地の扇頂の標高は約20m、扇端の標高は約9mを測り、比高差10m以上に及ぶ。現在の市の中心街は、左岸の岐阜扇状地上に位置する。加納城は岐阜扇状地の南東末端に立地する。

加納城および城下町は扇状地上に立地するが、その周辺の地形は単純ではない。東方に現在の境川を流路としていた木曽川が形成した自然堤防域、その北東に各務原から延びる低位段丘面域があり、さらに、これら扇状地、自然堤防、低位段丘に囲まれた後背湿地域がある。いずれも河川によって形成された地形で、加納城と河川の関わりは非常に深いものとなっている。

加納城の縄張りに直接大きく影響しているのは、荒田川とその支流の清水川である。荒田川は各務原台地の北側の低地部を西流した後、長良川扇状地と木曽川自然堤防の境界を南流し、扇状地の裾に沿うように西進して長良川に合流する。現在の荒田川の本流はほぼ真っ直ぐに南流するが、近世以降用水として利用されていたようである。また荒田川の支流には、金華山山塊南麓の岩戸地区から流れるものがある。清水川は、岐阜扇状地扇頂の岐阜城下町の位置で長良川から分流していた可能性が高く、ほぼ南北に流れ、荒田川に合流する。

加納城は荒田川・清水川によって三方が囲まれている土地に立地する。極めて緩やかな丘陵の末端部の立地に近い。

〈参考文献〉
『岐阜市史』史料編　考古・文化財　岐阜市 1979
『土地条件図』岐阜・大垣　国土地理院

1-2. 周辺の遺跡と歴史的環境

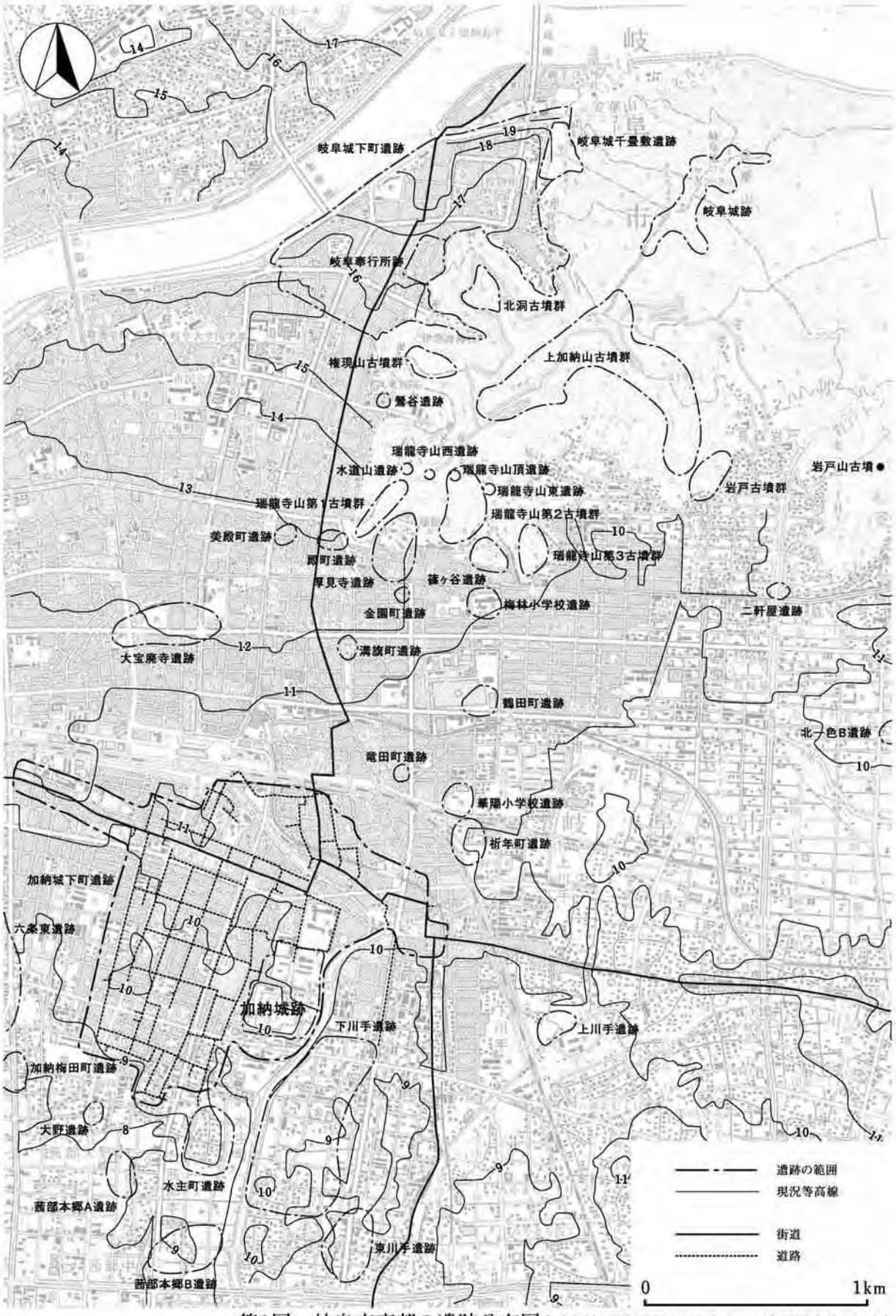
近世において岐阜市では、旧岐阜城下町である北部の岐阜町と南部の加納城下町が並立して発展した。岐阜町は長良川左岸に形成された扇状地上の扇頂部に、一方の加納城下町は扇端部に立地し、両者は尾張(岐阜)街道で結ばれていた。ここでは両町を含む、長良川扇状地とその周囲に分布する遺跡を概観する。

旧石器時代

第2図の東端の洪積台地は、東隣の各務原市を中心とする台地(各務原台地)の最西端にあたる。岐阜市内の旧石器時代の遺跡は現在のところこの台地上にほとんどが分布し、扇状地上には見つかっていない。

縄文時代

市内の縄文時代の遺跡は、旧石器の遺跡が分布する台地上及び北部の山裾に展開するものが多いが、



第1図　岐阜市南部の遺跡分布図(国土地理院発行2万5千分の1地形図を使用した)

扇状地上にも見られるようになる。

この地域では、金華山の南に繋がる通称上加納山の西麓に鶯谷遺跡、岐阜扇状地上に美殿町遺跡、後背湿地域に梅林小学校遺跡がある。いずれも上加納山からそれほど距離を置かない場所での立地である。

鶯谷遺跡では、工事に伴って中期の土器と石鏃、打製石斧が出土している。美殿町遺跡は石鏃と打製石斧の採集がある。梅林小学校遺跡からは昭和3年の校舎建設に伴って石鏃と石錘が出土している。いずれもわずかな採集であり、詳細は明らかでない。

弥生時代

市内の弥生時代の遺跡の立地は、各務原台地上と長良川扇状地縁辺の後背湿地域、北部山間の平地部の三つに大別できる。それ以外に特殊なものとして上加納山山頂付近に3遺跡が集中している。

この地域では、上加納山の上、その南の扇状地上及び湿地帯に多く立地する。唯一大野遺跡のみ扇状地の南末端にある。

上加納山尾根線上には瑞龍寺山頂遺跡、瑞龍寺山西遺跡、水道山遺跡が東から西へ連続して分布する。瑞龍寺山頂遺跡からは内行花文鏡、山中式の壺、高杯もしくは器台の脚部が採集されている。昭和52年発掘調査が行われ、岩盤を掘り抜いた長方形土坑を検出し、中から玉類が出土している。瑞龍寺山西遺跡からは弥生土器壺が採集され、水道山遺跡からは工事中に弥生土器高杯・器台が出土している。上加納山上には墳墓群が築かれていたと考えられる。また南麓に近い斜面から出土したといわれる銅鐸がある。

上加納山山麓の周辺には、扇状地上に殿町遺跡、溝旗町遺跡、金園町遺跡、湿地上に篠ヶ谷遺跡、梅林小学校遺跡、鶴田町遺跡、竜田町遺跡、華陽小学校遺跡、祈年町遺跡が分布し、弥生中期から後期の土器が採集されている。やや離れて立地する大野遺跡は荒田川右岸、長良川扇状地の末端に立地する。周辺の下川手遺跡・水主町遺跡・茜部本郷遺跡からも弥生土器が出土したという。

古墳時代

岐阜市内でも多くの古墳が確認されているが、大部分は後期古墳であり、その立地は山麓が多い。この地域では、上加納山・金華山山麓に瑞龍寺山第1～3古墳群、岩戸古墳群、千畳敷古墳などが確認されている。上加納山には、尾根上にも多くの古墳が分布し、北洞古墳群、権現山古墳群、上加納山古墳群、岩戸山古墳を形成している。このうち発掘調査が行われているのは千畳敷古墳1基のみで、詳細な状況は不明である。

千畳敷古墳は美術館建設に伴う緊急調査で、戦国期の城跡の下に横穴式石室が検出された。須恵器・鉄刀・鉄鏃・耳環・玉類が出土しており、6世紀末～7世紀初頭のものと見られる。また美殿町内には昭和24年まで、横穴式石室をもつ殿町古墳があり、工事に際して須恵器甕が出土している。

市内の古墳以外の遺跡の分布は、弥生時代のものと分布傾向は似ている。この地域では発掘調査が行われていないため、集落跡の状況は不明であるが、二軒屋遺跡からS字甕D類・宇田型甕、篠ヶ谷遺跡から台付甕脚台、溝旗町遺跡から須恵器が採集されている。

古　代

市内の遺跡はこの時期に急増する。立地は岐阜市東部・中西部の洪積台地上、長良川扇状地の縁辺、

根尾川扇状地上及び縁辺に多く、北部山間部にも点在する。激増するのは根尾川扇状地上で、この時期から中世にかけて盛行するものが多い。長良川扇状地縁辺のものは、弥生時代の遺跡とは重ならないものが多い。新たにこの時期に成立したという点と継続期間は、根尾川扇状地のものと同様である。長良川扇状地の場合、中央に分布するものは少ないが、これは既に市街地化されていることの影響が大きいと見られる。

この地域では、長良川扇状地中央に大宝廃寺、上加納山南麓に厚見寺が建立される。発掘調査が行われているのは1件で、岐阜城千畳敷遺跡で祭祀に関連すると見られる廃棄土坑が検出されている。

中　世

この時期の遺跡の分布状況は、古代とほぼ同様である。

この地域では、上川手遺跡・東川手遺跡・水主町遺跡・茜部本郷A・B遺跡などで遺物が採集されている。その他、加納城跡・下川手遺跡では、発掘調査や確認調査で遺物が出土しているが、状況は明らかでない。ただ一定量の古瀬戸製品や土師器皿があり、14世紀中頃に造られたといわれる革手城・正法寺に関連した遺物群と想定される。岐阜城千畳敷遺跡では、石列・階段・梵鐘鋳造遺構などが検出され、寺院が建立されていたことが明らかとなっている。

戦国期

市内の遺跡は、革手城推定地である下川手遺跡周辺(加納城跡・水主町遺跡など)や岐阜城跡周辺(岐阜城千畳敷遺跡・岐阜城下町遺跡)、革手城の移転先である鷺山地区から長良地区にかけた一帯に集中して分布する。

革手城は、下川手遺跡内にあったと推定されている。荒田川を挟んで、加納城跡の対岸にあたる。革手城の北には正法寺があったとされ、水主町遺跡の船田城と併せて、美濃国の守護所を形成していた。天正14年(1586)の氾濫まで、木曽川は現境川流路であったといわれており、河川に囲まれた自然堤防上に立地していた。

下川手遺跡では、過去2回の確認調査と、8回の試掘調査が行われている。その内、5回は革手城推定地の範囲内で、溝などが検出されている。出土遺物も多く、後期Ⅳ段階の古瀬戸製品や土師器皿が多い。

船田城推定地の水主町遺跡では1回の試掘調査が行われている。遺物は土師器皿が出土しているが、船田城を推測させるものは確認できていない。

加納城跡でも戦国期の加納城跡の遺構・遺物が多く出土している。近世加納城の土塁の下に中世加納城の土塁が埋没しているなど、成果は大きいが、詳細は後述する。

岐阜城千畳敷遺跡では、史跡整備のための調査1回と、緊急調査2回の計3回の発掘調査の他、試掘調査も行われている。永禄10年(1567)、織田信長によって陥落させられた斎藤時代の遺構・遺物や、永禄10年以降のものが多量に出土している。

岐阜城下町遺跡では、明確な遺構は確認されていないが、16世紀前葉から中葉の遺物が出土しており、斎藤氏の段階から町が整備されていた可能性が高い。

近　世

近世の遺跡は、市内全体に分布していると見られるが、ある程度詳細が明らかなのは、加納城とその

城下町、岐阜城下町から継続する岐阜町、岐阜町内の岐阜奉行所跡などである。近世の加納城下町と岐阜町の距離は約4kmで、岐阜と名古屋を結ぶ岐阜(尾張)街道で繋がれていた。両町は、近代以降も発展し、現在の岐阜市の礎となっている。

岐阜城下町遺跡では19ヶ所で確認調査、試掘調査が実施されている。御鮨所推定地、岐阜奉行所内の調査では多くの遺構、遺物が出土している。岐阜城千畳敷遺跡では18世紀後半から幕末にかけての遺物が多量に出土しているが、土地利用については明らかでない。一方の加納城下町遺跡では加納城以外の調査は無く、詳細は不明である。

〈参考文献〉
『岐阜市史』史料編　考古・文化財　岐阜市
『岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』(各年度)岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
『史跡加納城跡』岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
『千畳敷Ⅰ～Ⅲ』岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団

1-3. 加納城の歴史

中世加納城は、文安2年(1445)、美濃国守護代斎藤利永により築城されたとされる。守護土岐氏の居館革手城(下川手遺跡)の近接地である。明応4年(1495)、土岐氏の後継争いに端を発する船田合戦が起こる。『船田戦記』には、その際加納城を改修したとの記述がある。16世紀初め頃、土岐氏による福光への守護所の移転を契機に衰退を始めると見られるが、天文7年(1538)頃に廃城となったといわれている。

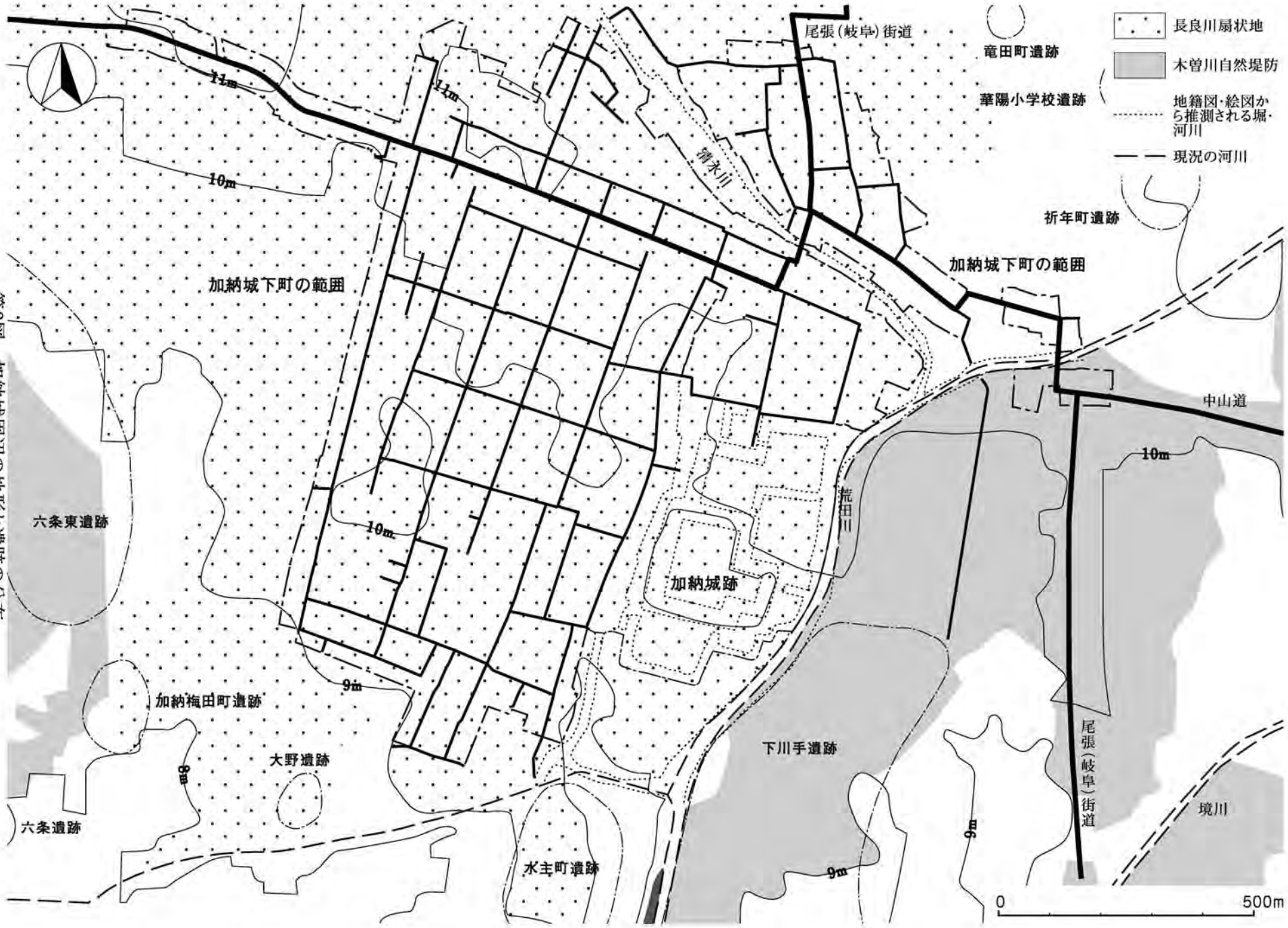
近世加納城は関ケ原合戦後の慶長6年(1601)、大坂方への備えのため、徳川家康が自ら現地を見分し、翌年から築城が開始されたとされる。初代城主は家康の娘亀姫の婿である奥平信昌で、以後奥平氏3代、大久保氏1代、戸田氏3代、安藤氏3代、永井氏6代の譜代大名が歴代の城主を勤め、明治を迎える。当初は10万石とされるが、徐々に石高を減じ、最終的には3万2千石となった。

城内の様子は、絵図によれば、本丸の北西角に天守台が備えられているが、天守自体が描かれているものは無い。櫓は、本丸に4棟、二の丸に4棟、三の丸・厩曲輪に各1棟の計10棟が建てられた。その内、二の丸北東角(現在岐阜地方気象台)には、享保13年(1728)に焼失するまで、岐阜城の天守を移築したとされる唯一の三層の隅櫓があった。絵図では、本丸内の建物は明らかでないが、発掘調査の成果などから、築城当初は御殿が建てられていた可能性が高い。二の丸御殿を描く絵図は複数あり、幾度かの建て替えがあったようである。

享保13年(1728)の大火は城下の大半を焼失するもので、城内にも火災は及び、岐阜城を移築したといわれる二の丸北東にあった御三階櫓が焼失している。

天明2年(1782)には洪水により、二の丸・三の丸の石垣・土塁が崩壊し、幕府へ修復の願いを提出している。

明治5・6年(1872･1873)には城内の建物は、取り壊される。明治22年(1889)に作成された地籍図によると、本丸周囲の堀は開墾地と表記されており、この段階で、ある程度埋没してしまっている可能性



第2図　加納城周辺の地形と遺跡の分布

が高い。本格的に埋め立てられるのは不明であるが、太平洋戦争の戦災によると見られる廃棄土坑があることから、この段階には埋没していることは確実で、昭和13年(1938)に実施された加納地区の区画整理時の可能性が高い。昭和14年(1939)には本丸内に旧陸軍が駐屯し、戦後は昭和50年(1975)まで、自衛隊が使用していた。その後、本丸は公園となり、昭和58年(1983)史跡に指定された。

1-4. 加納城の立地と縄張り

現在の加納城は、全ての堀が埋められ、本丸とごく一部の土塁・石垣が残るに過ぎない。三の丸は小学校、厩曲輪と二の丸、大藪曲輪は民有地となっている。このような状況の中で、現況から当時の曲輪を復元することは困難であるが、明治中頃に作成された地籍図が有効な材料となる。地籍図は、過去の調査結果と照らし合わせても、堀と石垣に関しては、細部までほぼ正確に反映しているといえ、信頼度が高い。しかしながら、土塁は復元困難な部分が多く、第3図に示した土塁の復元範囲に関しては、地籍図を主として、発掘調査成果、現況、絵図を勘案してとりあえず作成したものであるため、今後調査の進展によって変更する場合がある。

加納城は、扇状地の末端の微高地に立地し、すぐ東には荒田川が南流する。荒田川の当時の主流は、城域の南でほぼ直角に曲がり、西流していた。北には、北西から清水川が東流し、荒田川に合流する。西には長刀堀を掘削し、南北約550m、東西約400mの範囲を川と堀に囲まれた平城である。

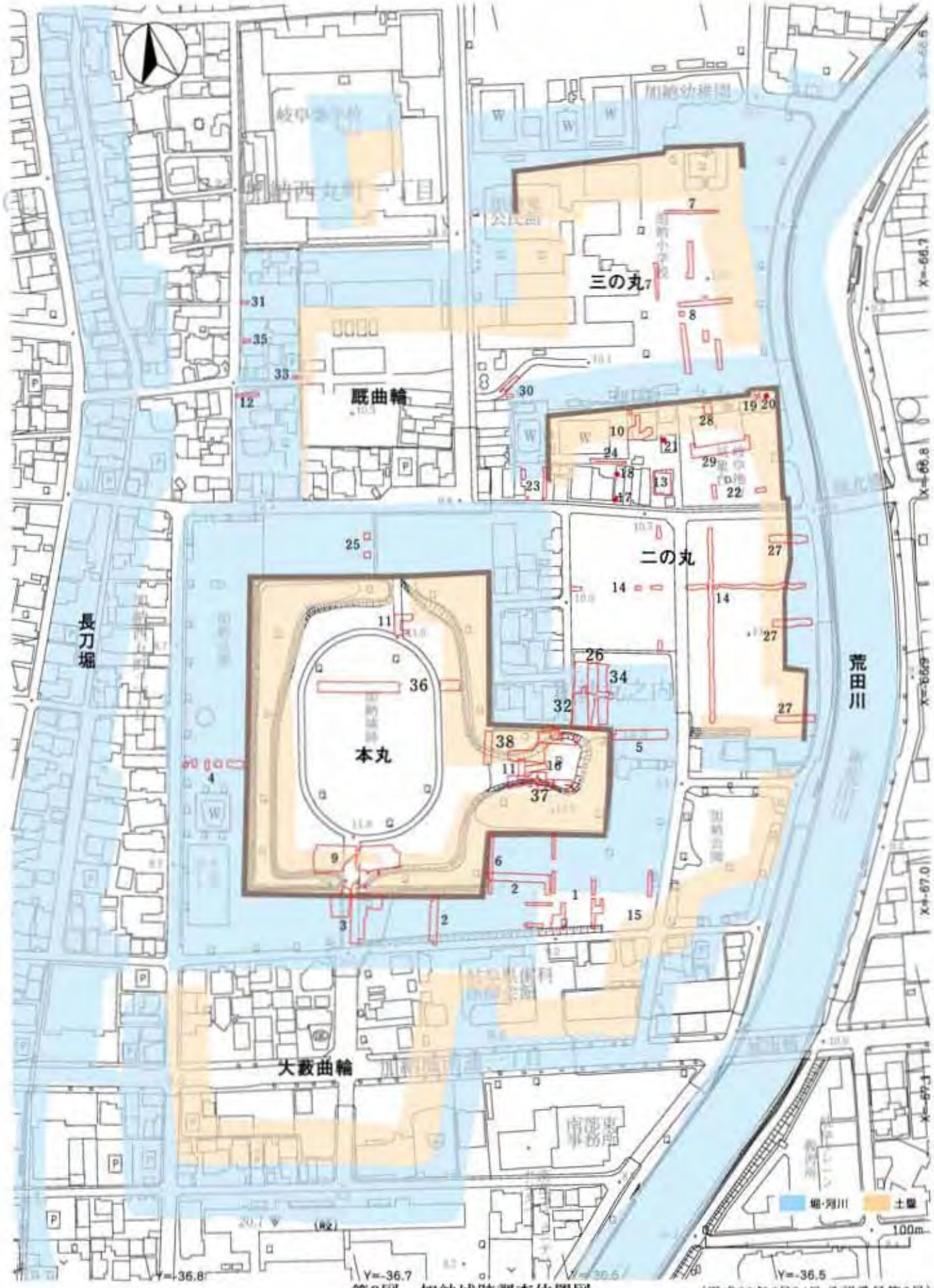
城域の北端から約200m北の中山道に面して大手を設けていた。北から三の丸、厩曲輪、二の丸、本丸を東西に2つずつ、互い違いに配している。本丸の南には大藪曲輪があり、全部で5つの曲輪から構成されていた。加えて三の丸の前には、鍵形に折れた堀と土塁による馬出状の入口施設がある。

本丸は東に突出する凸字形をしているが、この形状は初期徳川系城郭の特徴であるとして、「加納城型」とも呼称されている。突出する出枡形の部分を除く本丸本体の大きさは、南北160m、東西120mの長方形を呈するが、二の丸の大きさとほぼ等しい。三の丸、厩曲輪は一辺100m前後の正方形で、ほぼ同規模である。

加納城は戦国期の城跡を最大に利用して築かれている可能性が高いが、縄張り自体、中世加納城の遺構に規制されている可能性もある。

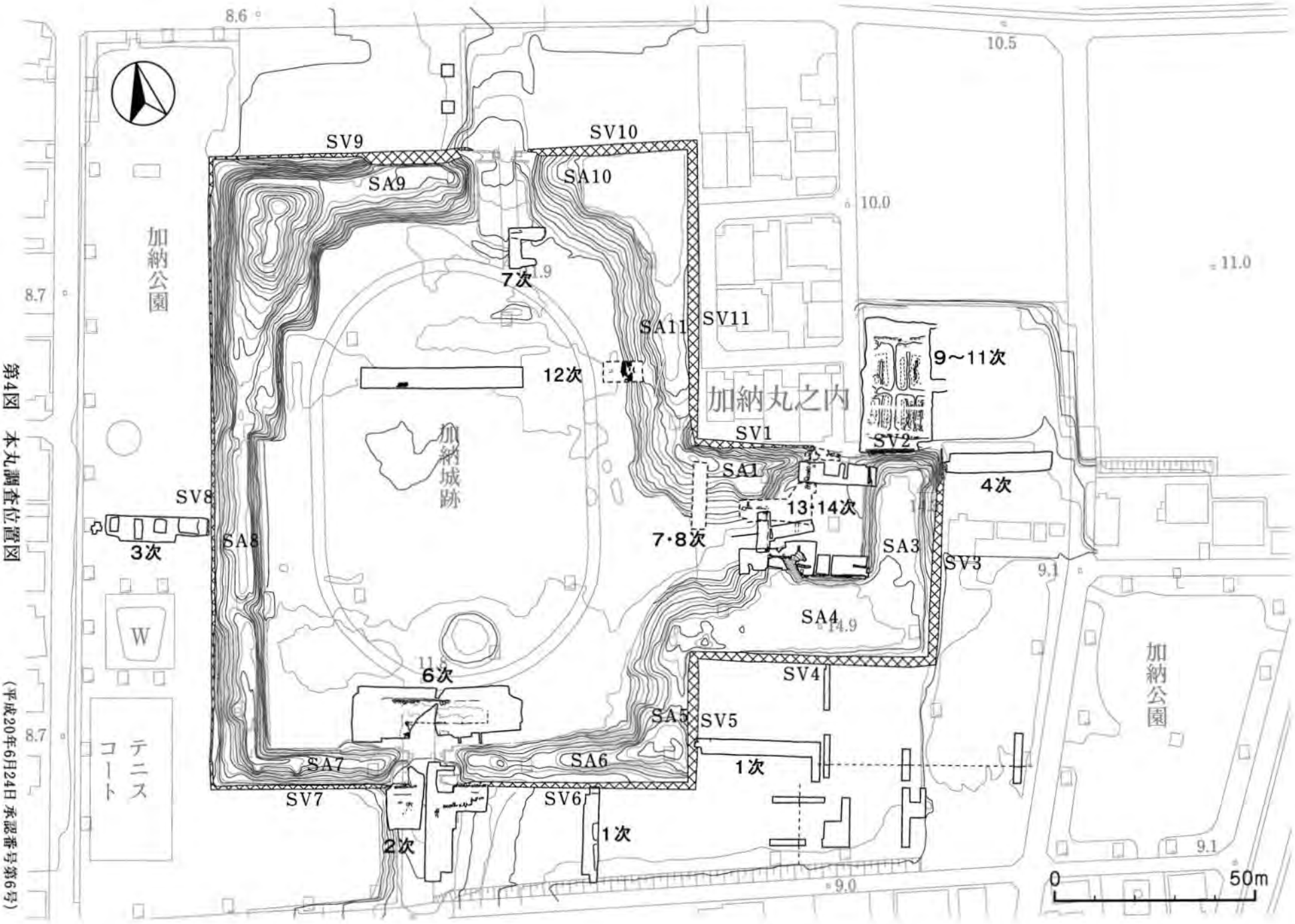
〈参考文献〉

中井　均「加納城にみる近世城郭の構造」『奥平信昌と加納城』 2004　岐阜市歴史博物館



第3図　加納城跡調査位置図

（平成20年6月24日 承認番号第6号）



第4図　本丸調査位置図

（平成20年6月24日 承認番号第6号）

地点	年度		調査地	調査次数	面積(㎡)	目的	主な遺構	報告書
1	昭和50	12/ -1/8	本丸南東堀		216	史跡範囲確定のため	堀	①
2	昭和63	9/13-1/6	本丸南東堀	本丸１次	213	史跡整備の基礎資料を得るため	堀	⑥
3	平成元～２	11/15-5/17	本丸南堀	本丸２次	260	史跡整備の基礎資料を得るため	堀・石列状遺構・瓦集積	⑥
4	平成２	5/18-6/11	本丸西堀	本丸３次	140	史跡整備の基礎資料を得るため	堀	⑥
5	平成４	2/15-2/24	本丸東堀	本丸４次	117	史跡整備の基礎資料を得るため	堀	⑥
6	平成６	2/13-2/20	本丸南東堀	本丸５次	60	史跡整備の基礎資料を得るため		⑥
7	平成７	12/4-12/8	三の丸	三の丸１次	54	グランド整備に先立つ調査		②
8	平成８	7/22-8/26	三の丸	三の丸２次	223	グランド整備に先立つ調査	堀・石垣・井戸・中世溝	③
9	平成11	9/29-3/30	本丸南門	本丸６次	530	史跡整備の基礎資料を得るため	枡形・石垣・中世土塁	⑥
10	平成12	4/7-4/14	二の丸	二の丸１次	44	個人住宅建設に先立つ調査	土塁・石列	④
11	平成12	7/26-10/31	本丸北門	本丸７次	55	史跡整備の基礎資料を得るため		⑥
			本丸大手門		30			
12	平成12	11/22,12/4	厩曲輪	試掘	5	個人住宅建設に先立つ調査	堀	⑤
13	平成12	2/5-3/16	二の丸	二の丸２次	84	個人住宅建設に先立つ調査	礎石建物・土坑など	⑧
14	平成13	4/24-6/14	二の丸	二の丸３次	385	史跡整備の基礎資料を得るため	土塁・石垣・中世土塁・中世礎石など	⑤
15	平成13	6/22	本丸南東堀外	立会	—	調整池工事に伴う工事立会		⑤
16	平成13	11/12-12/6	本丸大手門	本丸８次	30	史跡整備の基礎資料を得るため		⑥
17	平成13	3/13	二の丸	試掘	3	個人住宅建設に先立つ調査		⑦
18	平成13	3/16	二の丸	立会	—	個人住宅建設に伴う工事立会		⑦
19	平成13	3/11	二の丸	立会	—	発電施設建設に伴う工事立会		⑦
20	平成13	3/18	二の丸	試掘	1	鉄塔撤去に伴う調査	土塁	⑦
21	平成14	4/16	二の丸	立会	—	個人住宅建設に先立つ工事立会		⑦
22	平成14	4/22-4/26	二の丸	二の丸４次	22	史跡整備の基礎資料を得るため	土塁	⑦
23	平成14	7/22-8/2,9/2-9/6	二の丸	二の丸５次	34	史跡整備の基礎資料を得るため	石垣・堀	⑧
24	平成14	11/27-11/29,12/2-12/3	二の丸	立会	—	小学校プール改修に伴う工事立会	井戸・礎石	⑧
25	平成15	4/14	本丸北堀	試掘	18	青少年会館撤去に伴う調査	堀	⑫
26	平成15	7/17-8/27	本丸大手北堀	本丸９次	160	史跡整備の基礎資料を得るため	堀・瓦集積	⑫
27	平成15	7/22-8/22	二の丸	二の丸６次	195	史跡整備の基礎資料を得るため	石垣・土塁	⑨
28	平成15	9/4	二の丸	試掘	9	気象台改修工事に伴う調査	土塁	⑨
29	平成15	9/ -12/	二の丸	立会	—	気象台改修工事に伴う調査		⑨
30	平成15	12/8-12/19,2/2-2/6	二の丸	二の丸７次	23	史跡整備の基礎資料を得るため	堀	⑨
31	平成15	1/13-1/14	厩曲輪	試掘	4	個人住宅建設に先立つ調査	堀	⑨
32	平成16	9/27-11/9	本丸大手北堀	本丸10次	140	史跡整備の基礎資料を得るため	障子堀・瓦集積・盛土状遺構	⑫
33	平成17	6/28	厩曲輪	試掘	3	個人住宅建設に先立つ調査	堀・テラス面	⑩
34	平成17	9/26-12/16	本丸大手北堀	本丸11次	600	史跡整備の基礎資料を得るため	障子堀・瓦集積	⑫
35	平成17	11/18	厩曲輪	試掘	5	個人住宅建設に先立つ調査	堀	⑪
36	平成18	9/22-12/28	本丸内	本丸12次	250	史跡整備の基礎資料を得るため	土塁	⑫
37	平成19	11/26-3/17	本丸大手枡形	本丸13次	250	史跡整備の基礎資料を得るため	土塁・石垣・礎石・瓦集積	⑫
38	平成20	9/16-12/12	本丸大手枡形	本丸14次	240	史跡整備の基礎資料を得るため	石垣・階段状遺構	⑫

報告書
①『岐阜市埋蔵文化財発掘調査報告書』 1985 岐阜市教育委員会
②『平成７年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 1996 岐阜市教育委員会
③『平成８年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 1997 岐阜市教育委員会
④『平成11・12年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2001 岐阜市教育委員会・㈶岐阜市教育文化振興事業団
⑤『平成12・13年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2002 岐阜市教育委員会・㈶岐阜市教育文化振興事業団
⑥『史跡加納城跡』 2003 岐阜市教育委員会・㈶岐阜市教育文化振興事業団
⑦『平成13・14年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2003 岐阜市教育委員会・㈶岐阜市教育文化振興事業団
⑧『平成12・14・15年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2004 岐阜市教育委員会・㈶岐阜市教育文化振興事業団
⑨『平成15・16年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2005 岐阜市教育委員会・㈶岐阜市教育文化振興事業団
⑩『平成16・17年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2006 岐阜市教育委員会・㈶岐阜市教育文化振興事業団
⑪『平成17・18年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2006 岐阜市教育委員会・㈶岐阜市教育文化振興事業団
⑫ 本書

第1表　調査歴一覧表

2. 発掘調査の成果

2-1. 加納城の基本層序と微地形

加納城跡は岐阜扇状地上に立地するため、地山は扇状地堆積の砂礫層である。本丸大手北堀で検出した地山の礫をサンプリングし、石材同定を行ったところ、チャートが約50％、砂岩約27％、流紋岩約22％を占める事が分かった。これは長良川流域で見られる組成である。

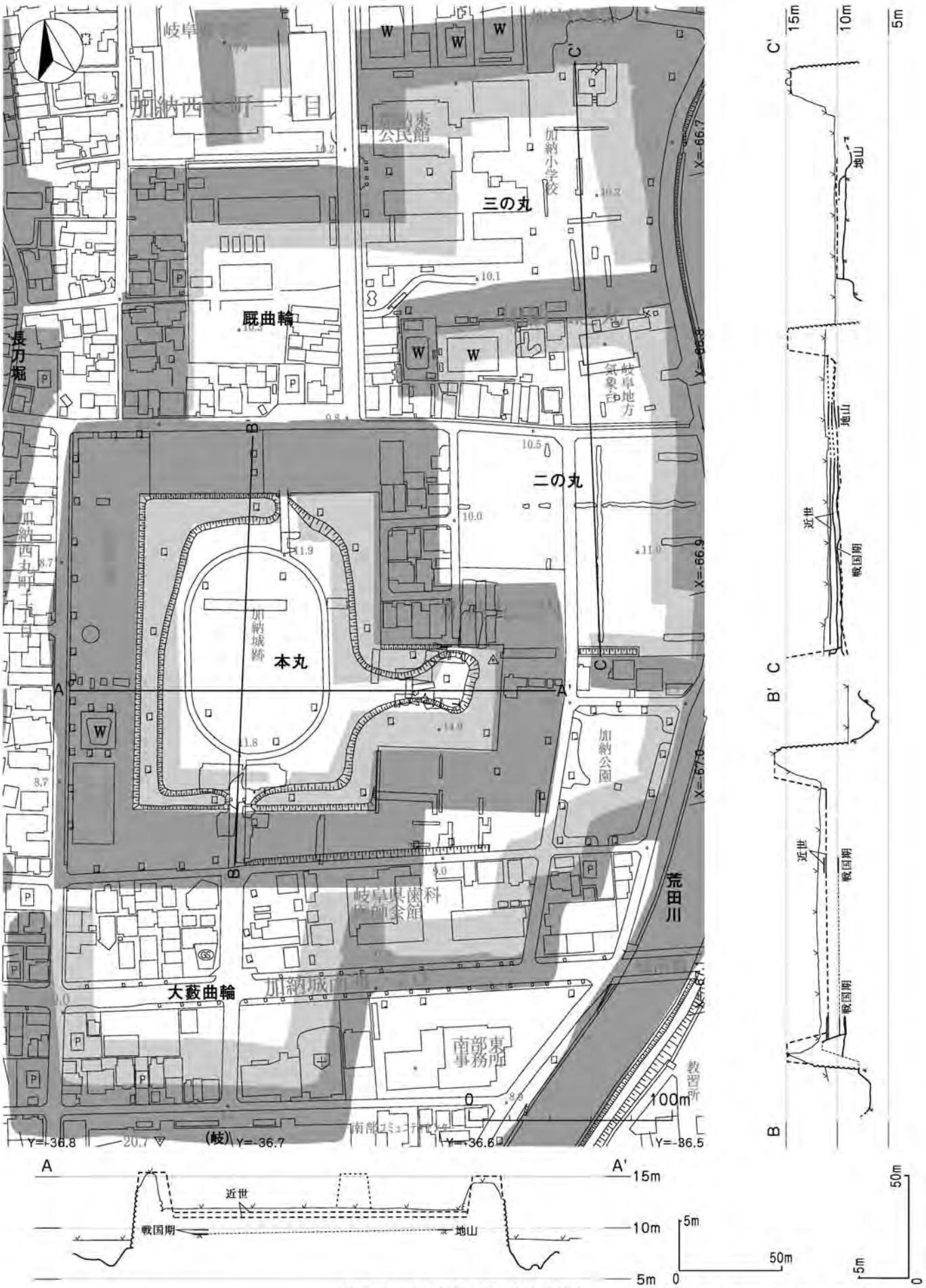
本丸・二の丸・三の丸の調査で、地山の上に茶色系のシルト層が堆積することを確認している。三の丸の調査では、層中から須恵器・灰釉陶器・山茶碗など、古代から中世の遺物が出土している。層の直上には戦国期の整地層が堆積することから、それまでの旧表土と見られる。

地山もしくは旧表土上面のレベルは、三の丸内が北で9.8m、南は10.0m以上で北下がり、二の丸内は北9.9m、南9.5m、東9.7m、西9.9mと南東に向かって下がる。本丸内では南門付近で9.4m、枡形内で9.8mと西下がりである。厩曲輪は北西角で9.3mと低いので、二の丸北西部周辺にピークがあり、北・東・南・西への緩やかに下る地形を呈していたと見られる。

戦国期には旧表土の上にシルト層による整地を行う。今までの調査で確認できる確実な整地層の範囲は、本丸・二の丸内に限られている。三の丸では遺構が多く検出されているが、近世以降に削平されている可能性があり、整地の状況は明らかでない。戦国期の整地層は、旧表土上にほぼ均一な厚さで盛っており、全体的な地形の起伏は旧表土上とあまり変化はないようである。唯一大規模な整地を行っているのが、本丸南門周辺で、ある時期に40cmの盛土を行っている。この結果の地面の高さと、本丸中央付近での戦国期の地面がほぼ平坦になる。本丸枡形内の1箇所で確認をしたが、地山直上には旧表土があり、整地層を確認することはできなかった。

戦国期の地面を覆うのが近世初頭築城時の整地層である。本丸では多量の砂礫層があり、その厚さは1.2mに及ぶ。砂礫層は地山の砂礫層と酷似し、堀掘削に際して、城内を盛り上げていることが明らかである。二の丸ではこれほど顕著な砂礫による整地層は見られず、本丸のみで見られる状況である。廃城までの間に数回の整地が見られる。本丸では最低1回、二の丸では3回が確認されている。本丸では場所によっては数回の整地が認められるが、広範囲の確実なものとなると現在のところ、面は築城時のものと廃城時のものに絞られる。廃城時の面は、近世のある時期に比較的大規模に盛土を行ったものであり、火災によって建物が焼失し、それを契機に整地している可能性が高い。

廃城後は削平や盛土、撹乱によって改変が加えられている。本丸内は削平された上、約1mの盛土があり、また広範囲に大規模な撹乱が見られる。本丸内であっても大手枡形内や南門枡形内では、廃城時の地面が良好に残る箇所も確認できる。



第5図　加納城跡基本土層図

（平成20年6月24日 承認番号第6号）

2-2. 「加納城跡」遺跡の出土遺物

加納城全体で39カ所の調査を実施しているが、大部分が近世の遺構を検出した時点で止めている。戦国期の遺構が少数確認されている他は、それ以前の遺構は皆無に等しい。しかし遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗など、中世加納城より前の時期のものも多く出土している。2回の築城により、多くの遺構が壊されて、盛土・整地層中に混じり込んだものであろう。ここでは、各時期の遺物の傾向を概観しておきたい。

中世まで

土師器の量は極めて少ない。

須恵器は7世紀代のものから見え始め、8世紀から9世紀前葉のものが多い。

灰釉陶器は全体的に比較的多く出土し、9世紀後半から11世紀前半のものまであるが、10世紀前葉から11世紀初頭頃にピークがあるようである。

尾張型山茶碗は、4型式から6型式までが出土しているが、12世紀後葉から13世紀前葉にピークがある。

東濃型山茶碗は、丸石3窯式から見られる。中世加納城直前の大洞東窯式まで出土するが、13世紀前葉から後葉までのものが多く、続く14世紀代のものは少ない。

古瀬戸製品は、後期Ⅲ段階以降、一定量出土する。

8世紀以降ほぼ継続的に集落等営まれていた可能性が高いが、11世紀後半～12世紀前半と14世紀に翳りが見られる。

戦国期

中世加納城に伴うと見られる遺物は、山茶碗(東濃型)では脇之島窯式・生田窯式のもの、古瀬戸製品では後期Ⅳ段階のもの、大窯製品では第1段階から第3段階までのもの、土師器皿ではB1類・B2a類・B2b類・C2類である。遺物量は多く、特に土師器皿は圧倒的な量を数える。

実年代では15世紀後半から16世紀中葉までのものである。

近　世

築城直後の遺物では、大窯第4段階から連房第1・2小期のものが出土する。この時期の遺物がある程度の量出土するのは、本丸内と二の丸初期の整地層・遺構からである。

以降、近世を通して瀬戸美濃陶磁器・肥前磁器が出土するが、遺構やそれに準ずる状況での出土は少ない。

種類	遺構番号	調査次数	調査地点	位置	時期・性格	備考
石垣	SV1	現存		大手北面西半		
石垣	SV2	現存・9～11次	26,32,34	大手北面東半		
石垣	SV3	現存		大手東面		
石垣	SV4	現存		大手南面		
石垣	SV5	現存・1次・5次	2,6	東面南		
石垣	SV6	現存・1次・2次	2,3	南面東		
石垣	SV7	現存・2次	3	南面西		
石垣	SV8	現存・3次	4	西面		
石垣	SV9	現存		北面西		
石垣	SV10	現存		北面東		
石垣	SV11	現存		東面北		
石垣	SV12	現存		大手内北面		
石垣	SV13	2次	3	南門西東面		SV14と接続
石垣	SV14	6次	9	南門西東面		SV13と接続
根石列	SV15	6次	9	南門枡形	枡形土塁北面	
石列	SV16	10・11次	32,34	SV2前平坦部肩	護岸?	
石列	SV17	12次	36	土塁内側裾?		
石垣	SV18	13,14次	37,38	SA1先端		SV1と直交
石垣	SV19	13次	37	SA3西辺・枡形東辺		
石垣	SV20	13次	37	SA12西辺		
石垣	SV21	13次	37	SA12北辺		
石垣	SV22	13次	37	SA12東辺		
石垣	SV23	13次	37	SV12延長方向		
石垣	SV24	14次	38			
石積	SV25	14次	38			
石垣	SV26	14次	38			
石列	SV27	14次	38			
石垣痕	SVX1	6次	9	南門枡形	枡形土塁北面	
石垣痕	SVX2	6次	9	南門枡形	枡形土塁東面	
石垣痕	SVX3	6次	9	南門枡形	枡形土塁南面	
土塁	SA1	現存		SV1背後		石垣の番号に対応
土塁	SA2	欠番				
土塁	SA3	現存		SV3背後		石垣の番号に対応
土塁	SA4	現存		SV4背後		石垣の番号に対応
土塁	SA5	現存		SV5背後		石垣の番号に対応
土塁	SA6	現存		SV6背後		石垣の番号に対応
土塁	SA7	現存		SV7背後		石垣の番号に対応
土塁	SA8	現存		SV8背後		石垣の番号に対応
土塁	SA9	現存		SV9背後		石垣の番号に対応
土塁	SA10	現存		SV10背後		石垣の番号に対応
土塁	SA11	現存		SV11背後		石垣の番号に対応
土塁	SA12	13次	37	SA4から北に突出		櫓門土台
土塁	SA13	欠番				
土塁	SA14	6次	9	SV14背後		
土塁	SA15	6次	9		南門枡形	
土塁	SA16	6次	9	SA6下	中世	
土塁	SA17	6次	9	SA7下	中世	
堀	SD1			SV1前		石垣の番号に対応
堀	SD2	9～11次	26,32,34	SV2前		石垣の番号に対応
堀	SD3			SV3前		石垣の番号に対応
堀	SD4			SV4前		石垣の番号に対応
堀	SD5	1次・5次	2,6	SV5前		石垣の番号に対応
堀	SD6	1次・2次	2,3	SV6前		石垣の番号に対応
堀	SD7	2次	3	SV7前		石垣の番号に対応
堀	SD8	3次	4	SV8前		石垣の番号に対応
堀	SD9	試掘	25	SV9前		石垣の番号に対応
堀	SD10			SV10前		石垣の番号に対応
堀	SD11			SV11前		石垣の番号に対応
溝状遺構	SD12	6次	9	城内		
溝状遺構	SD13	7次	11	北門		
溝状遺構	SD14	7次	11	北門		
溝状遺構	SD15	7次	11	大手二の門		
溝状遺構	SD16	7次	11	大手二の門	雨落溝?	
溝状遺構	SD17	8次	16	大手二の門	雨落溝?	
溝状遺構	SD18	8次	16	大手二の門		

第2表　遺構一覧表(1)

種類	遺構番号	調査次数	調査地点	位置	時期・性格	備考
瓦集積	SX1	1次	2	SV5直前堀内	廃城時?	
中世面	SX2	2次	3			
石列	SX3	2次	3	SD6,7内		
瓦集積	SX4	2次	3	SV7直前堀内		
瓦集積	SX5	2次	3	SV7前堀内		
土橋	SX6	2次	3		近代	
盛土	SX7	6次	9	SA16・17間	中世・虎口を閉塞?	
瓦集積	SX8	6次	9	南門枡形内	廃城時	埋め戻し
瓦集積	SX9	6次	9	南門枡形内	廃城時	
盛土状遺構	SX10	7次	11	北門		
桝状遺構	SX11	7次	11	北門	近代	
桝状遺構	SX12	7次	11	北門	近代	
瓦集積	SX13	9,11次	26,32,34	大手北堀二の丸寄り		註記記号SX1
瓦集積	SX14	9～11次	26,32,34	大手北堀本丸寄り		註記記号SX2
瓦集積	SX15	10次	26,32,34	大手北堀本丸寄り	廃城時	註記記号SX3
瓦集積	SX16	10次	26,32,34	大手北堀本丸寄り		註記記号SX4
瓦集積	SX17	10次	26,32,34	大手北堀本丸寄り		註記記号SX5
瓦集積	SX18	10次	26,32,34	大手北堀本丸寄り		註記記号SX6
瓦集積	SX19	11次	26,32,34	大手北堀本丸寄り	廃城時	註記記号SX8
盛土状遺構	SX20	10次	26,32,34	大手一の門前		註記記号SX7
瓦集積	SX21	12次	36	土塁SA11上		註記記号SX1
瓦集積	SX22	12次	36	城内	廃城時?	註記記号SX2
炭集積	SX23	12次	36	城内		註記記号SX3
瓦集積	SX24	13次	37	枡形二の門南西	廃城時	埋め戻し
瓦集積	SX25	13次	37	枡形一の門南東		埋め戻し
階段状遺構	SX26	14次	38		雁木の痕跡か	
礎石状円礫	SX27	14次	38			
瓦集積	SX28	14次	38			SV27・SX27の間
掘立柱建物	SB1	6次	9	枡形内		
礎石建物	SB2	現存		南西角櫓		
土坑	SK1	2次	3	土橋上?	中世?	
土坑	SK2	6次	9	城内		
土坑	SK3	6次	9		抜き取り痕?・近代	
土坑	SK4	7次	11		集石	
土坑	SK5	7次	11			
土坑	SK6	8次	16			
土坑	SK7	12次	36	城内		
土坑	SK8	14次	38	城内	抜き取り痕?	
石組遺構	SF1	7次・14次	11	大手二の門		
柱穴	P1	6次	9		中世	
柱穴か	P2	13次	37	SV18前(西)		
柱穴か	P3	13次	37	SV18前(東)		
柱穴か	P4	14次	38			

第3表　遺構一覧表(2)

2-3. 本丸堀跡の調査

2-3-1. 本丸北堀(第94・21図)

平成15年4月14日、本丸北堀跡の敷地に建つ岐阜市南青少年会館撤去に伴って試掘調査を行った(第94図)。会館駐車場で3m×3mのトレンチを2ヶ所に設定した。それぞれの位置は、トレンチの中心が、本丸石垣より10.3m地点(南トレンチ)及び19.4m地点(北トレンチ)である。

調査の成果

南トレンチは現地表下2.8m、北トレンチは現地表下2.0mで地山の砂礫層(7層)を確認した(第94図)。堀最深部は確認できなかったが、本丸西堀、東堀で過去に実施した調査の結果を考慮すると、標高6.4m程度であろう。堀底から0.2～0.4m程の厚さで粘土等の堆積土層が認められた(5・6・6′層)。これらは加納城が機能していた近世に堆積した可能性が高いが、一部近代に下る可能性もある。南トレンチでは5層の上に灰色砂礫層が認められたが、北トレンチではこの土層は確認できなかった。近代以降東側に築かれた土橋盛土の一部の可能性があるが断定はできない。南トレンチ4層、北トレンチ5層の直上には焼瓦を大量に包含する瓦礫層(3層)が厚さ1.6m程度認められた。これは第2次大戦時の岐阜空襲後に付近の焼失住宅等の瓦礫を棄てたものらしい(地元住民の話)。3層上は会館設置に伴う砕石層(2層)及びアスファルト層(1層)が見られた。

地山(7層)の検出高さが、北・南トレンチで異なるが、後述するように本丸の堀は障子堀である可能性が高く、トレンチの位置を考えても、このことを反映している可能性が高い。

出土遺物には3・4層から近代遺物に混入して近世加納城に伴う瓦や土師器皿が少量出土した(第21図)。第21図164は土師器皿B1類で、中世加納城に伴うものである。165は瀬戸産磁器の染付碗である。

2-3-2. 本丸大手北堀(9・10・11次調査)

(1)調査の経過

平成15年、本丸大手の北堀の状況を確認するため、幅5m、長さ33mの南北トレンチを設定し、7月22日より調査を開始した。堀の本丸側に瓦集積を検出、一部が被熱していることが判明した。本丸内で火災があった記録は無く、新たな所見を得ることができた。8月16日現地の一般公開を行い、8月27日現地での全ての作業を完了した。

平成16年、前年度の瓦集積の全貌を把握することと、本丸大手門前の構造(橋脚、橋台等)を確認することを目的として、西隣に幅10m、長さ18mと矩形に近い調査区を設定し、9月24日より掘削を開始した。橋脚等は確認できなかったが、新たな発見があった。それまでの堀の調査区と異なり、幅が広かったため、堀底に畝状の高まりを確認することができ、障子堀であることが判明したのである。10月24日現地の一般公開を行い、11月8日現地での作業を全て終了した。

平成17年、前年度の調査で障子堀であることが判明したが、調査区が狭く、全体の構造が不明であった。よってこれを明らかとするため、平成15・16年度の調査区を含めて、幅約18m、長さ約33mの調査区を設定し、本丸から二の丸を横断する形で堀底を検出した。調査は9月26日に着手し、11月19日、地元の市民団体である「加納まちづくり会」と共催で、加納城講座、発掘現場見学会を開催した。12月16日現地での作業を全て終了した。

(2)検出遺構

障子堀と堀障子

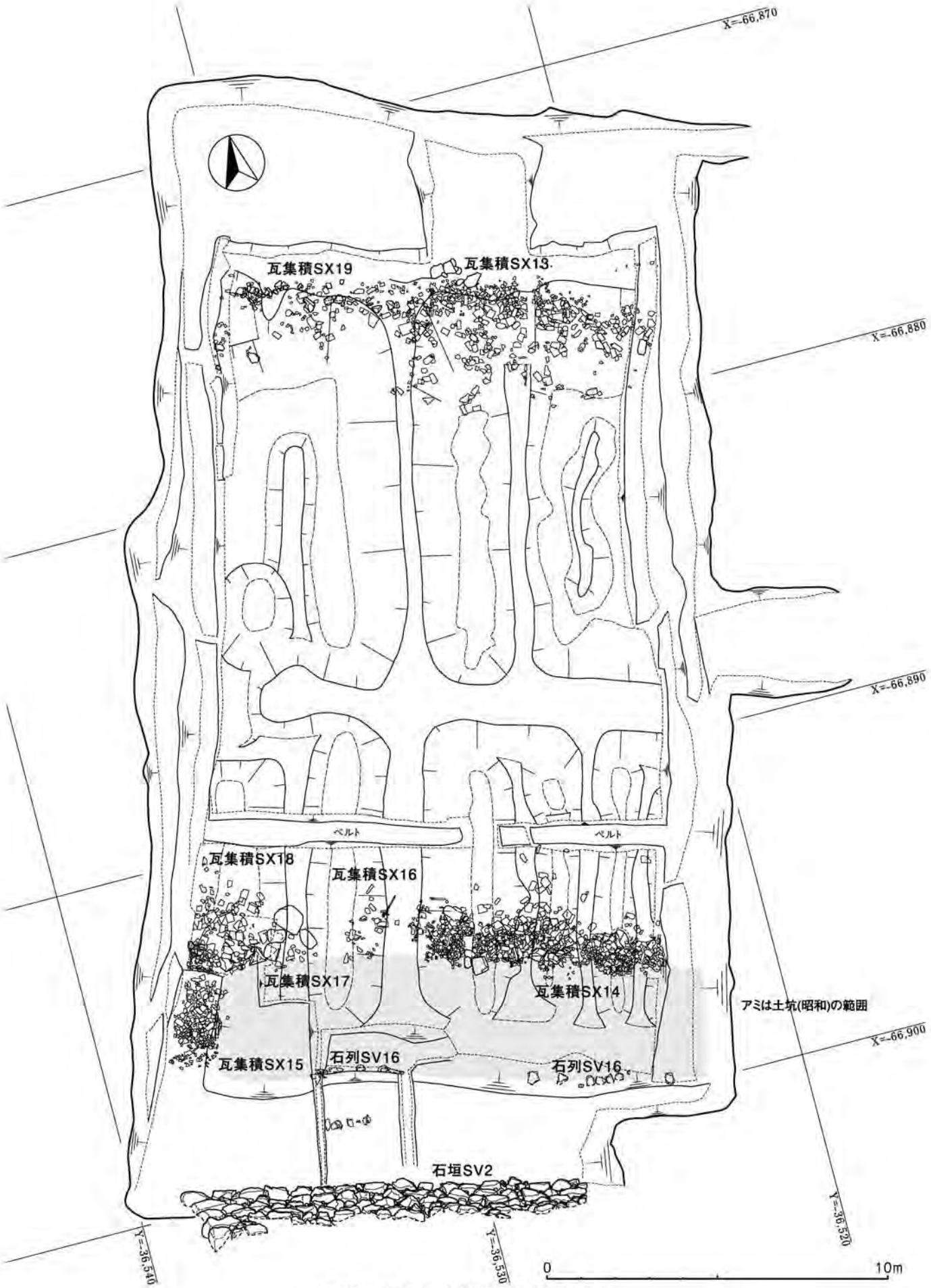
前項で述べたとおり、本丸大手北堀は、いわゆる障子堀であることが判明した。先学の研究に倣い、堀底の畝状の高まりを「堀障子」、堀障子を有する堀を「障子堀」と呼称すべきであろうが、紛らわしいので「堀障子」を「障子堀の畝」あるいは単に「畝」とする。なお加納城の障子堀の畝はすべて地山を掘り残したもので、盛土によるものではない。

現地形と検出された堀

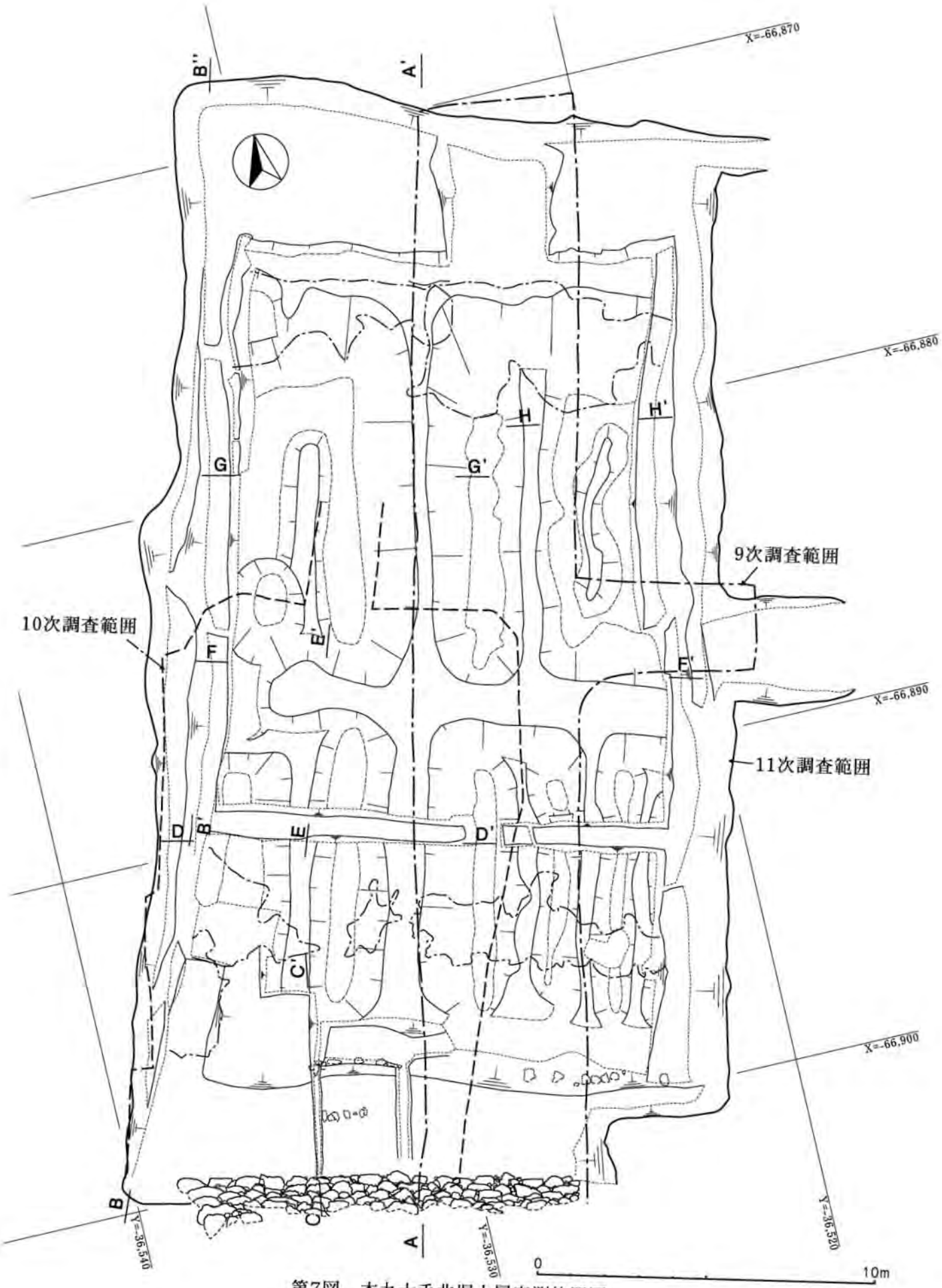
調査地点を含む市有地は、本丸の石垣から南北35m、東西48mの範囲で、周辺より約1m低い土地である。現況から判断すると全て堀と推測できるが、石垣より北約27mで堀の北肩が検出された。この場所は地籍図の地割りにほぼ合致することがわかった。地籍図は以前の二の丸内の調査結果とも良く符合し、廃城時の加納城の縄張りを、良く反映している可能性が極めて高い。今回の調査地点は明治以降に二の丸の南端が削平された結果、周辺より低くなっていると思われるが、後述するように加納城存続期間に崩落した可能性も否定できない。

土層の状況(第8～10図)

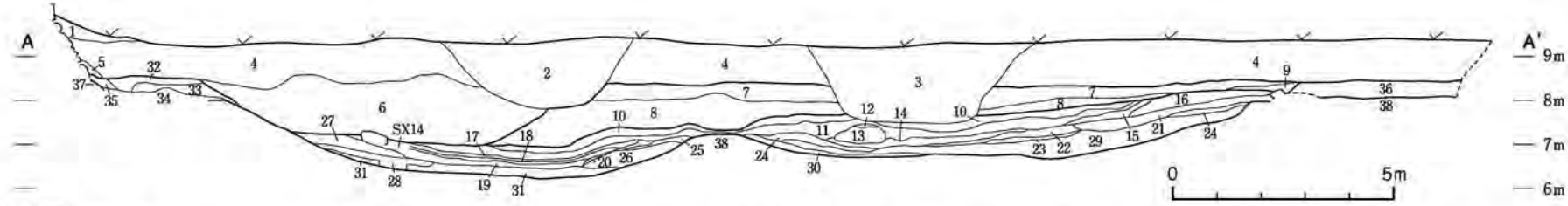
堀の堆積土(Ⅲ層)は畝等が崩落した砂礫層が若干見られるが、基本的に粘土層で、浚渫など撹乱された状況はない。粘土層の厚さは約1m、築城時から堀が埋め立てられるまでの自然堆積層である。土質により、上からⅢ1～Ⅲ4層の4層に大別できる。最下層のⅢ4層は堀底に堆積している純粋な粘土層で、初期の段階での堆積と見られる。その上層のⅢ3層は基本的に砂礫を主とする土層であるが、一部薄い



第6図　本丸大手北堀調査区平面図



第7図　本丸大手北堀土層実測位置図



Aセクション

▼Ⅰ層　現代客土・撹乱
1 暗褐色土
2 暗灰色土(コンクリート混)
3 暗灰色土(コンクリート混)
4 黒灰色砂礫(アスファルトガラ)
5 礫(円礫が主)
6 暗褐色土(瓦礫多量混・瓦は被熱)

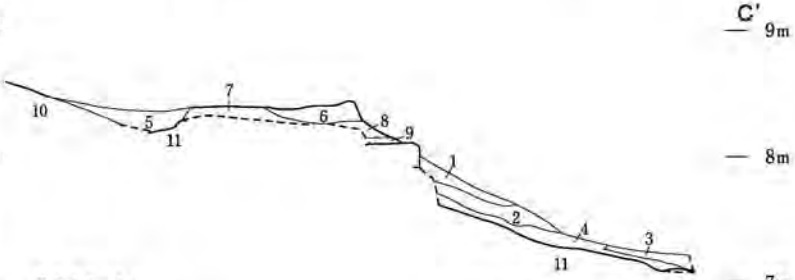
▼Ⅱ層　堀埋め立て土
7 黄灰色粘質土(硬く締まる)
8 黄灰色砂礫土(円礫多量混)
9 黄褐色砂礫

▼Ⅲ1層　堀埋土
10 黒褐色土(有機物多量混)
▼Ⅲ2層　堀埋土
11 灰色粘土(ヒシ多量混)
12 暗褐色土(有機物混)
13 青灰色砂礫
14 灰色粘土
15 灰色粘土(砂多量混)
16 暗褐色砂質土
17 灰色粘土(やや褐色味を帯びる)
18 灰色粘土(やや黄色味を帯びる)
19 灰色粘土
20 暗褐色粘土(しまり弱い)
▼Ⅲ3層　堀埋土
21 黄色砂(上面にSX1)
22 黄灰色砂
23 暗褐色砂礫
24 黄色砂礫
25 黄色砂礫
26 黄灰色砂
27 暗灰色砂礫
28 黄褐色砂
29 暗褐色土(砂礫と粘土がブロック状に混)
▼Ⅲ4層　堀埋土
30 灰色粘土
31 黒灰色粘土
▼SD1(溝状遺構)?
32 暗黄褐色土(しまり弱い)

▼Ⅳ層　近世整地層
33 灰黄色土(瓦・礫混)
34 明褐色砂質土(礫混)
35 黄灰色砂質土(しまり有)
36 黄褐色砂礫(礫細かい)

▼石垣基礎層?
37 円礫

▼地山
38 灰色砂礫



Cセクション

▼Ⅲa層　堀埋土
1 灰褐色砂質土(礫混)
2 黄灰色砂礫
3 暗灰色砂礫
4 暗褐色土(やや粘性有・紫色味を帯びる)

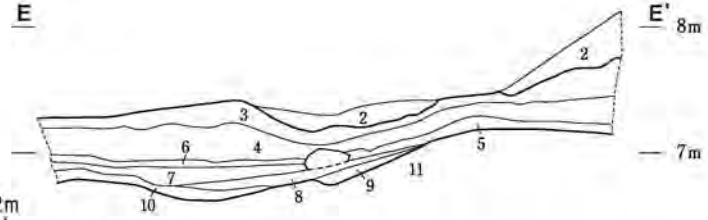
▼SD1(溝状遺構)
5 黒灰色砂礫(しまり無し・瓦多混)

▼Ⅳ層　近世整地層
6 白灰色砂質土(均質)
7 灰色砂質土(礫、瓦多混)
8 灰色砂礫(瓦多混・被熱瓦多い)
9 黄灰色砂質土(均質)

▼石垣基礎層
10 黄褐色砂質土(粘性あり)

▼地山
11 灰色砂礫

0　2m

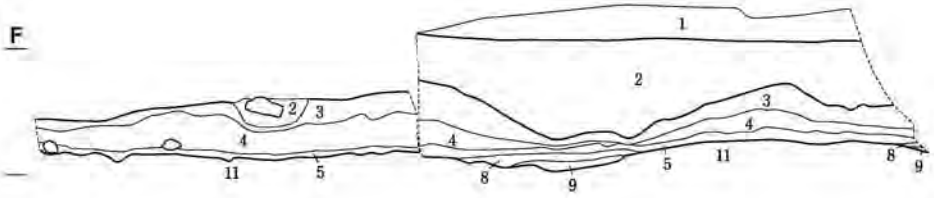


E・Fセクション

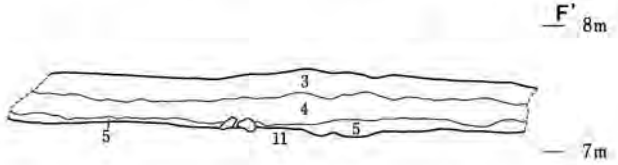
▼Ⅱ層　堀埋め立て土
1 黄褐色砂質土(粘性あり)
▼Ⅱ2層　堀埋め立て土
2 黄褐色砂礫土(瓦多混)

▼Ⅲ1層　堀埋土
3 暗茶色土(有機物多混)
▼Ⅲ2層　堀埋土
4 灰褐色粘土(ヒシ多混)
▼Ⅲ2?層　堀埋土
5 灰褐色粘土(小礫混)
▼Ⅲ3?層　堀埋土
6 灰褐色粘土
7 灰色粘土
▼Ⅲ4?層　堀埋土
8 黄褐色砂礫
9 暗灰色粘土(紫色味を帯びる)
▼Ⅲ4層　堀埋土
10 暗灰色粘土

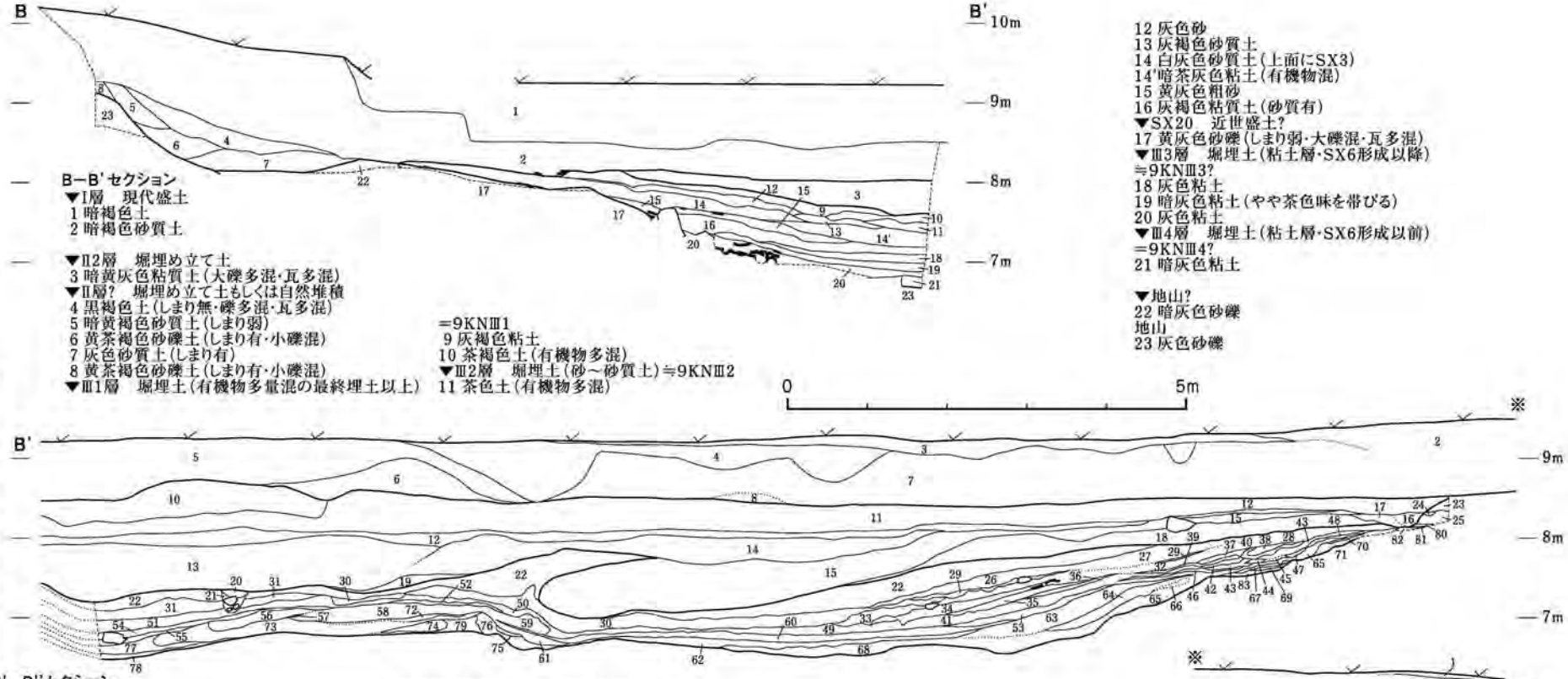
▼地山
11 灰色砂礫



平成15年度調査区



第8図　本丸大手北堀土層実測図(1)



B−B'セクション

▼Ⅰ層　現代盛土
1 暗褐色土
2 暗褐色砂質土

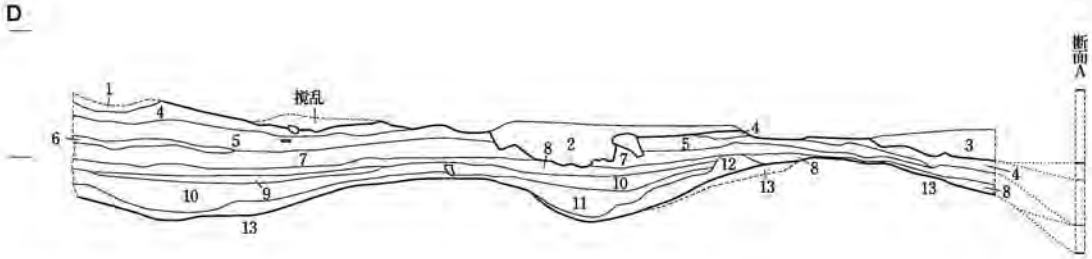
▼Ⅱ2層　堀埋め立て土
3 暗黄灰色粘質土(大礫多混・瓦多混)
▼Ⅱ層?　堀埋め立て土もしくは自然堆積
4 黒褐色土(しまり無・礫多混・瓦多混)
5 暗黄褐色砂質土(しまり弱)
6 黄茶褐色砂礫土(しまり有・小礫混)
7 灰色砂質土(しまり有)
8 黄茶褐色砂礫土(しまり有・小礫混)
▼Ⅲ1層　堀埋土(有機物多量混の最終埋土以上)
≒9KNⅢ1
9 灰褐色粘土
10 茶褐色土(有機物多混)
▼Ⅲ2層　堀埋土(砂〜砂質土)≒9KNⅢ2
11 茶色土(有機物多混)
12 灰色砂
13 灰褐色砂質土
14 白灰色砂質土(上面にSX3)
14'暗茶灰色粘土(有機物混)
15 黄灰色粗砂
16 灰褐色粘質土(砂質有)
▼SX20　近世盛土?
17 黄灰色砂礫(しまり弱・大礫混・瓦多混)
▼Ⅲ3層　堀埋土(粘土層・SX6形成以降)
≒9KNⅢ3?
18 灰色粘土
19 暗灰色粘土(やや茶色味を帯びる)
20 灰色粘土
▼Ⅲ4層　堀埋土(粘土層・SX6形成以前)
≒9KNⅢ4?
21 暗灰色粘土

▼地山?
22 暗灰色砂礫
地山
23 灰色砂礫

B'−B''セクション

1 灰黄褐色砂質土
2 暗灰色ガラ(赤紫色セメント瓦混じる)
3 灰黄褐色シルト質砂
4 灰黄色砂質土(50㎜礫含む、100㎜礫まばら)
5 灰黄色砂質土ブロック混じりガラ
6 灰黄色砂礫土(〜100㎜礫多く含む)
7 暗茶灰色ガラ
8 礫(〜100㎜)
9 灰褐色砂礫　締まり無し
10 灰黄褐色砂質土(焼瓦・〜200㎜礫多く含む)
11 灰黄色砂質土(30㎜礫まばらに含む、北へ礫径大きく多くなる)
12 黄灰色砂礫(〜50㎜礫)
13 黄灰色粘質土(〜200㎜礫多量に含む)
14 黄灰色砂礫(黄褐色斑文、〜50㎜礫多くまれに150㎜礫、上部に灰色砂質シルト薄層)
15 灰〜灰黄色砂礫(南へ100㎜礫多く含む)
16 灰黄色砂礫(〜100㎜礫)
17 灰黄色砂礫(〜50㎜礫)
18 灰黄色砂質土(〜150㎜礫多量に含む)
19 灰色砂礫(〜100㎜礫)
20 灰色砂
21 灰色砂(〜200㎜礫含む)
22 暗茶褐色シルト〜砂質シルト(植物遺体多く含む)
23 灰暗褐色シルト質砂(50㎜礫含む)　締まる
24 黄色砂礫
25 灰黄褐色砂礫土(〜70㎜礫)
26 黄褐色粗砂
27 黄褐色砂礫(〜50㎜礫、まれに100㎜礫)
28 黄色砂礫(〜50㎜礫)
29 茶褐色シルト質砂(礫含む)
30 暗灰色シルト質粘土(ヒシの実多く混じる)　締まる
31 褐灰色粘質シルト(ヒシの実多く混じる)
32 灰黄色砂礫(〜10㎜礫)
33 灰褐色シルト質砂(灰褐色粘質ブロック混じり)
34 褐色粗砂(〜7㎜礫多く含む)
35 黄褐色粗砂(茶褐色細砂混じり)
36 灰褐色シルト質砂
37 灰黄色土・灰茶褐色土の不明瞭まだら(砂混じり)
38 灰黄色砂質土・灰茶褐色土の不明瞭まだら(〜30㎜礫まばらに含む)　締まる
39 灰茶褐色砂質シルト(35層との間に砂の薄層)
40 灰褐色砂質土(灰黄色砂質土ブロック・〜30㎜礫混じり)
41 灰暗褐色シルト質砂(シルトと砂の層状まだら)
42 灰褐色粗砂(〜5㎜礫まばらに含む)
43 褐色細砂・茶褐色シルトの不明瞭互層)
44 灰茶褐色シルト質細砂　締まる
45 褐色細砂
46 淡茶褐色粘質シルト(南へ砂質が増す)　締まり無し
47 灰暗褐色シルト質砂(50㎜礫含む)
48 灰黄褐色シルト質砂(〜10㎜礫まばらに含む)
49 暗褐色粘質シルト(砂混じり)
50 暗灰色粘土　締まり無し
51 黄灰色粘土(ヒシの実含む)
52 灰褐色砂質シルト
53 暗褐色砂質シルト(灰黄色粗砂ブロック混じり)
54 暗灰色粘土
55 灰色粘土(砂の層状ブロック含む)
56 砂礫(〜100㎜)
57 淡紫灰色粘土
58 黄色砂礫(〜50㎜礫)
59 黄色粗砂(〜10㎜礫まばらに含む、淡紫灰色粘土層状ブロック混じり)
60 暗灰褐色粘土
61 黄色粗砂・暗茶褐色粘土互層
62 暗茶褐色粘土(やや紫味、〜150㎜礫まばらに含む)
63 暗灰褐色砂礫(〜70㎜礫)
64 灰黄色砂礫(20・70・100㎜大)・灰褐色〜暗茶褐色砂質〜シルト互層)
65 茶褐色砂礫(〜20㎜、まれに50㎜礫)
66 暗茶褐色砂(〜30㎜礫まばらに含む)
67 淡茶褐色粘質シルト
68 暗茶褐色砂礫土(シルト質砂・〜70㎜礫)
69 灰茶褐色シルト質砂(南)〜砂質シルト(北)
70 灰黄褐色シルト質砂
71 黄色砂礫(〜40㎜礫)
72 淡紫灰色粘土
73 黄色砂礫(〜10㎜礫・〜50㎜礫・紫灰色粘土の層状)
74 灰色粘土・灰黄色砂の層状まだら
75 暗茶褐色粘土(やや紫味)　締まり無し
76 黄灰色砂礫(〜70㎜)・淡灰色砂質シルトの層状まだら
77 灰暗褐色砂質粘土(砂混じり)
78 暗灰色粘土(酸化鉄集積層)
79 灰色粘土
80 黄色砂(〜200㎜礫の隙間を埋める)
81 茶褐色粘質シルト(上面に〜200㎜礫が載る)
82 灰黄色砂
83 灰色砂礫
84 黄色砂礫　　地山

第9図　本丸大手北堀土層実測図(2)

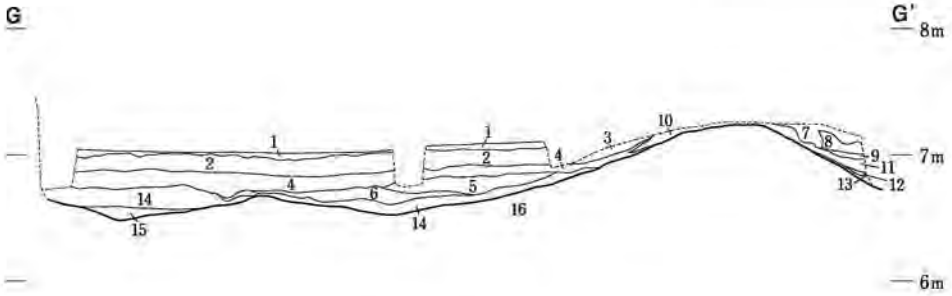


Dセクション

▼Ⅲ1層　堀埋土
1 茶褐色土(有機物多混)
▼Ⅲ2?層　堀埋土
2 灰褐色砂質土(礫多混・瓦混)
3 褐色砂礫土(円礫多混)
▼Ⅲ2層　堀埋土
4 茶色土(有機物多混)
5 暗茶灰色粘土(有機物混)
6 灰褐色粘質土(砂質有)
▼Ⅲ3層　堀埋土
7 灰色粘土
8 暗灰色粘土(やや茶色味を帯びる)
9 灰色粘土(粘性強い)
10 灰色粘土
▼Ⅲ4層　堀埋土
11 暗灰色粘土
12 砂礫と灰色粘土の互層(畝の崩落土)

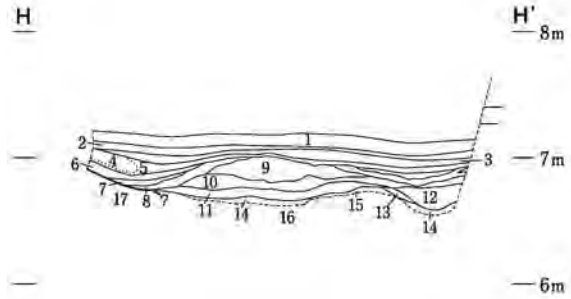
▼地山
13 黄色砂礫

0　2m



Gセクション

1 灰褐色砂質シルト　締まる
2 灰暗褐色シルト質粘土(砂混じり、東へ行くほど多くなり互層状をなす)
3 黄褐色砂礫(～10㎜礫、まれに50㎜礫)
4 暗灰色粘土(やや紫味)
5 灰暗褐色砂質粘土(酸化鉄集積、層状に重なる、～50㎜礫含む)
6 暗灰色砂質粘土(やや紫味)　締まり無し
7 灰黄色砂礫(～50㎜礫、灰褐色砂質土が層状に入る)
8 灰茶褐色粘質砂　締まる
9 暗茶灰色粘質シルト　やや締まる
10 灰色砂礫(～20㎜礫)
11 茶灰色粘質シルト(砂質ブロック混じり)
12 赤茶褐色砂質シルト(下方に酸化鉄集積)　締まり無し
13 灰黄色砂礫(礫まばら)
14 暗灰色砂礫(粘土混じり)
15 灰褐色砂礫(酸化鉄集積)
16 黄色砂礫　　地山



Hセクション

1 灰褐色粗砂(～5㎜礫少し含む)
2 暗灰色砂質シルト(砂混じり)
3 暗茶褐色粘質シルト
4 灰黄色砂礫
5 灰茶褐色砂質シルト(粗砂層状ブロック含む)
6 暗茶灰色粘土　締まり無し
7 茶灰色粘土　締まり無し
8 黄灰色砂(～50㎜礫混じり)
9 暗灰色砂礫土(やや紫味、～40㎜礫、まれに80㎜大)
10 暗灰色砂質シルト(やや紫味、～70㎜礫混じり)　締まり無し
11 黄色粗砂(～70㎜礫混じり)
12 暗灰色粘土(やや紫味)
13 茶灰色シルト(～50㎜礫少し含む)　締まり無し
14 灰黄色砂礫(～50㎜礫)　　地山?
15 褐色礫(砂少なく隙間が多い)　　地山?
16 灰黄色砂礫(～50・200㎜礫)　　地山
17 黄色砂礫　　地山

第10図　本丸大手北堀土層実測図(3)

粘土層との互層状になっている部分も認められる。堀北半に堆積が厚く、堀中央の平行畝の両側にも見られる。人為的な埋積とは見られないことから、本丸・二の丸側の肩、中央の畝が自然に崩落し、堆積したものと考えられる。砂礫層はこの層位にのみ見られることから、何か特殊な環境下におかれた可能性が考えられる。なお、Ⅲ3a層は二の丸側のⅢ3層のうち、多量に遺物を包含する層を抽出したものである。後述するSX13、SX14などの瓦集積はⅢ3層上面に形成される。Ⅲ3層の上層には再び粘土層(Ⅲ2層)の堆積が見られる。上部程有機物の混入が多い。最上層には有機物が多量に混入するⅢ1層がある。堀が埋められる直前の堀底堆積層であり、近世～近代の堆積と考えられる。Ⅲ1層上面のレベルは、二の丸側が高く約8m、撹乱を受けていない最も本丸寄りで約7m、この高さは石垣前の平坦面よりも低い。よって常時滞水していたのは堀の中央部のみで、石垣前には犬走り状のテラスが露出していた可能性が高い。

Ⅲ層直上には黄色系の締まった土が堆積する(Ⅱ層)。多量の瓦や円礫が混入し、上面が平坦であることから、堀を埋め立てた土層であると考えられる。大きく2層に分けられ、下層は円礫を多量に含み、最初に堀内に入れられた土層である。重量によって(?)一部では軟弱な堀内堆積物に深く沈み込んでいる状況が見られた。上層は黄色粘質土で硬く締まり、レベル8.4m辺りに平坦な面を造り出している。Ⅱ層上面からは巨大な土坑(第8図A-A'セクション6層)が穿たれ、中に戦災によると見られる二次被熱した遺物が多量に廃棄されていた。よってⅡ層の形成は昭和20年より前ではあるが、はっきりとした時期は確定できない。

Ⅱ層の上にはコンクリートなどが混入するアスファルトガラ層(Ⅰ層)が堆積する。戦後の形成である。

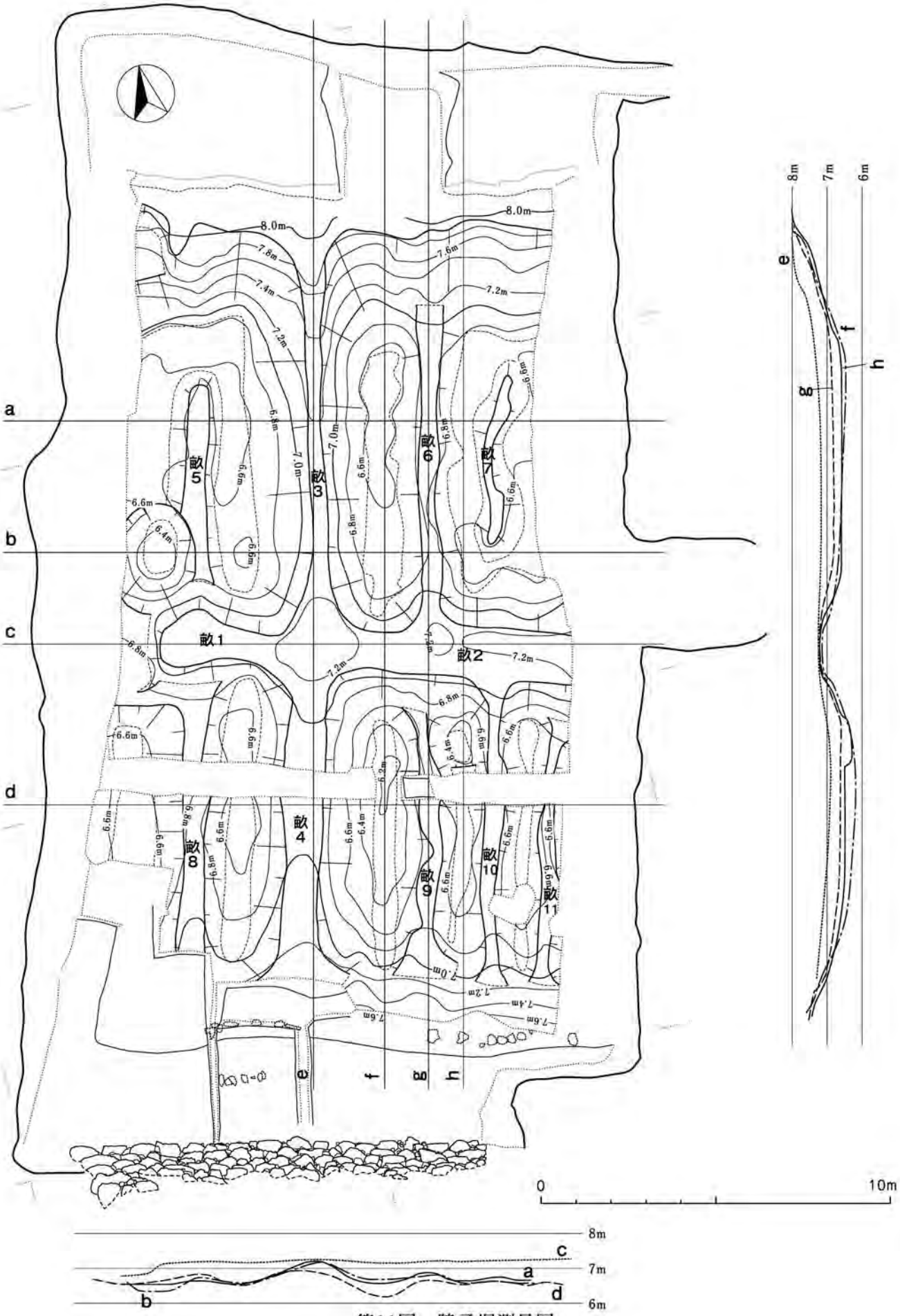
障子堀(第11図)

幅約27mの堀底に南北方向の短冊状の土坑を連続して掘削することにより、地山を掘り残し、畝を形成している。11本を検出し、高さ、幅に大小2つのサイズが見られる。大きなものとして、中央に堀と平行する東西方向の畝1・畝2、そこから直交方向に北へ延びる畝3、同様に南への畝4がある。小規模なものは全て南北方向で、畝1から北へ畝5、南へ畝8があり、畝2からは北へ畝6・7、南へ畝9～11がある。畝5と8、3と4、6と9、7と10は直線上に配置されている。また畝3・4の両隣との間隔はおよそ2間、畝6と7、畝9～11の間隔は約1間と非常に規則的な配置が窺われる。大きな畝(1～4)による方形の区画があり、その中を小さな畝で等分に区切る構造が予想されるが、全体像は不明である。北半最深部と畝2との比高差が最も大きく、約1.0mである。

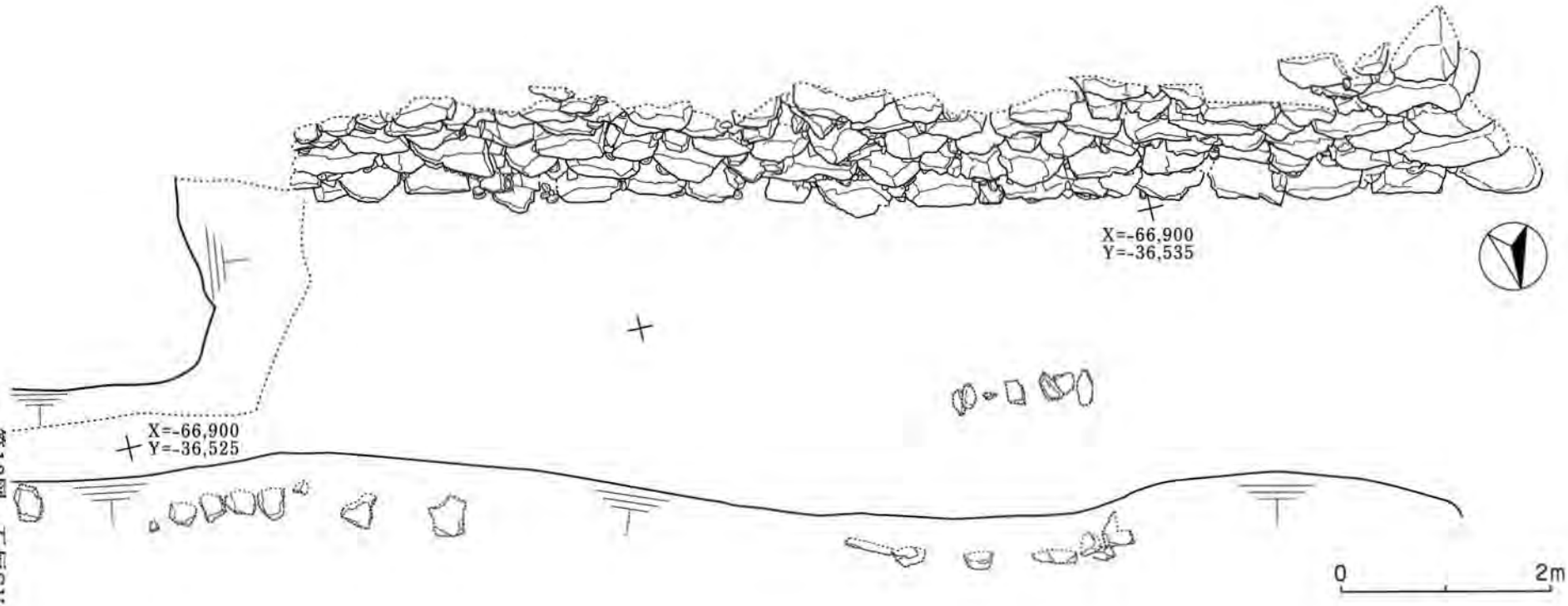
いずれも残存の横断面形状は蒲鉾型をしているが、堆積土を観察するといくらかは崩落している。しかしながらその土量はそれほど多くなく、元来の形状とそれほど変わらなかったと見られる。縦断面形状は畝1・2を境にして異なる様相が見える。北半の畝、底とも南半に比べ高く、幅が若干広いことも相まって、浅く見える。畝自体の幅も南に比べ狭いものが多い。

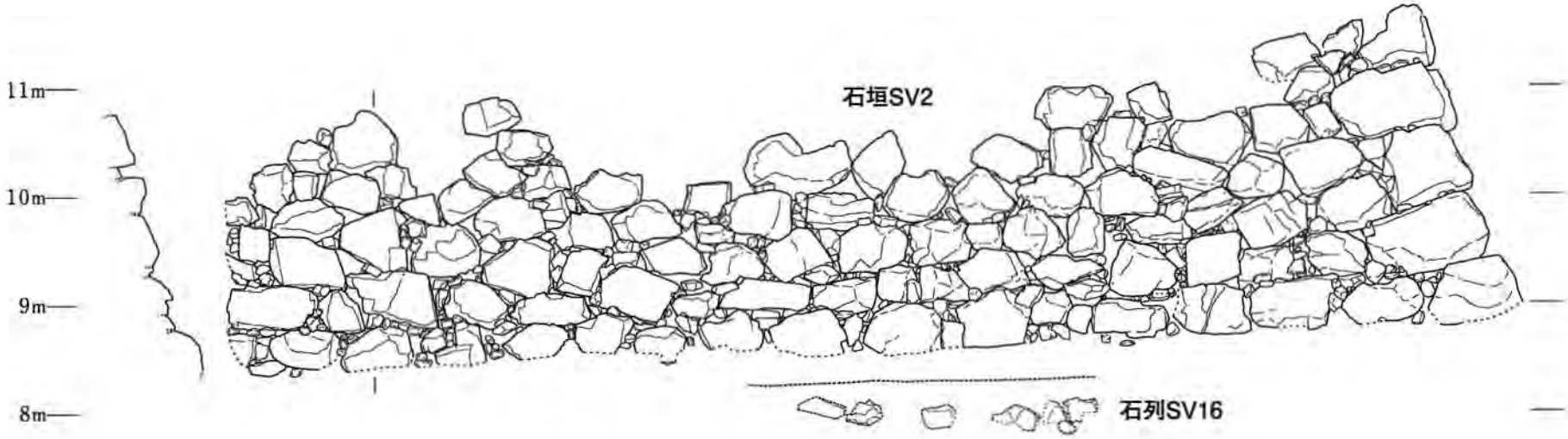
石垣SV2(第12図)

本丸の石垣で、基礎部分の高さ1mが埋没していた。現存の高さは最大で3.0m、石材は砂岩の1石を除き、全てチャートである。自然石のチャートを主たる石材として石垣を構築すると、どうしても表面部分には空隙が生じる。そこには主石材と比べて小さなチャートを詰め、またさらに円礫を詰め込む加納城の石垣の特徴を顕著に示している。石の積み方を観察すると、近代以降の積み直しは見られない。

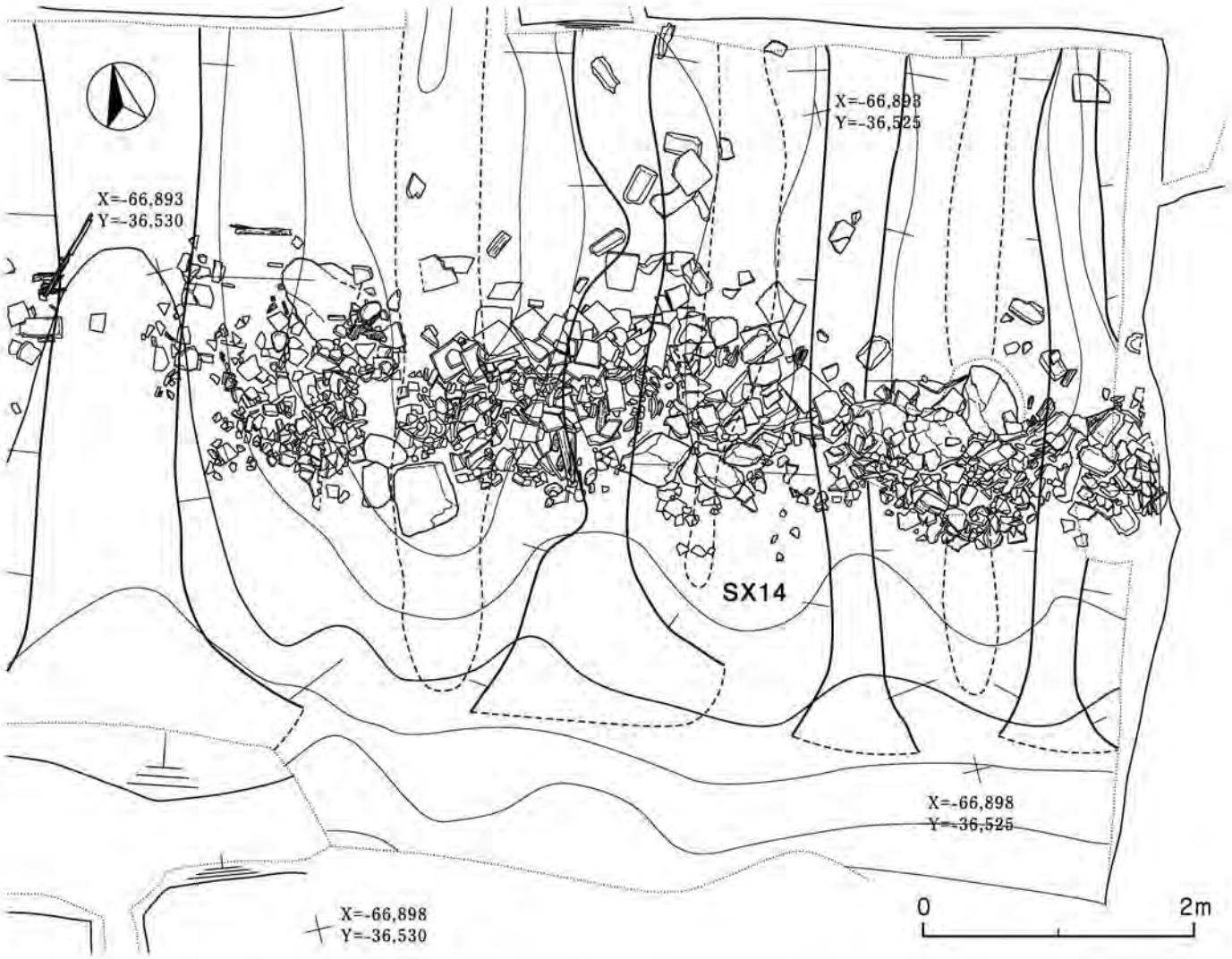

a
b
c
d
e
f
g
h
畝1
畝2
畝3
畝4
畝5
畝6
畝7
畝8
畝9
畝10
畝11
8.0m
7.8m
7.6m
7.4m
7.2m
7.0m
6.8m
6.6m
6.4m
8m
7m
6m
0
10m

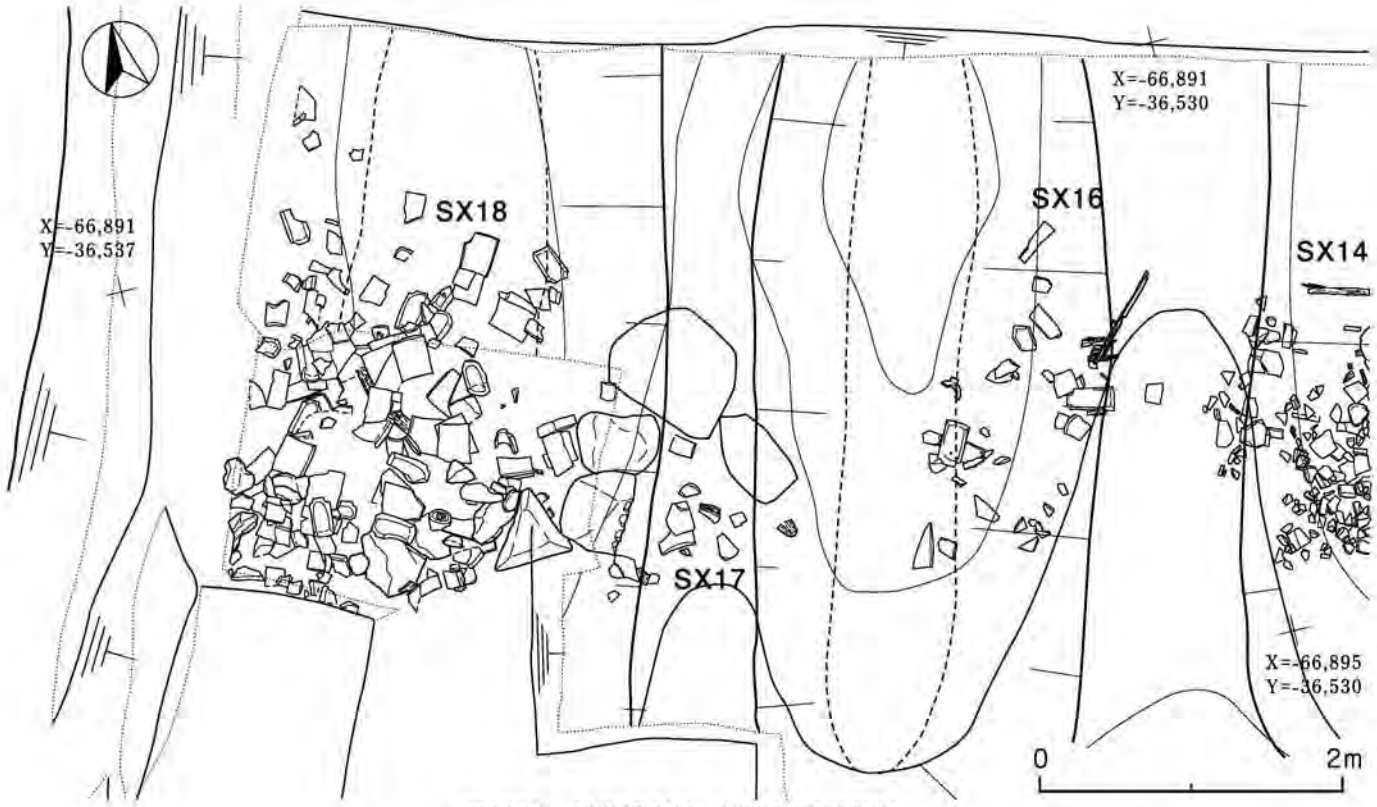
第11図　障子堀測量図





第12図　石垣SV2実測図





第13図　瓦集積SX14,16,17,18実測図

基礎は地山の砂礫層に直接石を据えている。根石といえる最下段の石材は、上位の石材に比べ20cm程度前に据えられている。

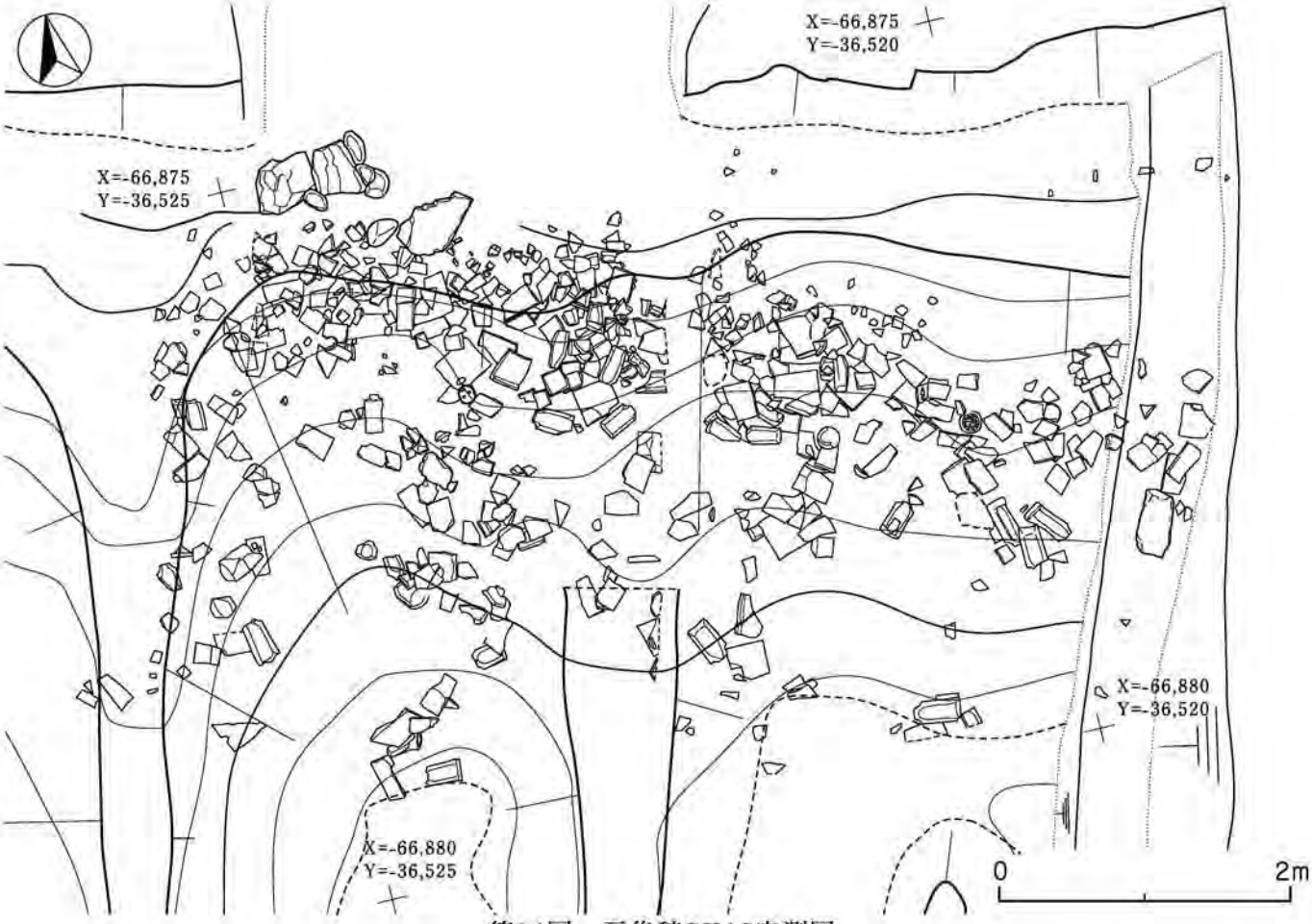
絵図によれば、この部分の石垣は土塁の天端まで構築されている。現況の土塁の高さがレベル14m余りであることから、あと2m程度の石垣が本来築かれていたと想定される。堀底の本丸寄りで石垣の石材の転落石が数個出土している。その中にも砂岩があることから、石垣自体、チャートを圧倒的な主体としつつも、わずかに砂岩を使用して構築されていたと見られる。現況の石垣を観察しても同様なことはいえる。

瓦集積SX14・16～18(第13図)

堀の本丸側、Ⅲ3層上面に形成された瓦集積である。集中している範囲毎に遺構番号を付けたが、一体のものと見られる。堀の傾斜に沿って北に向かって下がる堆積をしており、南端は小片が集中している。これは戦災後の廃棄土坑によって削られているためで、本来は堀壁面の傾斜に沿って、本丸側に広がっていた可能性が高い。東西の端部は調査区外に広がっており、本来の範囲は不明である。

瓦集積SX13(第14図)

堀の二の丸側、Ⅲ3層上面に形成された瓦集積である。西の一部は、平面的にSX19と重なるが、層位が異なっている。西端は図で示したとおり、東端は調査区外へと広がっている。南北の大きさはおよそ



第14図　瓦集積SX13実測図

4mであるが、堀の肩に近い方に密集しており、二の丸側から廃棄された状況は明らかである。

瓦集積SX15（第15図）

盛土状遺構SX20を覆うⅢ2層直上で検出された。SX20と同様東端は現代の土坑により壊されているため、本来の東西方向の範囲は不明であるが、南北方向は図で示したとおりと見られ、約3mを測る。この場所はⅢ1層が認められないところであるため、断定はできないが、堀埋土の最上面に廃棄されたと考えた方が良さそうである。場所として本丸大手の前に当たるため、明治初期に建築物が取り壊されたときの廃棄物と考えられる。

瓦集積SX19（第15図）

11次調査二の丸側で検出された瓦集積である。他の瓦集積に比べ、量が少なく、密度が小さい。9次調査範囲まで広がりは見られず、調査区西半に分布する。平面的には、SX13と一部重複するが、層位的に異なる。この部分ではⅢ1層が確認できないが、廃城時に廃棄された瓦集積と見られる。

盛土状遺構SX20（第15図）

調査区南西で検出された盛土状の遺構である。石垣前平坦部の肩から北へ四角く張り出したもので、大きな円礫と瓦片を多量に包含する砂礫層からなる。この種の土層は堀内の堆積土には見られないことから、人為的な盛土と判断した。東端は現代の土坑で破壊されており判然としないが、畝8の位置までは確認できる。北端はSX15とSX18の境あたりまでで、この位置には角礫が多く確認される。石積みあるいは石列の様相は見られないが、それらが転落したものかも知れない。掘削を行っていないため、未確認ではあるが、Ⅲ3層形成後、構築されたようである。本丸大手門の正面に当たることから、ある時期において、橋の基礎となる盛土を行ったのかも知れない。崩落の可能性があったため、範囲を検出しておらず、撹乱壁面やサブトレンチなど部分的な確認にとどまっている。

石列SV16（第12図）

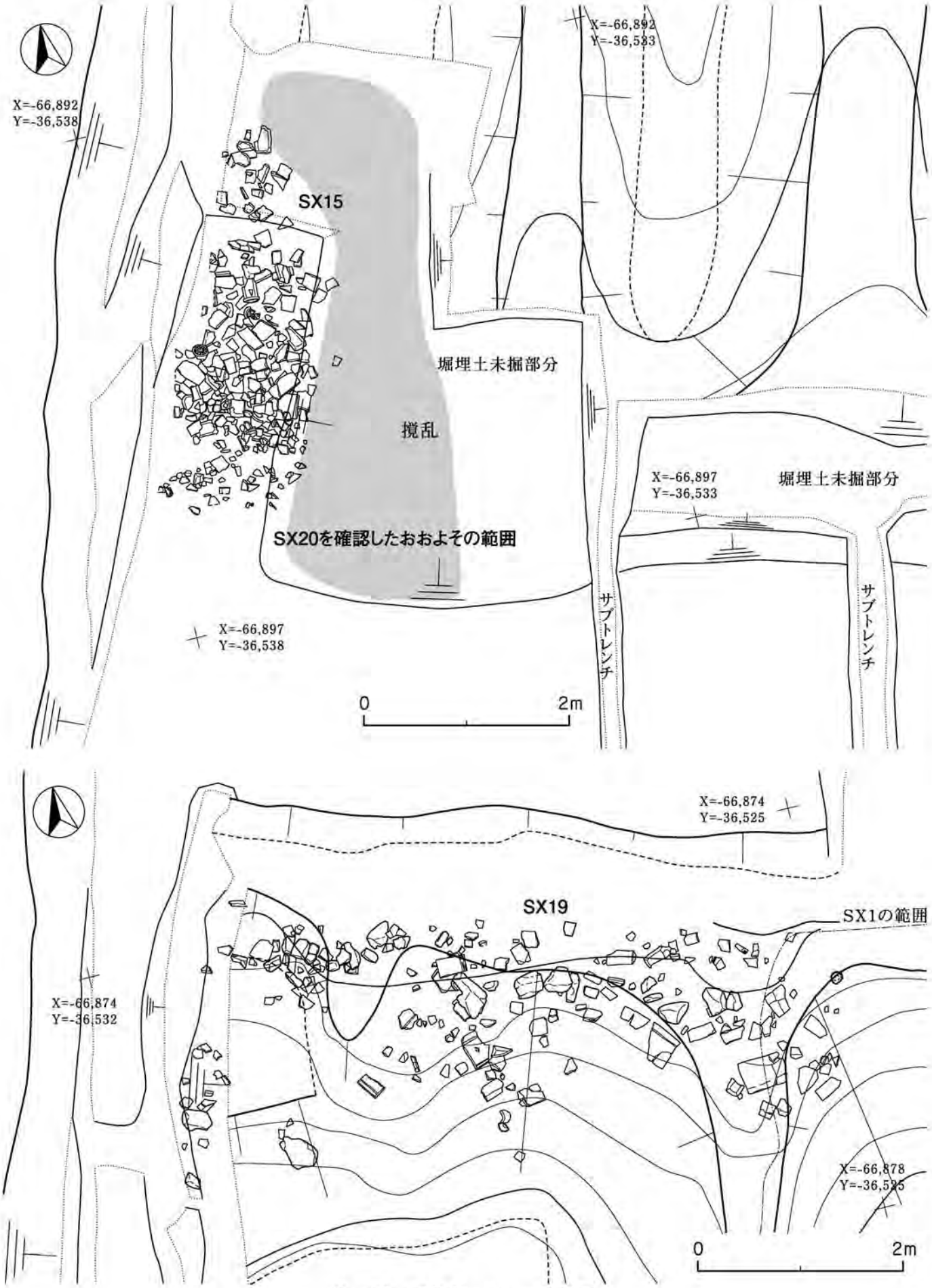
石垣SV2の前のテラス状平坦面の肩で検出された石列である。かなり小振りなチャートで構成されている。直線的に並んでいたため、石列と判断したが確証はない。位置的に水による堀の肩の浸食を防ぐ目的が考えられるが、このような規模で機能を果たすのか疑問が残る。

二の丸整地層

堀の二の丸側の肩周辺には、砂礫層ともに長さ40～50cm程度のチャート礫が出土した。これらは並んで配置されている状況ではなく、転落石であると考えられる。すると堀の二の丸側にも石垣状の施設が構築されていた可能性が高いが、その割に石の数は少なく、正確なところは不明である。

土坑（昭和）（第6図）

中に戦災によると考えられる陶磁器・瓦を主とする被熱遺物が多量に廃棄されていた。土坑は堀南端の堆積土の一部を破壊しているが、堀底にまではほとんど達していないようである。本丸石垣前の平坦部から少し下がったところに石列SV16が検出されているが、これは基本的に原位置を保っているようである。平坦部から堀南半最深部に至る部分は、SX14共々堆積層が削られてしまっているが、最深部周辺は粘土層の上部が撹乱されてしまっているに過ぎない。土坑の平面形状は東西に長く、西端はSX20の東端、東端は確認されていない。幅約8m、長さ14m以上を測る。



第15図　瓦集積SX15,19実測図

(3) 出土遺物

Ⅲ4層出土遺物(第19図)

1は土師器甕、2は灰釉陶器椀、3・4は山茶碗である。いずれも中世加納城以前の遺物である。

5は古瀬戸後期Ⅳ段階新の古瀬戸擂鉢、6・7は土師器皿で、中世加納城に伴う遺物である。

8は瀬戸産陶器連房第5～6小期の徳利である。層の形成時期を示す唯一の遺物であるが、1点のみの出土である。9は土師器内耳鍋、10は元豊通寶である。11は錆で癒着した銭貨である。6枚が重なっているが、銭文を確認することはできない。12は木製品の連歯下駄である。残存状況は良くないが、長さ20cm以上、幅10cm以上の長円形である。樹種はヒノキ属で台と歯を同時に作り出す一木作りである。

Ⅲ3層出土遺物(第19・22・23図)

13～36はⅢ3a層出土、37～63はⅢ3層出土の遺物である。

13～16は美濃須衛産、17は猿投産と見られる須恵器である。18・19は灰釉陶器、20・21は尾張型山茶碗6型式の碗である。23は土師器伊勢型鍋、24は中世の土師器皿、25は古瀬戸中期Ⅳ段階の折縁深皿である。

22・26～35は中世加納城に伴うと考えられる遺物群である。22は東濃型山茶碗生田窯式、26・27は古瀬戸後期Ⅳ段階新の腰折皿と擂鉢である。28は大窯1段階の縁釉挟皿、29は同3段階の天目茶碗、30は大窯製品の小壺(茶入)、31～35は土師器皿である。

36は常滑産と見られる陶錘である。体部中央に「○」の2カ所が切れるマークが刻印されている。

37～45は須恵器で7世紀後半からあり、8世紀のものが多い。46・47は灰釉陶器である。48～50は尾張型山茶碗で全て6型式である。51・52はそれぞれ白土原窯式、明和窯式の東濃型山茶碗である。

53～70は中世加納城に伴う遺物群と見られる。53は大洞東もしくは脇之島窯式、54・55は生田窯式の東濃型山茶碗である。56～59は古瀬戸後期Ⅳ段階の腰折皿(56)、縁釉小皿(57)、擂鉢(58)、盤類(59)である。59を除く3点は後期Ⅳ段階新のものである。60は大窯1段階の擂鉢、61は同2段階の稜皿である。62～70は土師器皿である。

71はロクロ成形の土師器皿、72は土師器内耳鍋、73は肥前産青磁で、鉢もしくは皿である。高台内を深く削り込んでおり、底部の厚さは薄い。73は層の形成時期を示す唯一のもので、17世紀中葉から後葉と推測される。

Ⅲ3a層出土の瓦は軒平瓦2点、軒丸瓦3点を実測した。166は軒平瓦E1類、167はB1類である。168・169は軒丸瓦R15-1類で、168は変形が大きく、瓦当の接合も十分ではなく、作りが雑である。170はL13-6類と推定される。181は丸瓦で、凹面には密度が小さい刺子の痕跡が見える。凸面には不明瞭であるが、タタキ痕と見られる痕跡も観察できる。

171～180・182はⅢ3層から出土した瓦である。171・172はB1類、173はE1類の軒平瓦で、いずれも北西集中部から出土した。完形度が高く、171・172は二次被熱している。174～180は軒丸瓦で、L13-6類(174)、L12-6類(176)、L16-7類(177)、R15-1類(178)、R14-1類(179)、L16-3類(180)と軒平瓦に対して、笵の種類が多い。178は168同様、歪みが大きい。笵が分類できた軒丸瓦の内、二次被熱しているものは見られない。182は鯱瓦の鰭の部分と見られる。今回出土の他の鯱瓦と比べて薄い。

SX14出土遺物(第19・23～27図)

74～76はSX14に伴う木製品である。幅約5.0～5.5cm、厚さ約2～4mmの薄く、長いこけら様の板材である。瓦と折り重なる様に出土していることから、屋根材の一部と見られ、瓦の下地としたこけら板と考えられる。樹種の詳細が明らかなものは、全てアカマツである。

瓦は膨大な量があるが、軒瓦は平12点、丸5点と極めて少ない。183はC1類、184はB類もしくはC類、185はE1類、186はB3類、187・188はS1類の軒平瓦である。187は二次被熱している。189・190はL13-6類、191はL12-b類の軒丸瓦である。189の丸瓦凹面には密度が小さい刺子が見られ、190は吊紐が認められるものの、その他の痕跡は不明瞭である。193～202は平瓦である。SX14の平瓦は、長さが約25～30cmと法量の幅が大きいが、主体となるのは28～29cmの大きめのものである。全体的に焼成は良好で、硬質なものが多く、厚さも平均2cmと比較的大きい。形状は大きめのものは台形、小さめのものは正方形に近いもの、という傾向がある。193は狭端部左角に「天下一」のスタンプ(陽刻)が押されている。刻印原体の大きさは、長さ6.0cm以上、幅1.2cmで木の木口面を使用している。203～210は丸瓦である。全長24～29cmと幅がある。204・205を除き吊紐痕が認められ、204には後部からの内タタキ痕がある。タタキは角で叩いたもので、痕跡はごく短い。

SX16出土遺物(第19・27図)

77は漆器椀である。残存状況は悪く、歪みも見られるが、口径17cm、器高13cm、高台径10cmと推測される。樹種はトチノキで、表面に黒漆が塗布される。文様はない。

211はC1類の軒平瓦、212～214はいずれもL13-6類の軒丸瓦であるが、212には巴中央によく見られる笵キズが無い。213・214の凹面には吊紐痕が見られ、また釘が残存している。

SX17出土遺物(第28図)

215はB1類の軒平瓦、216はL13-6類の軒丸瓦である。

SX18出土遺物(第28～30図)

217・218はB1類、219はC1類の軒平瓦である。いずれも残存状況は良い。220～222はL13-6類、223はL16-5類の軒丸瓦である。220・222はほぼ完形で、220には釘が残存する。221は二次被熱している。224～226は平瓦である。長さ25.5cm前後に収まり、全体的に小さい。227～230は丸瓦である。全長は24～27cm位に収まり、平瓦同様全体的に小さい。吊紐痕は見られない。231・232は輪違瓦である。平面形が横長の長方形で、長さが短い。

SX20出土遺物(第19・30図)

79は山茶碗である。遺構の時期を示すものではない。

233はB1類、234はB3類、235はS1類の軒平瓦である。236～238は軒丸瓦で、236はL12-4類、237はL13-6類と推測される。

SX13出土遺物(第19・30～33図)

78はSX13に伴って出土した土師器皿である。近世のものと推測される。

239はB1類、240はC1類、241はF2類、242はJ4類、243はF3類、245はE1類の軒平瓦である。244は残存状況が悪く、文様を分類することはできないが、新しい種類のものの可能性がある。246はL13-6類、

247はR15-1類、248はL12-6類、249はL12-7類、250はL12-b類、251はL12-i類の軒丸瓦である。軒平、軒丸とも、いずれも瓦当には砂が付着しているが、SX14・SX18などと比べると、文様の種類が豊富である。252・253は平瓦、254～258は丸瓦、259は塀瓦、260～262は輪違瓦である。

二の丸整地層(Ⅳ層)出土遺物(第20・34図)

101は灰釉陶器椀、102・103は白磁皿、104は瀬戸産染付碗、105は産地不明の陶器、106は近世の土師器皿C2類である。

263はJ4類の軒平瓦、266はR16-3類、267はL12-10類の軒丸瓦である。264はL11-1類、265はL12-16類と推測される。

Ⅲ2層出土遺物(第20・34～36図)

80は須恵器長頸瓶、81は灰釉陶器皿、82は土師器皿である。

83は連房第1～2小期の天目茶碗、84は同第3～4小期の灯明皿である。85は肥前産磁器で、外面が二重網目文の染付碗である。86は瀬戸美濃産磁器、87は産地不明の陶器である。88～91は土師器皿で、89・90はロクロ成形のものである。92～98は36と同様の陶錘である。体部の刻印は、「○」・「○が2つ連なったもの」・「○の2カ所が切れたもの」・「○が8つに分割されたもの」・「＊に似た線刻」・「無印」の6種がある。一例を除き、いずれも径は3.4cm前後であるが、長さは4.8cm前後・5.2cm前後・5.7cm前後の3法量があるようである。99は「永楽通寶」で、粘土層にパックされていたため、緑青がほとんど無く、銅色をしている。100は鉄釘である。

268はB1類、269はC1類、270はD2類、271はG3類、272はJ1類、273はS1類、274はK7類の軒平瓦である。新たな種類の文様が出土すると同時に、キラコを使用したK7類が現れる。しかし大部分は砂で、キラコはごく少量である。275はL16-4類、276はL13-6類、277はR16-1類、278はR15-1類、279はL16-2類、280はL16-7?類、281・283はL12-10類、282はL12-12類の軒丸瓦である。L12-10・L12-12類はキラコを使用する。284はC類の軒塀瓦、285は塀瓦の角桟部分である。286は平瓦で、歪みが大きい。

SX15出土遺物(第36・37図)

287はG4類、288はJ4類、289はH2類、290はQ3類、291はK11類の軒平瓦である。292～303は軒丸瓦で、砂を用いたL16-4類(292)、L13-a類(293)、L13-9類(294)、L16-7類(295・296)、L12-3類(297)とキラコを使用したL12-c類(299)、R14-2類(300)、R16-3類(302)がある。298はL13-9類と推測される。304～306は丸瓦で、凸面中央に刻印がある。294・301・303の凹面には、ほぼ全面にわたる内タタキ痕がある。307は輪違瓦である。

SX19出土遺物(第37・38図)

308はO3類、309はB1類の軒平瓦、310はL16-7類、311はR10-1類と推測される軒丸瓦である。312は丸瓦で、凹面には内タタキ痕がある。313はC類の軒塀瓦であるが、角桟は無い。314は角桟が付いた板塀瓦で、右側に角桟、後方に桟が付く。長さ約45cm、幅約30cmを測る。315は桟瓦形態の塀瓦と見られる。後方2カ所に焼成前に作られた孔があるが、左前と右後ろの2カ所に焼成後、新たに穿孔している。長さ約45cm、幅約30cmと通常の板塀瓦と規格が同じである。

Ⅲ1層出土遺物(第20・21・38～42図)

107・108は須恵器、109は白土原窯式の山茶碗である。

110～112は中世加納城に伴う遺物と見られる。110は生田窯式山茶碗、111は古瀬戸後期Ⅳ段階の天目茶碗、112は大窯3段階前半の稜皿である。

113は連房第2小期の向付(御深井皿)で、内面は型で成形されており、底部には3本の短い足が付く。これと同一のものが本丸1次調査でも出土している。114は器種不明の美濃産陶器で、連房第7～8小期に比定される。115～118は土師器皿で、115・116は手づくね、117・118はロクロ成形である。119は肥前産磁器、120・121は京都・信楽産と見られる陶器である。121はロクロ目が強く、口縁下の文様は、掻き落としによって描かれる。高台内には「仁清」と書かれる。122～124は鉄釘、125は銅製の灯明具である。歪みが見られるが、径約9cm、高さ1cm、1カ所に長さ1cm程度の持ち手が付く。126は常滑産陶器の甕である。127～129は美濃産徳利である。いずれも外面に薄い灰釉が掛かり、焼成前に線刻で文字が彫られている。127は「加納倉橋屋」と読むことができる。連房第10～11小期に比定される。

316はG5類、317はK5類、318はK7類、319はR1類、320・323はN3類、321はN1類、322はN6類の軒平瓦である。316を除いて、全てキラコを使用している。324～340は軒丸瓦である。砂を使用するのは、L16-1類(324)、L16-2類(325)、L16-3類(326)、L13-6類(327)、R16-1類(328)、L13-9類と推測される329である。327は巴中央の笵キズの無いものである。キラコはL9-a類(332)、L16-8類(333)、L12-10類(335)、L12-12類(336)、R13-1類(337)、R16-3類(338)、R13-1類(339)、R14-2類(340) で、330のL16-8類は不明である。341～343は軒塀瓦で、341がC類、342・343がG類で、いずれもキラコを使用している。344～346は丸瓦で、344は凸面に刻印がある。347・348は二の平瓦、349は塀瓦、350は熨斗瓦もしくは伏間瓦、351～353は熨斗瓦と見られる。351は平瓦の凹面に縦方向の切れ込みを入れたものである。354～357は輪違瓦、358～360は桟瓦である。

Ⅱ層出土遺物(第21・43～45図)

130～146はⅡ層出土遺物である。138は湯呑で、内面は鉄釉と灰釉を掛け分けている。139は志野の碗、140黄瀬戸鉢の加工円盤である。

361はB3類、362はJ1類、363はG5類、364はF4類、365はK4類の軒平瓦である。この内、364・365はキラコを使用する。366～385は軒丸瓦である。砂がL24-a類(366)、L16-3類(367・370)、L16-2類(368)、L16-7類(371)、L13-b類(372)である。キラコはL13-9類(375)、L12-12類(376)、L11-1類(377)、L12-15類(378)、L12-d類(379)、L12-f類(380)、L11-1類(381)、R14-2類(382)、L10-3類(383)、R16-3類(384)、R12-a類(385) である。R16-2類(374) は不明。386はA類、387はG類、388はI類、389はF類の軒塀瓦である。雲母が混入した砂を用いる386以外はキラコを使用する。390・391は丸瓦、392は熨斗瓦、383・394は輪違瓦である。392は平瓦の凸面に入れられた切り込みによって分割されている。

Ⅰ層出土遺物(第21・45図)

149～163はⅠ層出土遺物である。151は古瀬戸仏花瓶、153は秉燭、154は行平鍋である。155はいわゆる古唐津の皿である。163は銅製の薄い板であるが、近代以降のものかも知れない。

395～400は軒丸瓦である。砂がL16-5類と見られる395、L13-7類(396)、R16-2類(397)、キラコが

L12-8類(398)、L12-16類(400)である。L10-2類(399)は不明である。401はH類と見られる軒塀瓦、402・403はG類の軒塀瓦である。405～406は桟瓦の瓦当であるが、近代以降のものである。

(4)小結

障子堀の範囲(第16図)

9次調査を開始する前の本丸の堀での発掘調査は7回を数え、横断的な断面形を把握できるのは、1次調査のA・Bトレンチ、2次調査、3次調査、4次調査の5箇所である。2次調査を除く4箇所の断面形にはいくつかの共通点があることが分かっていた。その共通点とは次の4点である。①石垣の基礎はレベル8mで、砂礫層である。②石垣基礎の前に幅3m程度の平坦面がある。③堀底では地山の砂礫層が露出し、中央辺りで1箇所盛り上がる部分がある。④堀の肩の部分は非常になだらかで、肩の位置が判別しにくい。

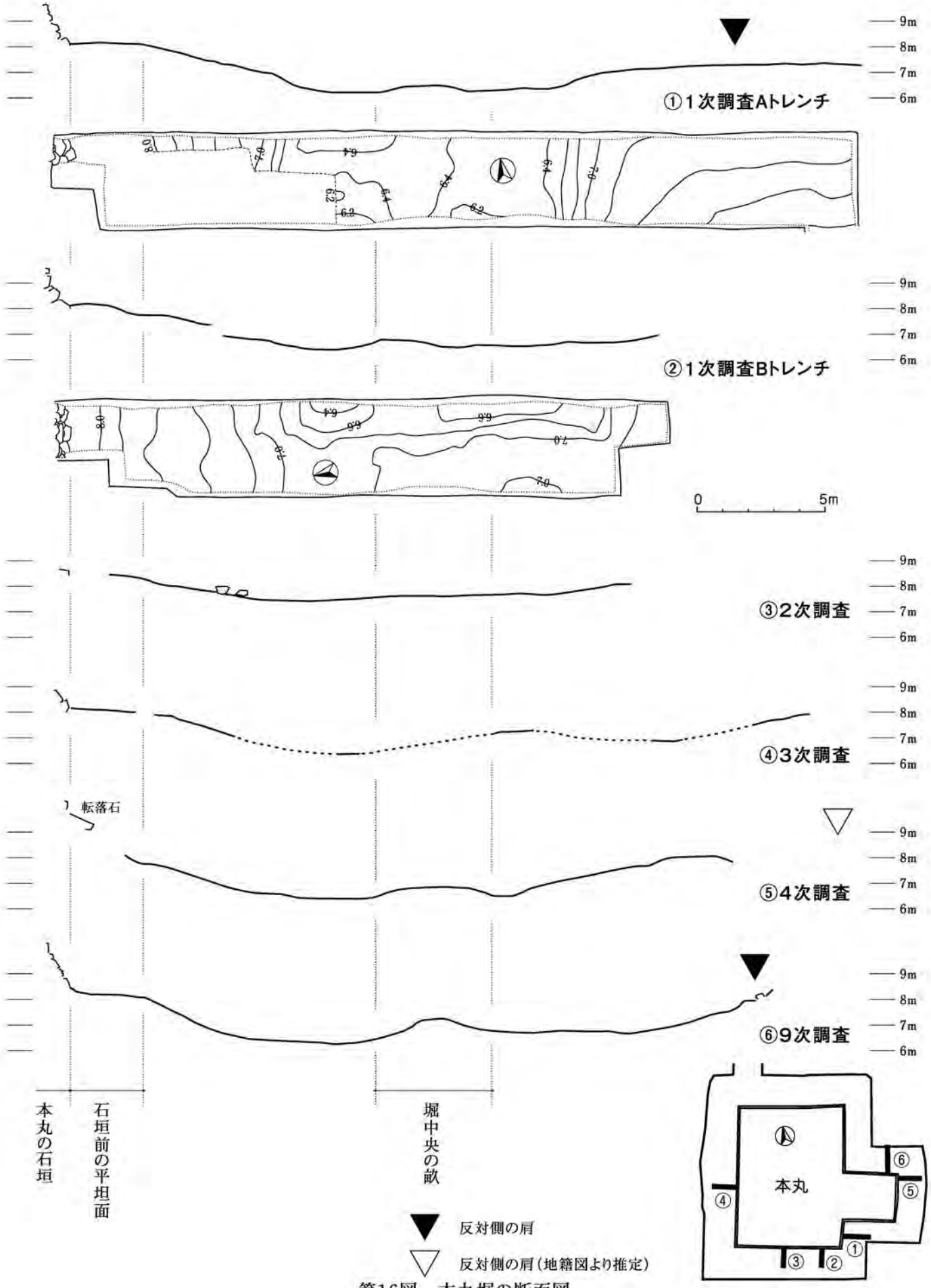
10次調査以降、前段③の盛り上がりは堀と平行方向の堀障子であることが分かったのであるが、改めて以前の調査成果について検討を加えてみたい。第16図は以前の調査で検出された堀底の断面図である。

1次調査Aトレンチは堀のコーナー部分に近い場所で、反対側は大藪曲輪の方向に向いていない。よって途中から堀の縦断面となっているため、極端になだらかに見える。この辺りの南北方向の堀幅は約25mと推測され、ほぼその中央部分には比較的小さいが盛り上がりを見ることはできる。堀底のコンターラインでも盛り上がりを挟んで、東西に小さな凹みが記録されていることから、障子堀と推測される。

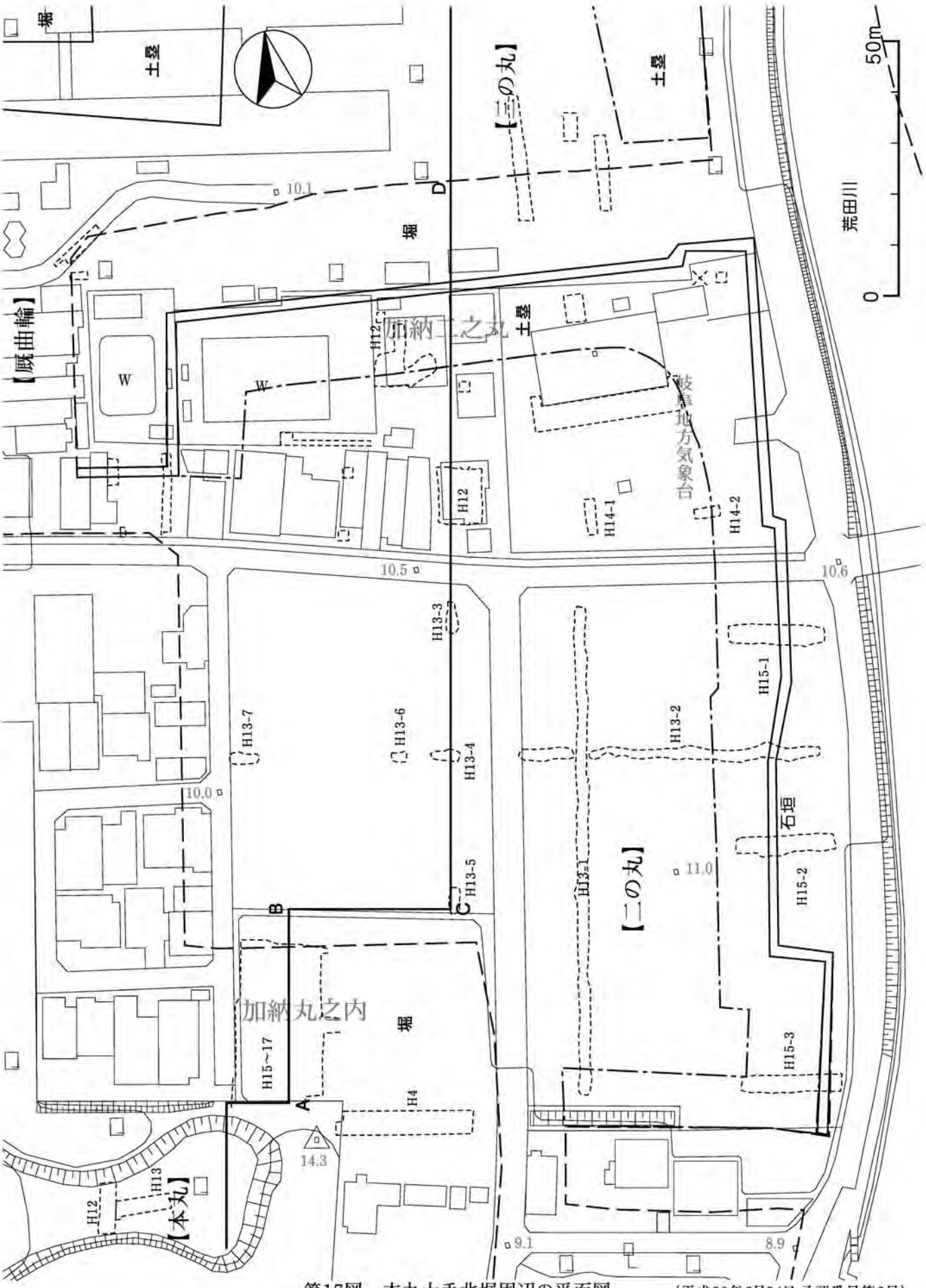
1次調査Bトレンチは本丸からの距離が若干短いが、中央で比較的顕著に盛り上がりを見ることができる。堀底のコンターラインにも2箇所で凹んでいる様子が記録されており、障子堀の構造を見ることができる。大藪曲輪と画する東西方向の堀は、地籍図から推測すると幅約35mあり、堀底の盛り上がりは中央と言うよりかなり本丸に寄っている。

2次調査は、トレンチの底においても比較的幅広の調査区であるにもかかわらず、凹凸は検出されていない。報告書の土層図を改めて検討すると、これだけでこの部分に障子堀がなかったと言い切れない部分が指摘できる。というのは、2次調査では地山と思われる砂礫層で掘削を止めているのであるが、部分的にさらに掘り下げた箇所において、砂礫層の下層で部分的に有機物を含む薄い粘土層が確認されている。9～11次調査でも同様であったが、堀底直上に薄い粘土層が堆積した後、厚い砂礫層が堆積している部分があったのである。堀底および堀の壁面で観察できる地山の砂礫層は、レベル8mから6mの間にシルト～粘土層が間に入る状況は確認されていない。これと同じ状況だとすると、2次調査では完全に堀底が検出されていない可能性が指摘できる。よって、築城当初の堀本来の形状が検出されていない可能性を指摘しておき、今回の検討材料には加えないこととしたい。ちなみに部分的に深掘りされて粘土層が確認されている部分に関しては、そのレベルが他の堀底より高いことを考えると、畝の上を横断していることも考えられる。畝上では余り凹凸が顕著でなく、2次調査の状況とも合致すると考えられる。

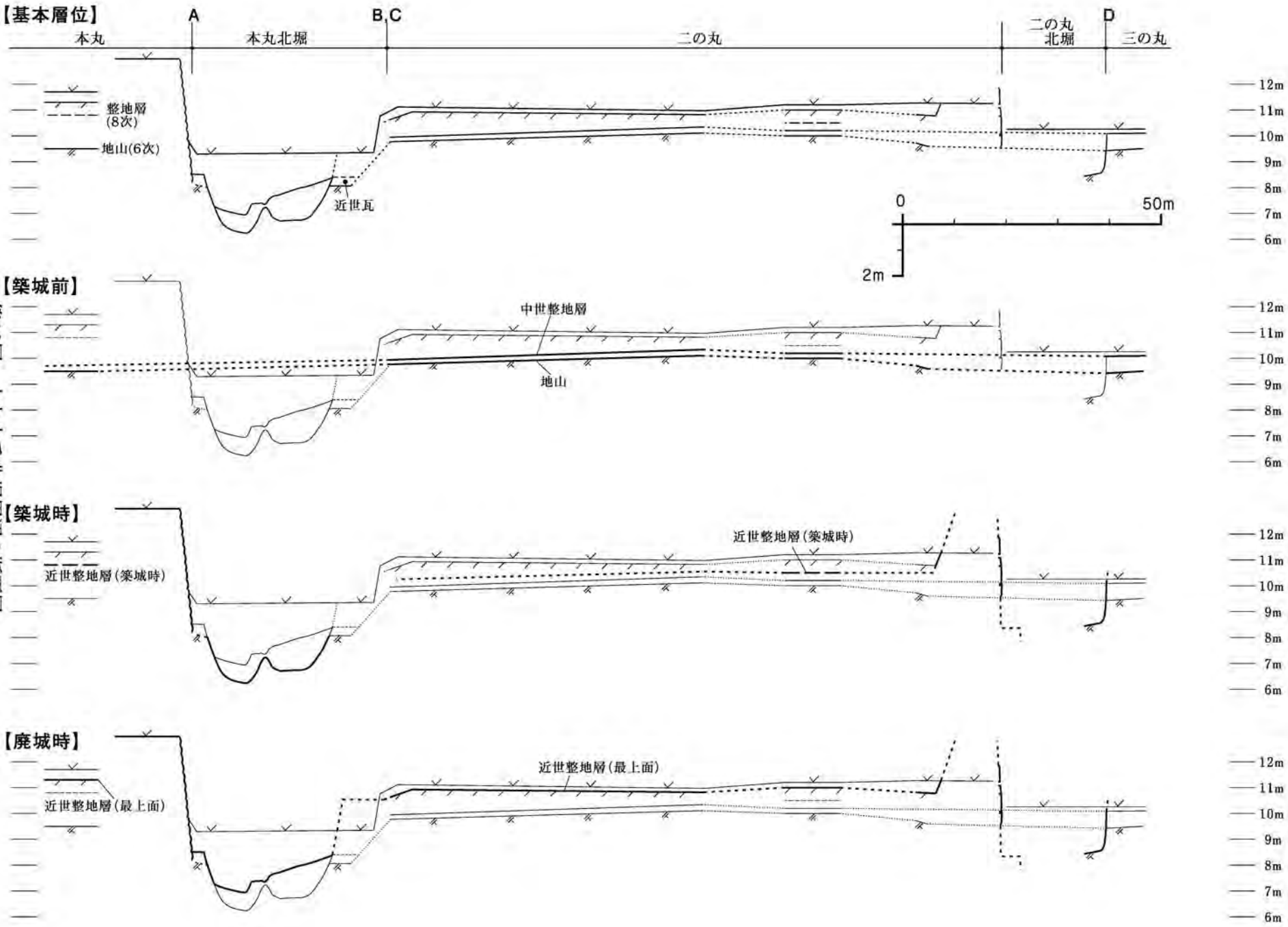
3次調査は5つの小さなトレンチを直線上に配置し、調査を行っている。各トレンチで検出された堀底のレベルは通常の堀のあり方ではなく、中央部分のものがその両脇のものと比べ高いという状況であ



第16図　本丸堀の断面図



第17図　本丸大手北堀周辺の平面図　（平成20年6月24日 承認番号第6号）



第18図　本丸大手北堀周辺の断面図

る。他の部分の断面形と同じく堀の中央部で盛り上がる断面形を想定している。この部分の堀は地籍図から推測すると幅が約35mあり、盛り上がりの位置も堀幅27mの9次調査などと比較すると、本丸の反対側に寄っているように見えるが、ほぼ堀の中央部分にあるものと推測される。

4次調査は本丸の石垣が崩落しているので、正確に水平位置を合わせることができない。第16図では石垣前の平坦面の肩を他の断面形と合わせてある。断面形を見ると中央部の盛り上がりが顕著で、同様な障子堀構造を有していたと考えられる。この部分の堀幅は、地籍図から9次調査よりも若干広い30m程度と推測される。

平成15年度の試掘調査(第94図)では、2箇所で小規模なトレンチを設定し、堀底の確認をした。通常であれば堀の最深部に位置する2箇所ではあるが、結果として堀底にレベル差があることが分かった。またわずかな長さではあるが、堆積土の傾斜方向から見ても他の堀の断面形に類するものであることが推測される。

本丸を巡る堀は、2次調査を除くいずれの調査区でも、堀中央で畝状の盛り上がりを推測することができる。1次調査においては、平面的な堀底の地形からも堀障子である可能性が極めて高いと指摘できる。以上のことから、本丸を巡る堀は障子堀である可能性が高いと考える。

堀の規模(第17・18図)

前述したように調査区の北端では、堀の埋土とも地山とも異なる砂礫層が検出された。層中には瓦片が包含されていることから、二の丸の整地層の一部と理解した。上部は削平されているため、本来の地表面は確認できないが、以前に行った二の丸での試掘調査結果などを踏まえ、堀の規模等を復元してみたい。

平成13年度の二の丸試掘5トレンチは、二の丸の西半の南端に当たり、今回の堀の肩と比較するには絶好の位置である。5トレンチでの地山のレベルは9.7～9.8m、中世整地層の最上面は9.9～10.0m、近世整地層残存部の最上面は10.4～10.9mである。堀底のレベルは、最深で6mであることから、廃城時の堀の深さは最小でも約4.5mと捉えることができる。

二の丸整地層中の瓦はキラコを含んでおり、構築されたのが近世後半であることは間違いない。ただし、地山までの掘り込みがこの段階で成されたのかは不明である。近世前半には堆積していたと考えられるⅢ3層に撹乱が見られないことや二の丸整地層の範囲と重ならないことを考えると、築城時の段階から、この辺りに堀の肩があった可能性も考えられる。

二の丸側の堀埋土中に直方体に違いチャートがいくつか出土したが、これを含めて考えると、少なくとも廃城時には整地層とともに石垣が構築されていた可能性が高い。この位置の本丸石垣との距離は約30mを測り、これが本丸大手北堀の幅と推測される。

堀埋土から分析した植生の変化

堀内の自然堆積土(Ⅲ層)は上から有機物を多量に包含する粘土層(Ⅲ1層)、暗灰色系の粘土層(Ⅲ2層)、砂礫層(Ⅲ3層)、粘土層(Ⅲ4層)の大きく4層に細分されることは、報告の中で記述した。これら堆積層は撹乱を受けておらず、築城時から堀が埋められる時点までの間に自然に堆積した土層であることが推測される。形成時期はⅢ4層・Ⅲ3層は18世紀前葉まで、Ⅲ2層は18世紀末葉(?)、Ⅲ1層は堀の埋

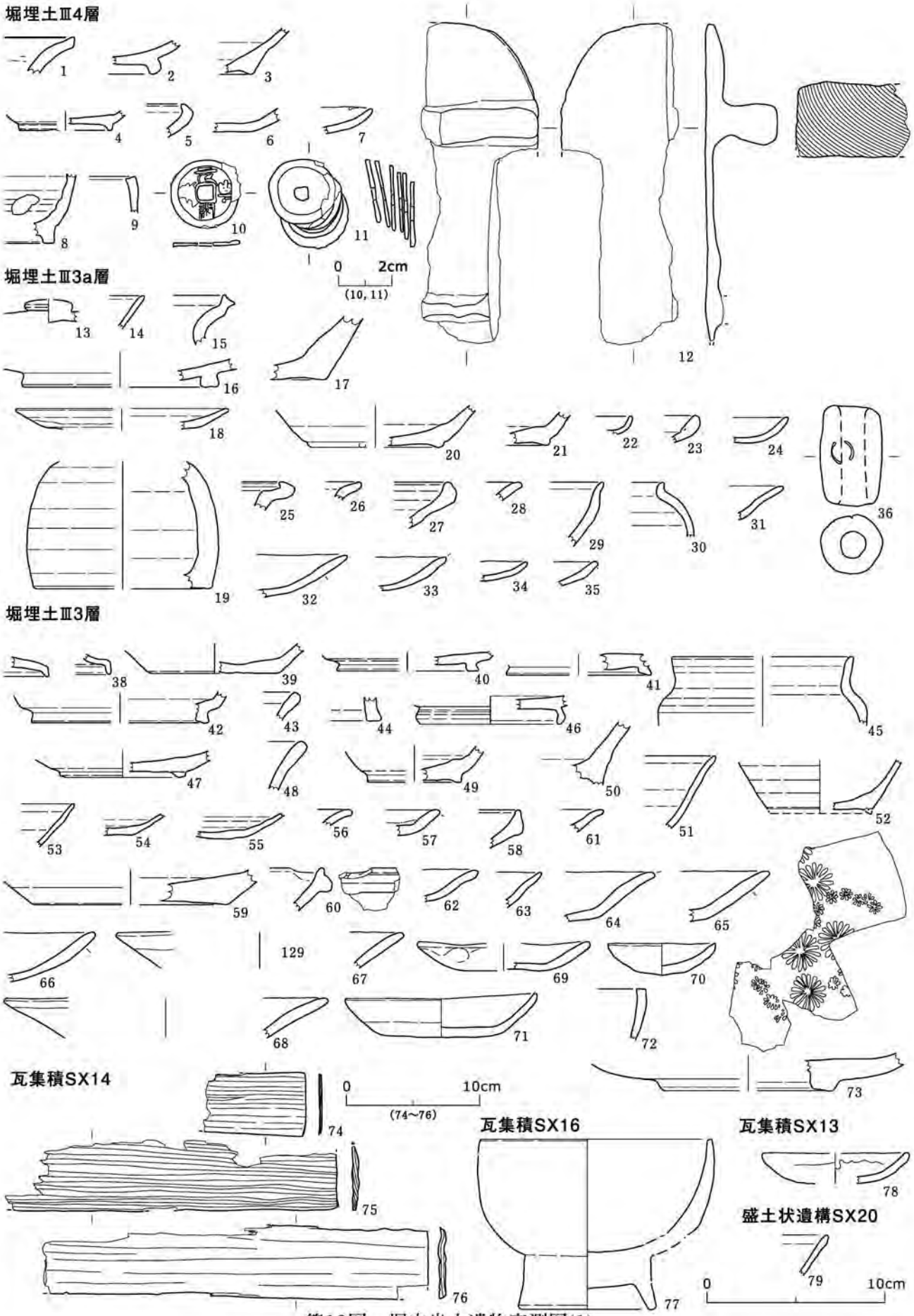
め立て直前と推測される。粘土層には良好に花粉化石が残存していると推測できたため、各層からサンプルを採取し、花粉分析を行った。また種実等が肉眼でも観察されるⅢ2層の最上層は、大型植物化石の分析も合わせて実施した。

詳細な分析結果は「3.自然科学分析」に譲るが、下層から上層にかけて大きく変化を有する結果が得られたので、それに関しての若干の検討をしてみたい。

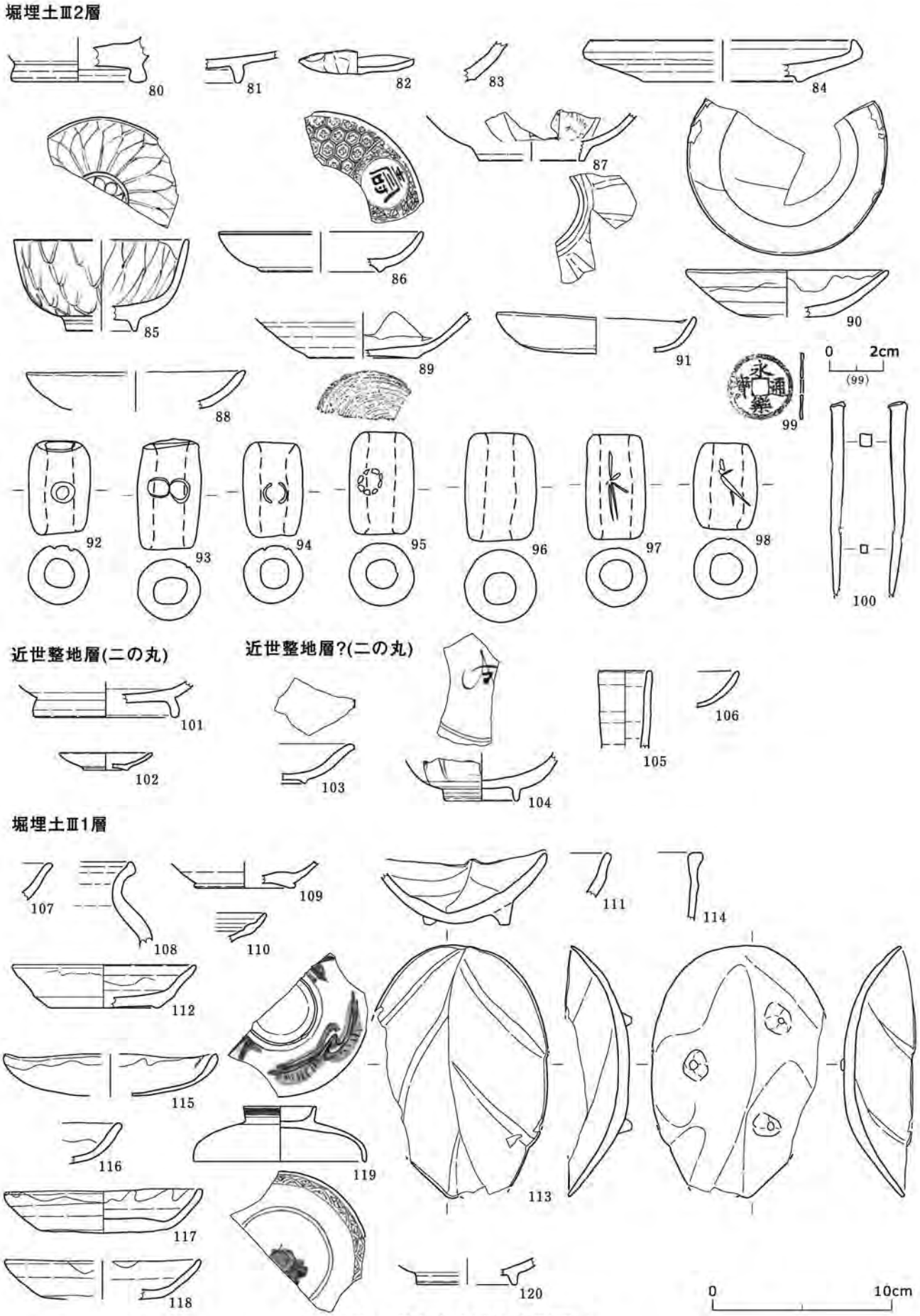
特徴的なのは、樹木花粉と草本花粉の比率である。一般的に通常時代が下るにつれ、樹木花粉が減少する傾向があるが、今回の分析では逆の結果となった。また樹木の主体が、落葉樹からマツ属複維管束亜属へ遷移する傾向がある。時代を通じて水生植物のバラエティに富み、水深や水のきれいさには変化は見られない。流水に生育するヒルムシロ属も見られる。

本丸を巡る堀は、厩曲輪の北から西を画する堀と接続するものの、その端部は土橋となっており、荒田川には繋がらない閉じた堀である。粘土層の堆積があることからも、河川のような水の流れがあったとは考えにくいが、地盤である砂礫の透水層を通るわずかな水流により、堀の水は常に一定の量と清浄さが維持されていたと推測される。

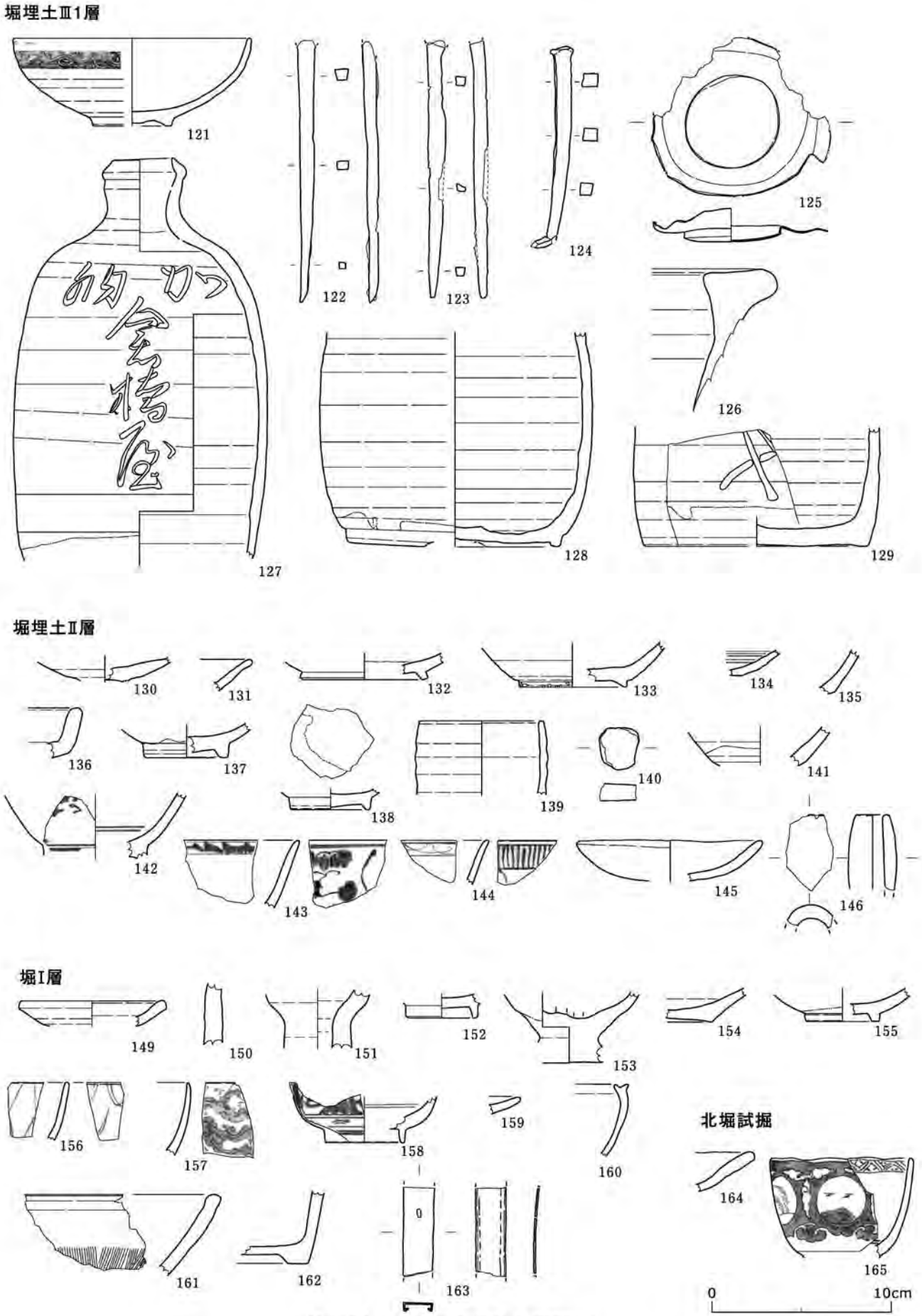
樹木の花粉比率の変化は、現在のところ明確な説明をすることはできないが、城内に植樹された樹木の変化を表している可能性も考えられる。



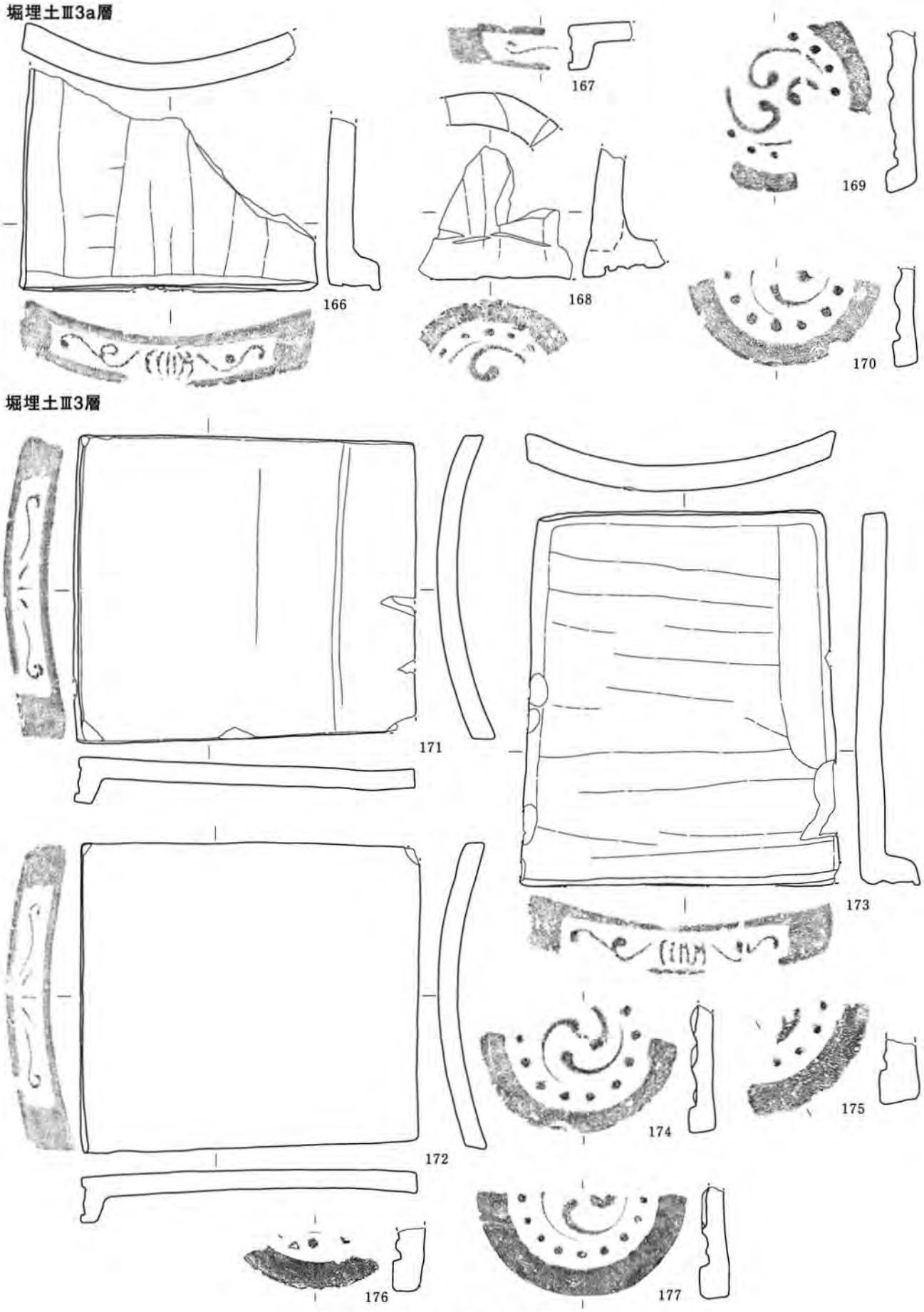
第19図　堀内出土遺物実測図(1)



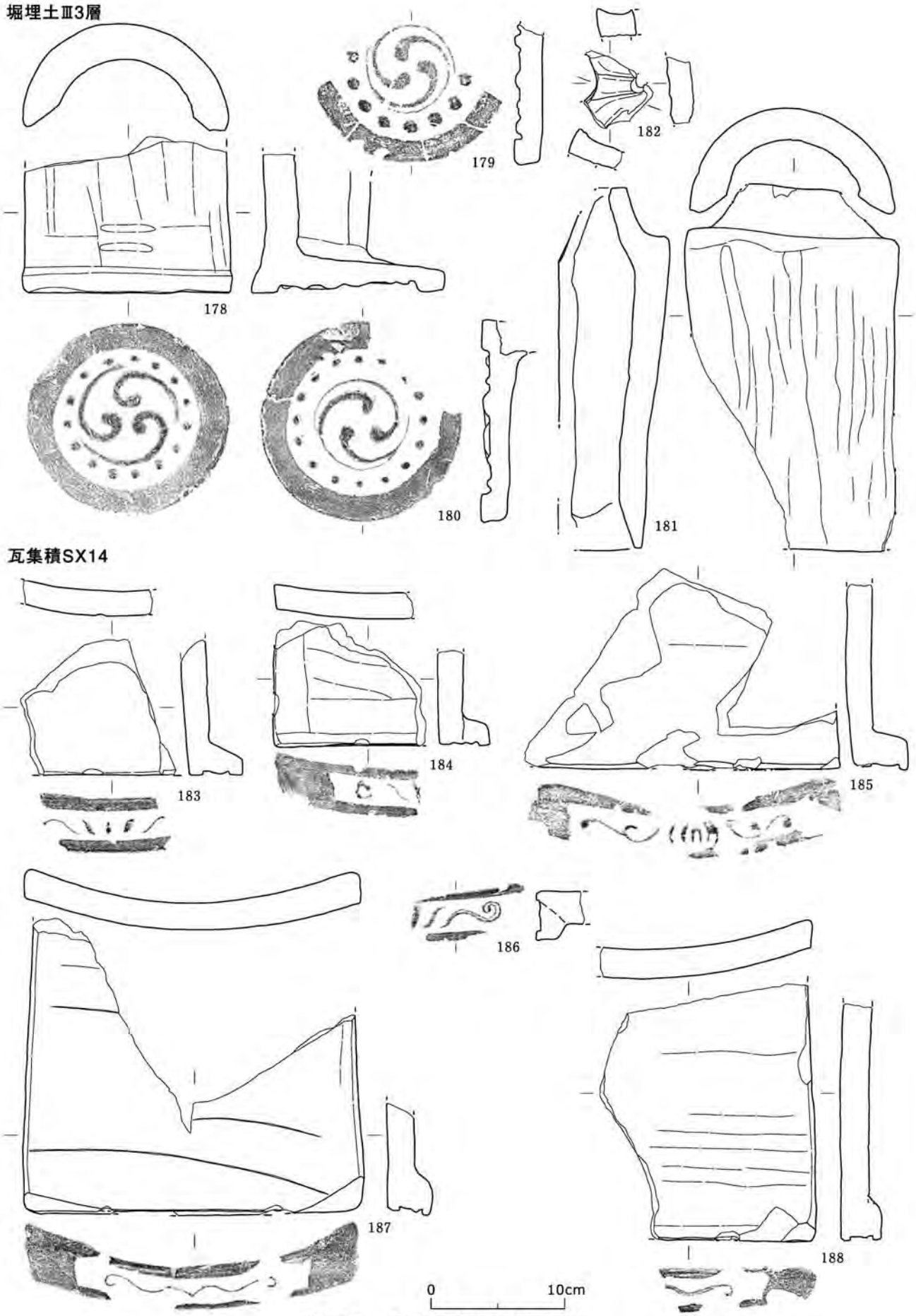
第20図　堀内出土遺物実測図(2)



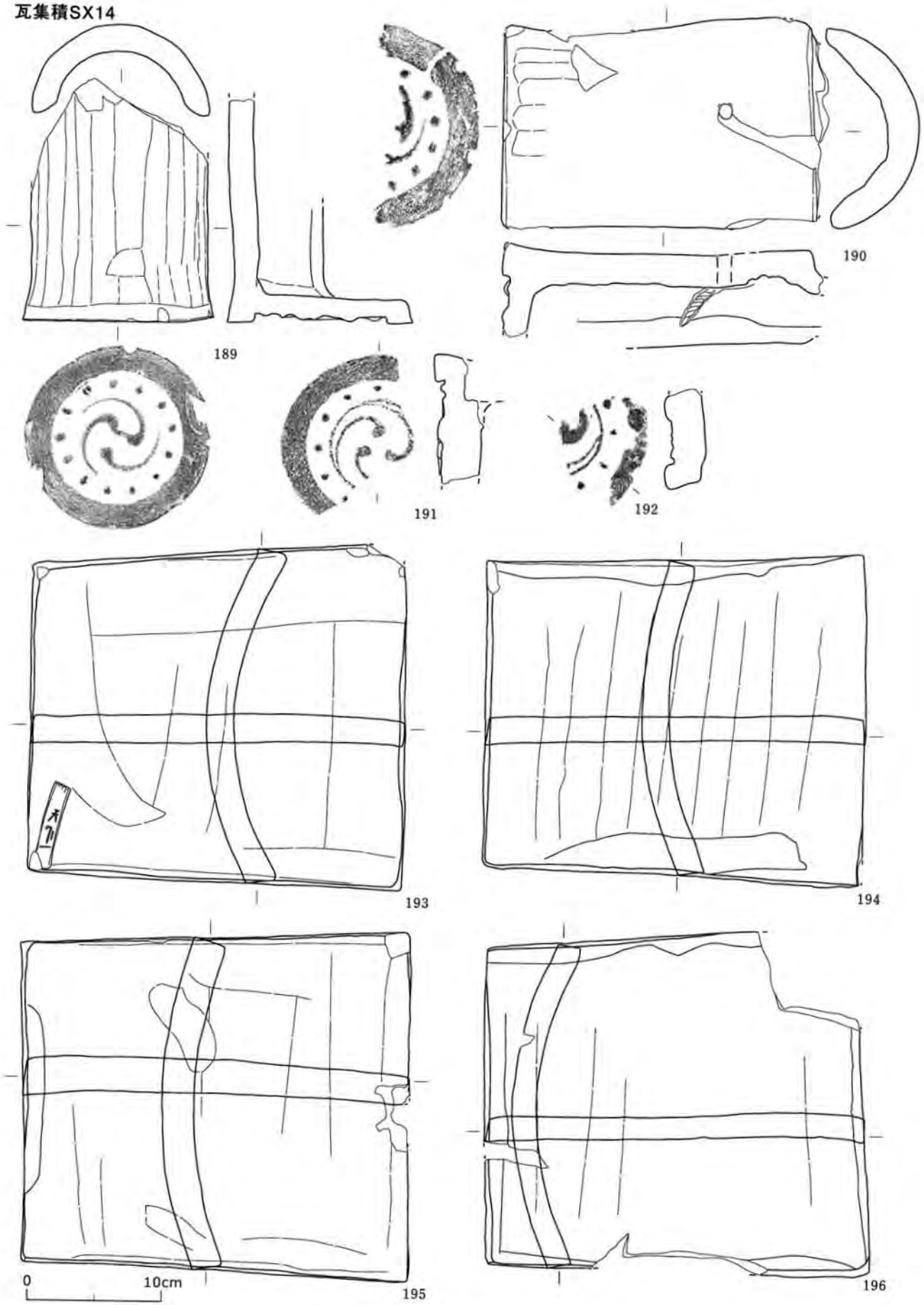
第21図　堀内出土遺物実測図(3)



第22図　堀内出土遺物実測図(4)

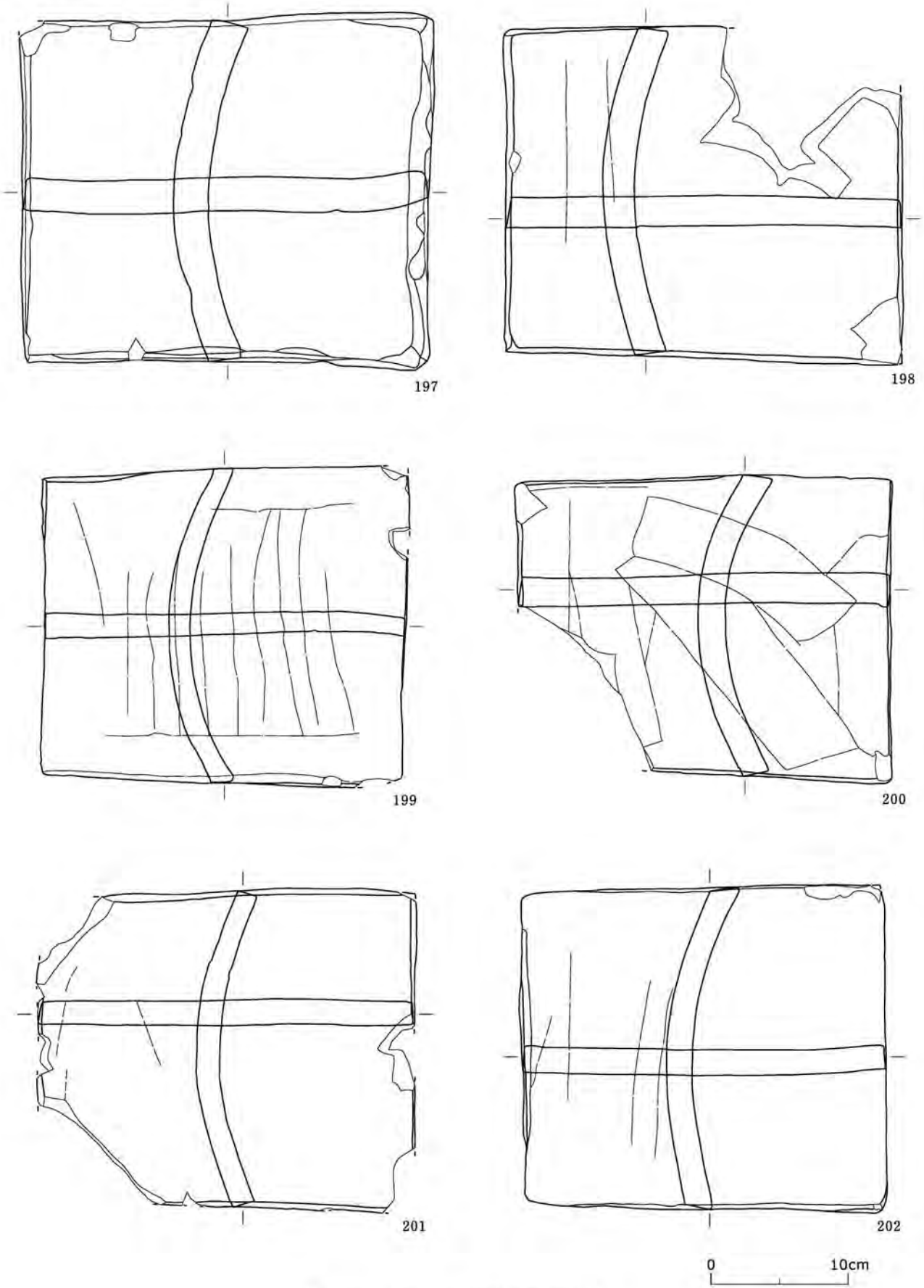


第23図　堀内出土遺物実測図(5)



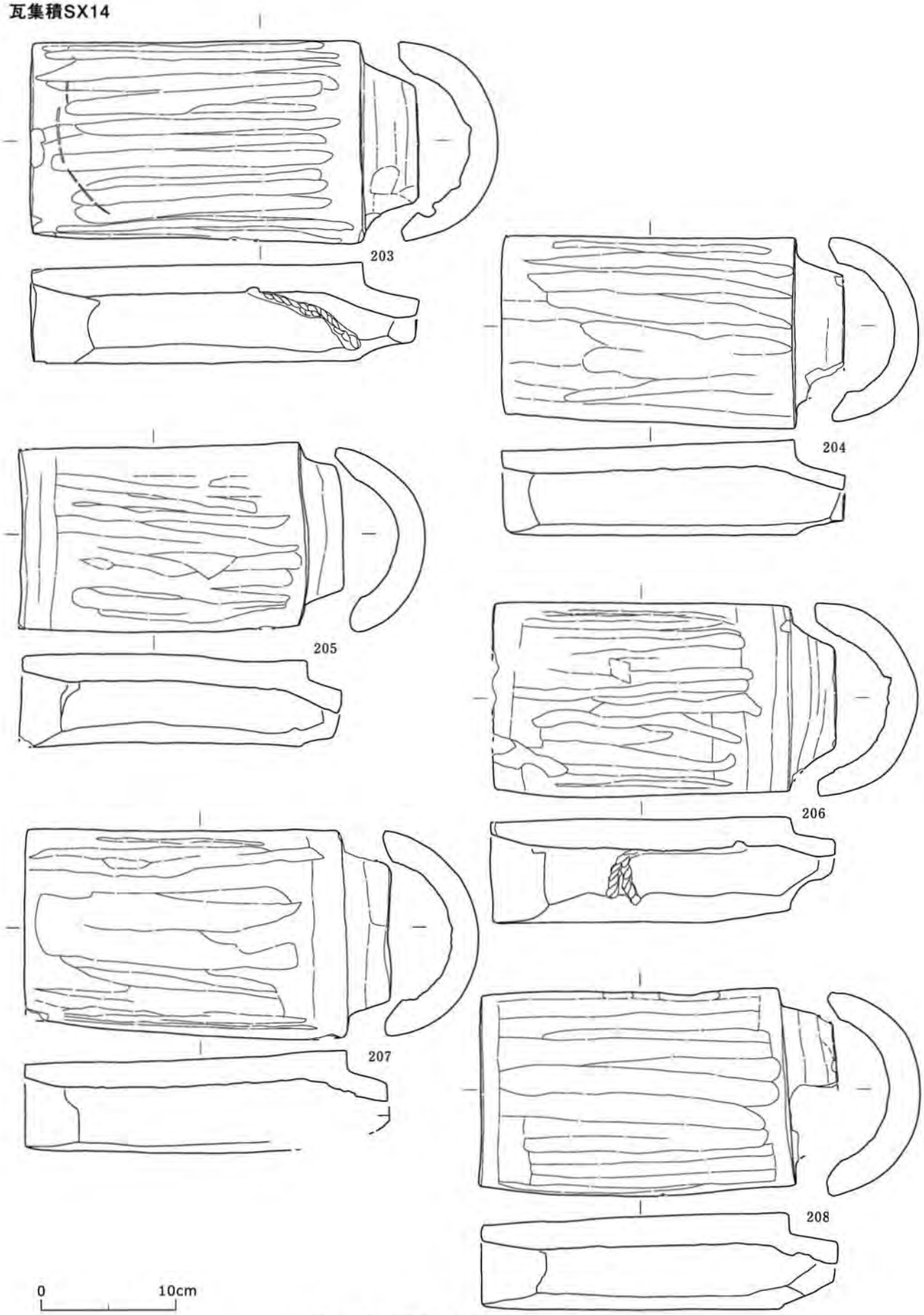
第24図　堀内出土遺物実測図(6)

瓦集積SX14



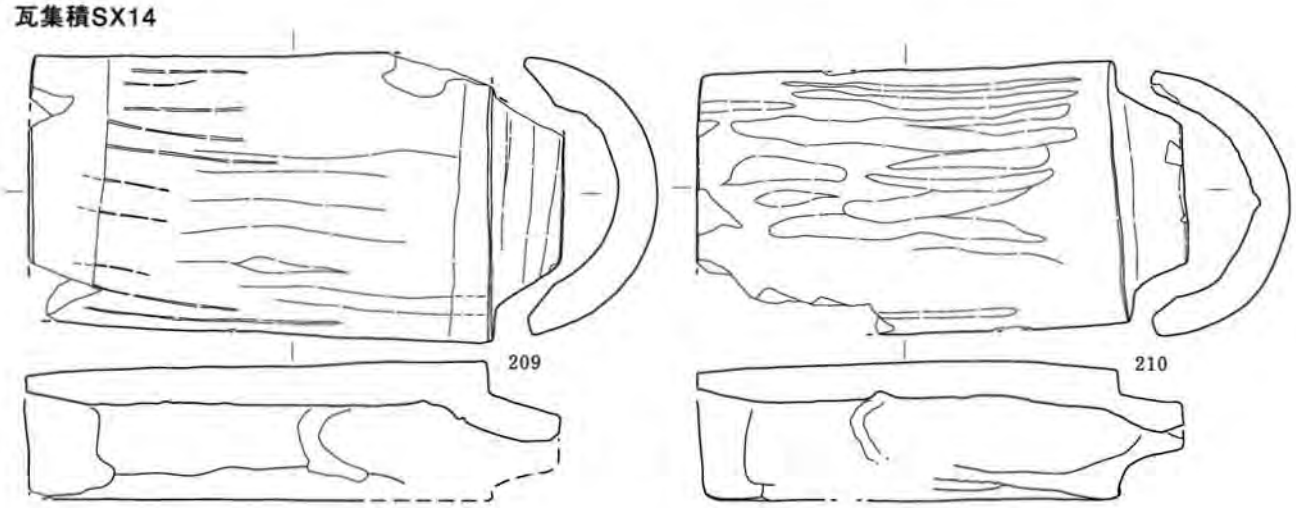
第25図　堀内出土遺物実測図(7)

瓦集積SX14

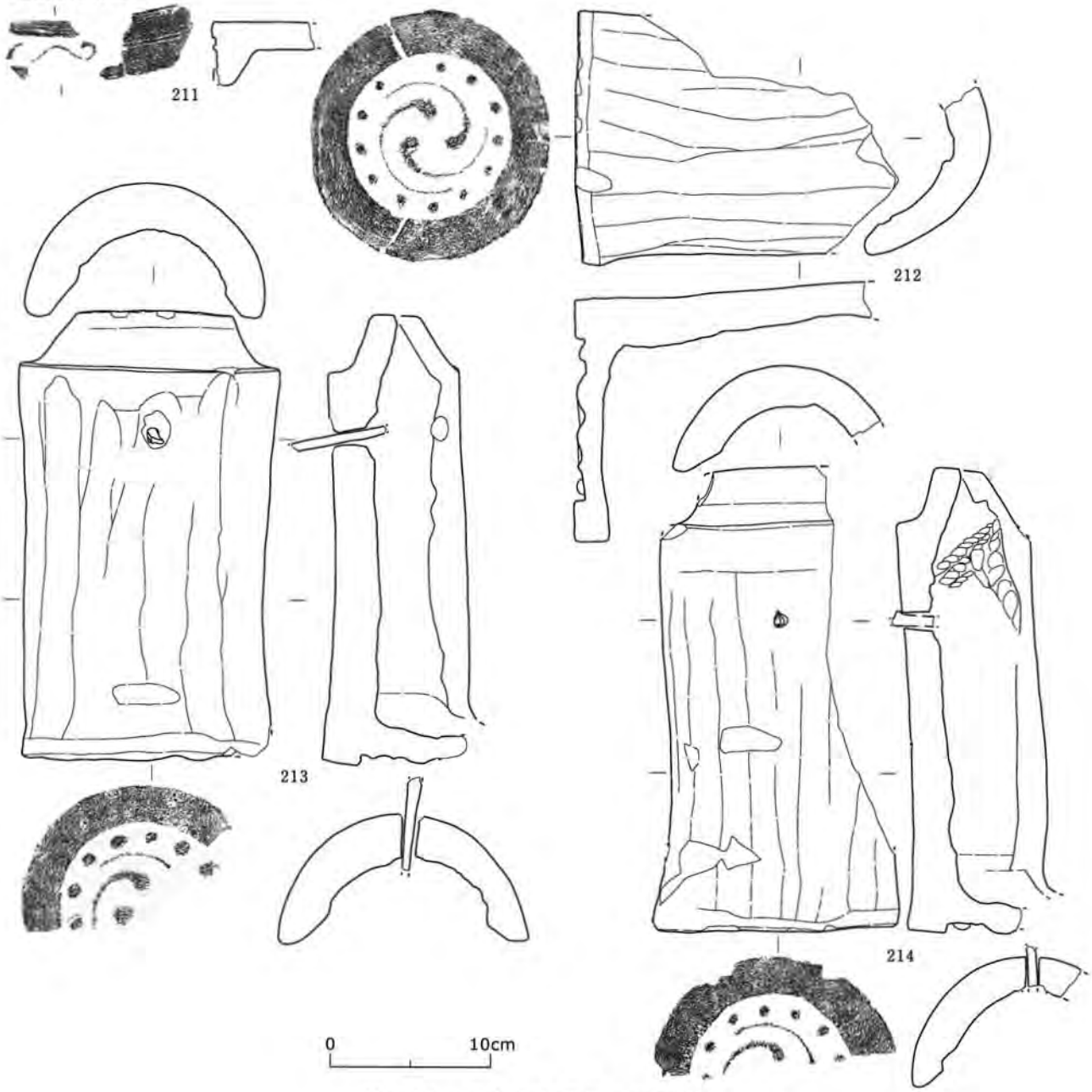


第26図　堀内出土遺物実測図(8)

瓦集積SX14

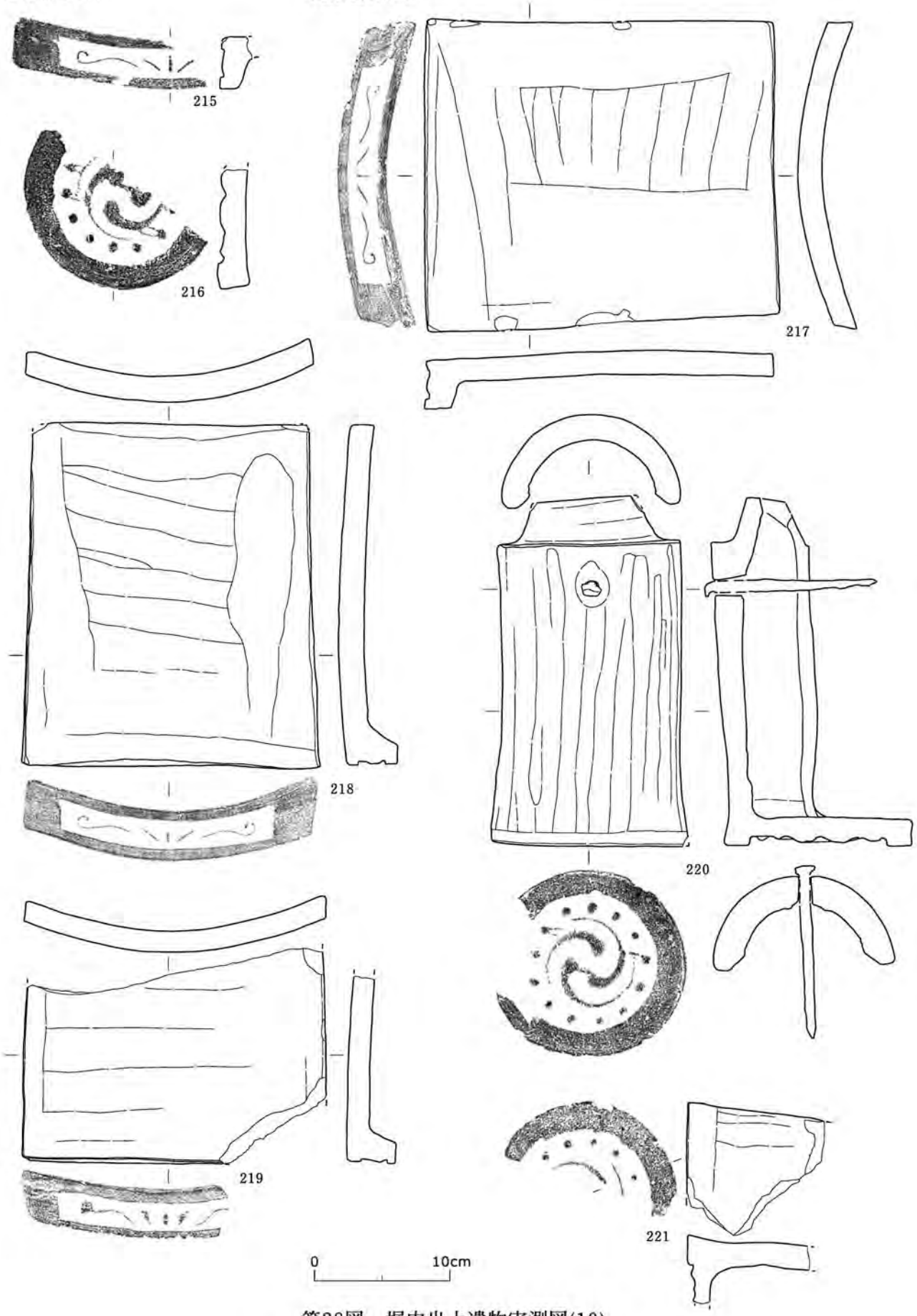


瓦集積SX16



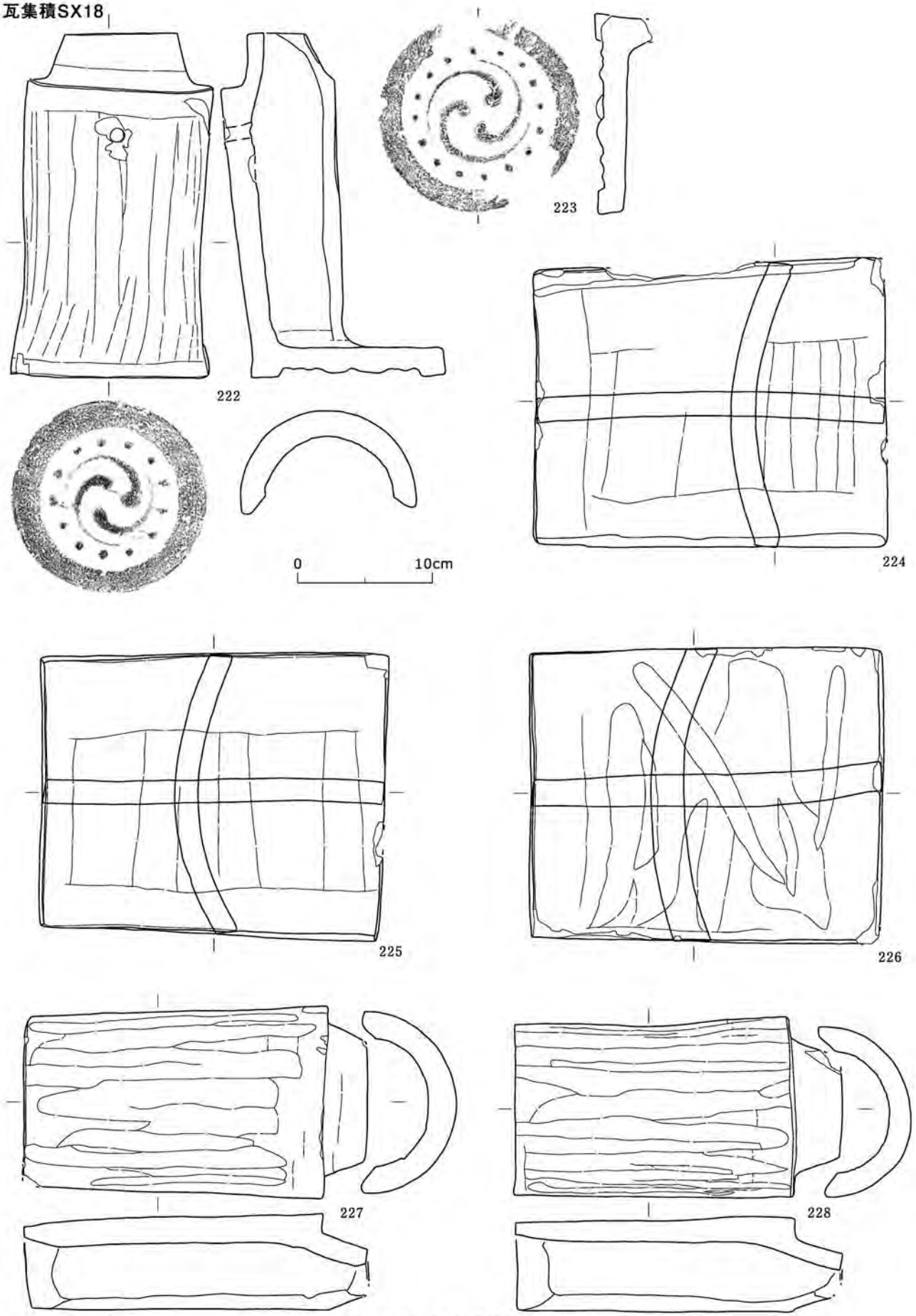
第27図　堀内出土遺物実測図(9)

瓦集積SX17　　瓦集積SX18



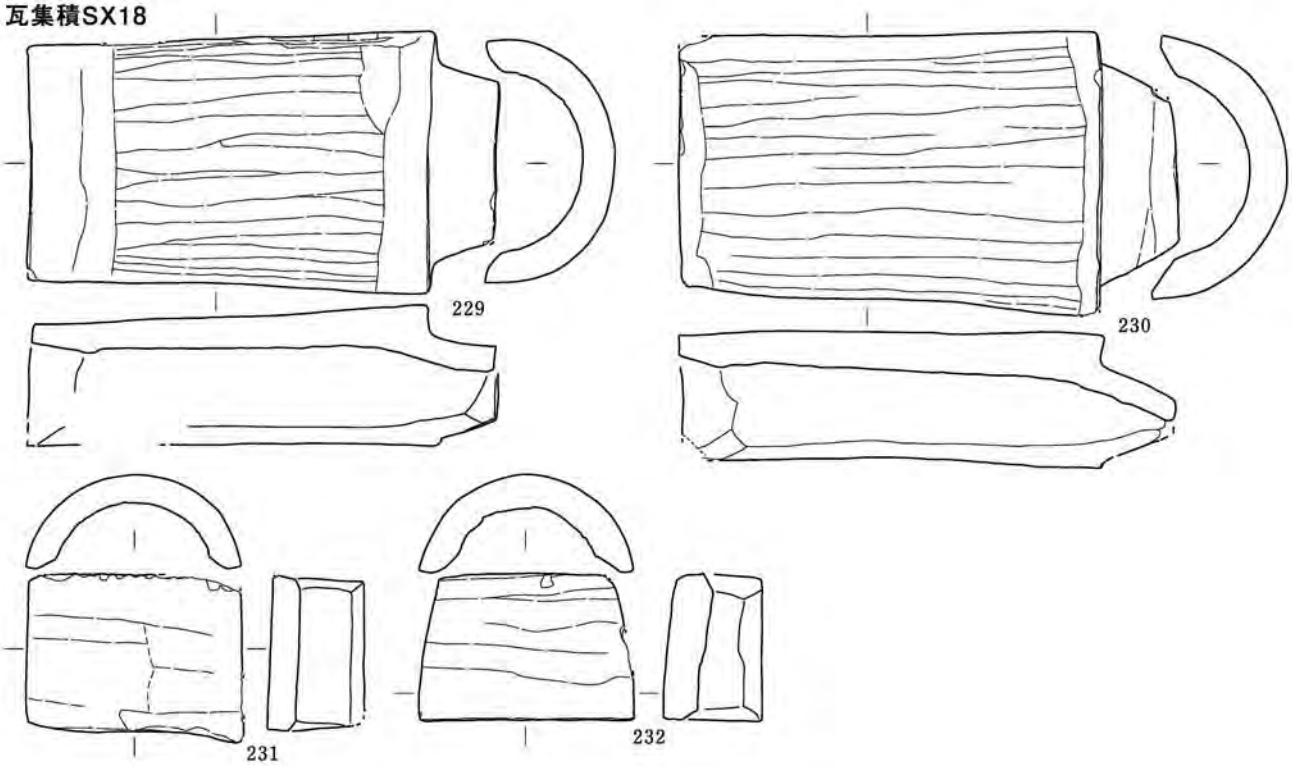
第28図　堀内出土遺物実測図(10)

瓦集積SX18

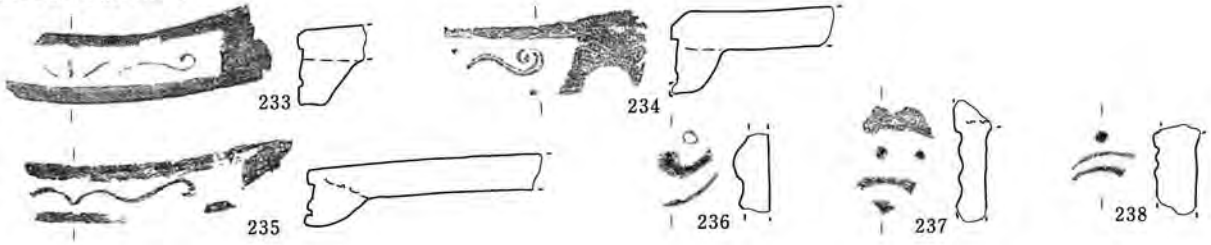


第29図　堀内出土遺物実測図(11)

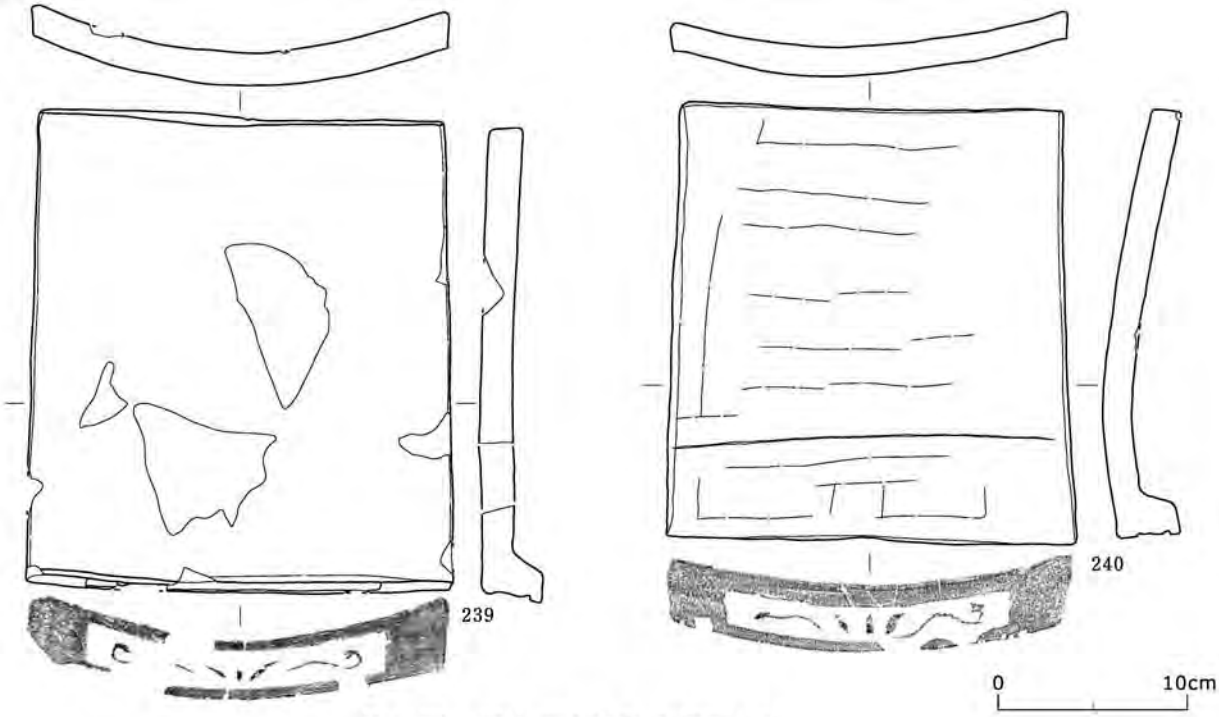
瓦集積SX18



盛土状遺構SX20

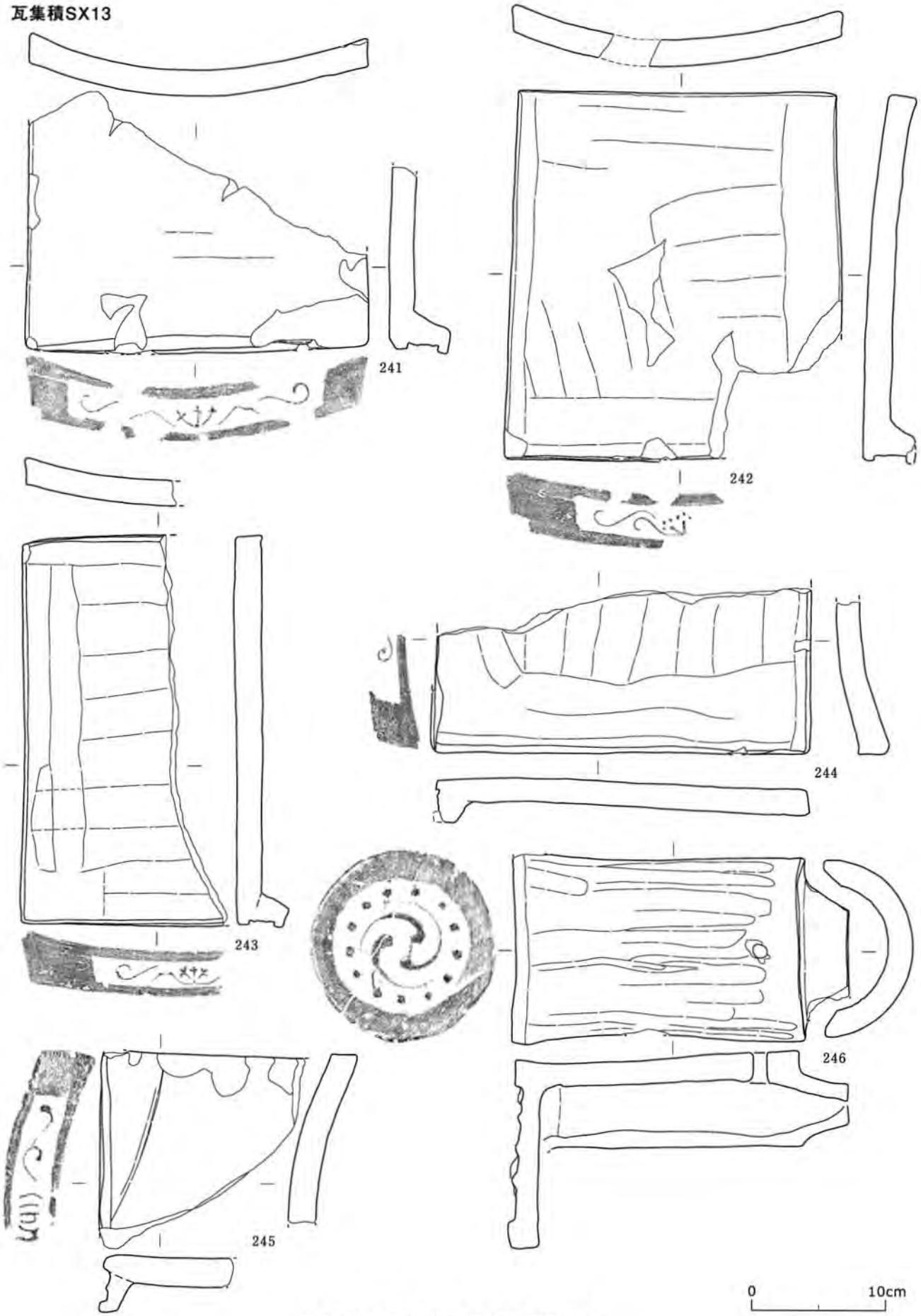


瓦集積SX13

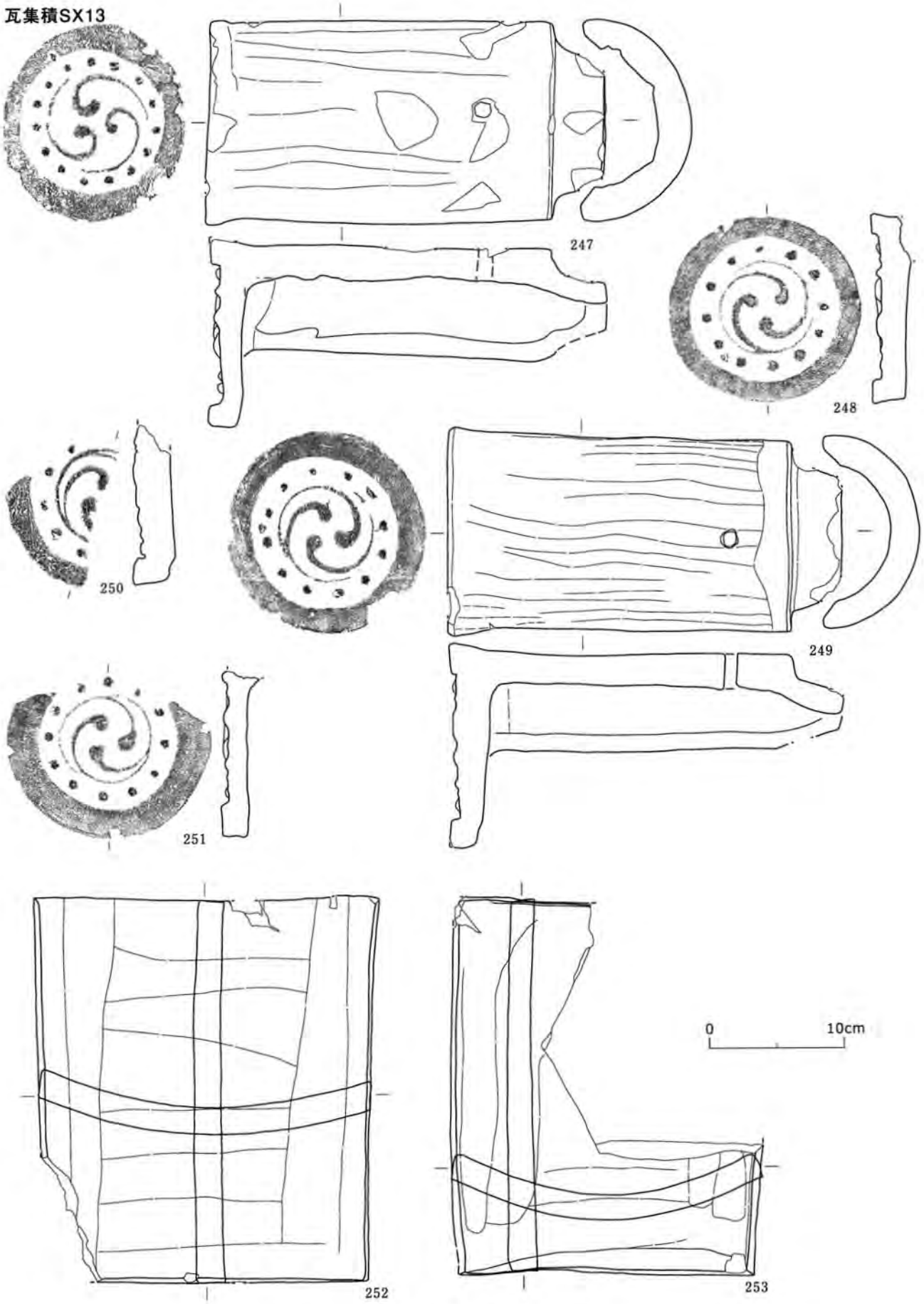


第30図　堀内出土遺物実測図(12)

瓦集積SX13

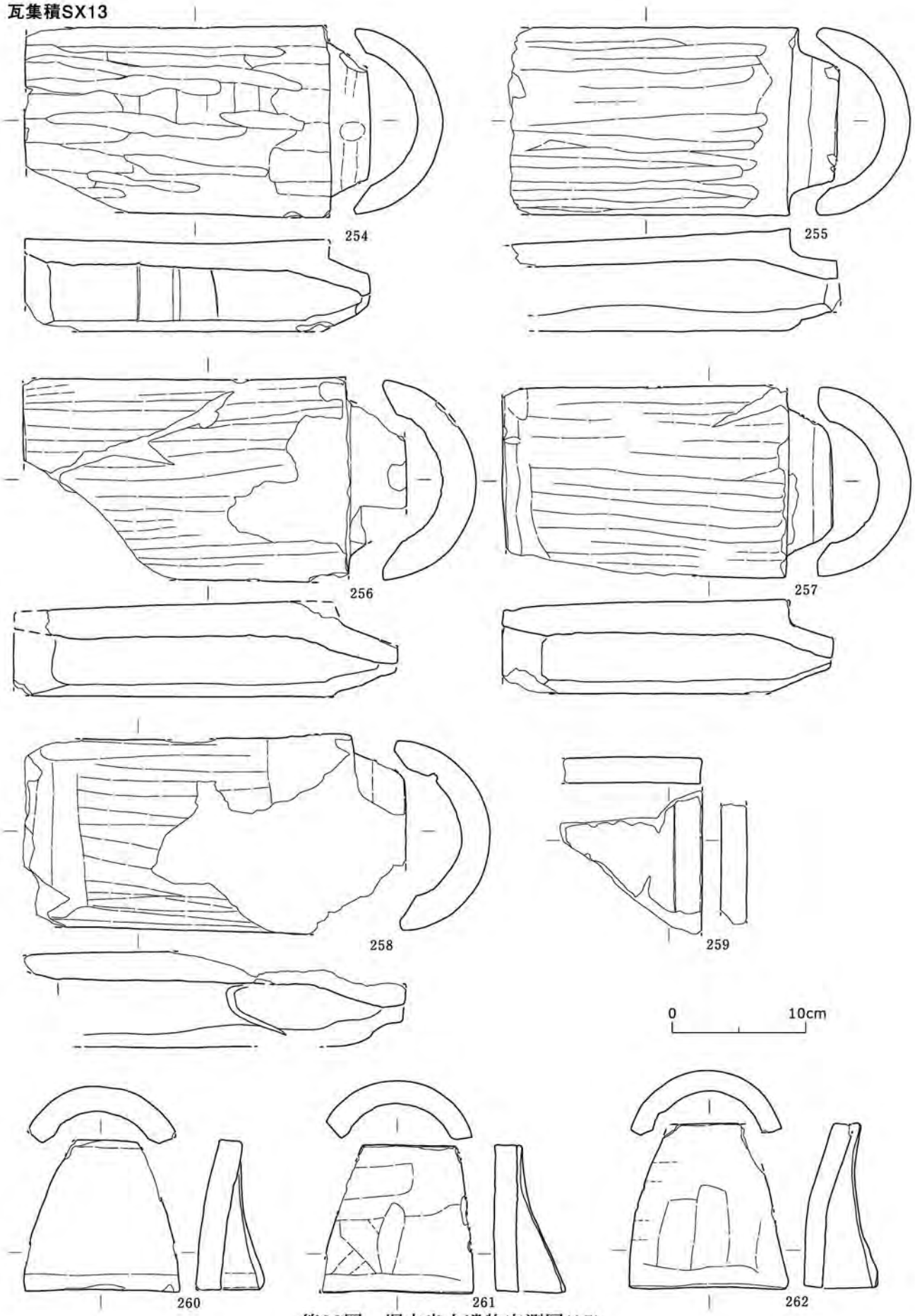


第31図　堀内出土遺物実測図(13)

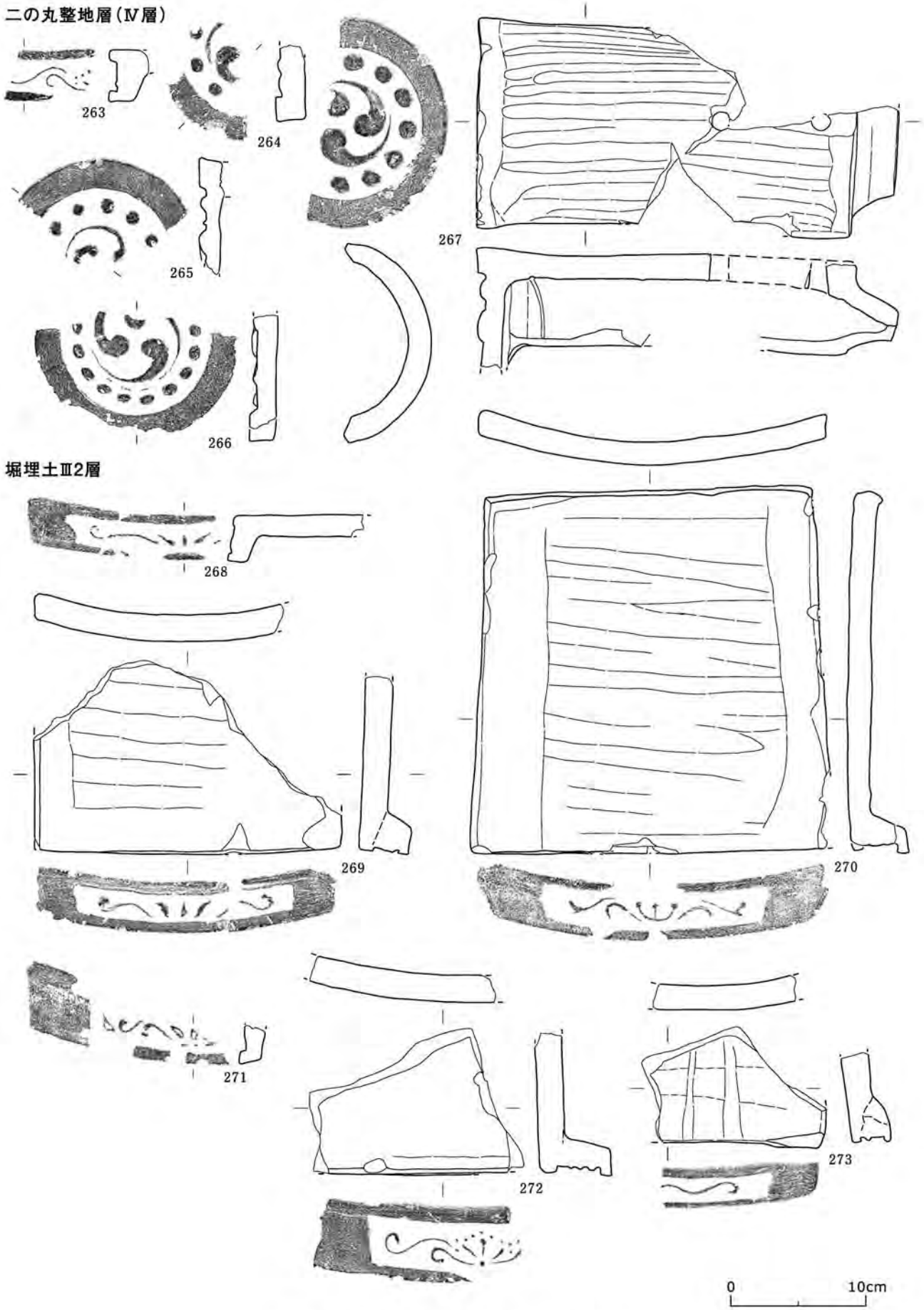


第32図　堀内出土遺物実測図(14)

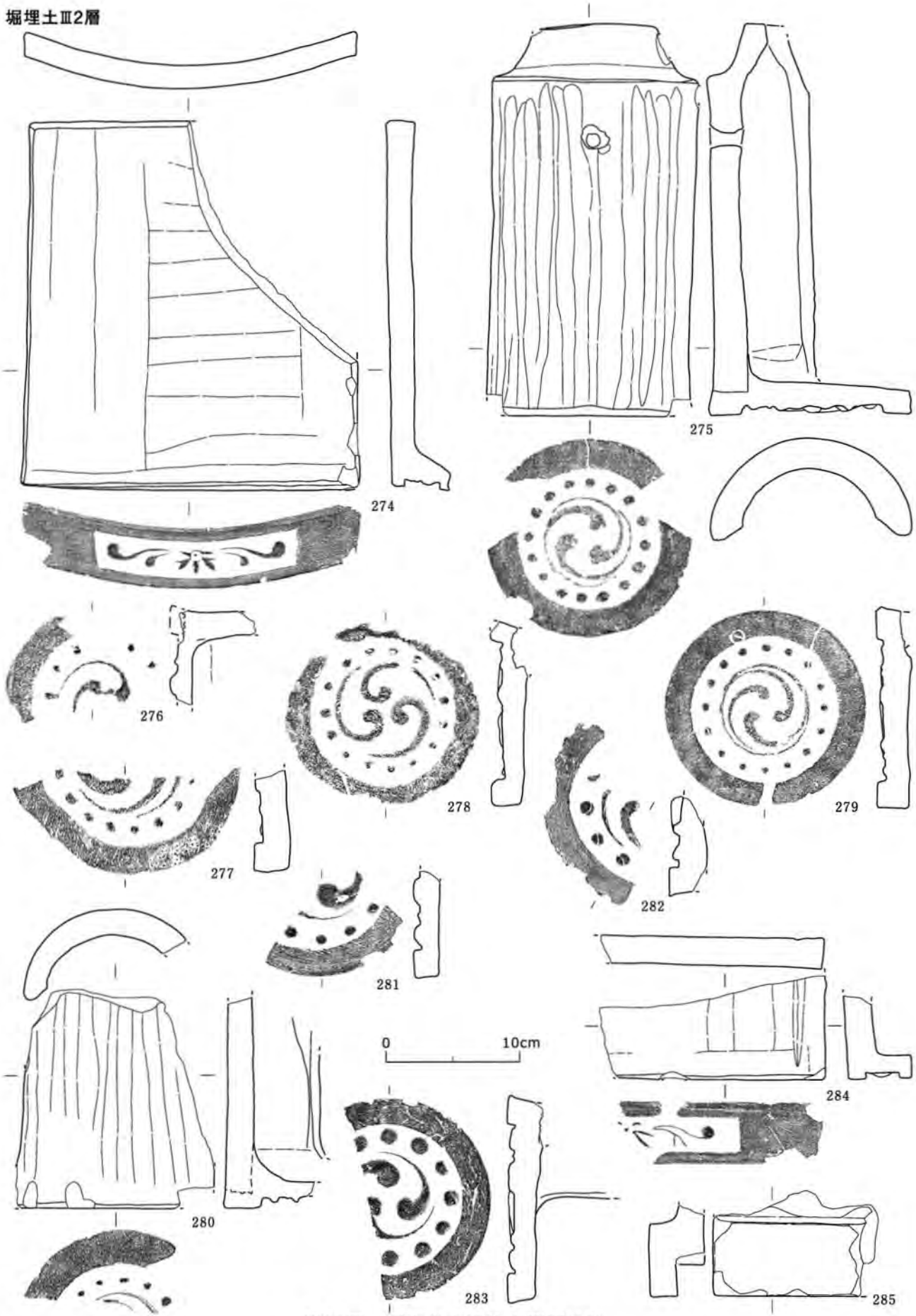
瓦集積SX13



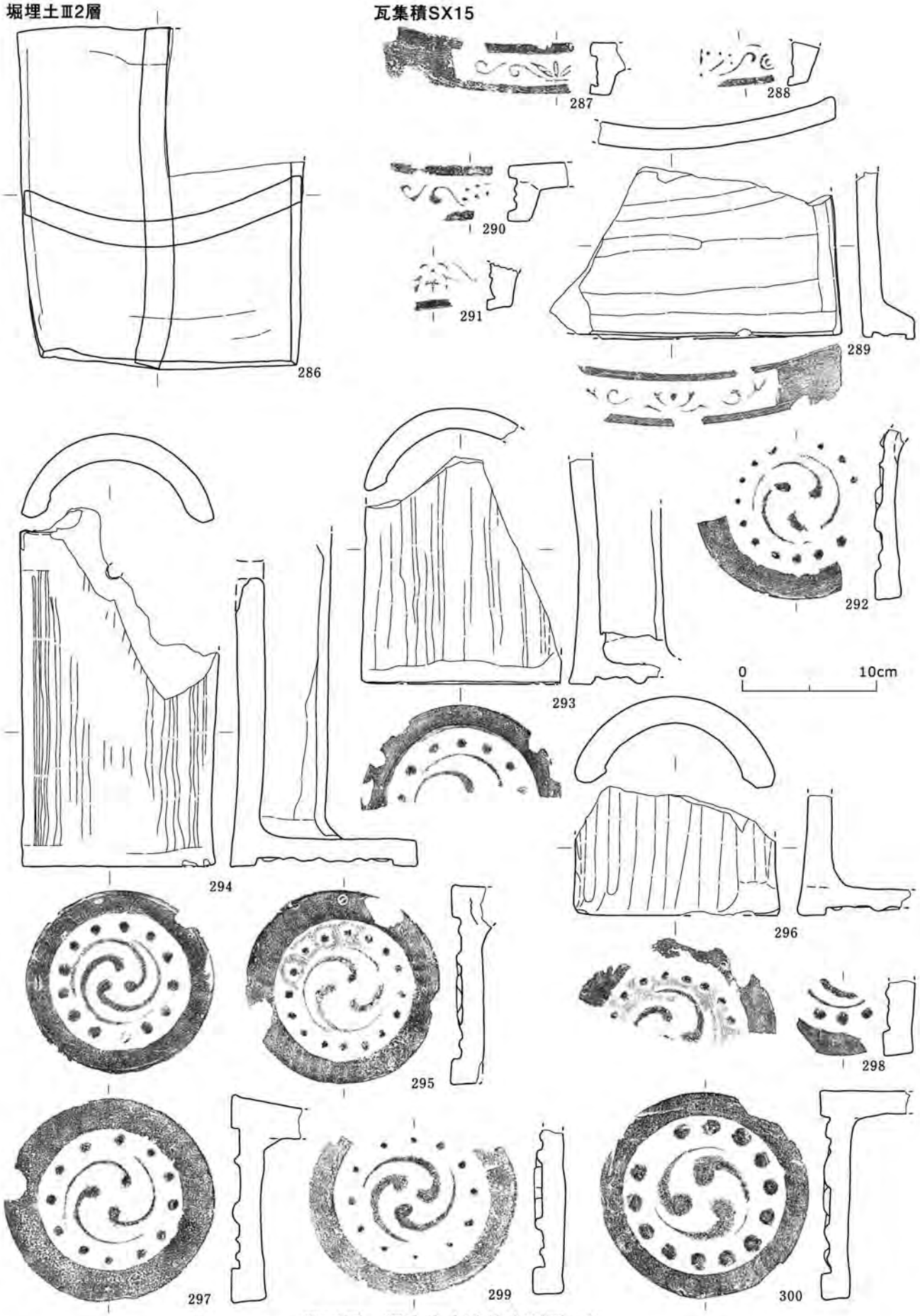
第33図　堀内出土遺物実測図(15)



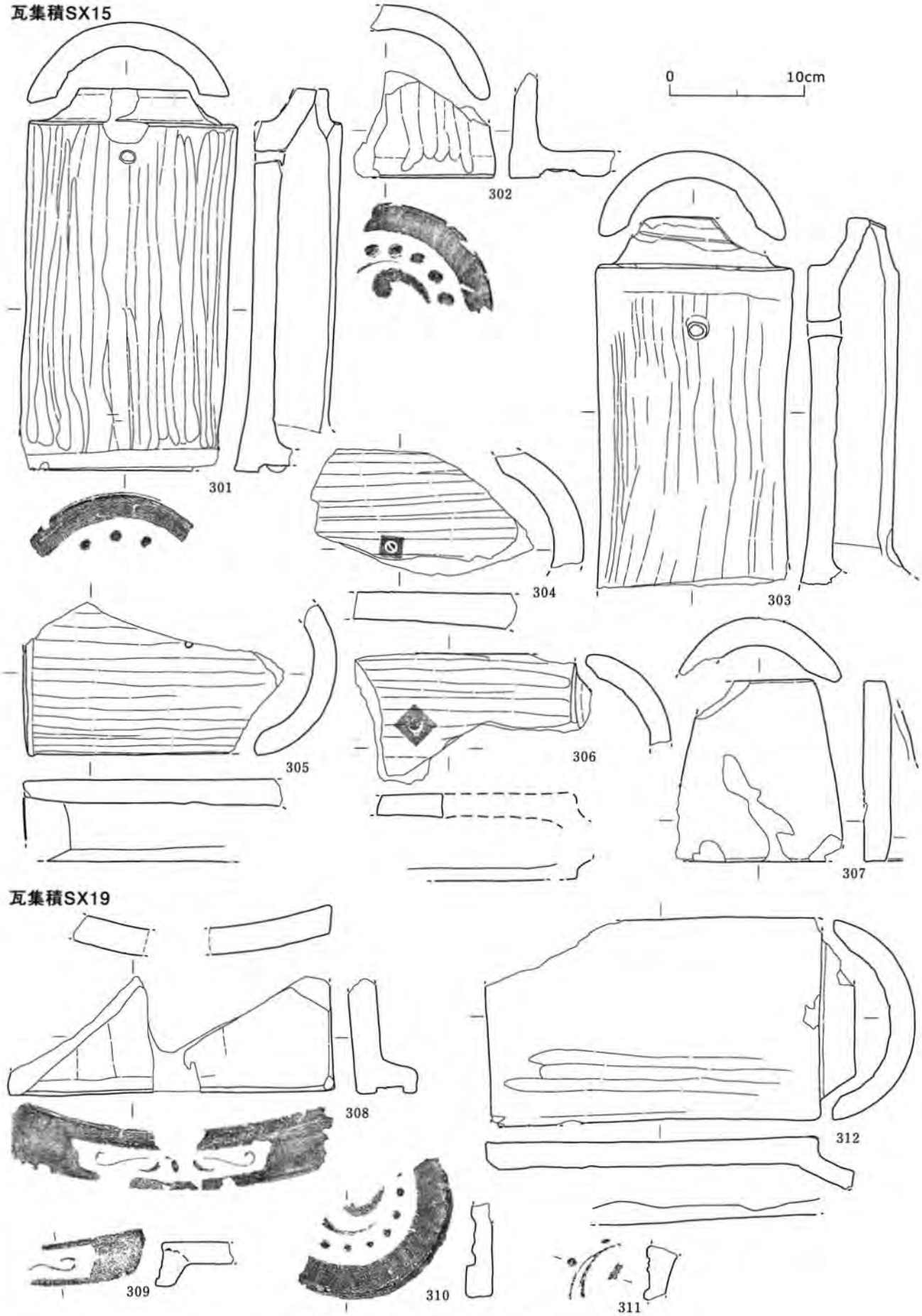
第34図　堀内出土遺物実測図(16)



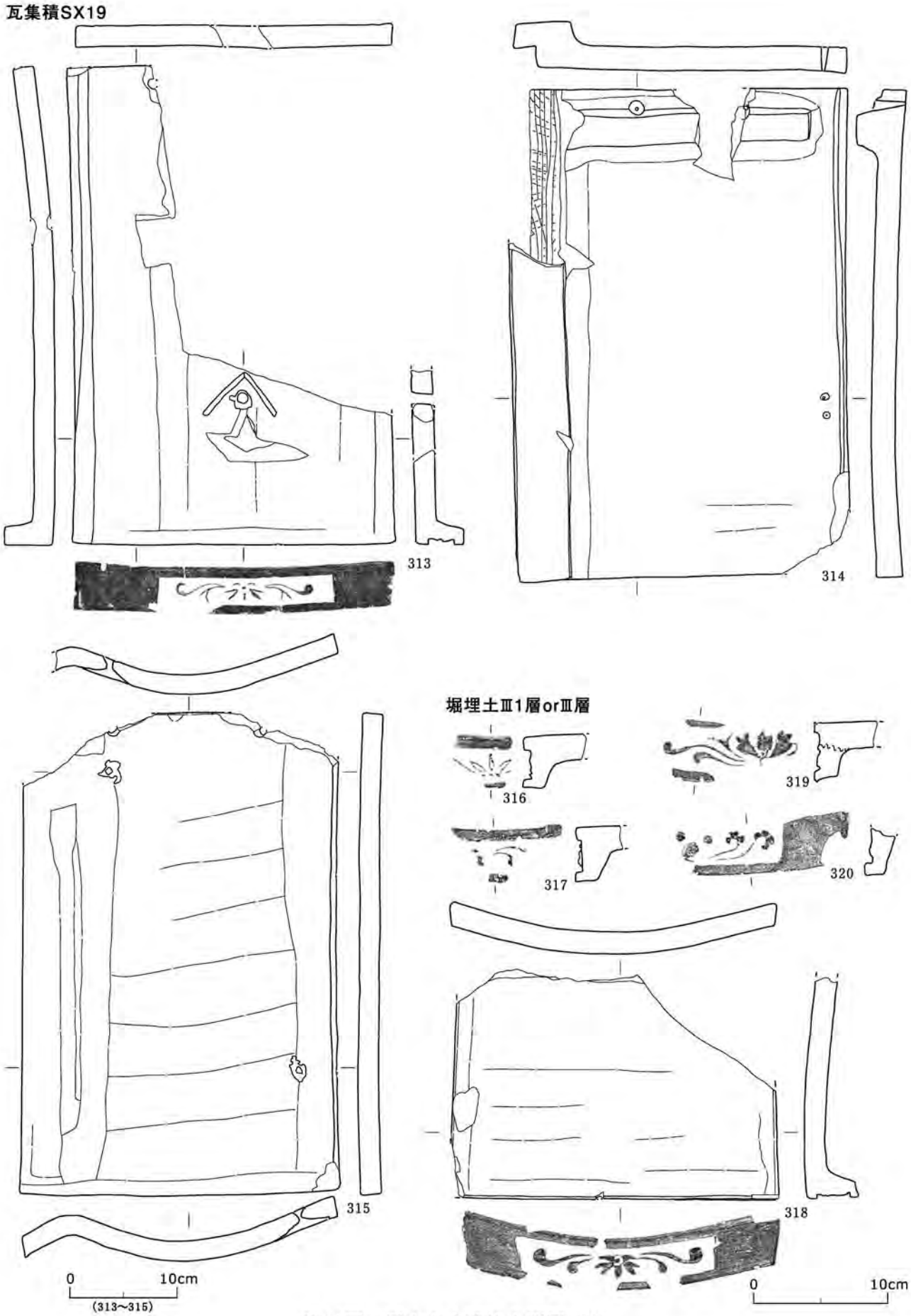
第35図　堀内出土遺物実測図(17)



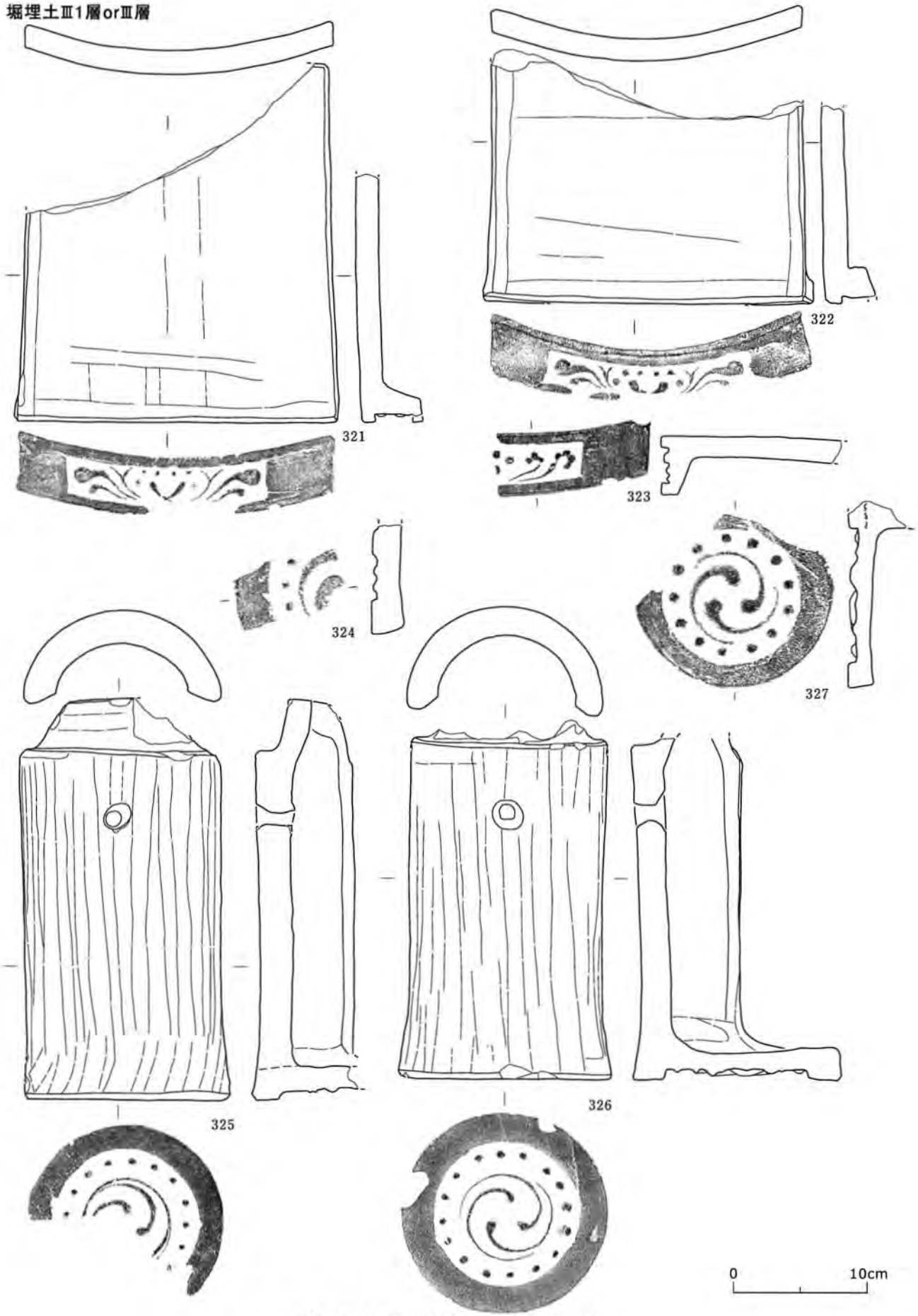
第36図　堀内出土遺物実測図(18)



第37図　堀内出土遺物実測図(19)



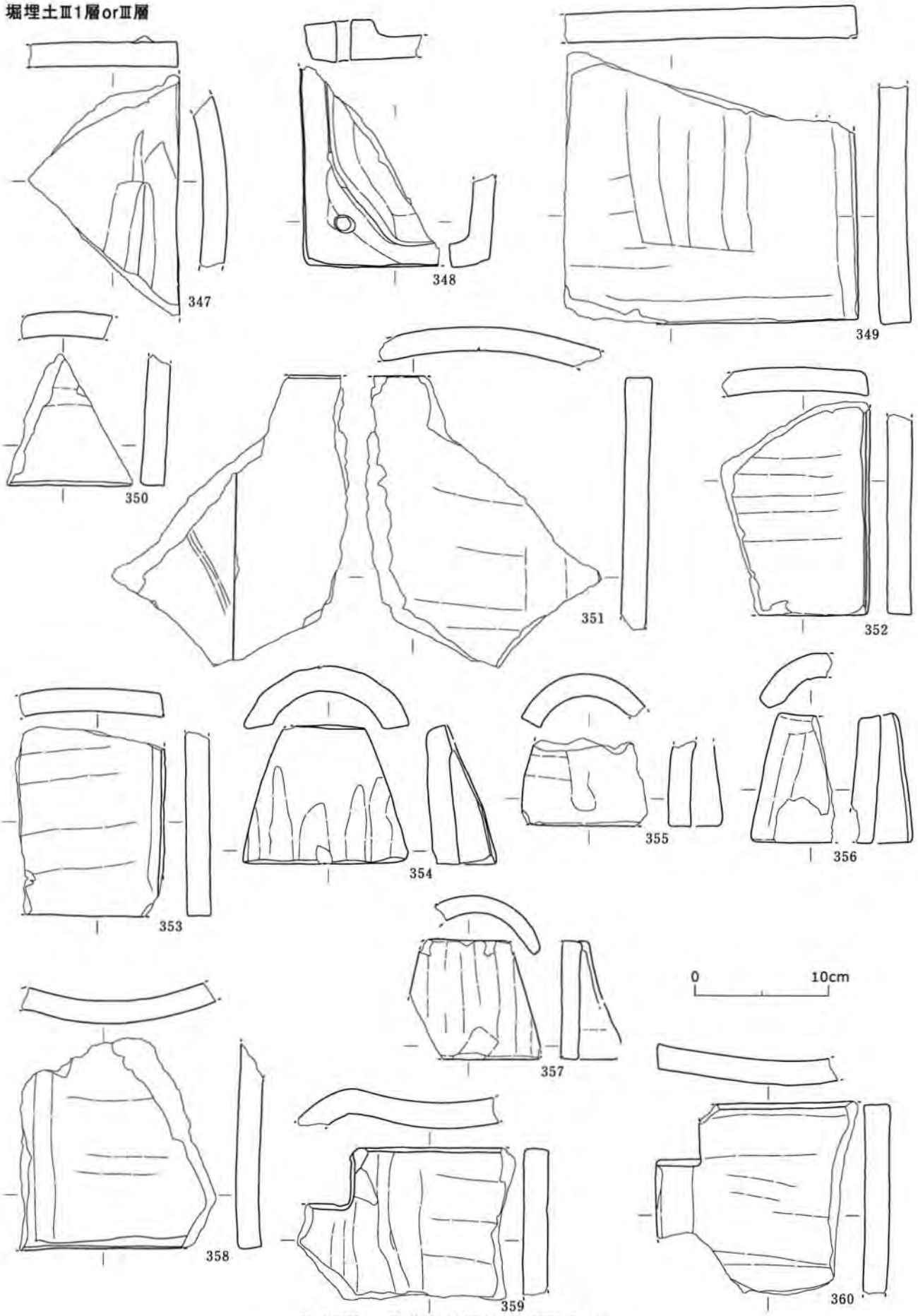
第38図　堀内出土遺物実測図(20)



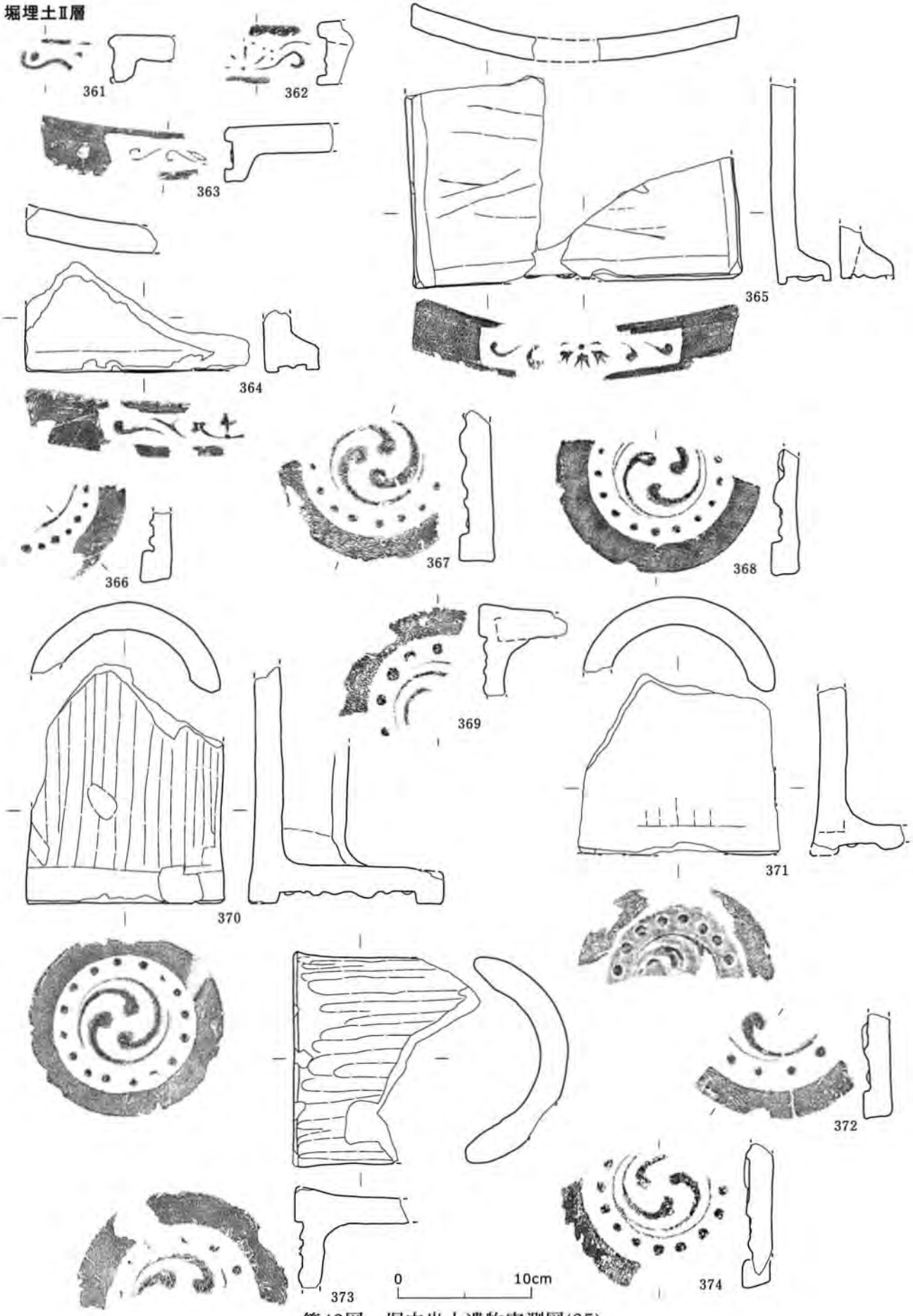
第39図　堀内出土遺物実測図(21)

第40図　堀内出土遺物実測図(22)

第41図　堀内出土遺物実測図(23)

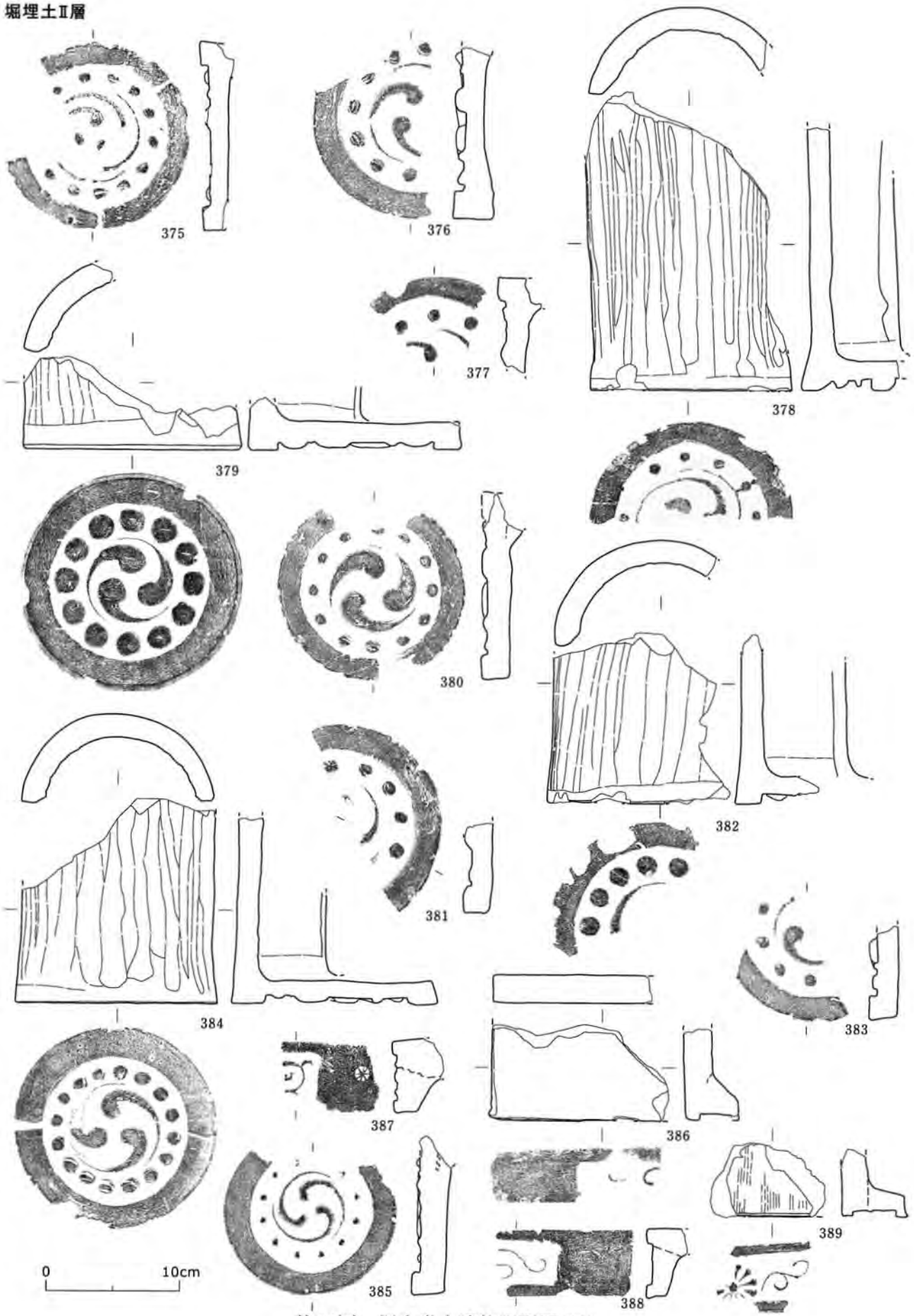


第42図　堀内出土遺物実測図(24)

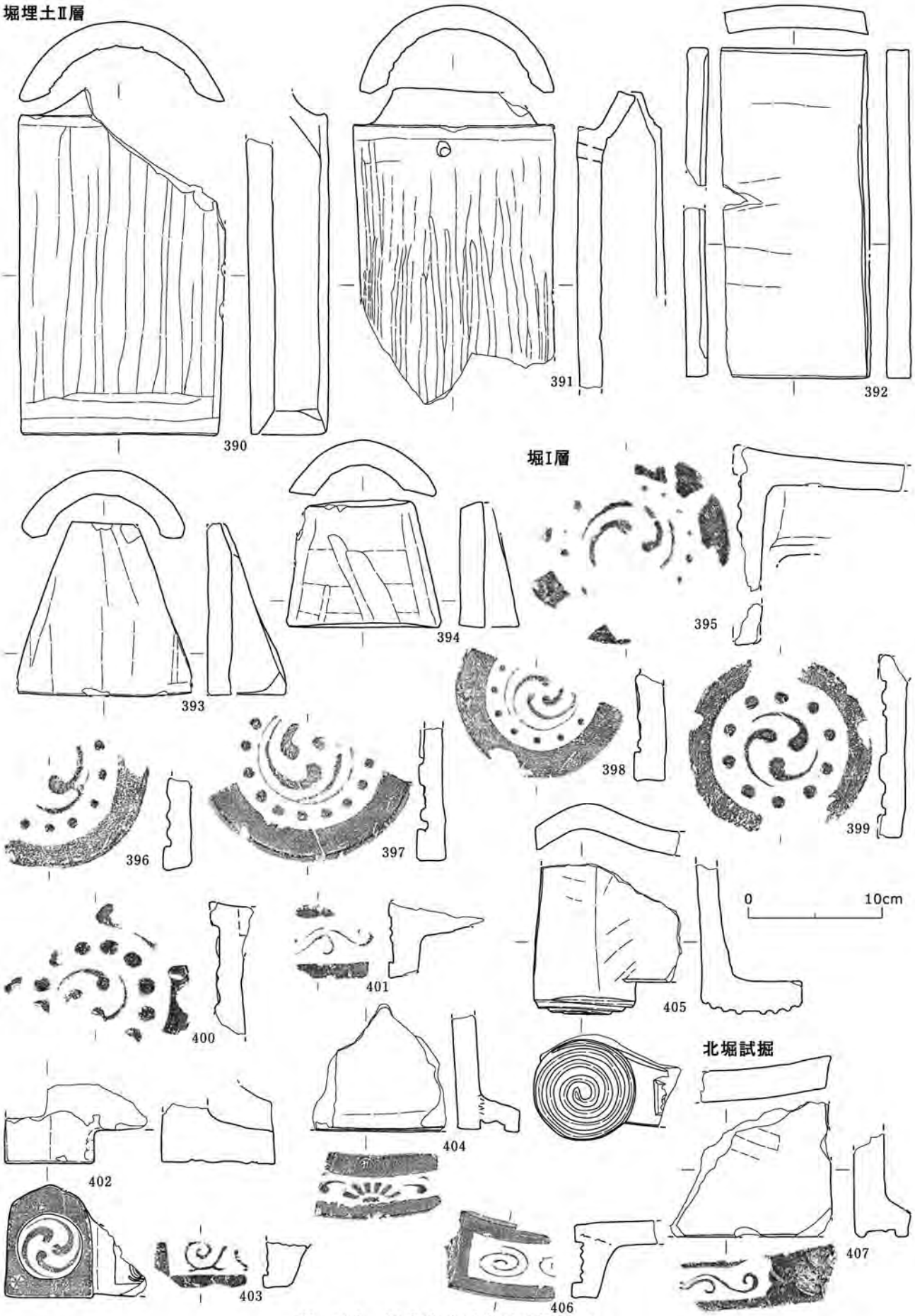


第43図　堀内出土遺物実測図(25)

堀埋土Ⅱ層



第44図　堀内出土遺物実測図(26)



第45図　堀内出土遺物実測図(27)

2-4. 本丸内の調査

2-4-1. 本丸内(12次調査)

(1)調査の経過

平成18年、本丸内の状況を確認するため、本丸中央北寄りに幅5m、長さ40mの東西トレンチ(以下A区)とその延長線上、土塁の裾に幅5m、長さ10mのトレンチ(以下B区)を設定し、9月22日に調査を開始した。トレンチは自衛隊撤去時の建物配置図を元に、構築物を極力避けて設定したが、重機掘削を開始すると、予想外に撹乱が激しいことが判明した。A区は、コンクリートが混入するなど明らかに現代の整地層・撹乱である部分は重機で掘削した。Ⅱ3層より下、Ⅲ1層上面までは人力で掘削を行った。B区は半分が現存の土塁にかかるため、表土より全て人力での掘削とした。

11月25日に加納まちづくり会と協働開催のイベントの一環として、調査現場の一般公開を行った。近世整地層上面で掘削は留めたが、一部、撹乱の底で断割トレンチを設定し掘り下げた。12月26日に埋め戻しを開始し、28日に全ての作業を終了した。

(2)撹乱の状況

A・B区とも予想以上に撹乱されている状況が確認された。

A 区

調査区の東端(撹乱1)と西端(撹乱2)に巨大なものがある。中には巨大なコンクリートブロックなどがあり、層位が最も新しいものであることから、自衛隊撤去時(昭和50年)の廃棄土坑といえよう。撹乱3は鉄塔の基礎で、現地表より2.5mもの深さに達している。上部の鉄塔部分は撤去されているが、コンクリート製の基礎は撤去されず、構築時のまま埋没している。現地表より2.5mにも達することから、唯一中世加納城の面にまで及ぶ撹乱で、撹乱埋土中からは多くの戦国期の遺物が出土した。トレンチ中央に東西方向に延びる幅1mの撹乱4からは、重機掘削時よりコンクリート製基礎が出土していた。これに直交する撹乱7・8・9や平行する撹乱11、調査区南壁に沿いに見つかった撹乱群とセットとなり、建物等の基礎と考えられるが、詳細は不明である。これらは撹乱3によって壊されていることから、自衛隊が使用していた期間のある時期に撤去されていることが分かる。撹乱5・6はそれぞれ塩ビ管・コンクリート管設置のためのもの、撹乱10は人頭大のコンクリート塊が埋められていたものである。調査区は撹乱4を境に大きく北と南に分断されるが、北区・南区とも撹乱の無い部分に関しては、近世整地層が比較的良好に残存していた。

B 区

自衛隊図面では一部土塁を断ち割って建物が配置されていたため、当初より調査区の南半が撹乱されていることが想定できた。予想通り建物北半の「コ」字形の基礎(撹乱2)とそれを巡る大きな土塁の削平(撹乱1)が確認された。またその建物から北へ延びるケーブル埋設撹乱(撹乱6)、西へ延びる水道管撹乱(撹乱4)がある。撹乱4の水道管は、撹乱3の鉄管に接続されていたものと考えられる。また現存する土塁の裾部分に、土塁と平行して土管が埋設されていることが分かった(撹乱5)。撹乱3と5の間も別の撹乱があり、近世整地層及び土塁の盛土の残存状況は極めて悪い。さらに致命的なのは撹乱5によって、

最重要の土塁裾の構造が判明しないことである。

(3) 基本層位・検出遺構

基本層位

前述のように撹乱が予想以上に多かったため、結果として壁面において下層の状況を確認することができた。基本層位はⅠ～Ⅳの4層に大別できる。上から昭和50年以降公園として利用されているときの造成土(Ⅰ層)、明治5年廃城以降の整地層(Ⅱ層)、慶長7年以降近世加納城時の整地層(Ⅲ層)、15世紀末頃の中世加納城時の整地層(Ⅳ層)である。

A 区

Ⅰ層は表土・公園造成土から成り、厚さ約50cmを測る。

Ⅱ層の大部分は昭和14年以降の陸軍・自衛隊利用時と考えられるが、5面が想定でき、それぞれそのベースとなる整地層を上からⅡ1～Ⅱ5層とする。厚さ約60cm。

Ⅲ層は撹乱4の壁面の観察より、瓦が包含される砂質土層Ⅲ1層と、包含されない砂礫層Ⅲ3層に分けることができ、さらにその境に部分的に堆積する粘質土を主とするⅢ2層とに分けた。Ⅲ1層は粘質土・砂質土・砂礫土などが複雑に堆積しており、まさに整地層の様相を呈する。層中には瓦が多量に包含されており、中には被熱したものや炭も見られることから、本丸内での火災→火災後の片づけ・造成という状況が想定される。Ⅲ2層はⅢ1層ともⅢ3層とも質的に異なる上、均質なきれいな土を用いていること、またほぼ水平に堆積していることから、ある時期の整地層で、その上面が当時の地表面である可能性が考えられた。しかしながら、調査区の東半のみにしか見られないこと、複雑な堆積が見られ、容易に面を想定しにくい状況がある。そのため今回は結論を急がず、とりあえず別の層として認定だけをしておく。Ⅲ3層は平成11年度の調査で明らかとなった、築城時に地山の砂礫を盛り上げた厚さ1m以上にも及ぶ整地層である。

Ⅳ層はⅢ3層でパックされる黒褐色粘質土で、上面は近世加納城築城直前の地表面である。土中に焼土・炭・戦国時代の遺物が包含されることから、中世加納城の面及び整地層もしくは遺構埋土であると考えられる。極めて部分的ながら、Ⅳ層の下には旧表土と考えられる黄灰色粘質土も確認した。A区撹乱3でのみ確認。

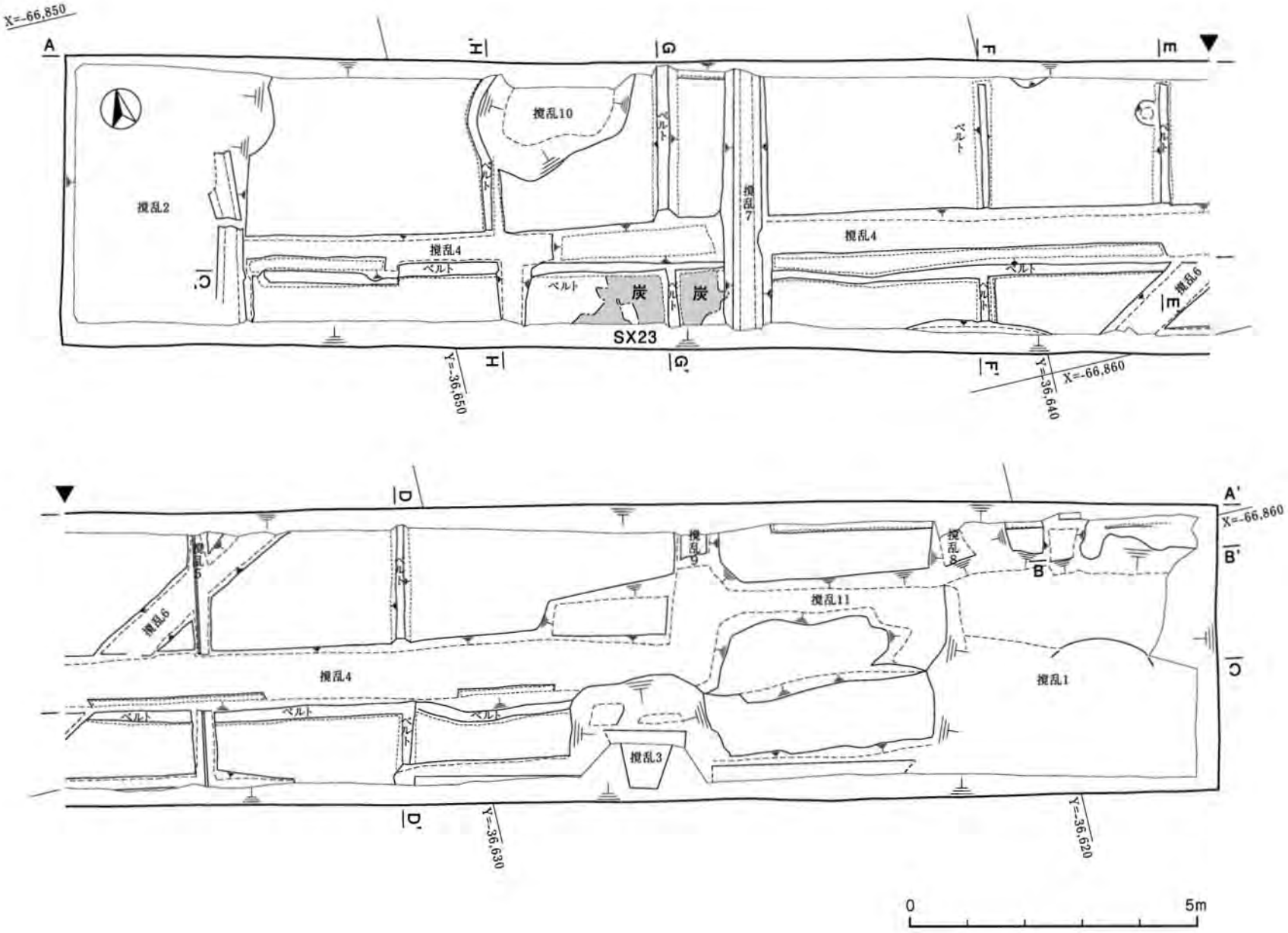
B 区

B区では戦国期の整地層にまで達する撹乱はなく、今回の調査では確認されていない。よってⅠ～Ⅲ層に大別できる。

Ⅰ・Ⅱ層は表土、近現代整地層及び撹乱である。自衛隊時およびその撤去時の撹乱が激しく、近現代整地層が破壊されているようで、A区と異なり、Ⅱ層中の面が明かでない。よってB区においては、Ⅰ層、Ⅱ層を含めて、Ⅰ層として取り扱う。

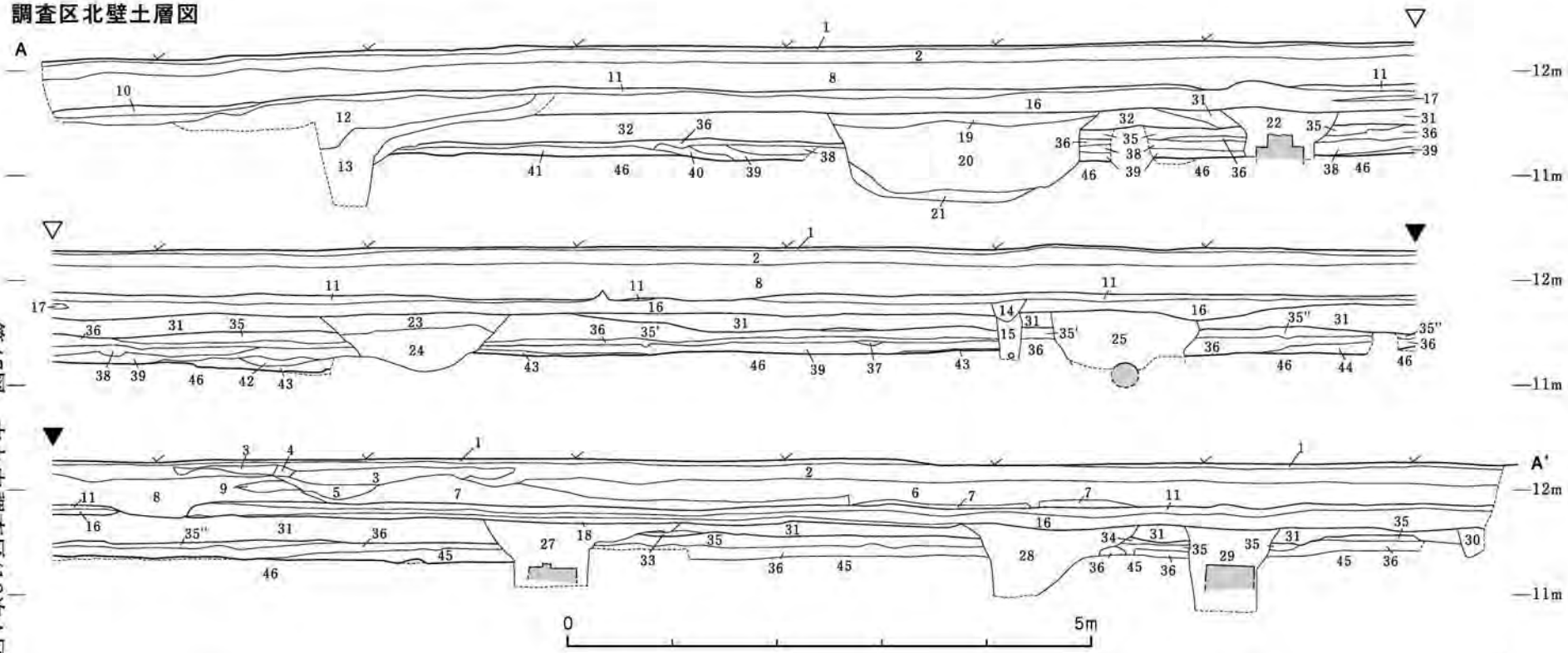
Ⅲ層は近世整地層及び土塁盛土である。撹乱によって土塁裾部が壊されているため、平地部の整地層と土塁の盛土との境界が明らかでない。おおむね撹乱5を境に平地部と斜面部がそれぞれに対応すると考えられるが、土塁と断定せず層の末尾に「a」を付すことで区別することにする。Ⅲ層はA区同様、瓦

A区平面図



第46図　本丸内調査区(12次A区)平面図

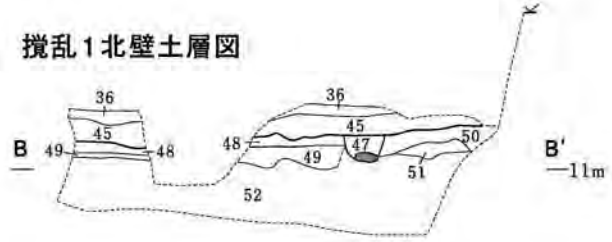
調査区北壁土層図

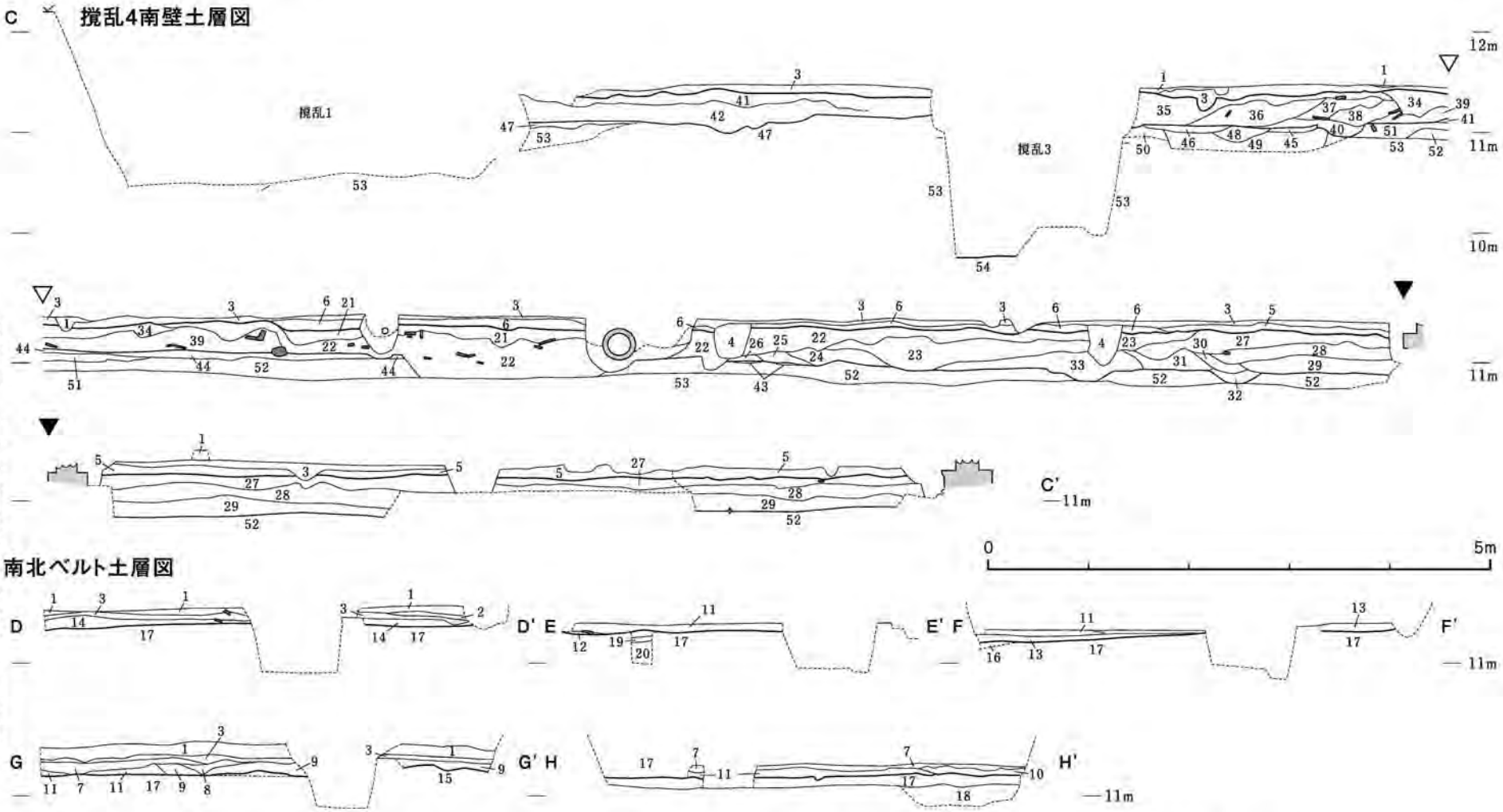


第47図　本丸内調査区(12次A区)土層図(1)

表土(I1)	1.黒色土
公園整地層(I2)	2.黄色砂質土(サバ土)
	3.明灰褐色砂質土(サバ土)
	4.明赤褐色砂質土(サバ土)
	5.黄色砂質土(サバ土)
	6.赤褐色砂礫(角礫)
	7.橙色砂礫(細かい角礫)
	8.赤褐色砂礫(角礫)
	9.黒褐色砂礫
近現代整地層1(II1)	10.灰黄色砂
	11.黄色砂質土(サバ土)
撹乱2	12.茶褐色砂礫土(円礫)
	13.黒色土(大部分が16層)
撹乱5	14.暗茶褐色土
	15.黒色土(アスガラ)
近現代整地層2(II2)	16.黒色土(アスガラ)
	17.黄色砂質土(サバ土)
	18.赤褐色砂礫
撹乱10	19.暗茶褐色砂礫
	20.コンクリート塊
	21.暗茶褐色砂礫
撹乱	22.暗茶褐色砂礫土(コンクリート混)
撹乱	23.暗褐色土
	24.円礫+コンクリート
撹乱6	25.暗茶褐色土(16層ブロック混)
撹乱9	27.茶褐色土(コンクリート混)
撹乱8	28.暗褐色土
撹乱	29.暗褐色土
撹乱1	30.黒褐色土
近現代整地層3(II3)	31.暗茶褐色砂礫土
	32.灰褐色砂礫(円礫・暗褐色土ブロック混)
	33.暗黄褐色粘質土
	34.黄褐色粘質土
近現代整地層4(II4)	35.黄褐色粘質土(部分的に灰色粘質土との斑)
	35'.黄褐色砂質土(礫混)
	35".黄褐色砂質土
近現代整地層5(II5)	36.暗灰色砂質土(粘性強い・赤褐色砂礫層間に入る)
	37.暗紫色土(焼土)
	38.灰黄色粘質土(黄色粘土ブロック混)
	39.暗茶褐色砂質土(粘性強い)
	40.暗黄褐色砂質土(粘性強い)
	41.暗茶褐色砂質土(粘性強い)
	42.暗茶褐色砂質土(39層よりしまり悪い)
	43.暗褐色砂質土
	44.暗黄褐色砂質土
	45.暗茶褐色粘質土
近世整地層1(III1)	46.暗黄褐色砂礫土(黒褐色砂礫土との斑・炭混・上面部分的に薄く砂堆積)
遺構	47.暗灰褐色土(しまり悪い)
近世整地層1(III1)	48.黄灰色砂礫
	49.灰褐色砂質土(粘性あり)
	50.暗茶褐色砂質土(粘性あり)
	51.暗褐色砂質土(粘性あり)
近世整地層3(III3)	52.黄灰色砂礫

撹乱1北壁土層図





▼近現代整地層4(Ⅱ4層)
1.黄褐色粘質土(部分的に灰色粘質土との斑)
2.白色砂

▼近現代整地層5(Ⅱ5層)
3.暗灰色砂質土(粘性強い・赤褐色砂礫層間に入る)
4.暗褐色土(赤褐色砂礫ブロック混)
5.暗灰色砂質土
6.暗灰色砂質土
7.灰黄色粘質土(黄色粘土ブロック混)
8.暗黄褐色粘質土
9.暗褐色土(砂利混)
10.暗茶褐色砂質土(粘性強い)
11.暗褐色土(砂利混)
12.暗茶褐色砂質土
13.暗褐色砂質土
14.暗黄褐色砂質土
15.炭

▼近世整地層1(Ⅲ1層)
16.暗黄灰色粘質土
17.暗黄褐色砂礫土(黒褐色砂礫土との斑・炭混・上面部分的に薄く砂堆積)
18.黄色粘質土
19.暗黄褐色土
20.黄褐色粘質土
21.暗褐色砂質土
22.暗茶褐色砂質土(瓦多混)
23.茶褐色砂質土(瓦多混)
24.暗茶褐色砂質土
25.暗茶褐色砂質土
26.暗黄灰色砂質土(粘性あり)
27.暗茶褐色砂質土
28.茶褐色粘質土
29.暗褐色砂礫土(瓦多混)
30.暗褐色砂礫土(しまり弱い)
31.暗褐色砂礫(しまり弱い)
32.暗褐色粘質土
33.暗茶褐色砂礫土(しまり弱い)
34.茶褐色砂質土
35.茶褐色砂質土
36.暗黄灰色砂礫(しまりなし)
37.暗茶褐色砂質土
38.茶褐色粘質土(瓦多混)
39.暗褐色砂礫(瓦多混)
40.暗黄灰色砂質土(粘性あり)
41.暗黄褐色砂礫土(黒褐色砂礫土との斑)
42.暗褐色砂質土(砂利混)

▼近世整地層2(Ⅲ2層)
43.灰褐色粘質土(均質)
44.灰褐色粘質土(均質)
45.茶褐色砂礫
46.暗黄灰色砂質土(粘性あり・炭、焼土混)
47.黄灰色砂質土(粘性あり・均質)
48.茶褐色砂礫
49.黒褐色砂礫(炭多混)
50.黄灰色粘質土(瓦、炭混)
51.暗灰色砂質土

▼近世整地層3(Ⅲ3層)
52.黒褐色砂礫
53.黄灰色砂礫

▼中世整地層(Ⅳ層)
54.黒褐色粘質土(焼土、炭、土師器皿片混)

の包含の有無で上下2層に細分でき、層の状況からA区のⅢ1層、Ⅲ3層に対応すると思われる。それぞれ傾斜(東)部の層(Ⅲ1a層・Ⅲ3a層)と平地(西)部とで細分した。

瓦集積SX21(第49図)

B区土塁盛土1(Ⅲ1a層)直上で検出した瓦集積である。撹乱1が及ばない調査区北側と撹乱1東壁にて確認できる。SX21を覆うのが近代以降の盛土であると考えられることから、廃城時に一括廃棄された瓦群であると見られる。ベルトより東の南半は未掘のため明確な範囲を確認することはできなかったが、撹乱1東壁で観察する限り、さらに南へ延びると考えられる。

瓦集積SX22(第49図)

B区撹乱2の底で確認した瓦集積である。近世整地層2(Ⅲ3層)直上で検出できる。撹乱で破壊されていたり、近世整地層1の下に潜ったりと検出範囲は小さいが、集積具合から判断すると広範囲に広がっている可能性が高い。瓦は軟質なものが多く、また被熱しているものが多い。

炭集積SX23(第46図)

A区で確認した炭の広がりである。近世整地層1(Ⅲ1層)直上で検出でき、周辺の面直上にも炭が点在する。集中的に広がりを見せる範囲は東西2.5m、南北1m程で、南へはさらなる広がりが確実であるが、撹乱4南壁断面では確認することができないため、北端を検出している状況と考えられる。一部で焼土も見られるが、面自体が強く被熱している様子は見られない。炭片は小さく、細いものが多く、柱のような木材が炭化したものとは考えにくい。

石列SV17(第49図)

B区撹乱2の底で確認した石列である。チャートを石材とした石列で、面は西を向いていると考えられ、長さ1.5m、1段のみ残存する。土塁盛土1(Ⅲ1a層)と土塁盛土2(Ⅲ3a層)の境に位置し、土塁盛土2に伴う石列と考えたいが、細長い土坑状の掘方内に構築しているようで、調査区南半でも確認することができない。土塁の裾の一部分のみ据えられているようである。

土坑SK7(第49図)

B区西よりの撹乱の底で検出した。長径1m以上、短径0.6m、深さ1m以上の土坑である。掘削は行っていない。

(4)出土遺物

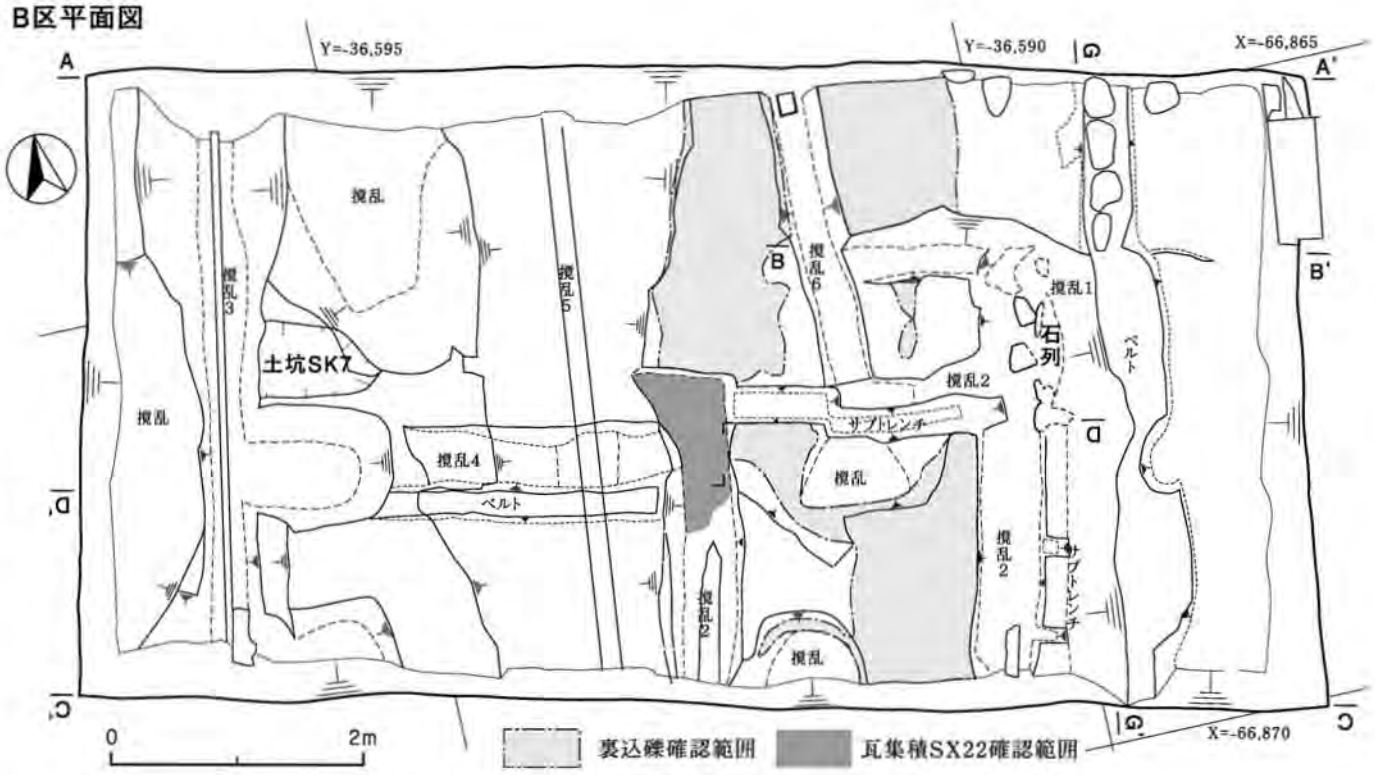
原則的に近世の整地層・盛土の掘削は行っていないため、大部分は近現代の整地層及び撹乱からの出土である。

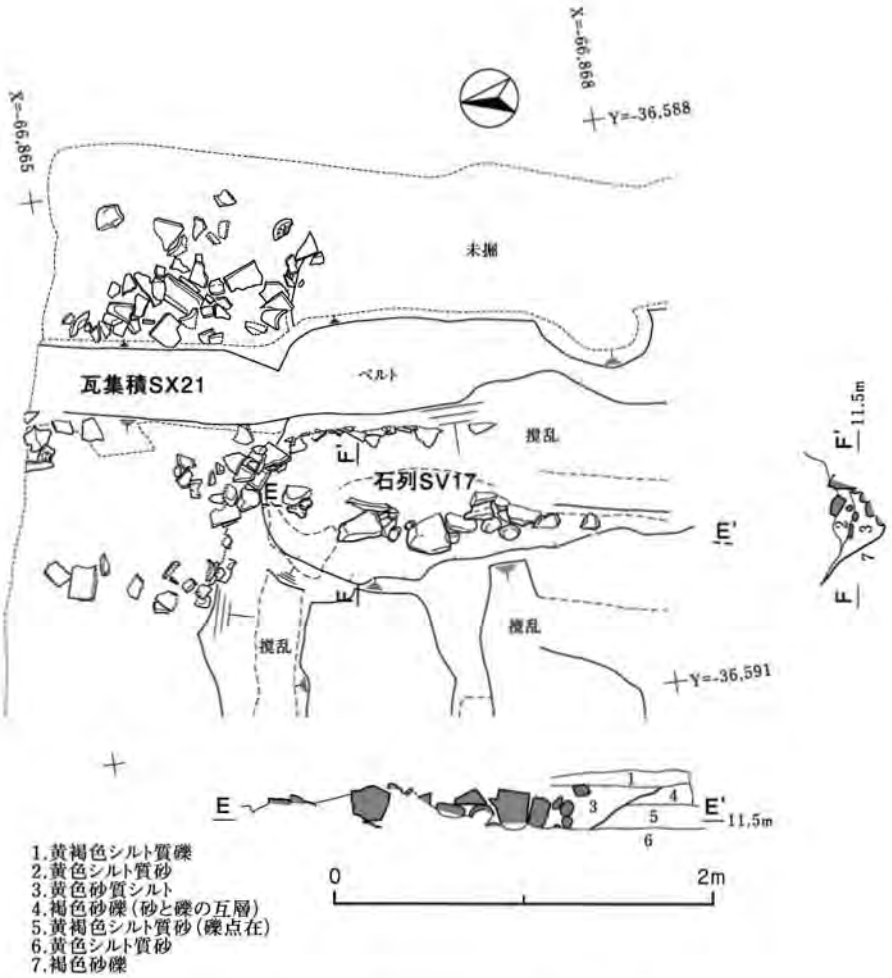
A区近世整地層出土遺物(第52・53図)

408～414、525～533は部分的な断割や、撹乱壁面の近世整地層から出土した遺物である。

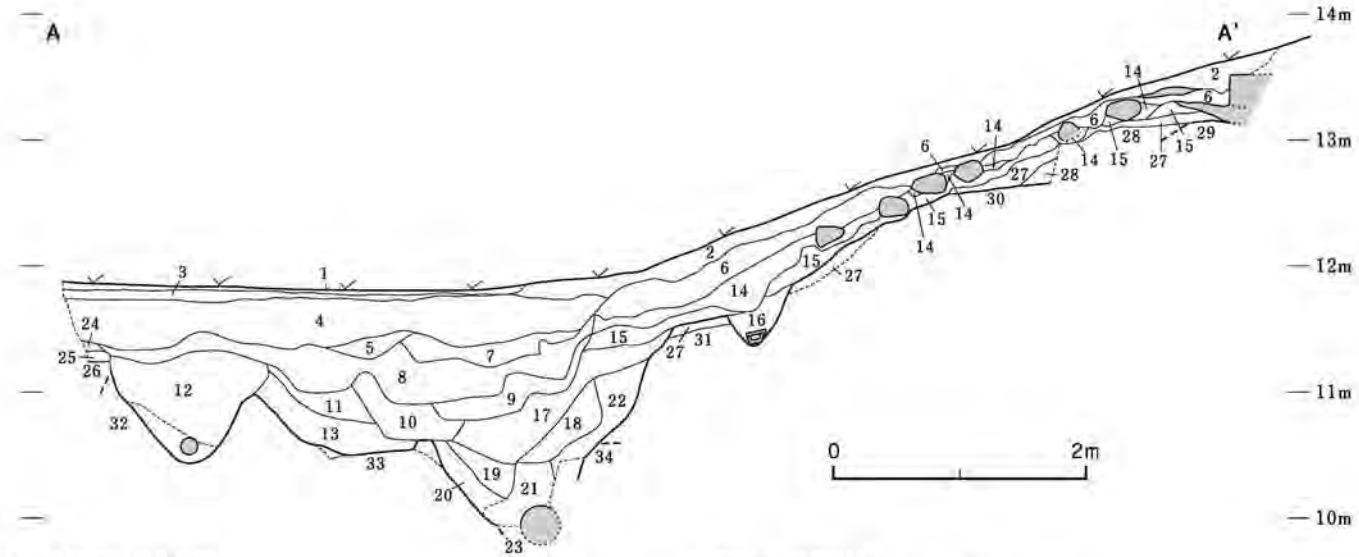
408は灰釉陶器椀である。409は胎土から瀬戸美濃産と見られる陶器であるが、器種は不明である。外面の釉薬は発色が悪く、透明感が無い。411は中国産と見られる染付皿である。410・412～414は鉄釘である。全体的に小さく、瓦に使用されたものではないと思われる。

525は軒丸瓦である。巴が右巻きであることと、推定珠文数、歪みが大きいことからR15-1類と推測





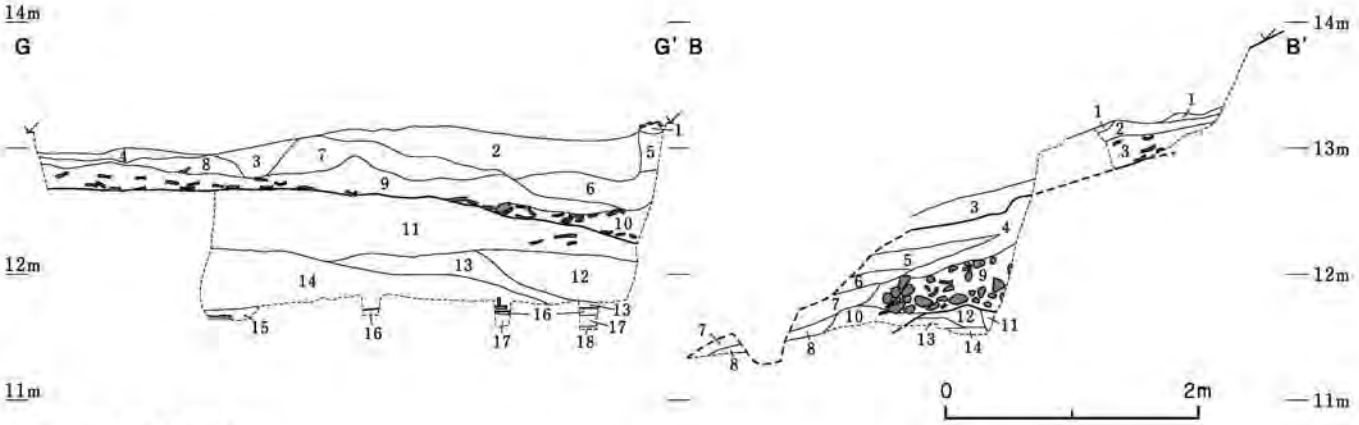
第49図　本丸内調査区(12次B区)平面図



▼近代整地層・攪乱(I層)
1.黄灰色砂質シルト
2.灰色砂質シルト―締まりなし
3.黄色砂質土(サバ土)
4.灰黒色シルト質砂―締まる
5.灰褐色シルト質砂(灰黒色シルトブロック混じり)―締まる
6.黄灰色砂質シルト(礫・瓦・煉瓦片含む)
7.灰黒色砂質シルト(コンクリート片・ビニール含む)
8.灰色シルト質砂(～50㎜礫含む)
9.黄褐色シルト質砂(～100㎜礫少し含む)―硬く締まる
10.黄褐色砂質シルト(灰黒色シルト小ブロック含む)―締まる
11.灰褐色砂質シルト(～20㎜礫・黒色粒含む)―締まる
12.灰黄褐色砂質シルト(礫・瓦含む、下方砂礫)
13.灰黄褐色シルト質砂(～30㎜礫まばらに含む)―締まる
14.灰褐色砂質シルト(礫・瓦含む)
15.灰黄褐色砂質シルト(礫・瓦含む)
16.灰褐色シルト質砂礫
17.黄色シルト質砂礫
18.黄褐色シルト質砂礫
19.黄色砂質シルト
20.灰色砂礫
21.褐色シルト質礫(150㎜)
22.灰黄色砂質シルト(礫・瓦含む)―硬く締まる
23.暗灰色シルト質砂
24.灰黄褐色砂質シルト―硬く締まる
25.灰褐色砂礫
26.灰黄色シルト―硬く締まる
27.黄褐色シルト質砂(礫・瓦多く含む)
28.黄色砂質シルト(瓦多量に含む)―締まる

▼土塁盛土1(Ⅲ1a層)
29.黄褐色砂質シルト(～70㎜礫・瓦多く含む)―締まる、瓦集積SX1ベース
30.黄褐色砂質シルト(～30㎜礫・瓦まばらに含む)―締まる、瓦集積SX1ベース
31.黄褐色シルト質礫(～50㎜)

▼近世整地層2(Ⅲ3層)
32.黄色砂礫
33.黒色砂礫
34.褐色礫



▼表土・近現代整地層(I層)
1.灰色砂質土―締まりなし
2.灰黄褐色砂質土(礫・瓦含む)
3.灰黄色砂質土(小礫含む)―締まり無し
4.灰褐色砂質シルト(礫・瓦含む)
5.灰黄褐色砂質土(礫・瓦含む)
6.灰黄褐色砂質土(礫・瓦含む)
7.灰黄色砂質土(礫・瓦含む)
8.灰黄褐色砂質シルト(礫・瓦含む)―締まる
9.黄色砂質シルト(下方に瓦多量に含む)―やや締まる
10.黄褐色砂質シルト(瓦多量に含む)

▼土塁盛土1(Ⅲ1a層)
11.黄褐色砂質シルト(～30㎜礫・瓦まばらに含む)―締まる、瓦集積SX1ベース
12.黄色シルト質礫(～100㎜礫・瓦含む)
13.黄色シルト質礫(～50㎜礫・瓦含む)
14.黄褐色シルト質礫(～100㎜、瓦含む)
15.褐色砂礫(～10㎜、瓦含む)

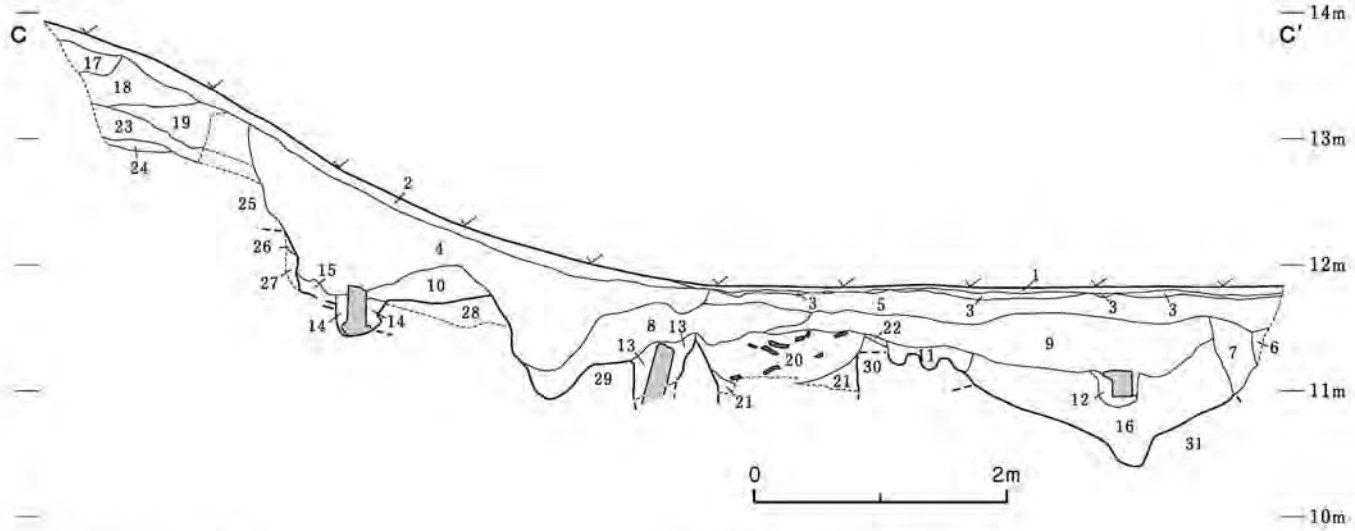
▼土塁盛土2(Ⅲ3a層)
16.灰黄色砂質土
17.褐色砂礫(～50㎜礫点在・瓦含む)
18.灰褐色砂礫質砂(一部で砂と砂質シルトの互層)―締まる

▼近現代整地層・攪乱(I層)
1.灰褐色砂質シルト(礫・瓦含む)
2.灰黄褐色砂質シルト(礫・瓦含む)―締まる
3.黄色砂質シルト(下方に瓦多量に含む)―やや締まる

▼土塁盛土1(Ⅲ1a層)
4.黄褐色砂質シルト(～30㎜礫・瓦まばらに含む)―締まる、瓦集積SX1ベース
5.砂礫(～50㎜)
6.黄褐色シルト質砂礫(瓦含む)
7.黄褐色シルト質砂礫(～50㎜)
8.黄色シルト質礫(～20㎜、まれに50㎜大)
9.黄褐色シルト質礫(～100㎜、瓦含む)
10.黄色砂質シルト(～10㎜礫含む)

▼土塁盛土2(Ⅲ3a層)
11.褐色砂礫(～10㎜、瓦含む)
12.黄褐色砂礫(～10㎜)―締まる
13.黄色砂質シルト
14.黄色砂

第50図　本丸内調査区(12次B区)土層図(1)

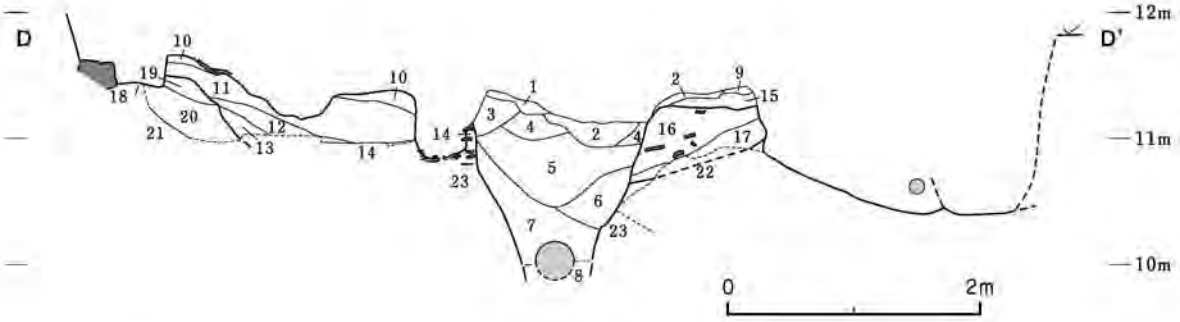


▼近現代整地層・撹乱(1層)
1.黄灰色砂質シルト
2.灰色砂質シルト―締まりなし
3.黄色サバ土
4.灰黄褐色～灰黒褐色砂質シルト
5.灰黄褐色～灰黒色シルト質砂―硬く締まる
6.灰黄褐色・灰黒色シルト質砂まだら
7.灰黄色シルト・灰黒色砂質シルトまだら
8.黄色～灰褐色砂質シルトまだら
9.灰黄色・灰暗褐色シルトブロックまだら
10.灰褐色シルト質砂礫
11.灰黄色シルト質砂―締まりなし
12.灰黄褐色砂質シルト～砂礫
13.灰褐色シルト
14.灰黄褐色シルト質砂―締まりなし
15.黄色シルト質砂―やや締まる
16.灰黄色シルト～灰色砂礫
17.灰黄褐色砂質シルト(礫少し含む)―締まる
18.灰褐色砂質シルト(礫・瓦含む)―やや締まる
19.灰黄褐色砂質シルト(礫・瓦含む)―やや締まる
20.黄褐色～灰色砂質シルト―締まる
21.褐色シルト質礫
22.灰黄褐色砂質シルト―硬く締まる
23.灰黄色砂質シルト(灰色まだら)―締まる
24.黄色砂質シルト(瓦多量に含む)
25.黄褐色砂質シルト(瓦多量に含む)

▼土塁盛土1(Ⅲ1a層)
26.黄褐色砂質シルト(～30㎜礫・瓦まばらに含む)―締まる、SX1ベース
27.黄色シルト質礫(～100㎜礫・瓦含む)
28.黄褐色シルト質礫(～50㎜礫)

▼近世整地層1(Ⅲ1層)
29.灰黄色砂質シルト(～50㎜礫・瓦少し含む)
30.灰黄色砂質シルト(白色粒・礫・瓦含む)―硬く締まる

▼近世整地層2(Ⅲ3層)
31.黄色砂礫



▼近現代整地層・撹乱(1層)
1.黄色砂質シルト(～70㎜礫多く含む)―締まる
2.灰色砂質シルト(～100㎜礫・瓦含む)―硬く締まる
3.灰黄色シルト質砂(礫・瓦少し含む)―締まる
4.黄褐色シルト質砂(～100㎜礫多く含む、瓦含む)
5.黄褐色シルト質礫(～70㎜礫・瓦多く含む)
6.灰黄色砂質シルト(白色粒・瓦少し含む)
7.褐色シルト質礫(シルト分少なく～150㎜礫多い)
8.灰黒色砂質シルト
9.灰黄褐色砂質シルト

▼土塁盛土1(Ⅲ1a層)
10.黄褐色シルト質礫(～50㎜礫多量、まれに100㎜大、瓦含む)―締まる
11.灰黄色砂質シルト(～50㎜礫・瓦少し含む)―締まる
12.黄褐色シルト質細砂(20㎜礫・瓦まばらに含む)―締まる
13.灰黄色砂質シルト(瓦含む)―締まる
14.灰黄色シルト(瓦多量に含む)

▼近世整地層1(Ⅲ1層)
15.灰色シルト質砂―硬く締まる
16.灰黄色砂質シルト(白色粒・礫・瓦含む)―硬く締まる
17.灰黄色シルト(白色粒・瓦含む)―硬く締まる

▼土塁盛土2(Ⅲ3層)
18.黄褐色砂質シルト(～100㎜礫・瓦含む)―締まる
19.褐色砂礫(～30㎜、まれに100㎜大)
20.灰黄褐色シルト質砂礫(～10㎜、まれに100㎜大)
21.灰黄色シルト質砂(～100㎜礫含む)―締まる

▼近世整地層2(Ⅳ層)
22.黄色砂礫
23.褐色礫―瓦集積SX2のベース

第51図　本丸内調査区(12次B区)土層図(2)

される。526・527は平瓦、528は丸瓦である。528の凹面には吊紐痕がある。529・530は熨斗瓦、531～533は輪違瓦である。

A区近現代整地層・撹乱出土遺物(第52・53図)

415～471、534～539は近現代整地層、472～516は撹乱出土遺物である。

415は土師器甕、416～418は須恵器、419・420は灰釉陶器、421～423は尾張型山茶碗、427は古瀬戸後期Ⅰ段階の縁釉小皿である。

424～426、428～435は中世加納城に関わる遺物群と見られる。424～426は東濃型山茶碗で、大洞東から生田窯式のものである。、428は後期Ⅳ段階新の擂鉢、429は大窯1～2段階の茶入である。430～435は土師器皿で、430～432はB1類、433・434はB2a類、435はB2b類である。

436は大窯4段階後半の天目茶碗、437～446は連房第1～2小期の瀬戸美濃産陶器である。437・438は志野丸皿、440・441・444は鉄絵の皿と鉢、442・445・446は擂鉢、443は黄瀬戸鉢である。447・448は409と同一個体の可能性が高い。これら近世初頭の遺物群は、当時本丸内に生活空間があった可能性を示唆する。

464・465は焼塩壺、466～469は近世の土師器皿である。

534はE1類、535はJ7類、536はI1類、537はK類の軒平瓦、538・539は軒丸瓦である。

472～476、480～493、505～512は土師器皿、479・500の生田窯式の東濃型山茶碗、古瀬戸後期Ⅳ段階新の天目茶碗(501)、大窯1段階の天目茶碗(502)、大窯2～3段階の擂鉢(503)とともに中世加納城の時期の遺物群である可能性が高い。

494は連房第1小期の黄瀬戸鉢、513は大窯4段階の後半の志野鉢、514は連房第1小期の天目茶碗、515は中国産染付碗である。

B区瓦集積SX22出土遺物(第52・53図)

540・541ともにG2類の軒平瓦、542はJ類である。540は二次被熱している。543・544はL13-8類の軒丸瓦である。545は丸瓦である。

B区土塁盛土出土遺物(第52・54図)

546は丸瓦である。接合することはできないが、同一個体のものである。

B区瓦集積SX21出土遺物(第52・54・55図)

517は5型式の尾張型山茶碗である。547はJ類と見られる軒平瓦、548・549はI2類、550はK8類である。551(L16-7類)、552(L16-4類)、553(L13類)はいずれも瓦当面に砂が付着する。554は菊文の軒瓦である。1015と同笵で、軒桟瓦の可能性があるが、軒平瓦と捉えておく。555・556は平瓦、557～559は丸瓦である。560・561は鯱瓦と思われる。562～567は輪違瓦である。SX21の層位から廃城時の一括廃棄遺構と見られる。

B区近現代整地層・撹乱出土遺物(第52・55図)

518・519は灰釉陶器、520は古瀬戸腰折皿、521は連房第1小期の擂鉢、522は古瀬戸後期Ⅳ段階新の擂鉢、523は連房第1小期の擂鉢、524は中国産磁器の染付小杯である。

568～579は軒平瓦である。568はA2類、573はG4類、574はI1類、575はI2類、576はJ3類、578はJ類の新類と見られるが残りが悪く詳細は不明である。580～590は軒丸瓦である。591は軒塀瓦A類、592は伏間瓦である。

(5)小結

本丸内の火災

A区ではⅢ1層中に多量の瓦が包含されることが確認された。Ⅰ層・撹乱・Ⅱ層中からも瓦が出土したが、大部分はⅢ1層を壊したことによる混入であると見られる。B区では撹乱の底でⅢ3層上面(Ⅲ1層直下)において瓦集積SX22を検出し、断割トレンチの掘り下げに際しては、多量の瓦が出土した。これらの瓦は、少なからず二次被熱をしており、層中のあり方とも合わせて、本丸内での火災後の片づけで埋められた可能性が高い。

これまでのところ、本丸が火災にあったという記事・文献は確認できていなかった。本丸大手北堀での9～11次調査の成果をさらに裏付ける事象ということができよう。

土塁の改修

前項でⅢ1層とⅢ3層の状況が、瓦の包含の有無、瓦が二次被熱をしていることから、ある時期の火災によって片づけ、改修が行われたことを想定した。このことは平地部の盛土に限らず、土塁の盛土にもいえることが分かった。Ⅲ3a層には瓦が包含されず、Ⅲ1a層には被熱した瓦が入ることから、この改修に際して、土塁をも拡幅していることが想定できる。

加納城の修復に関して分かっていることは、天明2年(1782)の洪水により、二の丸と三の丸の土塁と石垣が崩れ、修理を申請するための絵図を作成している。二の丸4次調査(平成14年度)では二の丸東辺土塁の内側の裾を検出しているが、盛土中に瓦が包含されることから、修復の可能性が示唆された。

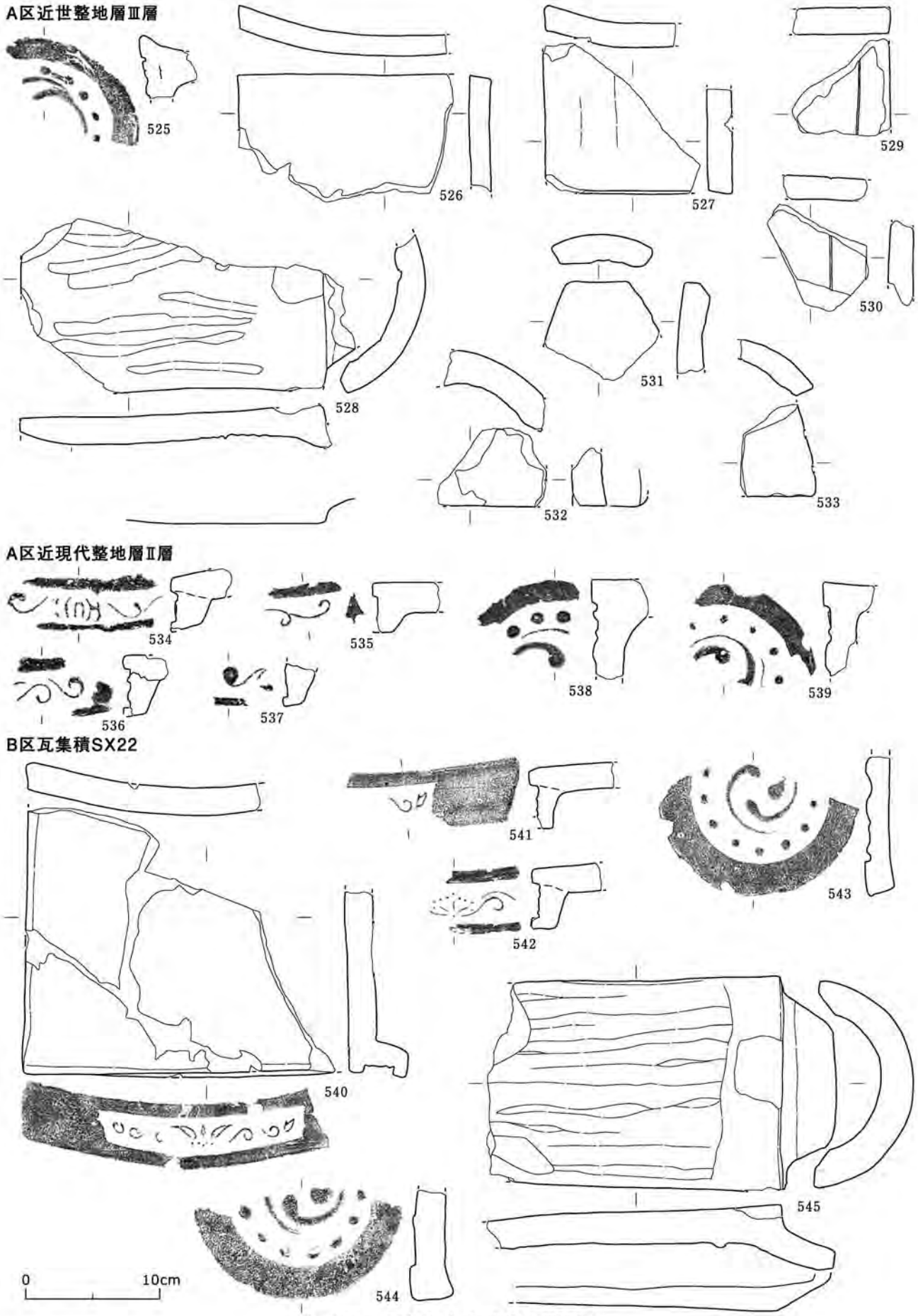
土塁の改修ということはあまり想定していなかったが、今回の調査でそのような状況を確認できたことの意味は大きい。二の丸でも同様なことが行われており、いずれも小範囲での検出であることに不安はあるが、比較的一般的に行われたことかも知れない。

中世加納城の範囲

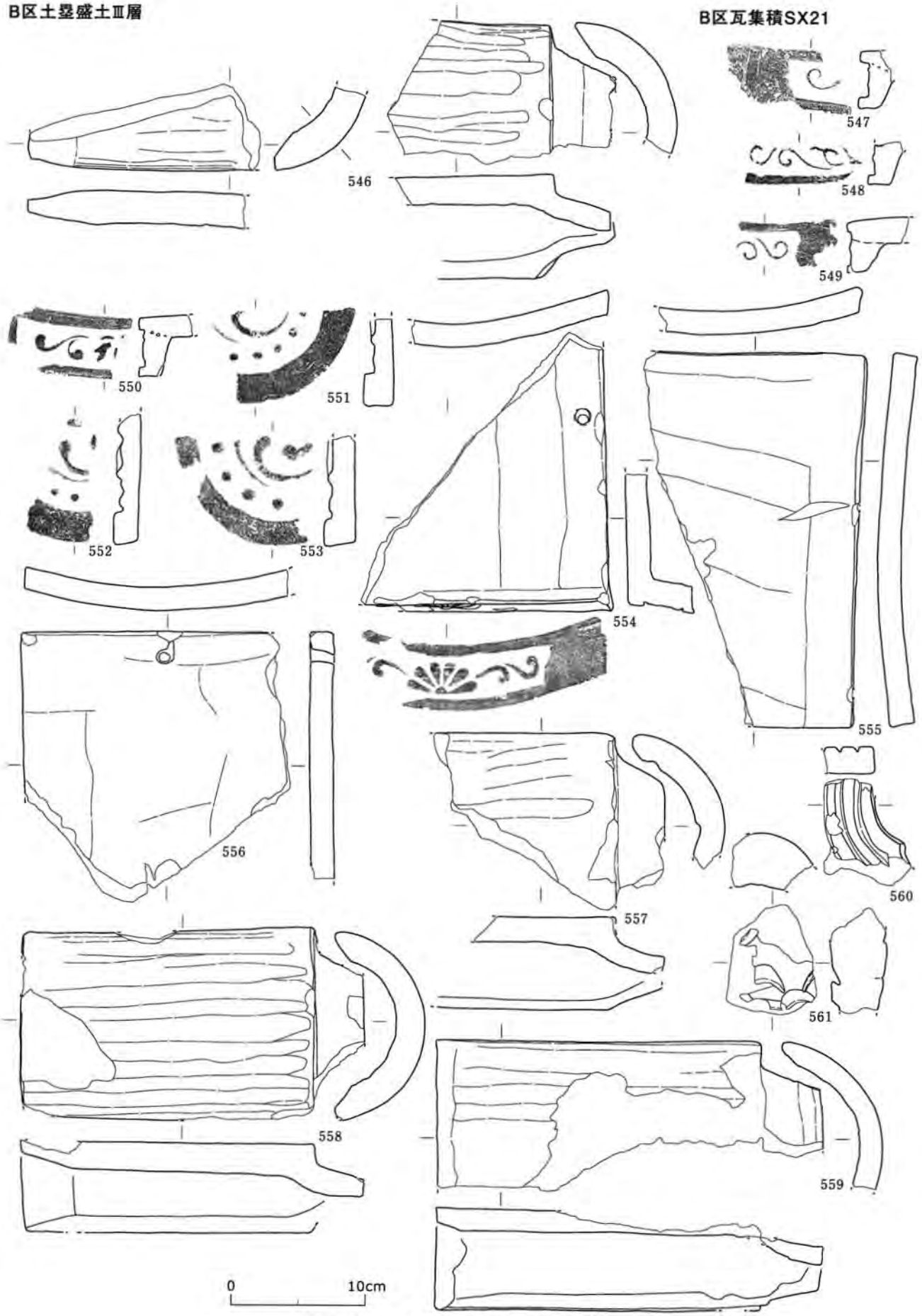
A区撹乱3において中世加納城の整地層あるいは遺構埋土と考えられる土層を確認した。層中には戦国期の遺物・焼土・炭が多量に包含されることから、6次調査における整地層と共通の特徴が見られる。また二の丸3次調査(平成13年度)でも同様な土層が確認されている。今回の調査の戦国面のレベルは9.7m、6次調査のそれは9.4m、両者の南北方向の距離は約85mあることから、ほぼ水平といって良いであろう。また地理的な立地を考えると、元々の地形が南下がりであると考えられ、それに即した状況でもある。ちなみに二の丸調査は本調査地より東に約90m離れたところで行われ、その地点でのレベルは9.9mである。

6次調査では現存の近世加納城本丸南側の土塁と重なるように中世加納城の土塁が発見された。また二の丸3次調査でも中世の土塁と近世の土塁が重複して検出されている。これらのことから近世加納城は戦国期の加納城の跡地に残された遺構を利用して省力化を図っていることが推定された。少なくとも近世本丸は中世加納城と完全に重なっていると想像され、今回の調査で確認した整地層についても、城内の地表面である可能性が高い。

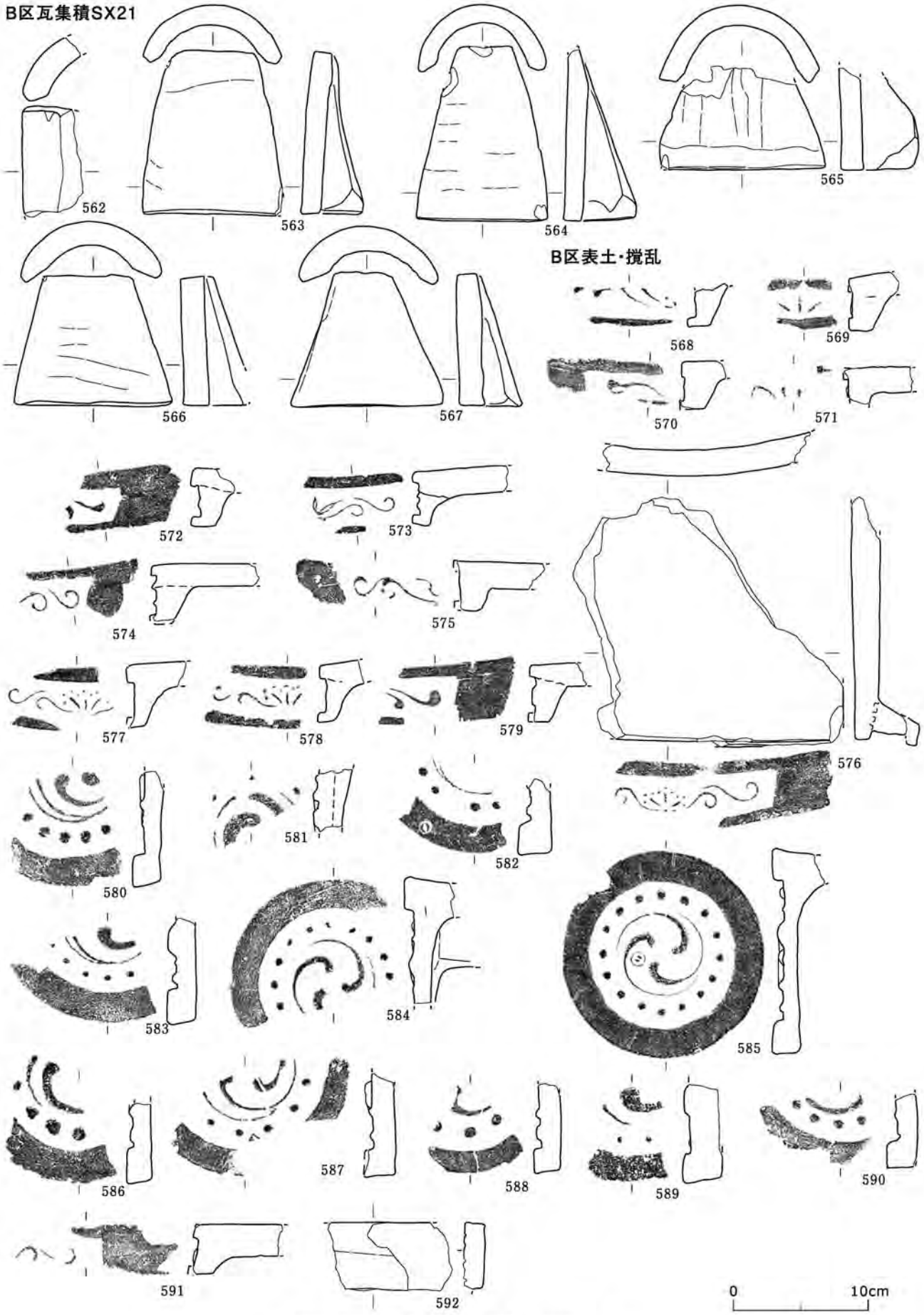
第52図　本丸内出土遺物実測図(1)



第53図　本丸内出土遺物実測図(2)



第54図　本丸内出土遺物実測図(3)



第55図　本丸内出土遺物実測図(4)

2-4-2. 本丸大手枡形(13・14次調査)

(1)調査の経過

平成19年度(13次調査)の調査は、本丸大手枡形の規模及び状況を確認するために、南辺の土塁に沿って幅約5m、長さ約32mの東西トレンチ(以下現況階段を境に東をb区・西をc区)と、一の門が想定される位置に幅5m、長さ19mの東西トレンチ(以下a区)を設定し、11月26日に調査を開始した。

a区中央の平坦部の一部には以前自衛隊の建物があり、撹乱されていることが予想されたため、樹木などを避けつつ、明らかに近現代整地層・撹乱である部分を重機で掘削した。東西両端の土塁裾部分は、表土から手作業による掘削とした。b区は土層観察と埋め戻しの目安とするためのベルトを2箇所に設定し、近現代整地層・撹乱を重機で掘削を開始した。b区はそのほとんどに自衛隊建物があった場所であり、当初から撹乱は予想していたものの、範囲と深さは相当なものであった。現況でも確認することのできた石垣の直前にまで撹乱は及び、b区全体で近世整地層が残存するのは、面積の半分にも満たない状況であった。撹乱を掘削すると石垣の崩壊を招く恐れがあったため、近世整地層上面の高さで留めることとした。c区は大部分が土塁裾にかかるため、重機掘削は行わず、表土から人力での掘削とした。

当初、現況の石段の撤去は行わない予定であったが、調査期間の後半、櫓門の袖石垣が階段の下に残存する可能性が高いことが判明したため、段の一部を撤去し、調査区を拡張した。また絵図で想定された南側の土塁の階段を確認するため、c区西半を南へ拡張した。またb区の撹乱の一部を重機で深掘りをし、下層の状況と整地層の状況を確認した。

平成20年3月9日に加納まちづくり会と協働開催のイベントの一環として、調査現場の一般公開を行った。3月11日に埋め戻しを開始し、17日に全ての作業を終了した。

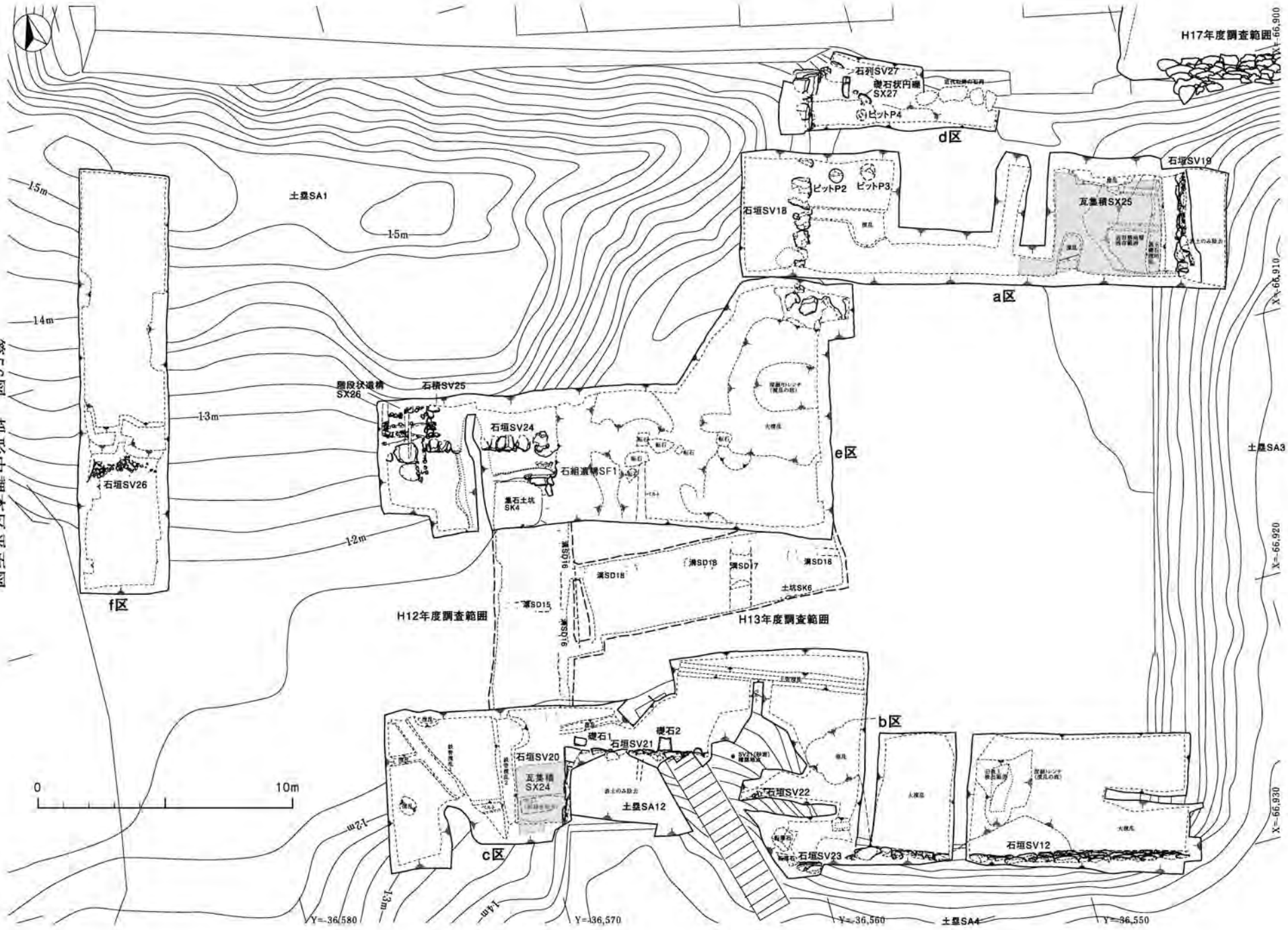
平成20年度(14次調査)は13次調査で明らかとなった櫓門南側の袖石垣に対応する北側の土塁の痕跡、また13次調査で確認することができなかった一の門の位置を再度想定し、トレンチを設定した。13次調査a区の北側に幅2.5m、長さ8.5mの東西トレンチ(以下d区)、13次調査a区西端から南西方向に、東西約18m、南北約10mの範囲にL字形のトレンチ(以下e区)を設けた。調査の手順は平成19年度調査と同様であるが、d区及びe区の土塁部分は表土から人力掘削を行った。またe区内では、一部が平成12年度調査範囲と重なるが、調査区壁面と石組遺構SF1のみ露出させた。

f区の調査は枡形内d・e区と併行して行った。絵図には、土塁上に多聞櫓、土塁内側に雁木が描かれているところで、その残存状況や構造を確認するため、幅3.5m、長さ16.5mのトレンチを、横断する形で設定した。表土と現代の盛土層のみを重機で掘削し、その後人力で掘り下げた。

平成20年11月22日には、前年度同様加納まちづくり会との協働イベントで調査現場の一般公開を行った。またe区大撹乱底で深掘りを行い、戦国期の状況を確認したが、撹乱が地山にまで及んでおり、確認することはできなかった。12月9日に埋め戻しを開始し、12日に全ての現場作業が終了した。

(2)撹乱と土層の状況

a区は近代以降の改変が多く、撹乱も深くまで及んでいる。東半では、近代以降通路として使用されていたことで、スロープ状に削られており、一部では築城時の面に達する。



第56図　枡形内調査区平面図

b区は自衛隊の建物があった場所で、調査前から撹乱は予想していたものの、SV12直前まで広がっており、また予想以上に深く、完掘は行わなかった。第56図に示したとおり、近世の整地層が残存するのはベルトより東、SV12前の三角形状の部分と、SA12周辺のみである。撹乱壁面の土層観察によると、最低でも2面は確認できる。上面は近代遺物を包含する整地層直下で、層上面に瓦がのることから廃城時のものと見られる。下面は砂礫を主体とする特徴的な築城時の整地層直上で、築城直後の面と認識できる。下面と上面の間の整地層中には瓦が多く包含されており、いずれかの時期に本丸内を盛土した状況を示している。b区では撹乱の底を重機で深掘りし、下層の状況も確認した。砂礫層からなる築城時の整地層直下には旧表土が確認できた。本丸・二の丸の調査で確認した、戦国期の整地層とレベルがほぼ同じで、中世加納城の時期のものと見られる。しかし、これまでに確認できた土に比べ、しまりが無く、また遺物が全く出土しなかった。

c区は部分的な撹乱以外、残存状況は他の調査区に比べて良好で、廃城時と見られる瓦集積や礎石が検出された。撹乱壁面の土層観察により、最低2面(築城時と廃城時)の整地面が確認できる。さらに間に整地の単位は見られるものの、断面観察だけでは、整地面とまでは認識できなかった。

d区東半は撹乱と近代以降の石列、さらに立木の根によって、表土を完全に掘削することはできなかった。西半は残存状況が良好であるが、北半は斜面を削り取るように、破壊されている可能性が高い。

e区は大部分が撹乱されており、SV24などが検出された西端(e西区)のみ遺構が残存する。撹乱の深度はおおよそ築城時の地面辺りに及び、一部は地山にまで撹乱が到達していた(大撹乱)。またSV24の延長方向に溝状の撹乱があり、埋土中に石垣の石材が数個出土した。この溝状撹乱を境に北半では砂礫、南半では粘質土が検出される。砂礫は土塁盛土の最下部、粘質土は平坦部の整地層、その境界に石垣抜き取り痕という状況が推測されるが、明瞭には検出できていない。

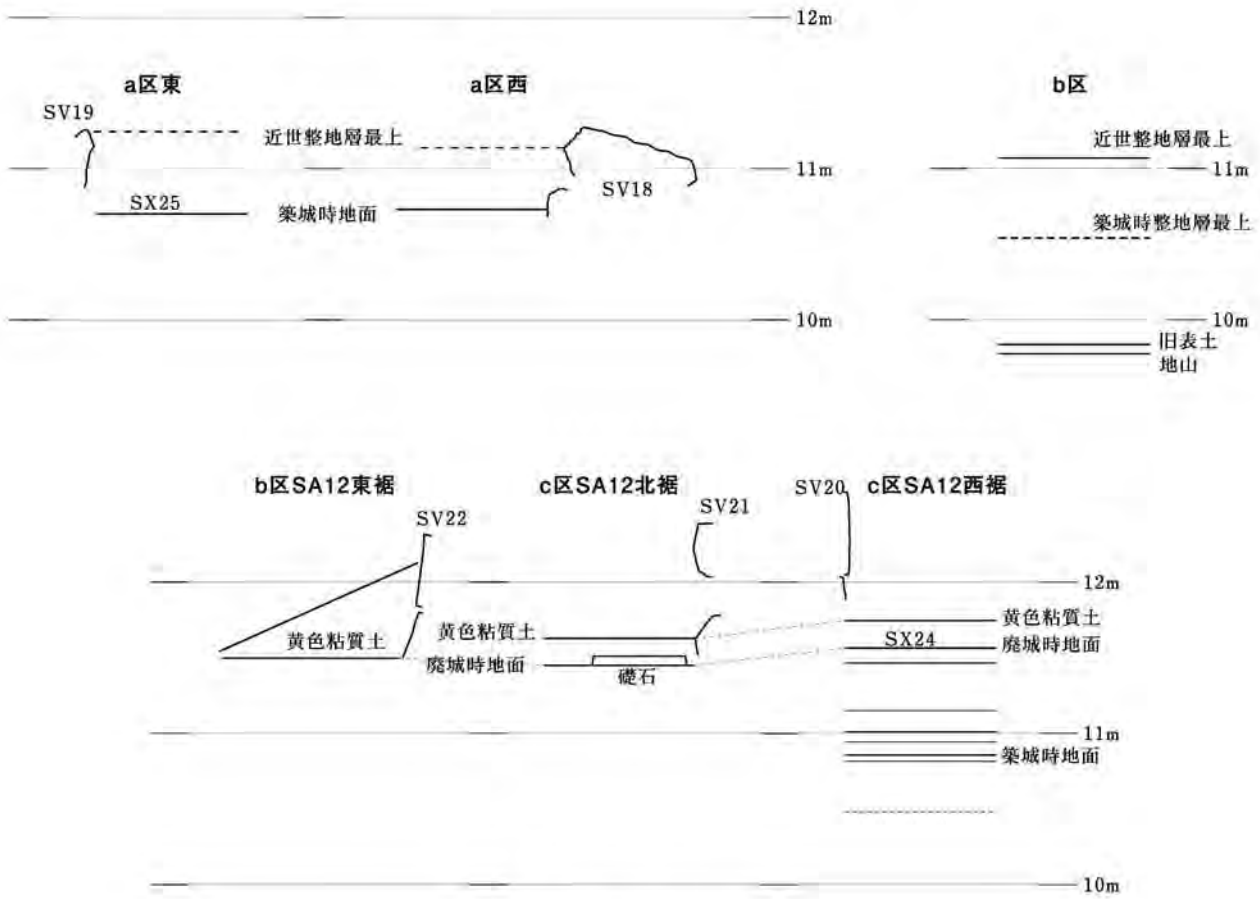
(3)基本層位・検出遺構

基本層位(第57図)

a区は近代以降の削平が広範囲にわたっており、西の北半および東の東半を除いて、築城時の地面近くまで削平されている。レベル10.7mあたりに築城時の整地面が確認でき、これをベースにSV18・19が築かれている。それ以降の整地面は認識できないが、東で最高11.2m、西で最高11.1mまで瓦を包含する盛土が確認できる。

b区は近代以降の大撹乱が広範囲にわたっており、近世整地層が残存している部分はわずかである。SV12北の大撹乱壁面で整地層の状況を確認したところ、瓦を包含する穴状の堆積が見られた。いずれかの段階での廃棄土坑と見られるが、確認範囲が狭く、状況を明らかにすることはできなかった。近世整地層の最高地点は11.0m、築城時の整地面は不明である。近世加納城築城直前の旧表土面が9.8m、地山が9.7mあたりで確認できる。

c区はSA12周辺で比較的整地層が残存している。礎石が検出された北裾の整地面が11.4m、東裾11.5m、西裾11.6mで同様の整地面が確認できた。これを覆うように多量の瓦を包含する黄色粘質土を検出しているが、廃城後の堆積土であろうと判断している。近辺の撹乱壁面では10.8m付近で築城時の



第57図　枡形内土層模式図

整地面が確認できる。

d区は表土直下で、a区西北半に残存する近世整地層が検出される。北半は近代以降に削られていると見られるが、その壁面で3面の整地面が確認できる。最下は10.1m辺りで築城時と見られる整地面がある。その上には瓦を包含する整地層があり、10.7m辺りの上面には礎石状の円礫が伴う。さらにその上10.8～10.9mにP4が検出された面がある。

e区は撹乱が激しく、廃城時の面は、SV24などを検出した西端以外は残存しない。大撹乱の北壁、南壁では10.9～11.0m辺りに築城時と見られる整地層が確認できるのみである。

d区を除く4調査区の土層の状況を総合すると、次の様相が分かる。9.8mの旧表土上に盛土を行い、10.7～11.0mに築城時の整地面を造る。のち改修に伴い盛土をし、最終的に11.4～11.6mの整地面の時、廃城となる。盛土中には瓦が包含され、建物の改築を伴っている可能性が高いが、その回数は不明である。d区は築城時の面、その上の面いずれも他の調査区より低い。これはd区が本丸入口部分に当たることから、築城当初より段差を有していたといえる。石垣のベースの高さも同様であることから、本丸に向かって、階段あるいはスロープで一段高い場所に上るような構造が推定できる。

f区の基本層位は、トレンチ南端から6mの地点を境に、北半と南半で状況が大きく異なる。北半は表土直下に土塁盛土の砂礫層が検出されることから、土塁自体大きく崩されているものと考えられる。一方の南半は、表土(Ⅰ層)直下から50cm程の粘質土・砂質土による盛土(Ⅱ層)が確認できる。層厚は約

50cmあり、比較的締まった水平堆積の盛土である。層中から数点ではあるが、ガラス片が出土しており、近代以降に造成されたと見られる。その下に瓦を多量に包含する裏込め礫の崩落と見られる礫層(Ⅲ層)があり、その直下に黄色粘質土層(Ⅳ層)が南端を除く南半全面で検出される。Ⅳ層上面では東西方向の浅い溝状遺構が検出された。その直下に硬く締まる粘質土が検出される。Ⅳ層上面が廃城時の地面と見られる。

今回の調査で確認できた遺構は、築城時の面に伴うものは、全ての石垣、瓦集積SX25で、廃城時の面に伴うものは、礎石、瓦集積SX24である。

土塁SA12(石垣SV20・21・22)(b・c区)(第58図)

枡形南辺の東西方向の土塁SA4から北へ張り出す土塁である。東西辺および北辺は石垣が構築され、枡形二の門に接続する。土塁の長さは約4.2m、幅約7.8mと推測される。

調査で西辺の大部分(SV20)、北辺の3/4(SV21)、西辺の極一部(SV22)で石垣を確認することができた。SV20は長さ3.2m、高さ1.4m程度が検出でき、石材は全て砂岩で、詰め石の一部に円礫が用いられている。SV21は長さ5.7m、高さ1.0mを検出した。石材は、西の角から1.9mは砂岩、それより東はチャートを使用している。東の角周辺は現況で樹木があり、調査することができなかったが、東の角から1.2mの地点でのサブトレンチで砂岩の石材を確認した。このことから中央部のみチャートを使用している可能性が極めて高いと見られる。SV22は樹木と現況石段のため、サブトレンチでのみ石垣を確認することができた。石材は砂岩である。

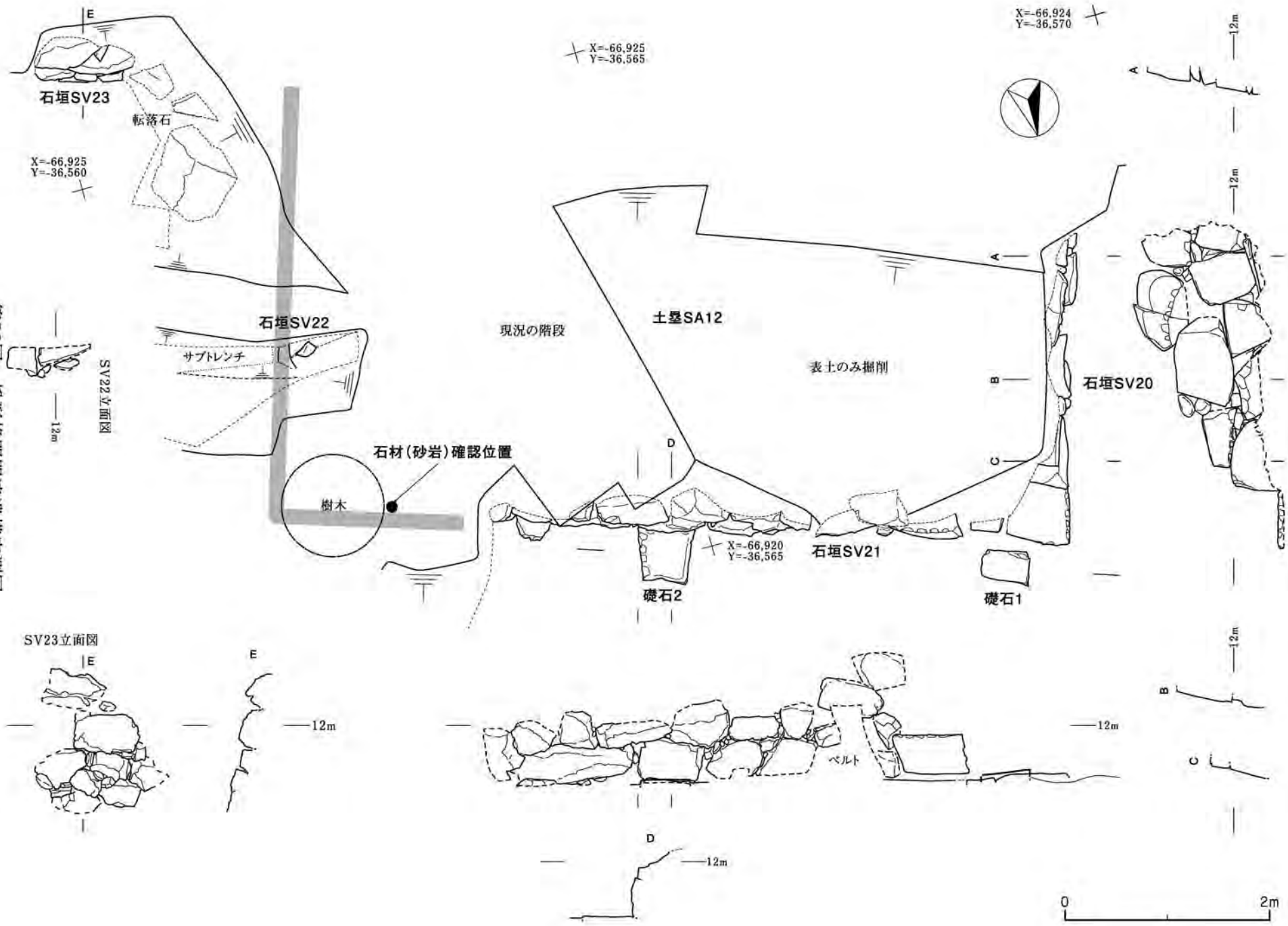
今回の調査で、櫓門の南袖石垣の位置と大きさをほぼ特定できたが、特徴的なのは硬質の砂岩を用いた石垣を採用している点である。加納城の石垣は、ごく一部で砂岩が見られるものの、圧倒的にチャートで構築されている。硬質砂岩はチャートに比べ、加工がし難い上、岐阜市内では産出する山が極めて限定されるため、望みの大きさの石材は入手しづらいはずである。矢穴痕が各所で残っており、それによる割れ面は平らで、そこを面にすると整った石垣が構築されるという点が重要なのであろう。北辺の中央部は門が建っていた当時は、門の内部になり、外観上隠れる場所のみチャートを使用しているのも特徴である。

ここで検出した石垣は、最低1段は埋没しており、門自体改修後建て直されたと推測できる。築城時の地面は不明であるが、石材の大きさから推測すると、第59図Dセクションの7～9層辺りと見られる。本丸内で火災があった可能性が高く、それが契機の改修と推測されるが、具体的な時期は明らかでない。

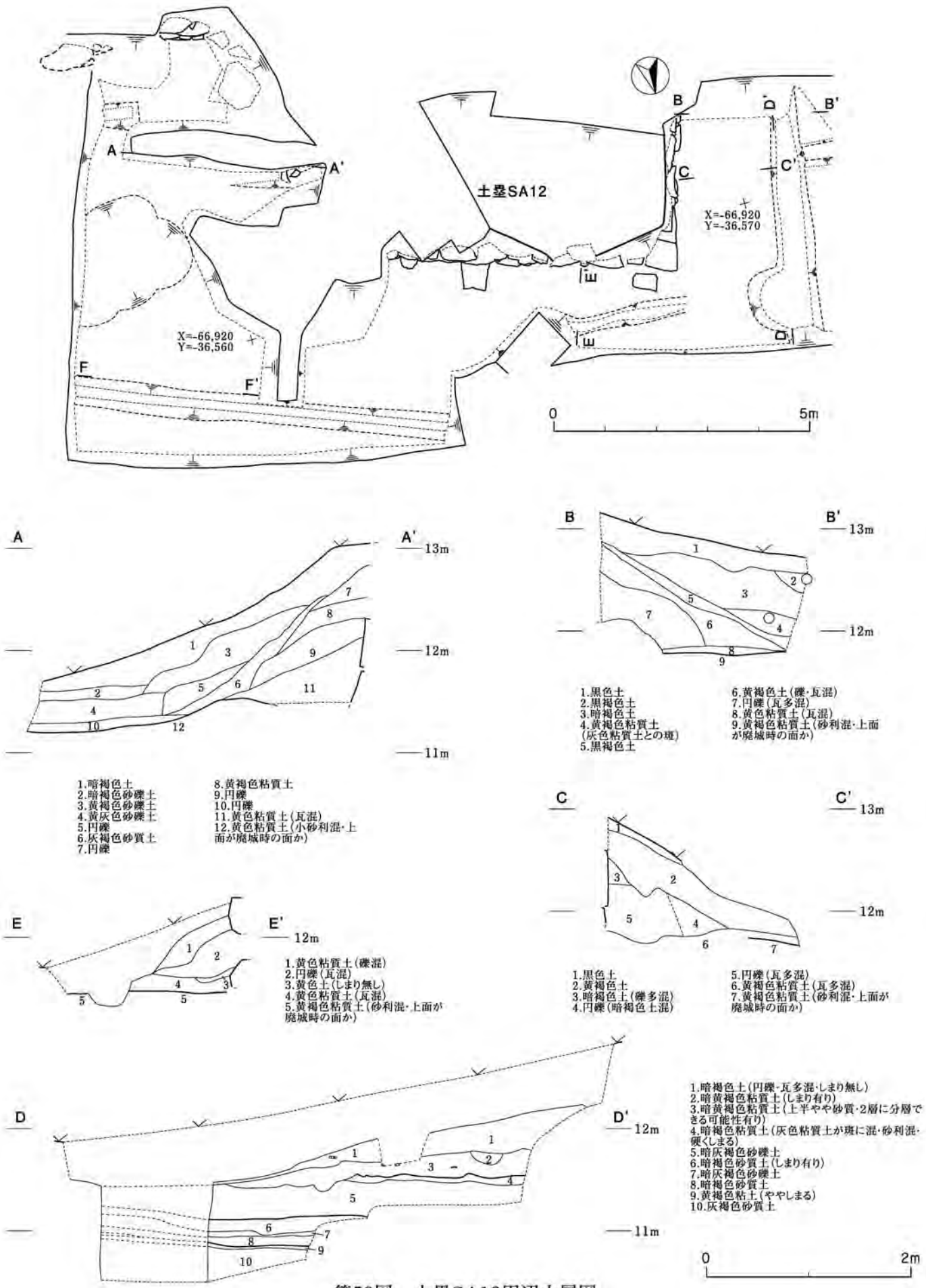
礎石1・礎石2(c区)(第58図)

SA12北に隣接する位置で2基の礎石を確認することができた。礎石1はSA12北西角から40cm程度内側に位置し、大きさは東西48cm、南北36cmで平面形は長方形に近い。礎石が伴う整地面からは高さ5cm程度露出しているが、元来の厚さは不明である。石材は砂岩であるが、露出する部分には明瞭な加工痕が見えない。礎石2はSA12北辺の中央部に位置すると想定される。大きさは南辺58cm、北辺43cm、南北54cmと台形をしており、整地面からは5cm露出する。石材は砂岩で、上面及び南面は矢穴を用いた割面である。また上面の西辺から北辺に沿って、平行に加工痕が見える。

礎石1と礎石2の間隔は、それぞれの中央間で、約3.3mである。礎石が設置される整地面は砂利混じ



第58図　枡形櫓門関連遺構実測図



第59図　土塁SA12周辺土層図

りの土(第59図Eセクション5層)で、礎石周囲に掘方が確認できなかったことから、整地と同時に礎石が据えられているといえる。整地面のレベルは11.4～11.5mである。礎石を覆う黄色粘質土(同4層)中からは瓦・鉄製品が出土しているが、SV20西やSV22東など門の範囲外に比べて、瓦の出土量は格段に少ない。鉄製品には筋金状の鉄板や半球状の頭部をした鉄釘があり、門に使用されていたものと推測される。

石垣SV12・SV23・SV24(b区)(第60図)

枡形南辺の石垣である。調査前の現況で一部分が露出していた。先述のとおり、石垣前の大撹乱が石材直前にまで迫っていたが、それによる崩落は無さそうである。最大高さ1.5mが残存する。石垣の東端を検出していると思われるが、確認することはできなかった。ベルトを挟んで東西で石材や石の積み方が異なっており、また平面形状もベルトを屈折点として、くの字に折れ曲がっている。よってベルトの東部分をSV12、西部分をSV24、さらに西の石垣をSV23とする。

SV12はチャートを横長に積んでいるのに対して、SV24は砂岩を立石状に立て並べている。SV24は図化した最下部の石が基底石で、SV12やSV23より50cm程高い。また撹乱の埋土が基底石の下に入り込んでいるようであり、明治以降に積み直している可能性が高いと見られる。SA12東辺の石材を転用していると思われる。

SV23はチャートを使用した石垣で、転落石による障害や安全上の理由で、長さ1m程の検出に留まっているが、西方向に延びていくことは確実である。東方向はSV24の奥に現存するのか否かは不明である。図化した最下段の石に伴う整地層中には瓦が包含されており、本来の根石は埋没しているものと見られる。

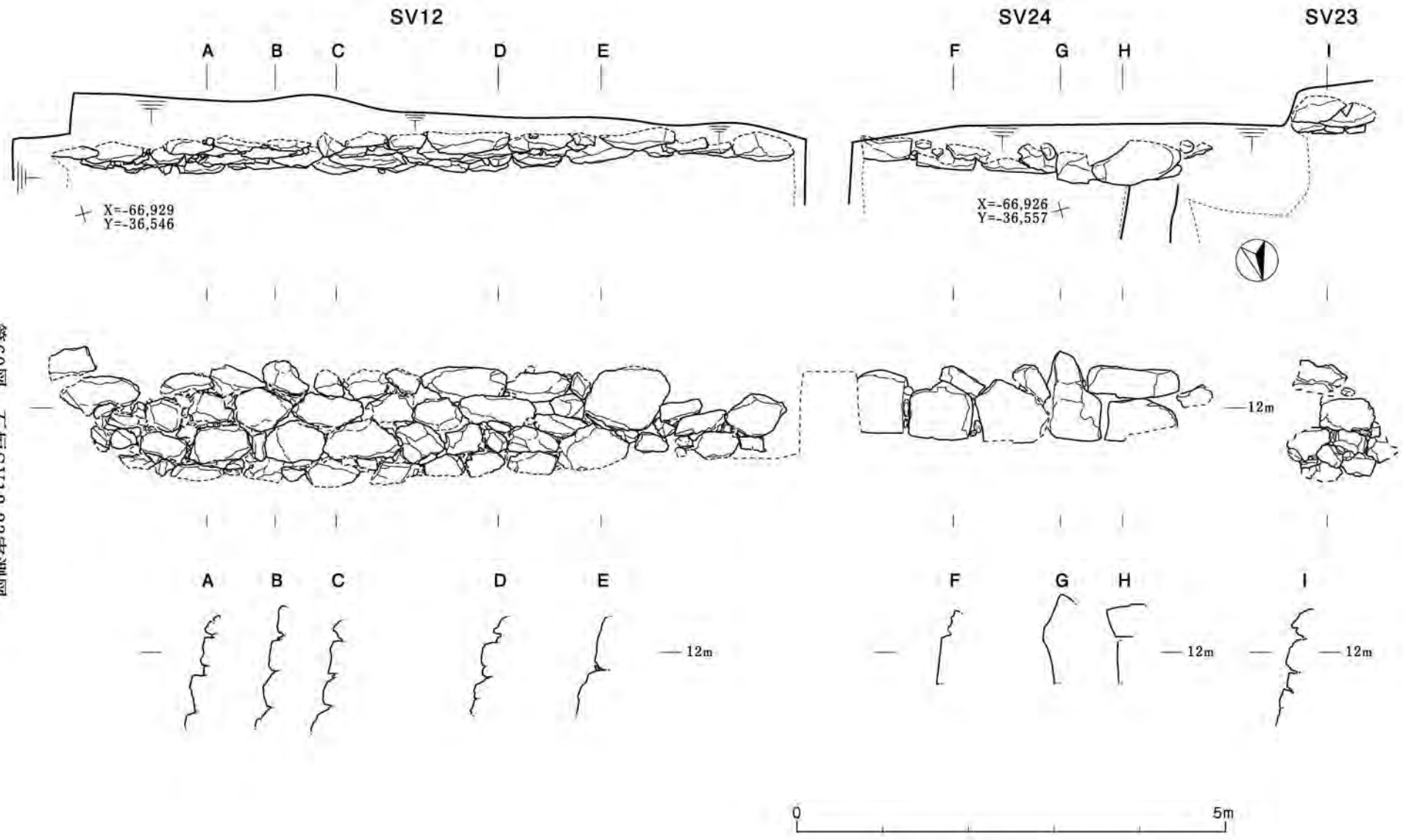
SV12の現存長さは8.5mであるが、SV23を含め、さらにSA12の推定位置までの長さは16.3mを測り、枡形空間部南辺の本来の石垣の長さとなる。SV12の東端では北行する石垣と直交するはずであるが、撹乱が東方向に広がっており、土塁自体相当破壊されているため、石垣が残存していない状況と見られる。

石垣SV18(a・d・e区)(第61図)

SA1先端の石垣である。この部分の土塁は近代以降に大きく削られ、旧状を留めていないが、1段ないし2段の石垣のみ残存していた。a区西は北半が一段高く残るが、南半は撹乱がより深い位置まで及んでいるためで、そこで検出された石垣の石材も上部が割られている状況も見られた。近世整地層と見られる土層を検出した時点(近代以降の削平面)で掘削を留めており、北半南半とも近世の地面を検出したものではない。SV18は現存のSV1とコーナーを成す。

中央部の東西撹乱の壁面で、築城時の整地層と見られる砂層が確認できることから、南半で検出した石材が根石であることは間違いないところである。さらに北半に残存する整地層中には瓦が多く包含されており、ある時期に全体的に盛土を施す状況は、本丸内の調査で確認できたことと同様である。

石材は全てチャートで、裏込めとして円礫層、さらにその背後に砂層による土塁盛土層が確認できた。平成20年度(e区)には南延長方向の確認を行ったところ、撹乱による破壊で、根石3石のみ検出することができた。3石はL字形に配され、さらに東延長方向には抜き取り痕と見られる土坑を確認した。また裏込め礫の分布状況から見て、SV18はe区北端で、東方向へ屈曲していると見られる。



第60図　石垣SV12,23実測図

石垣SV19(a区)(第63図)

a区東で検出されたSA3西裾の北端部分の石垣である。検出長さは4.1m、最大高さ1.2mを測る。主石材は全てチャートで、間に円礫を詰め込んでいる。

北方向への延長は本丸外周の石垣SV2のコーナーに向いており、直線的に接続していたことは確実である。南方向への延長はSV12東端と合致するが、後述の理由で真っ直ぐ延長していたかは不明である。

永井の頃と推測される本丸内の建物を詳細に描いた絵図には、SV19周辺に横矢状の張り出しが見られる。今回の調査区の中ではそのような石垣の屈折部分は確認することができず、またSV2までも直線的に接続することが確実である。よって屈折箇所があるとすれば調査区の南であると思われるが、その場合SV12の東端はさらに東へ延びるか、壊されていることとなる。

SV18との距離は14mを測る。

ピットP2・ピットP3(a区)(第61図)

P2はa区西の北半、近世整地層の削平面で検出した直径55cm、深さ40cm以上のピットである。掘削面は不明であるが、高さなどから廃城時の面から掘り込まれている可能性が高い。半截のみを行ったが、底の検出に至っていない。瓦・鉄釘が出土した。

P2の東1.8mの地点で、ほぼ同規模のピットP3が検出された。塀などの柱穴の可能性が推測されたが、半截を行ったところ、桟瓦と丸釘が出土した。撹乱の可能性が高いと見られるが、P2・P4との位置関係から、ひとまず遺構として取り扱うこととした。

瓦集積SX24(c区)(第64図)

SA12の西で検出した瓦集積である。範囲はSA12北辺の延長を北限として、東はSV20、西は鉄管撹乱2までの範囲で、南は確認できていない。北と東は後世の削平によって失われている可能性が高い。瓦集積は、砂利が混じる黄褐色粘質土(第59図Bセクション9層)直上にあり、瓦自体はその直上の黄色粘質土(同8層)中に包含されているような状況である。黄色粘質土は土塁SA12の周囲で確認しており、東裾と西裾では瓦が多量に包含されている。

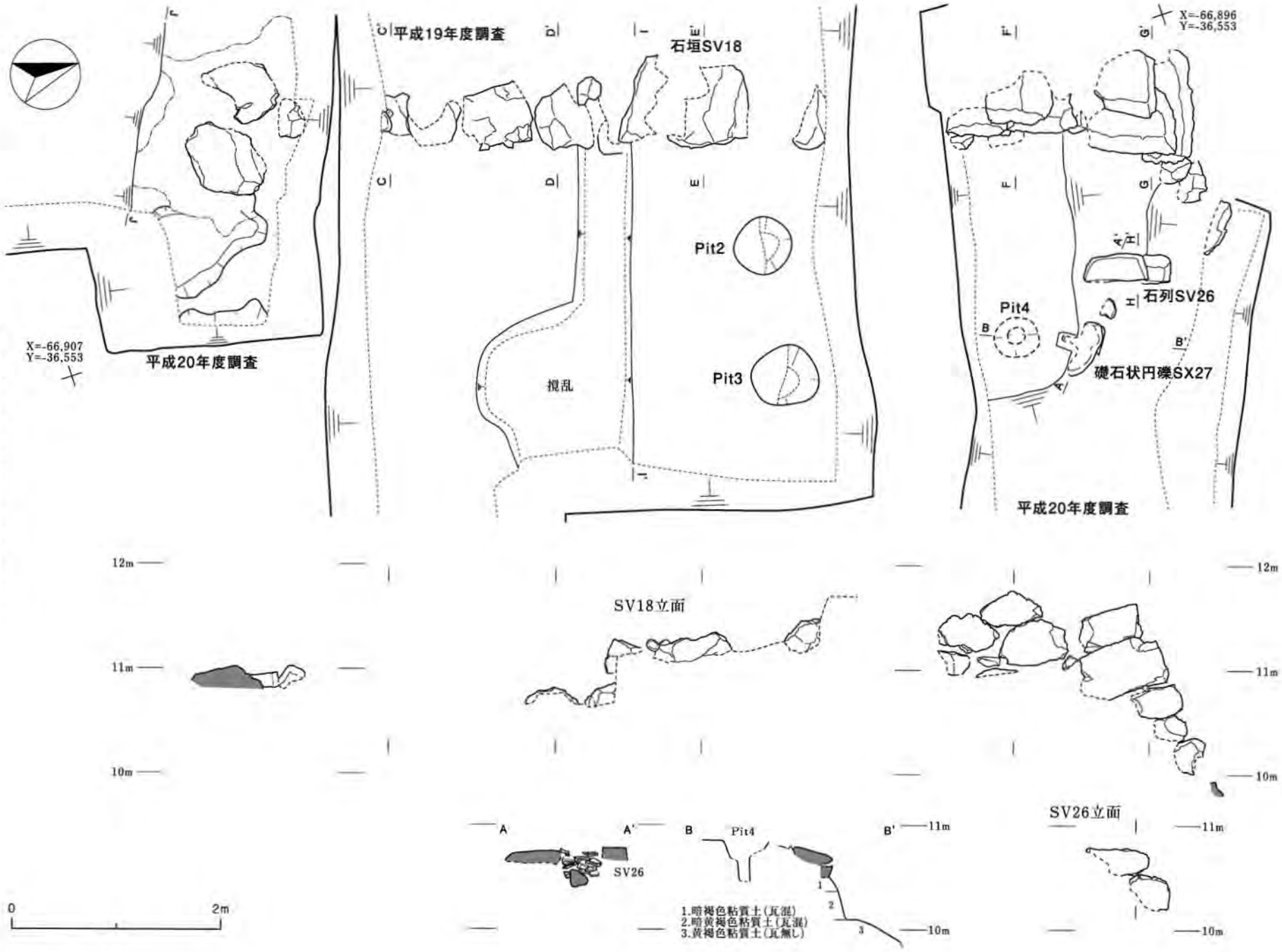
瓦集積の中には塀瓦やキラコを使用した軒瓦が含まれている。またベースの砂利が混じる黄褐色粘質土は礎石1・2に伴う整地層で、黄色粘質土は礎石の覆土と対応する。黄色粘質土上面がフラットな面ではないことから、SX24は廃城時のものと考えているが、改修時のものの可能性は否定できない。

SX24は記録作成後、取り上げないで現地に埋め戻した。

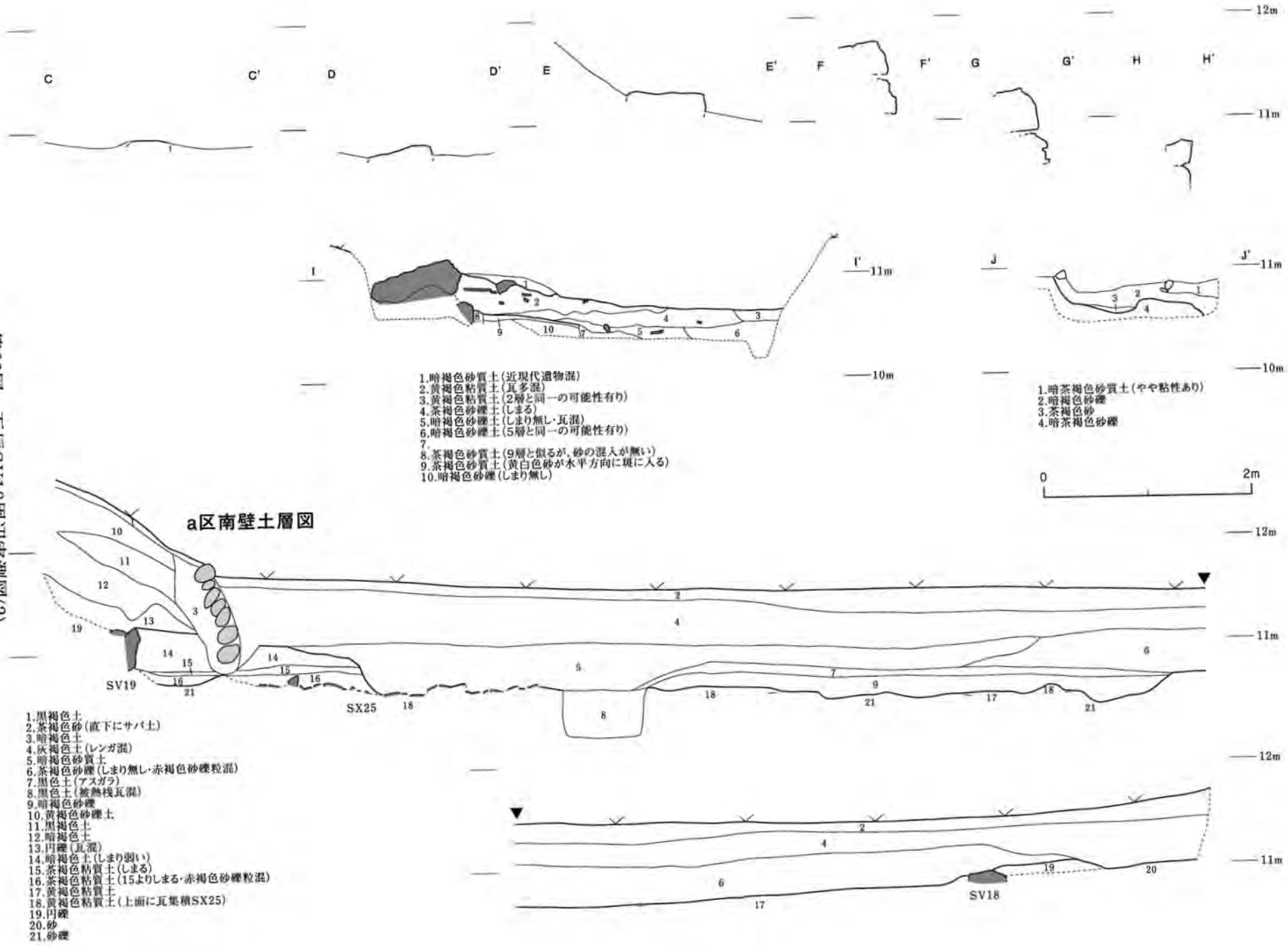
瓦集積SX25(a区)(第64図)

SV19の前面で検出した瓦集積である。a区東ほぼ全体で確認できる。西に向かって密度が減少し、やがて途切れてしまうが、これは後世の削平によるものと見られる。全体的にやや西下がりで集積しているが、北西角周辺のみ特に低く検出された。北東角・南東角に比べて約30cmも低いにもかかわらず、密度は余り低下していない。後世の撹乱によることもあるが、元来階段など一段低い地形があり、そこに集積している可能性がある。

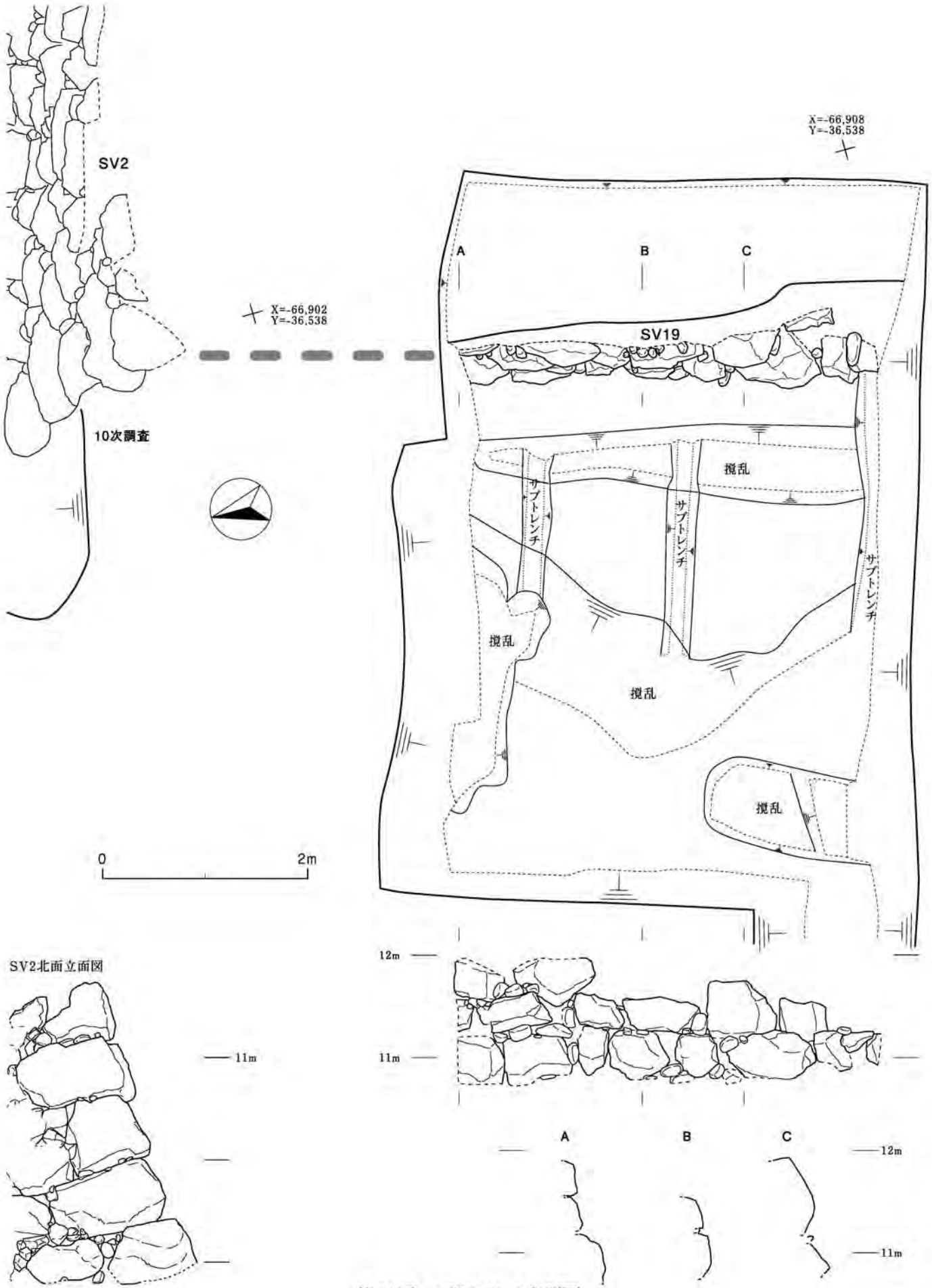
瓦集積のベースは黄褐色粘質土で、この直下には築城時の整地層である砂礫層がある。また、瓦はキラコを使用しているものや塀瓦など後出する要素を持つものが見られないのとともに、二次被熱してい



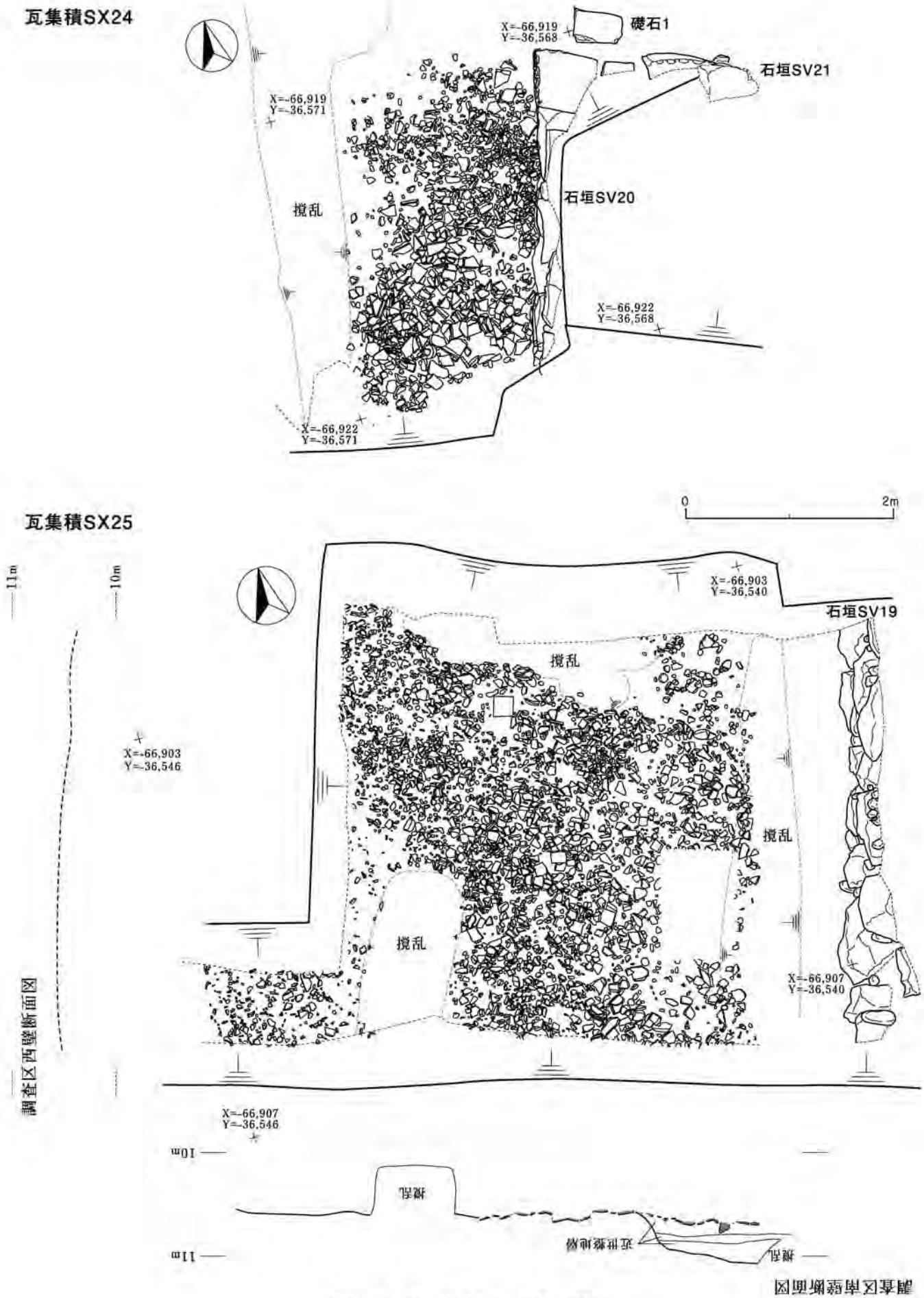
第61図　石垣SV18周辺実測図(1)



第62図　石垣SV18周辺実測図(2)



第63図　石垣SV19実測図



第64図　瓦集積SX24,25実測図

るものが多くある。これらのことから、本丸大手枡形一の門周辺における、最初の改修に伴う瓦の廃棄遺構である可能性が高く、その原因は火災によるものと推測される。

SX25を覆っていたのが、第62図のa区南壁セクションの14～16層である。これらの層は大部分が撹乱されており、SV19前に最大で東西2.7mの範囲にしか残存しなかった。記録後、SX25検出のためと層自体の時期を特定するため掘り下げたところ、近現代のものは出土しなかった。SX25形成後に盛土された近世整地層の可能性が高いと考えられるが、断定することはできない。

なお、SX25は記録作成後、取り上げないで現地に埋め戻した。

石垣SV24・石積SV25(e区)(第65図)

撹乱の及んでいないe西区で検出した。SV24は東西方向の石垣、SV24の西端から北へ直交する石積SV25、さらにSV25より西で検出した階段状遺構SX26が一体となった構造をもつ。

SV24は長さ約5.0m、最大残存高さ約1.0mを測るが、最低1段は埋没している。東端で検出した石材の下に石は無く、この高さが基底部の段となる。

SV25はSV24西端から北へ直交する石積である。第66図Aセクションで見られるように、SV24の裏込めがここを境に途切れていることから、SV24とSV25はコーナーを形成していたことは間違いないが、石材は小さく、これまでの調査で確認した石垣コーナーとは様相が異なる。立面図に表した石材は、最下段のものであるが、基礎部分が全体的に段もしくは斜面を成すと見られる。

階段状遺構SX26(e区)(第65図)

SV25の西で検出した遺構である。全体的に北が高く、南が低い土塁内側の斜面のようであるが、盛土の一部と見られる締まった粘質土と砂礫が水平に堆積しており、それらが段状に検出されたことから階段状遺構と判断した。盛土と見られる層中には、長辺10～30cm程度のチャートが散在するが、それらが段の端部に置かれているようにも見えるところもある。最下部には長辺90cm、短辺80cm、高さ45cmのチャートがある。上面は平坦で長軸がSV24と平行することから、これこそが雁木の一部とも考えられる。

このような調査結果は、以下のような状況が考えられる。

①最下部のような大型のチャートで構成される雁木であったが、石材が抜き取られている状況。

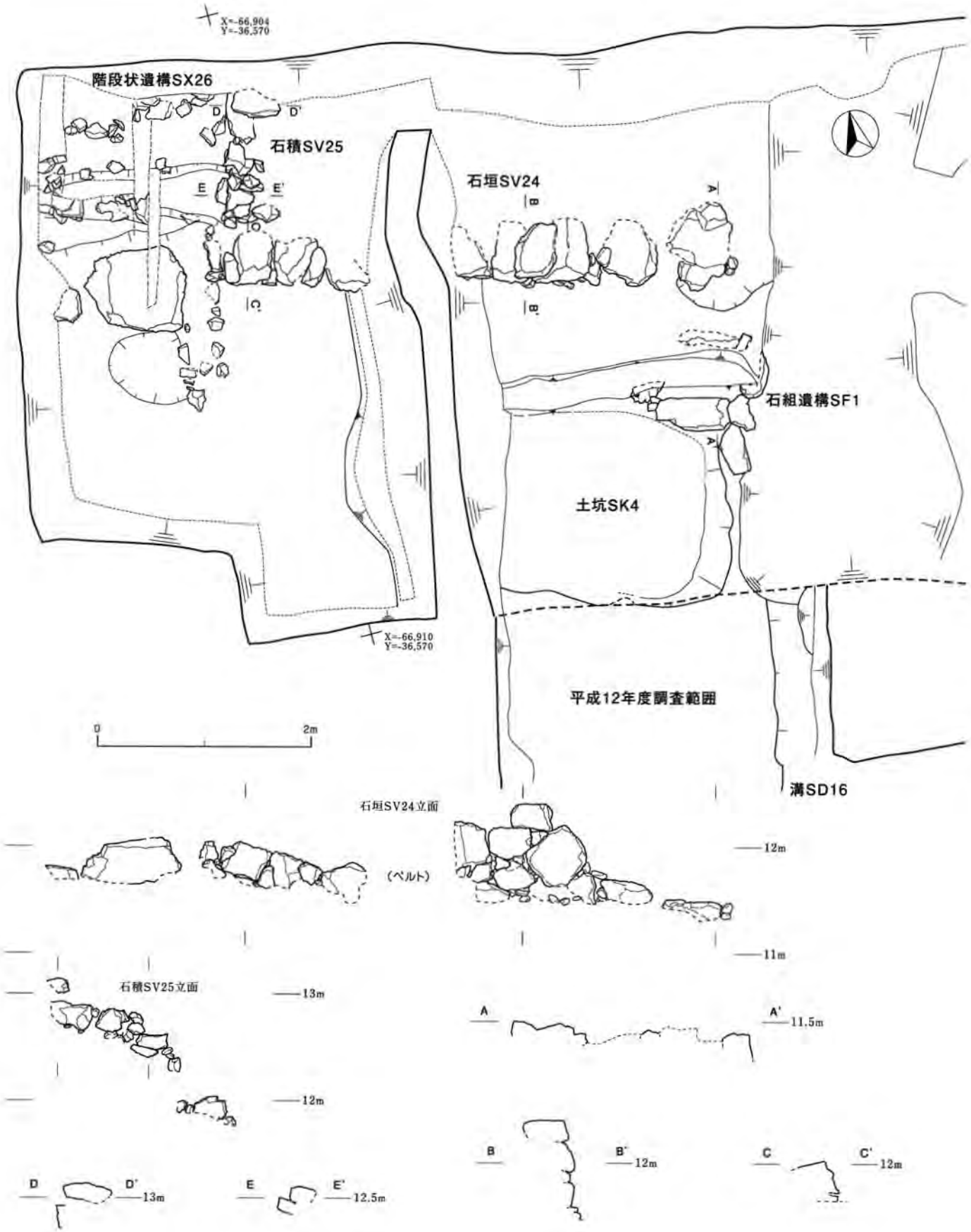
②段の端部のみ小型のチャートを据える構造の雁木が崩れた状況。最下部のみ大型のチャートを使用する場合と使用しない場合が考えられる。

今回の調査範囲で確認できた状況では、本来の構造を判断することができない。①の場合であれば、今回の調査は掘り足らないが、残存状況の良い部分を確認した上で、再調査をすべきと考え、最低限の断割のみに留めた。

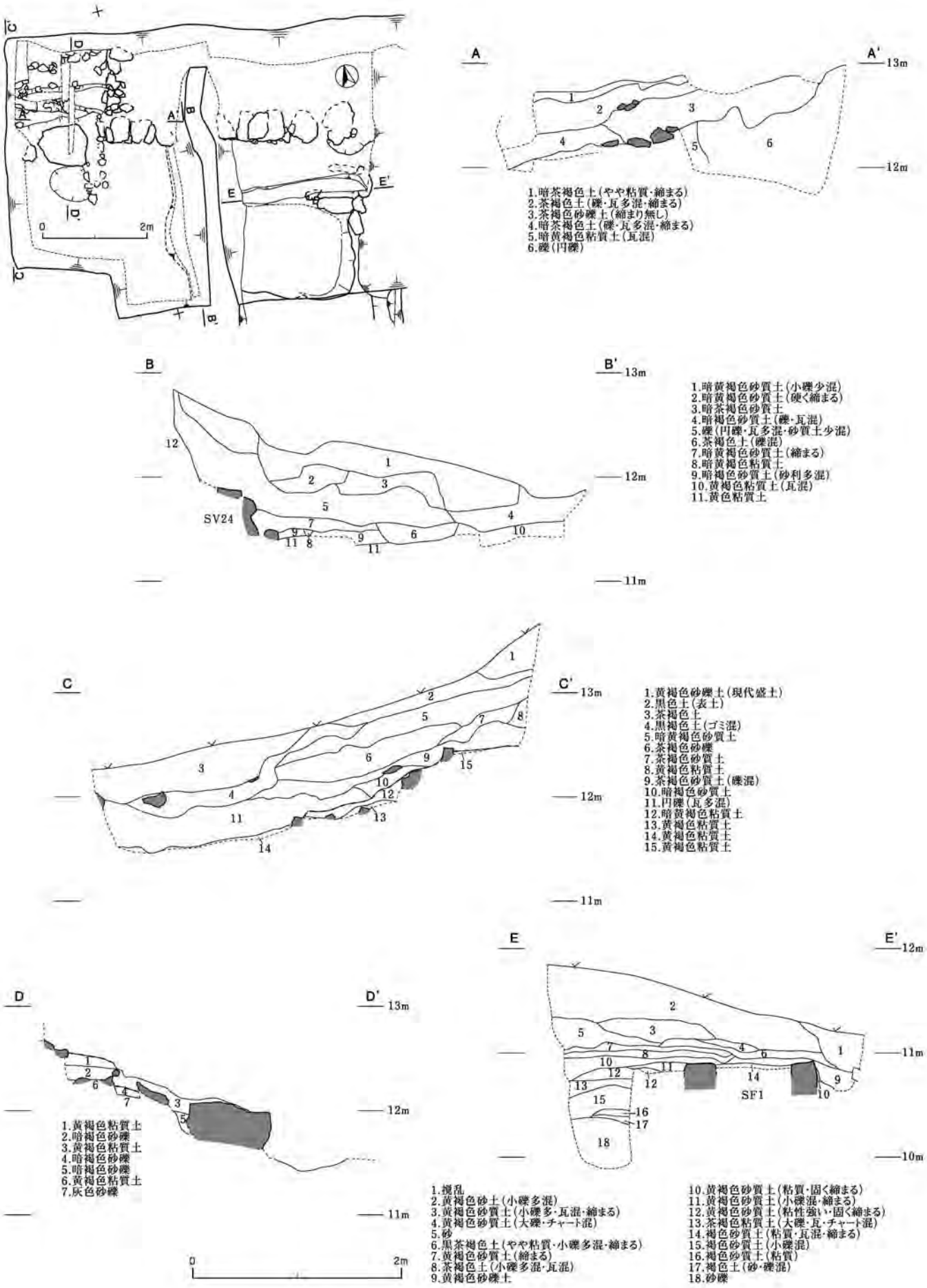
石組遺構SF1(e区)(第65図)

平成12年度調査(7次)区北端で検出されていた遺構である。ベルトを残して、北側を掘り下げたところ、東西に長い石材が検出できた。石材は、完全に露出させなかったので、正確な大きさは不明である。7次調査の所見によれば、石材は板状で、立石状に縦長に据えられている。石組遺構の内法は東西75cm、南北60cmを測る。

櫓門の雨落溝と考えられるSD16との位置関係、遺構の構造から判断すると、雨水を溜める集水桝の



第65図　石垣SV24周辺実測図



第66図　石垣SV24周辺土層図

ような性格のものと想定できる。

石列SV27(d区)(第61図)

d区北側斜面に調査前から露出していたチャート2石から成る石列である。2石は積まれているようであるが、大部分が近世整地層に埋没しているため、構造は明かでない。上の石材は長さ約60cm、幅約30cm、高さ約25cmの直方体に近く、下の石材と合わせて、東側に平坦な面を揃えている。両者とも水平に据えられているようで、縁石のようなものと見られる。

礎石状円礫SX27(d区)(第61図)

d区西半平坦部から北へ傾斜する肩で検出した。一部が露出していたようで、石の北側にコケが付着する。上面が平坦な円礫で、長径約60cm、短径約40cmを測る。北側が下がって傾いているが、これは後世の撹乱によるものと見られる。P4が検出された面より1つ下の面に伴うと見られる。高麗門の礎石の可能性が考えられるが、門の位置としては西に非常に偏っていることから、原位置を保っていない可能性もある。

SX27とSV27の間から瓦が密集して出土した。斜面での土層観察では、両者の間に掘り込みがあり、その中に埋没している状況と見られる。門の脇の排水溝の可能性も考えられる。

ピットP4(d区)(第61図)

SX27を覆う黄色土の上面で検出された。この黄色土は表土直下の土層で、近代以降の削平面の可能性もある。長径44cm、短径39cm、埋土は二重円を呈し、内側の埋土は全く締まりのない黒色土である。出土遺物は無く、時期が不明で、近世の遺構と断定することはできない。

石垣SV26(f区)(第68図)

Ⅳ層上面で東西方向の溝状遺構が検出されたが、その遺構の上、調査区西壁に、南北100cm、高さ50cmのチャートが出土した。石材の背後には円礫層があることから、石垣と石垣基礎部分と判断した。溝状遺構は幅70cm、深さ5cm、断面は浅いU字形をしており、10～20cm大のチャートや円礫が底に貼り付くように出土している。上面は平坦なものが多く、安定しているため、崩落した礫ではなく、石垣の基礎である可能性が考えられる。

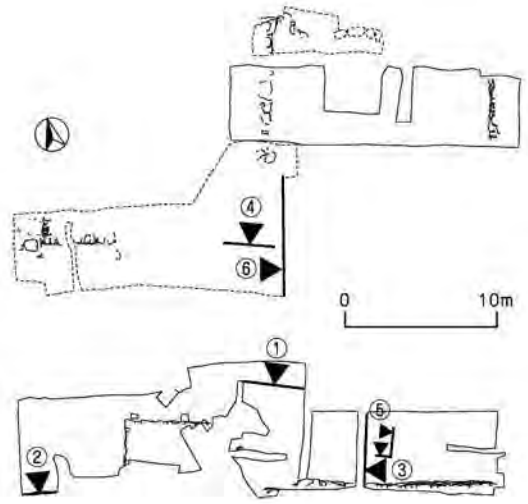
裏込めは円礫層が主体で、少数チャートの角礫が入る。裏込めの一部分を断ち割ったところ、盛土を削って石垣を構築している様子が観察できた。盛土中にも瓦が包含されており、近世のある時期に改修、SV26を構築していることが判明した。

調査区西壁に出土した石材とSX26最下段の石材は、大きさ・形状が似ており、また土塁に対して平行な位置関係にあるといえる。ただSV26とSX26では裏込め礫層の有無という大きな違いがあるため、SV26を石垣、SX26は石垣ではないと判断した。

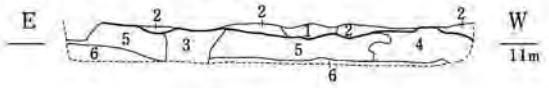
深掘りトレンチ(b区・e区)(第67図)

b区の大撹乱の底を重機で深掘りし、下層の状況を確認した。撹乱は廃城時と見られる整地面より1.2mの深さにまで達しており、その直下レベル9.8m辺りで旧表土と見られる暗褐色粘質土を確認した。その直下には地山の砂礫層が確認できる。

6次調査で検出された中世加納城内の地面は9.4m、12次調査の撹乱底で検出した中世加納城に伴う遺構埋土のレベルは9.7mと、暗褐色粘質土と高さはほぼ同じである。しかし今回検出した暗褐色粘質土層

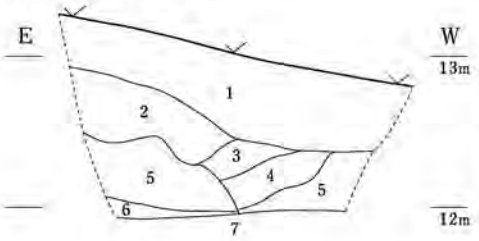


①b区土管撹乱南壁



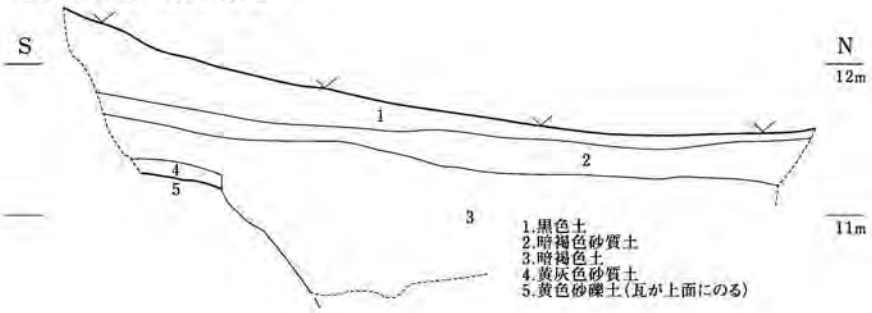
1.灰黄色砂礫土
2.灰色粘質土(硬くしまる)
3.暗褐色砂礫土(礫・瓦混)
4.黄褐色粘質土
5.暗褐色砂礫土
6.茶褐色粘質土

②c区拡張部南壁



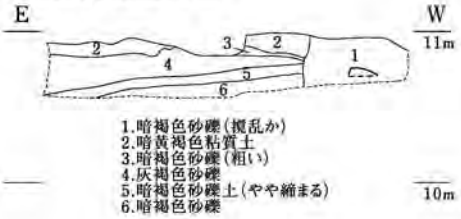
1.暗褐色土
2.黄褐色土
3.暗褐色土
4.黄色粘質土+灰色粘質土(斑に混じる)
5.円礫(瓦多混)
6.4とよく似る
7.暗黄褐色土(砂利混)

③b区南北ベルト東壁



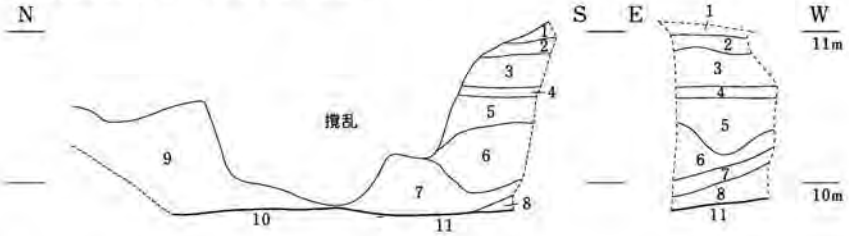
1.黒色土
2.暗褐色砂質土
3.暗褐色土
4.黄灰色砂質土
5.黄色砂礫土(瓦が上面にのる)

④e区大撹乱南壁



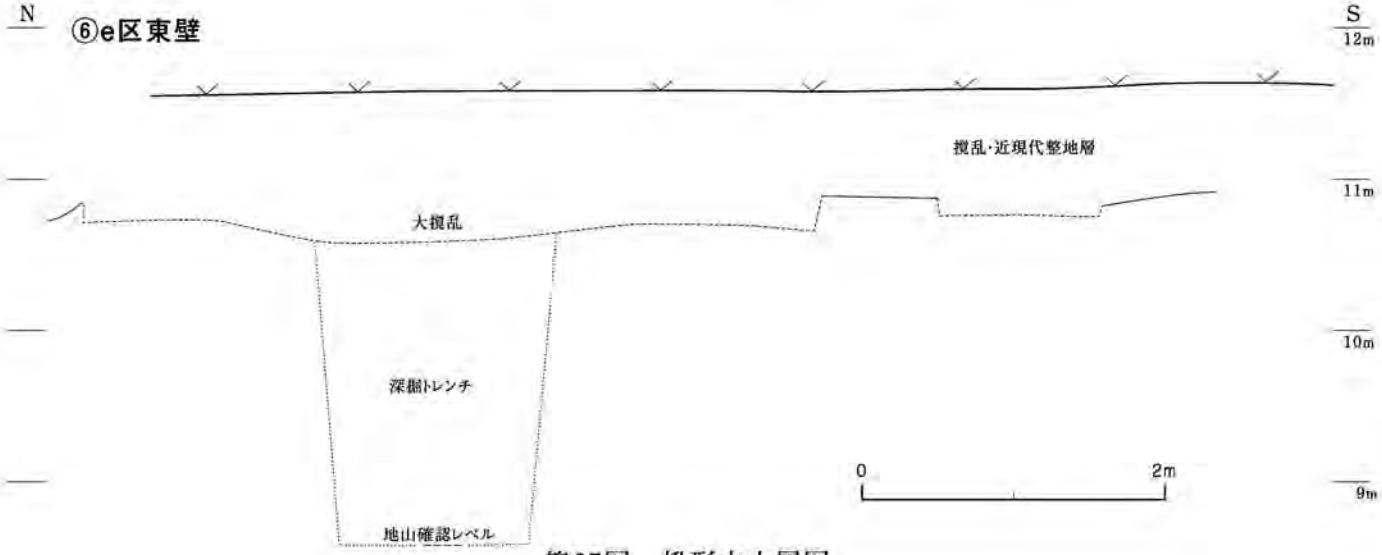
1.暗褐色砂礫(撹乱か)
2.暗黄褐色粘質土
3.暗褐色砂礫(粗い)
4.灰褐色砂礫
5.暗褐色砂礫土(やや締まる)
6.暗褐色砂礫

⑤b区深掘トレンチ東壁・南壁

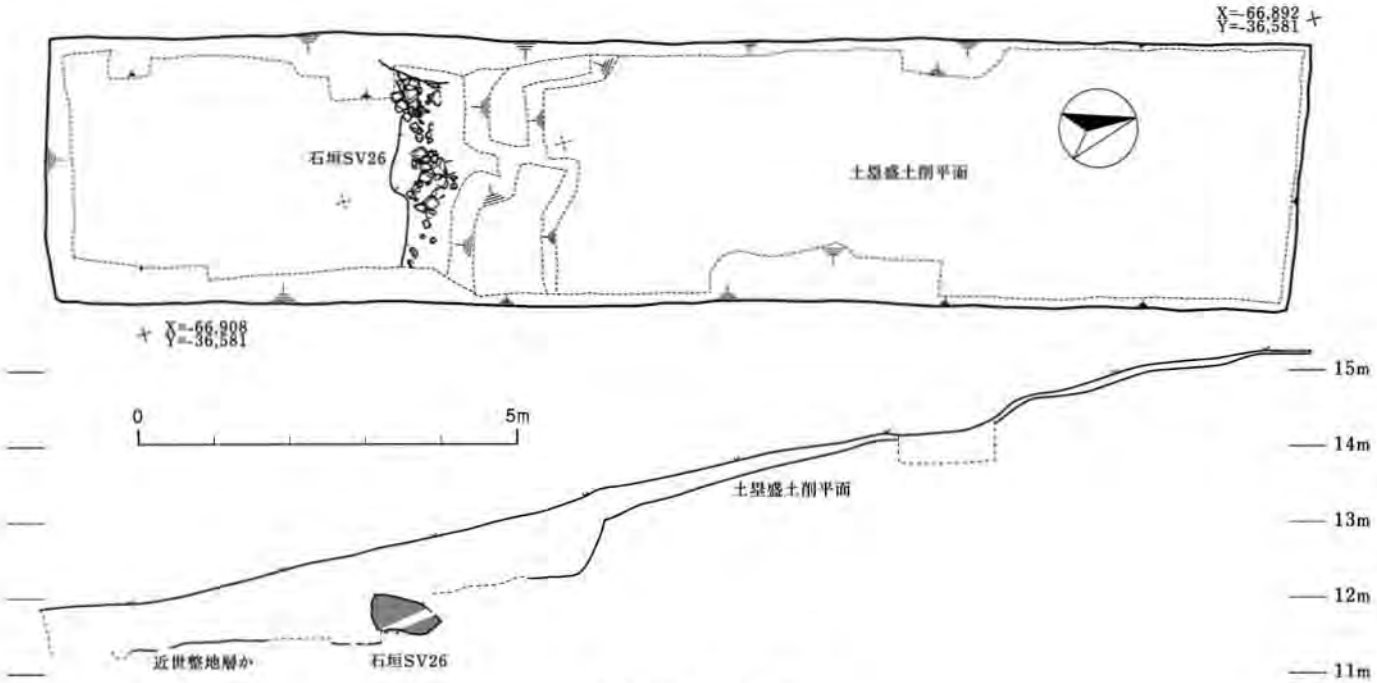


1.黄褐色砂礫土(上面に瓦のる)
2.灰褐色砂礫
3.灰黄色粘質土
4.暗褐色砂礫土
5.黄褐色粘質土
6.礫
7.黄灰色粘質土
8.暗褐色砂礫
9.灰色砂礫
10.暗褐色粘質土
11.砂礫

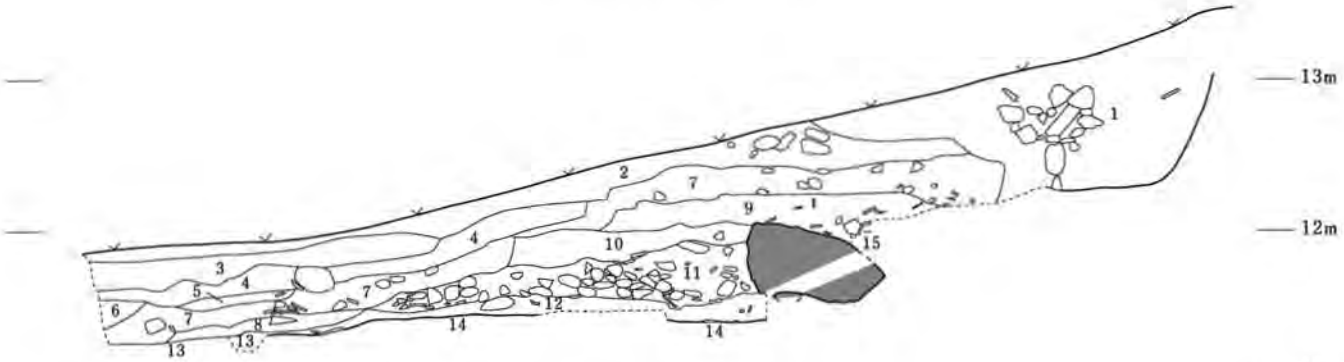
⑥e区東壁



第67図　枡形内土層図



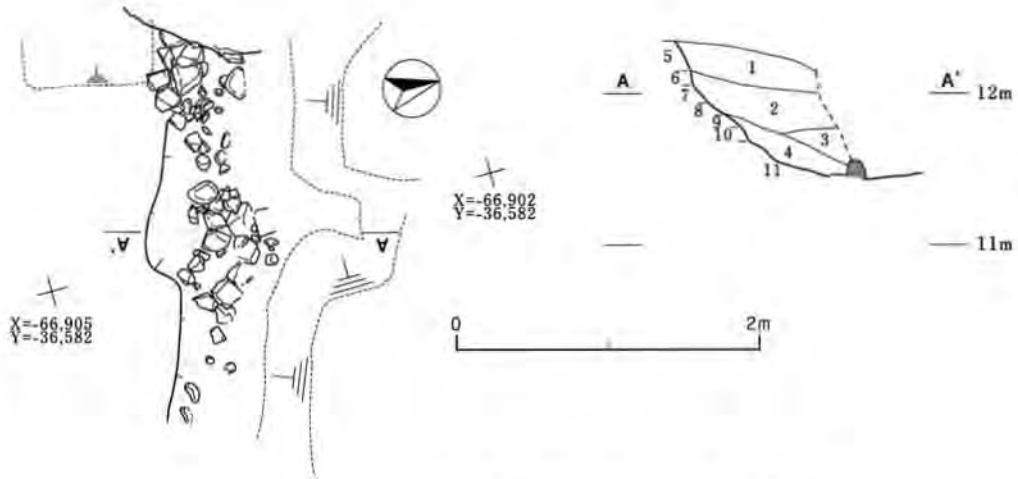
f区全体平面図・断面図



f区南半西壁土層図

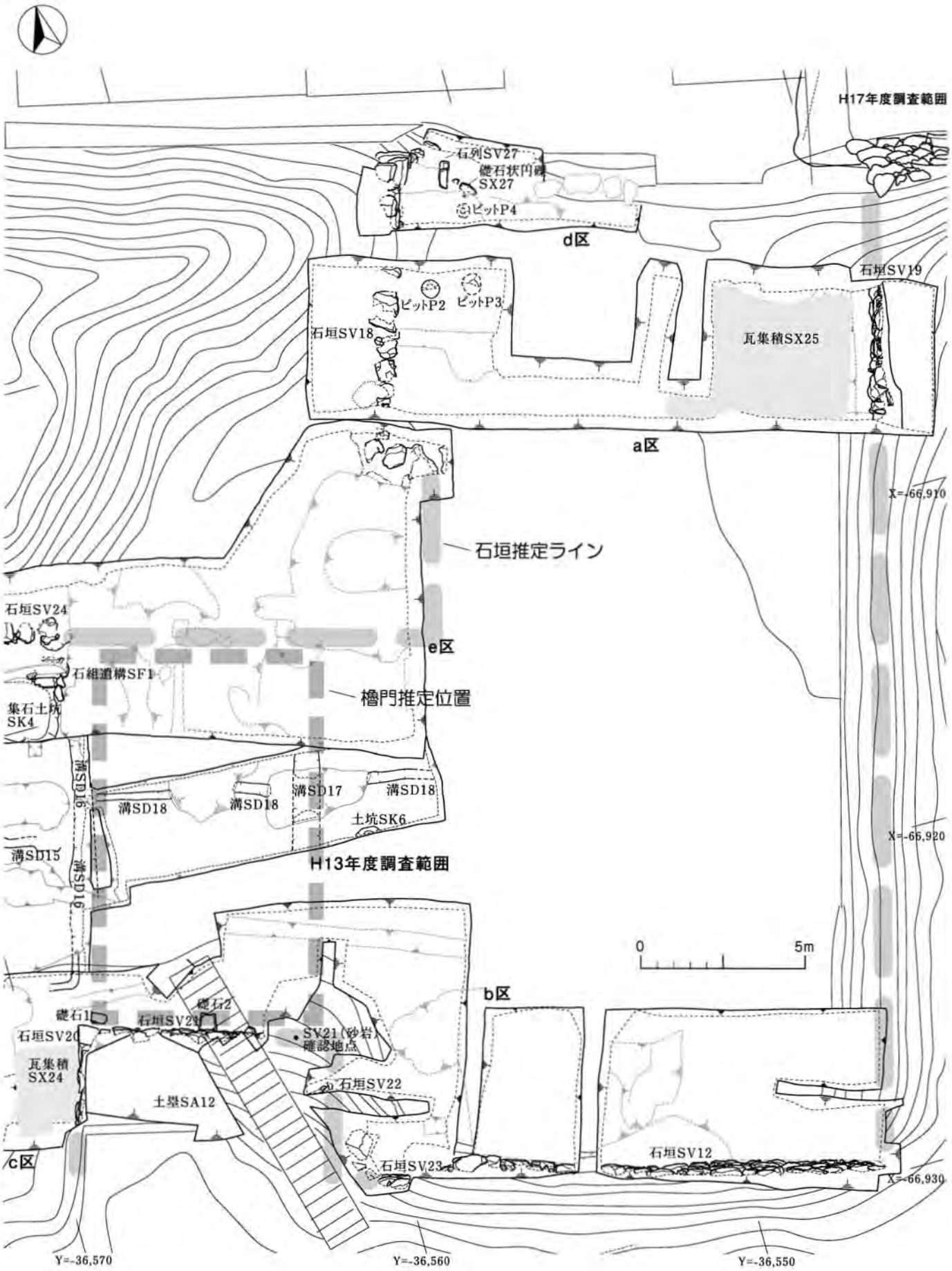
1.茶褐色砂礫
2.黒褐色土(表土)
3.黄褐色砂礫土
4.黒色土
5.暗褐色砂質土
6.暗茶褐色土(小礫・レンガ混)
7.暗黄褐色粘質土
8.茶褐色砂質土
9.黄褐色粘質土(固く締まる)
10.暗黄褐色砂質土(固く締まる)
11.礫(円礫・瓦多混)
12.黄褐色粘質土(瓦混)
13.暗褐色砂礫土(固く締まる)
14.黄褐色粘質土(瓦混・白色砂斑に混じる)
15.円礫(裏込め)

0 2m



1.暗褐色砂質土
2.黄色砂礫土(粘質土混)
3.礫
4.黄褐色土(小砂利混)
5.暗褐色砂質土
6.暗褐色土(砂質土+小砂利)
7.暗褐色砂質土
8.黄白色砂質土
9.黄褐色粘質土(小円礫混)
10.黄褐色粘質土(瓦混)
11.黄色粘質土

第68図　f区平面図・土層図



第69図　枡形内検出遺構平面図

は、しまりが無く、遺物も包含されないことから、この地点が城外に当たる可能性が高いものと見られる。

e区大撹乱底でも同様に深掘りを行ったが、現地表下3.1m、レベル8.6mの地山の砂礫層にまで撹乱が及んでおり、戦国期の状況もしくは旧表土を確認することはできなかった。

(4)出土遺物

SA12北礎石覆土出土遺物(第71・72図)

593は円形の鉄板の様であるが、詳細は不明である。

660は丸瓦、661・662は面戸瓦である。663は軒桟瓦と見られる瓦当であるが、554・1015と同種かも知れない。

SA12北黄色粘質土層出土遺物(第71図)

594は東濃型山茶碗である。595は鉄釘、596・597は幅2.9cm、厚さ1～2mmの鉄板である。597には穴が開いており、太さ5mm程度の釘?が残存している。門に使用されていた筋鉄の可能性がある。598・599は636と同様な半球状の頭を有する鉄釘である。

SA12北崩落礫層出土遺物(第72図)

664・665は軒平瓦で、それぞれD2類、E1類である。666は輪違瓦である。

SA12北流土層出土遺物(第71・72図)

600は灰釉陶器、601は古瀬戸後期Ⅳ段階新の腰折皿、602は肥前産染付湯呑で、外面に鶴文が描かれるが、コンニャク印判の可能性がある。

667～671は軒平瓦である。668は新類のB4類、669はD4類である。672はA類の軒塀瓦、673は軒桟瓦と見られる。674は軒丸瓦である。

SA12北表土層出土遺物(第71・72図)

603は連房第5小期の擂鉢である。

675・676は軒平瓦、677は軒丸瓦、678は輪違瓦、679は鬼瓦である。

SA12北SV20・21抜き取り痕出土遺物(第71図)

604は須恵器、605は灰釉陶器である。現代の物も出土している。

SA12北撹乱出土遺物(第71図)

607は産地不明の陶器である。

SA12東崩落礫層出土遺物(第71・72～74図)

608は須恵器の甕、609は現代の陶器である。

680～684は軒平瓦、685～691は軒丸瓦、692はB類の軒塀瓦である。693・694は平瓦、695は二の平瓦、696～698は丸瓦、699は隅丸瓦、700・701は塀瓦である。702～705は菊丸瓦で、702が新類のC類、703～705はB類である。706は輪違瓦、707は鬼瓦である。708は鬼瓦と思われるが、詳細は不明である。709～713は鯱瓦で、714は不明な瓦である。

SA12東流土層出土遺物(第71・74・75図)

610は土師器壺の底部、611は鉄釘である。

715～722は軒平瓦で、715がC3類、721はK12類の新類である。722も新類と見られるが、中心飾りが欠損している。723～727は軒丸瓦で、724のL12-f類、727のL12-e類が新類である。728は軒隅瓦で、文様はK類と推定される。729は軒塀瓦のC類である。730・731は平瓦、732～735は丸瓦で、735は行基式である。736は塀瓦、737は輪違瓦である。739～741は鯱瓦、742・743は不明の瓦である。

SA12東表土層出土遺物(第71・75図)

612は肥前産磁器の染付碗である。

744～747は軒平瓦、748は軒丸瓦、749は丸瓦である。750・751は菊丸瓦のB類、752は鬼瓦と見られる。753・754は鯱瓦の鰭である。

SA12東撹乱出土遺物(第71図)

613は土師器皿、614は不明土製品である。

SA12西SX24出土遺物(第71図)

615は美濃産火鉢の体部で、連房第8～11小期に比定される。

SA12西SX24覆土出土遺物(第71・75図)

616は須恵器蓋、617は瀬戸産磁器の染付端反湯呑で、第9小期に比定される。

755・756は不明瓦である。

SA12西崩落礫層出土遺物(第71・75・76図)

618・619は尾張型山茶碗、620は連房第5～7小期の擂鉢である。

757～761は軒平瓦である。761は二次被熱があり、瓦当上辺部の面取の特徴からS1類と見られる。762は軒丸瓦である。763・764は平瓦、765は丸瓦、766は塀瓦である。767・768は面戸瓦、769・770は輪違瓦、771・772は鯱瓦、773は塼と見られる。

SA12西流土層出土遺物(第71・76図)

621は須恵器の蓋、622は土師器皿である。623は連房第1小期の天目茶碗、624・625は肥前産磁器で、625は青磁碗である。626は釘様の銅製品で、頭部が丸く、体部は板状である。627は鉄釘である。

774・775は軒平瓦、776～778は軒丸瓦、779は輪違瓦である。

a区近世整地層出土遺物(第71・77図)

628は須恵器有台杯である。

629～631は中世加納城に伴う遺物と見られる。629は東濃型山茶碗生田窯式の碗、630は古瀬戸後期Ⅳ段階新の擂鉢、631は大窯2段階の丸皿である。

632・633は同一個体と見られる壺で、連房第1～4小期に比定される。

635は中国製と見られる天目茶碗、636は頭部が中空半球状した鉄釘で、門に使用されていた可能性が高い。

780はL13-6類、781はL12-3類、782はL12-4類、783はL11-2類、784はR13-a類の軒丸瓦である。瓦当面はいずれも砂を使用する。785は二の平瓦、786は丸瓦、787はB類の菊丸瓦である。788は瓦を二次加工した円盤、789は不明瓦である。

a区P2出土遺物(第77図)

790は丸瓦、凹面には比較的密にタテ刺子が見られる。

a区崩落礫層出土遺物(第77図)

791～793は軒丸瓦で、793は瓦当面にキラコを使用する。

a区流土層出土遺物(第77・78図)

794～800は軒平瓦である。798はJ8類、800はK5類で、いずれもキラコを使用する。801～806は軒丸瓦である。807～810は軒塀瓦で、807・808はC類、809・810はG類である。811・812は塀瓦、813は桟瓦である。

a区近現代整地層出土遺物(第71・78図)

638・639は戦国期の土師器皿、640は瀬戸美濃産磁器の染付碗である。641は常滑産陶器である。

814・815は軒平瓦、816～819は軒丸瓦である。817はR16-a類である。820・821は丸瓦、822は新類のC類の菊丸瓦、823は輪違瓦である。

a区表土・撹乱出土遺物(第71・78図)

643～645は灰釉陶器、646は尾張型山茶碗、647は古瀬戸後期Ⅳ段階の四耳壺である。648は連房第8小期の瓶掛、649は肥前産染付皿である。

824～826は軒平瓦、827・828は軒丸瓦、829は丸瓦、830は鯱瓦、831は軒桟瓦である。

b区深掘りトレンチ出土遺物(第78図)

832は撹乱底に設定した深掘りトレンチから出土した遺物である。壁面で、近世の土坑状の遺構を確認したが、この遺物はその遺構から出土したものと見られる。遺物は全て瓦で、細片が多く、1点のみを実測した。832は平瓦である。

b区表土出土遺物(第78・79図)

833は軒平瓦D1類、834～838は軒丸瓦、839・840は軒塀瓦である。841・842は塀瓦、843・844は熨斗瓦で、凹面側に切り込みが入っている。845は輪違瓦、846は鯱瓦である。

c区崩落礫層出土遺物(第79図)

847は軒平瓦D1類、848･849は軒丸瓦である。849は珠文の大きさ、形状が交互に異なっており、元々12個の珠文の間に1個ずつ増やしたものと見られる。850は平瓦、851は丸瓦である。

c区流土層出土遺物(第71・79・80図)

652・653は須恵器有台盤、654は東濃型山茶碗、655は連房第3～4小期の鉄釉丸皿、656は中国製白磁碗である。

852は軒平瓦I2類、853・854は軒丸瓦、855は新類のI類の軒塀瓦である。856は平瓦、857は丸瓦、858は二の平瓦、859は輪違瓦である。860～862は飾瓦と見られるが、明らかでない。

c区表土出土遺物(第71・80図)

657は連房第5～9小期の丸碗、658は連房第8～11小期の土瓶である。659は砥石で、3面に擦痕が見られる。

863～867は軒平瓦である。868は軒平瓦と見られるが、新類の文様で、瓦当面が高く、断定することはできない。869～874は軒丸瓦で、874は珠文を有しない。875は丸瓦、876は輪違瓦、877～879は鯱瓦である。

a～c区撹乱・表土層出土遺物(第80図)

880・881は軒平瓦で、880はD4類、881はF3類である。882～884は軒丸瓦で、884は新類のL12-e類である。885～887は不明瓦である。

d区溝状遺構SX28出土遺物(第84図)

976は軒平瓦で、中心飾りに桔梗をあしらった新類U1類である。977は平瓦、978・979は丸瓦である。

d区流土層出土遺物(第81・84図)

888は焼塩壺の身である。

980は軒平瓦で、K9類と見られる。981・982は輪違瓦、983は不明の瓦である。

d区表土層出土遺物(第81・84・85図)

889は古瀬戸後期Ⅳ段階新の擂鉢、890は連房第8～9小期の小碗である。

984～987は軒平瓦で、瓦当の文様は順にK7、K9、R1、U1類である。988～991は軒丸瓦である。992は軒桟瓦と見られる。993は平瓦である。994～1003は輪違瓦、長さの短いものがほとんどである。

e区近世整地層出土遺物(第85図)

1004は平瓦、1005は丸瓦である。

e区近現代整地層出土遺物(第81・85図)

891は尾張型山茶碗4型式の片口鉢、892は連房第5小期の擂鉢である。893は京都・信楽系の陶器、894は土錘、895は鉄釘である。

1006は軒平瓦で、瓦当文様はK5類である。1007は棟瓦である。

e区撹乱出土遺物(第81・85図)

896は灰釉陶器、897は連房第8～9小期の小碗である。

1008～1010は軒平瓦で、1008・1009はD2類、1010はL2類である。1009は二次被熱している。1011・1012は軒丸瓦である。1013は隅瓦、1014は輪違瓦である。

e西区礫層下粘質土出土遺物(第85図)

1015は瓦当中心に菊を飾った軒瓦である。完形ではないが、桟瓦の特徴が見られないことから、軒平瓦V1類に分類した。1016・1017は軒丸瓦である。

e西区SX26覆土出土遺物(第81・85図)

900は須恵器の甕、901は瀬戸美濃産陶器連房第11小期の染付皿である。902は銃弾、陸軍・自衛隊時代の物である。

1018は軒平瓦N3類、1019は軒丸瓦、1020は丸瓦である。1021～1023は輪違瓦である。

e西区SK8出土遺物(第81・86図)

898は鉄釘である。

1024・1025は軒丸瓦である。1026は平瓦、1027は丸瓦

e西区崩落礫層出土遺物(第81・86・87図)

899は瀬戸美濃産磁器で、近代以降の物と見られる。

1028～1035は軒平瓦である。C1類(1028)、H1類(1029)、H2類(1030)、I2類(1031)、K1類(1032)、

K8類(1033)、N2類(1034・1035)が出土している。1036～1041は軒丸瓦である。1042は軒塀瓦I類、1043・1044は軒桟瓦である。1045～1047は丸瓦である。1048・1049は谷丸瓦、1050は塀瓦、1051・1052は輪違瓦、1053は熨斗瓦、1054は鯱瓦である。

e西区流土層出土遺物(第81・87・88図)

903は連房第8～9小期の練鉢、904は同第10～11小期の土瓶である。905・906は瓶掛で、いずれも連房第9小期のものである。907・908は火鉢で、907は第10～11小期のものである。909は染付碗、910は瀬戸美濃産磁器染付蓋である。

1055～1060は軒平瓦で、K3類(1055)、K8類(1056)、S1類(1057)、N1類(1058)などがある。1061～1063は軒丸瓦である。1065～1067は丸瓦である。1069は平瓦状のものに斜めに線刻されているもので、飾り瓦かも知れない。1070は菊丸瓦、1071·1072は鯱瓦である。1073～1081は輪違瓦で、長さの長いものが多い。

e西区表土層出土遺物(第81・82・88図)

911は土師器の壺の口縁部である。912は古瀬戸後期Ⅳ段階の釜、913は大窯の祖母懐壺、914は土師器皿である。

915～918は美濃産の碗で、915が連房第5～6小期、916～918は第8～9小期のものである。919は連房の碗、920は第10～11小期の灯明皿である。921・922は連房の擂鉢で、921が第5～7小期、922が第10～11小期である。923は連房第8～9小期の半胴、924・925は瓶掛で、924が第8小期、925が第9小期である。926～931は火鉢で、口縁部の形状から全て別個体のものである。926・927は連房第8小期、928～930は第9小期、931は第10～11小期のものである。932は瀬戸美濃産磁器の染付碗、933は肥前産磁器、瑠璃釉の香炉と見られる。934は常滑産甕である。935·936は銅製品で、近代以降のものかも知れない。

1082～1086は軒平瓦で、1083がG4類、1084がH2類、1085がJ3類である。1086は中心飾りが残存しないため分類できないが、脇の文様が周知のどれとも異なる新類ものである。1092は軒桟瓦である。1087～1091は軒丸瓦である。1093は丸瓦である。1094・1095は二の平瓦、1096は塀の隅瓦、1097は面戸瓦である。1098～1102は輪違瓦である。

f区土塁盛土?出土遺物(第89図)

f区北半のサブトレンチ掘削中、土塁盛土と見られる地山と同質の砂礫層から出土した。撹乱等を同時に掘ってしまったものかも知れない。1103は平瓦である。1104は輪違瓦と思われる。

f区礫下粘質土層出土遺物(第82図)

937は瀬戸美濃産磁器の染付端反湯呑で、第10小期にあたる。938は瀬戸美濃産染付小碗、939は鉄釘である。

f区崩落礫層出土遺物(第82・89・90図)

940は鉄釘である。

1105はB1類の軒平瓦、1106はK類の軒平瓦である。1107～1111は軒丸瓦である。1112は平瓦、1113・1114は桟瓦、1115は輪違瓦である。

f区流土層出土遺物(第82・83・90図)

941は尾張型山茶碗、942は古瀬戸後期Ⅳ段階の縁釉小皿である。943は連房第9小期の擂鉢、944は第

10～11小期の火鉢である。945は瀬戸美濃産の染付湯呑である。948は美濃産連房第10～11小期の水鉢である。腰部より下に錆釉を施し、その上に上半部のみ灰釉、さらにその上から白と緑の透明感のない釉薬を流し掛けている。

1116はS1類、1117・1118はK9類の軒平瓦、1119・1120は軒丸瓦である。1121・1122は平瓦で、1121には穿孔があり、1122は不等辺四角形に加工されている。1123は丸瓦である。1124は桟瓦、1125は隅瓦である。1126～1130は輪違瓦である。

f区近現代整地層出土遺物(第83・91図)

950は土師器甕の口縁部、951は尾張型山茶碗、952は東濃型山茶碗である。

953は連房第8小期の丸碗、954は連房第8～9小期の小碗、955は連房第10小期の広東碗である。956は連房第11小期の大皿、957は連房第8小期の瓶掛、958・959は連房第8～11小期の火鉢である。957・959はe西区表土出土の破片と接合している。962は肥前産の染付徳利、963は砥石である。

131はN2類の軒平瓦、1133は軒丸瓦である。1134はI類の軒塀瓦である。1135・1136は輪違瓦である。

f区表土層出土遺物(第83・91図)

964は東濃型山茶碗、965・966は大窯の擂鉢で、それぞれ1段階、3段階後半に比定される。967～971は瀬戸美濃産陶器で、徳利(967)、小碗(968)、鎧湯呑(969)、碗?(970)、土瓶(971)である。連房第7～9小期のものである。973・974は瀬戸美濃産磁器、975は切羽である。

1137はJ2類の軒平瓦、1138・1139は軒丸瓦である。1140は台形状で、一辺に桟が付いている。1141・1142は輪違瓦、1143は鬼瓦と思われる。

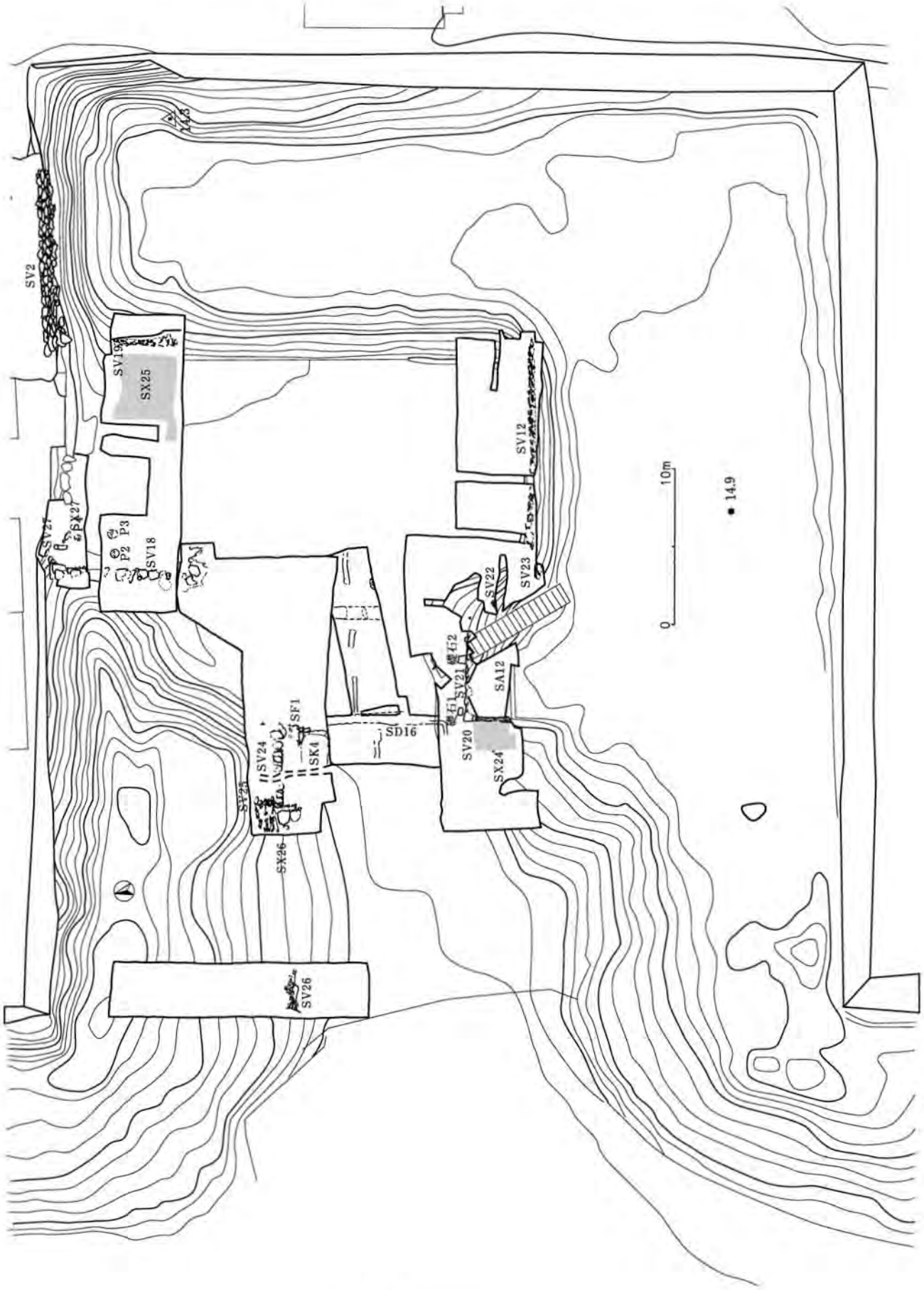
(5)小結

本丸大手枡形について

平成19・20年度の調査で本丸大手櫓門の位置と大きさがほぼ確定できたと考えられる。櫓門に接続する袖石垣SA12の幅は推定7.8mである。永井の頃の絵図によると、櫓門南辺の礎石は3石で等間隔に描かれている。今回検出した礎石1は南辺西、礎石2は南辺中央にあたる。礎石1と礎石2の間隔は3.3mあり、単純に2倍すると6.6mとなる。これが櫓門の東西の大きさと推測される。再び絵図を参考にすると、南北:東西は5:3、東西6.6mから比率で計算すると11.0mとなり、これが南北の大きさと推定される。SV24を東へ延長したとき、延長線とSV21の距離は11.8mとなり、推定値11.0mとほぼ一致する。また、櫓門の北側にはSA12に対応する袖石垣が無い可能性が高い。

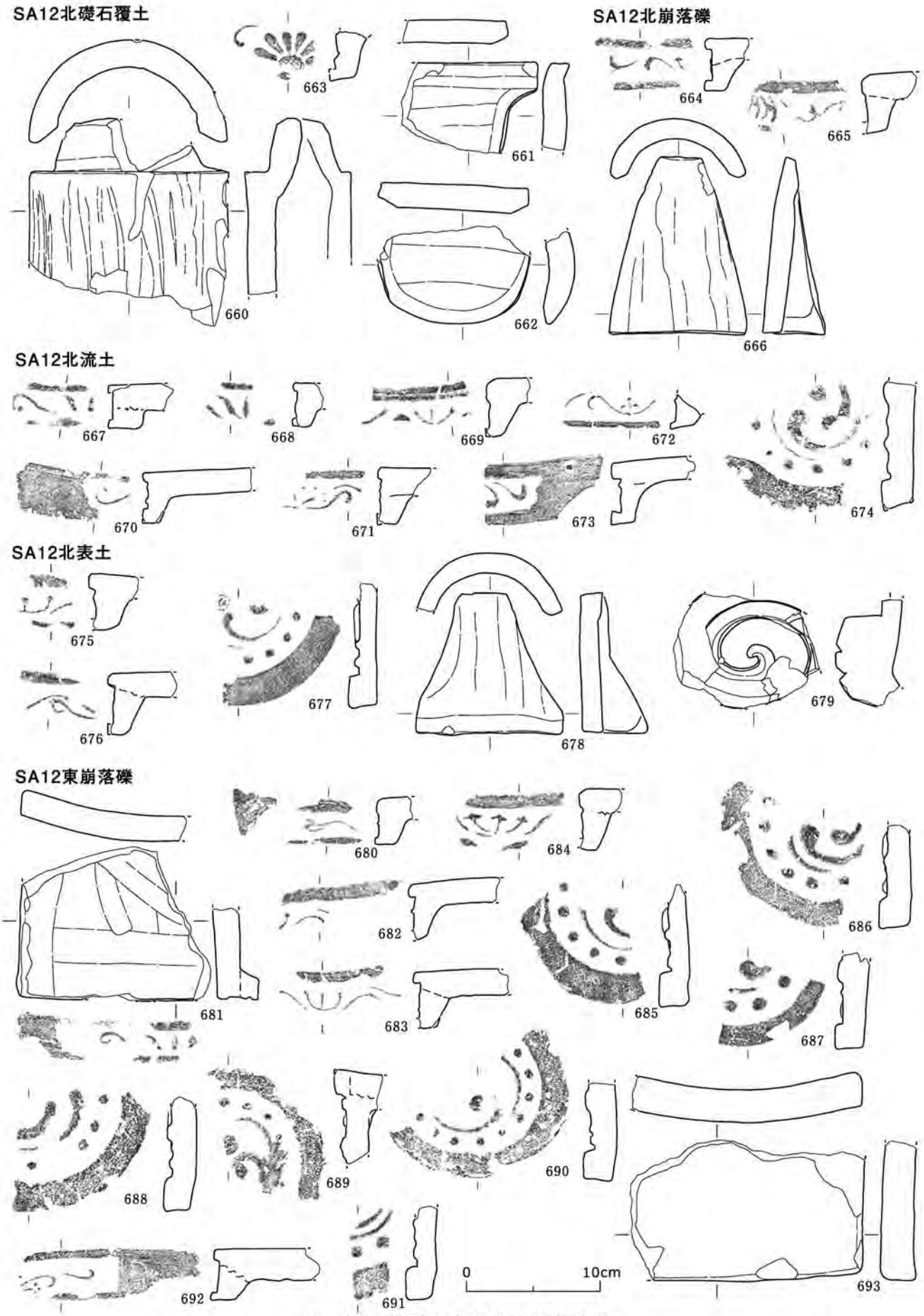
櫓門に関連する遺構として、南北方向の素掘りの溝SD16と石組遺構SF1が7次調査で検出されている。櫓門の推定位置と大きさを合わせてみると、SD16は西辺に添う形となり、またSF1は門の北東角に隣接する位置にあたる。SD16は雨落溝、SF1は集水桝と想定される。

石垣SV12・18・19・23が検出できたことによって、本丸大手の枡形の平面形がおおよそ判明することとなった。SV12・23は枡形南辺の石垣で、南北の大きさが約30mであることが確定する。東西はSV18とSV19の距離が約14mを測り、枡形の空間が、ほぼ1:2の長方形を呈することがわかった。細部では、SV18が一度屈曲する点や、逆にSV19が想定の範囲内で屈曲しない点など、絵図との相違が見られる。

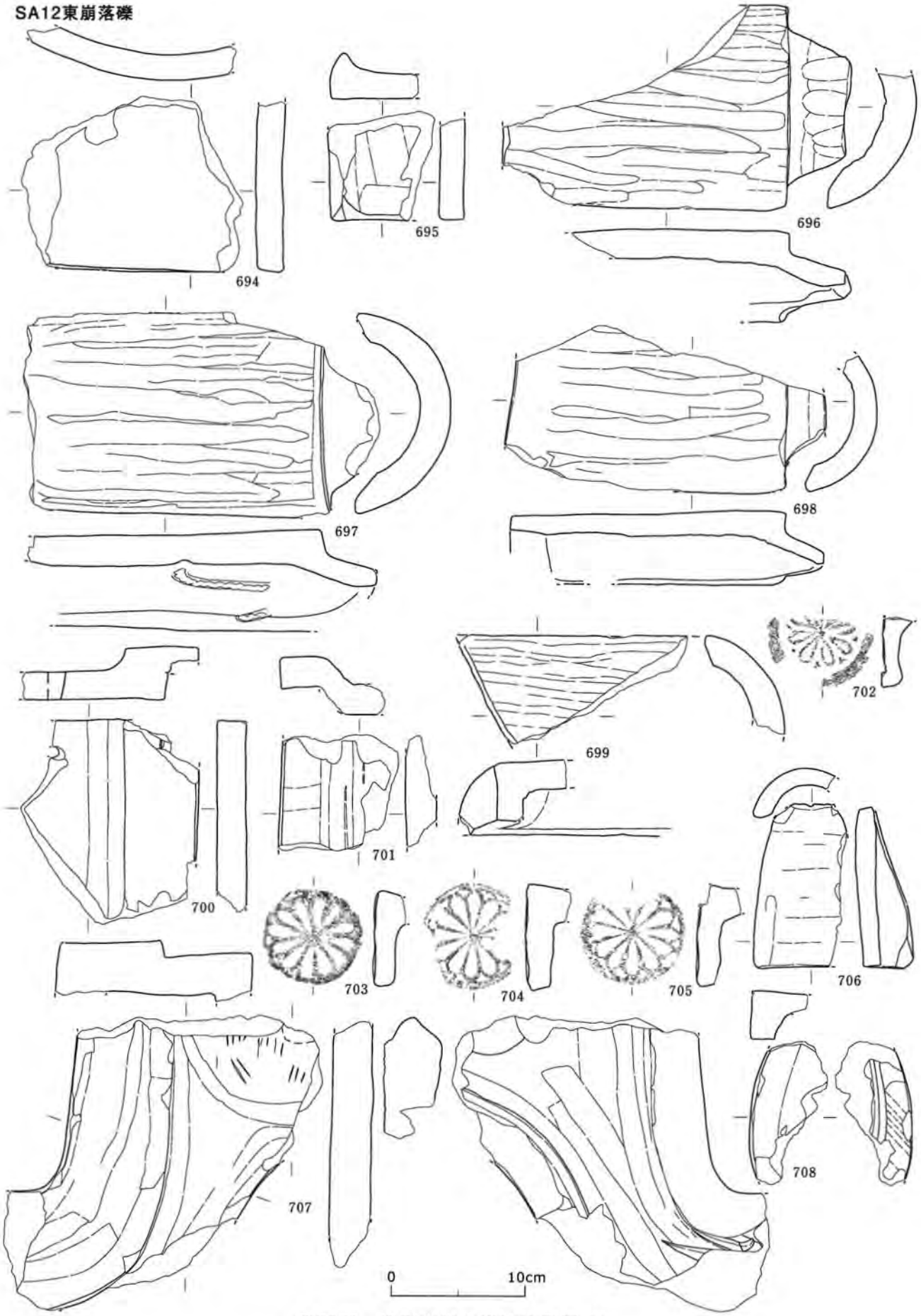


第70図　本丸大手枡形平面図

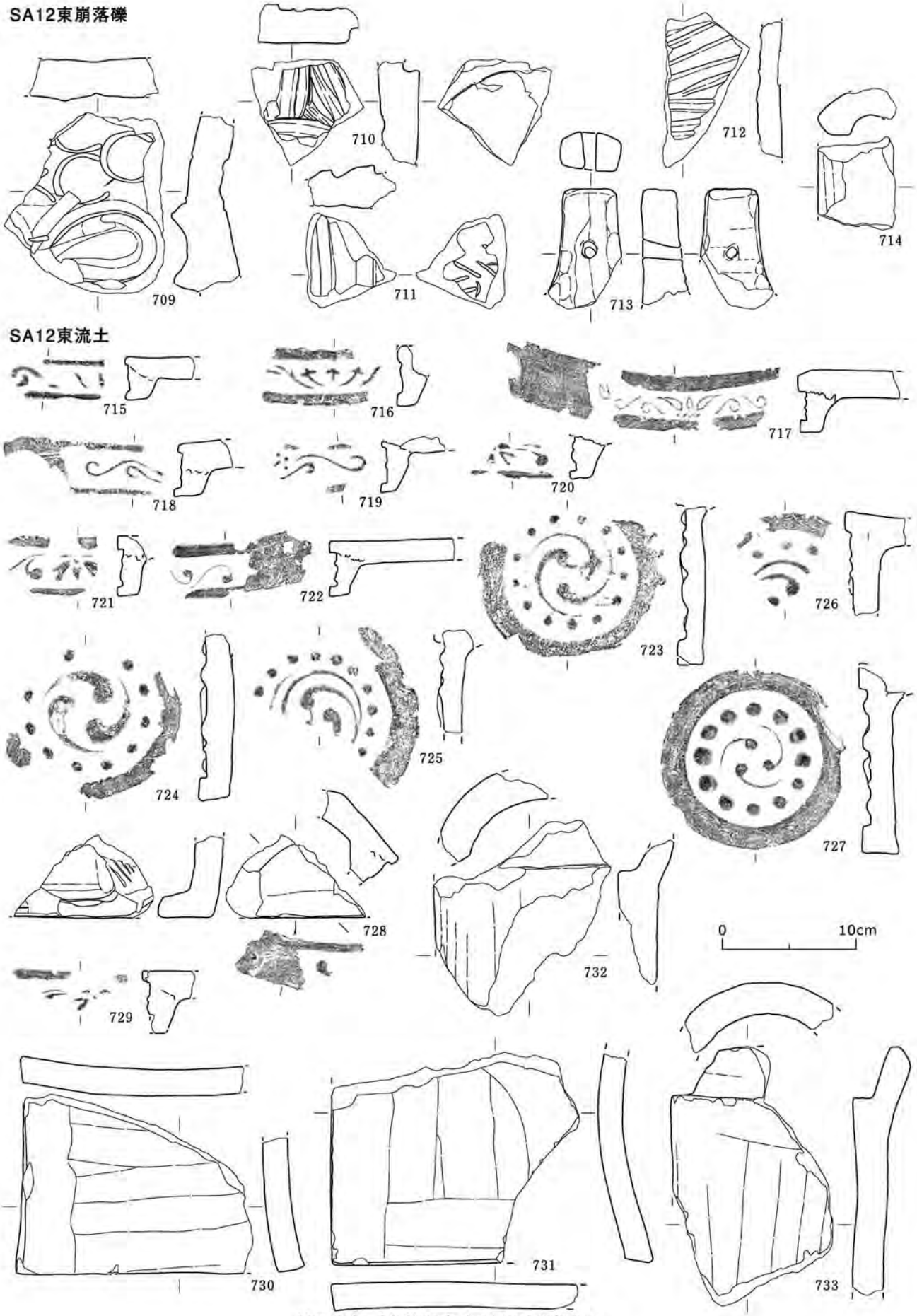
第71図　枡形内出土遺物実測図(1)



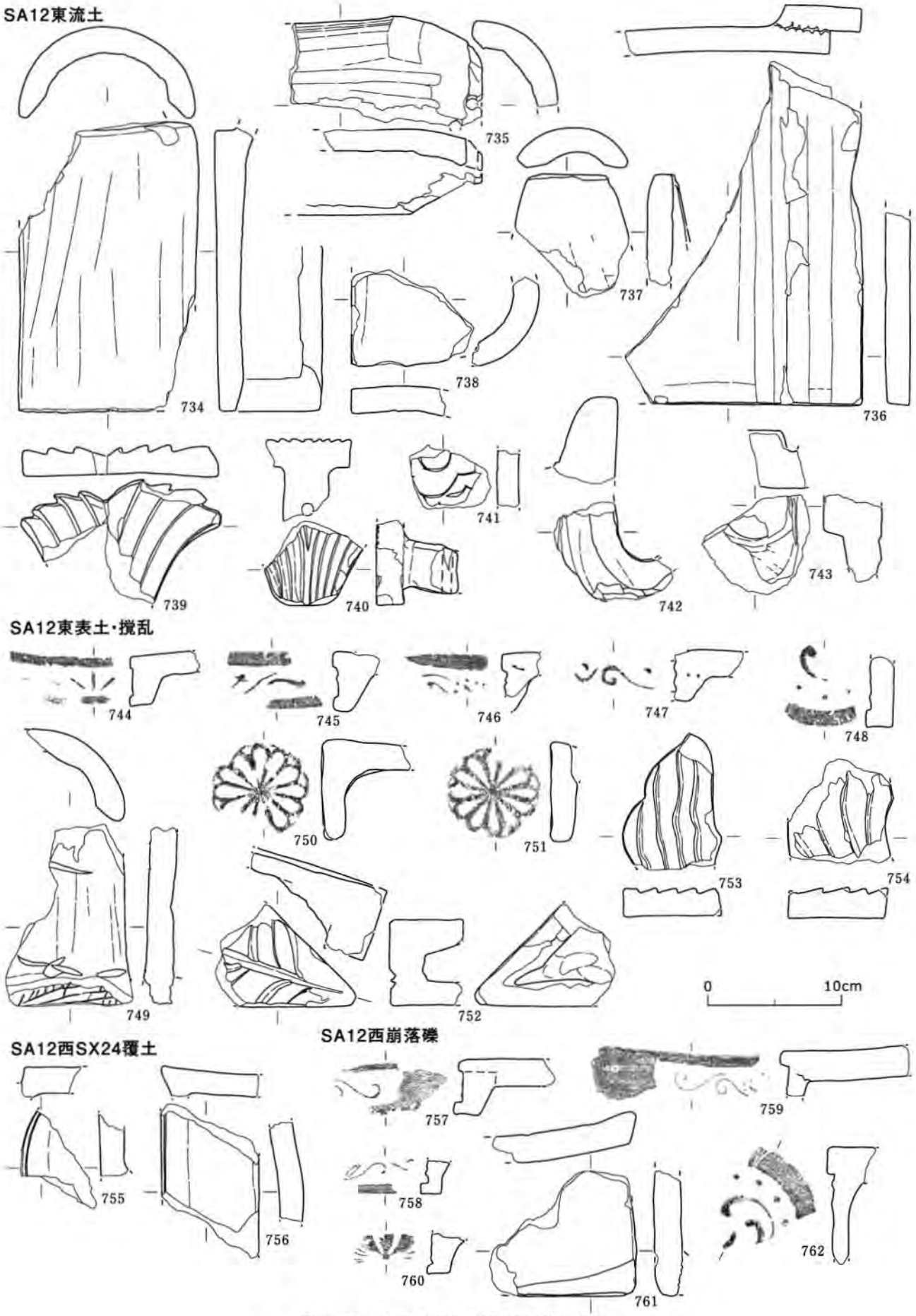
第72図　枡形内出土遺物実測図(2)



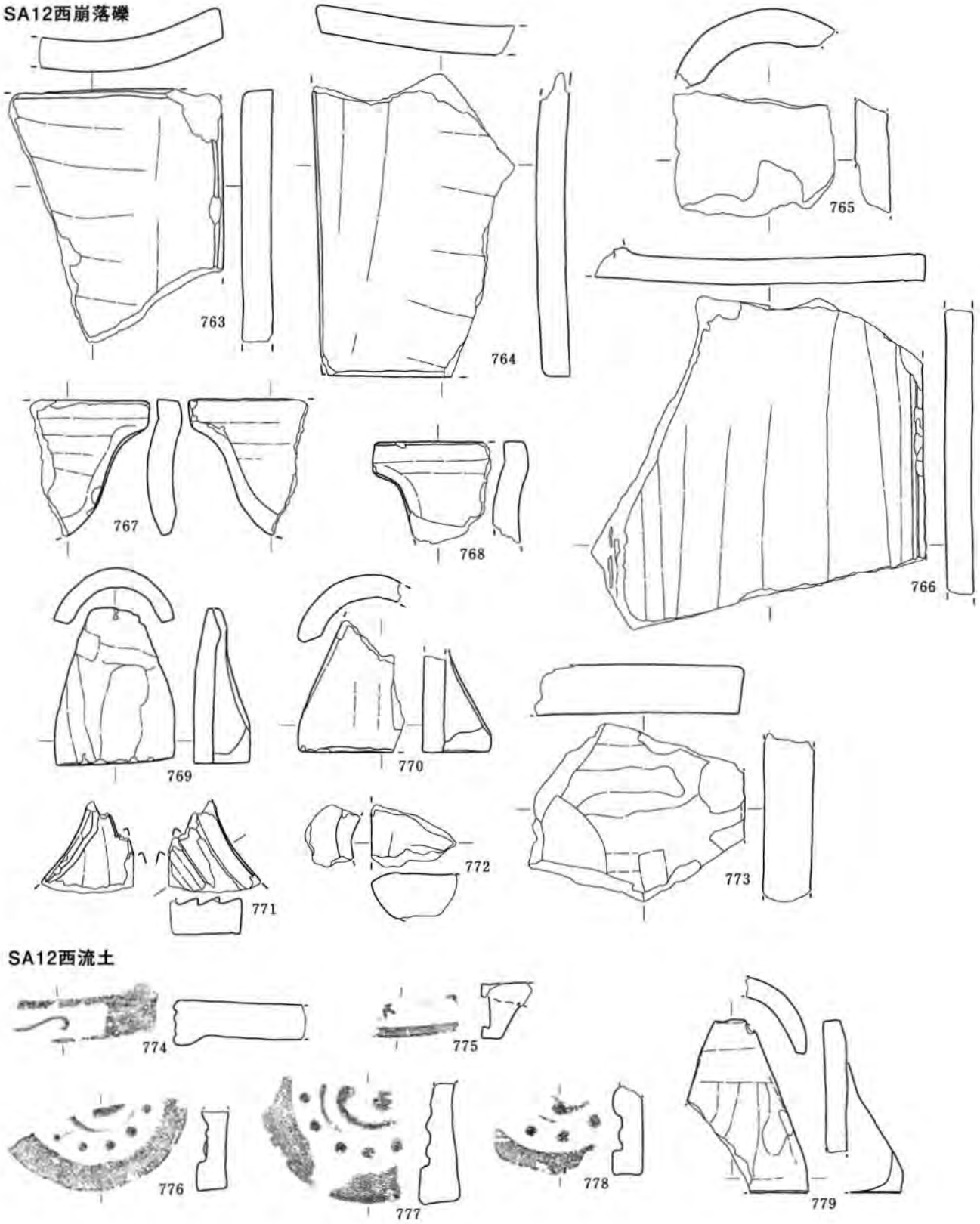
第73図　枡形内出土遺物実測図(3)



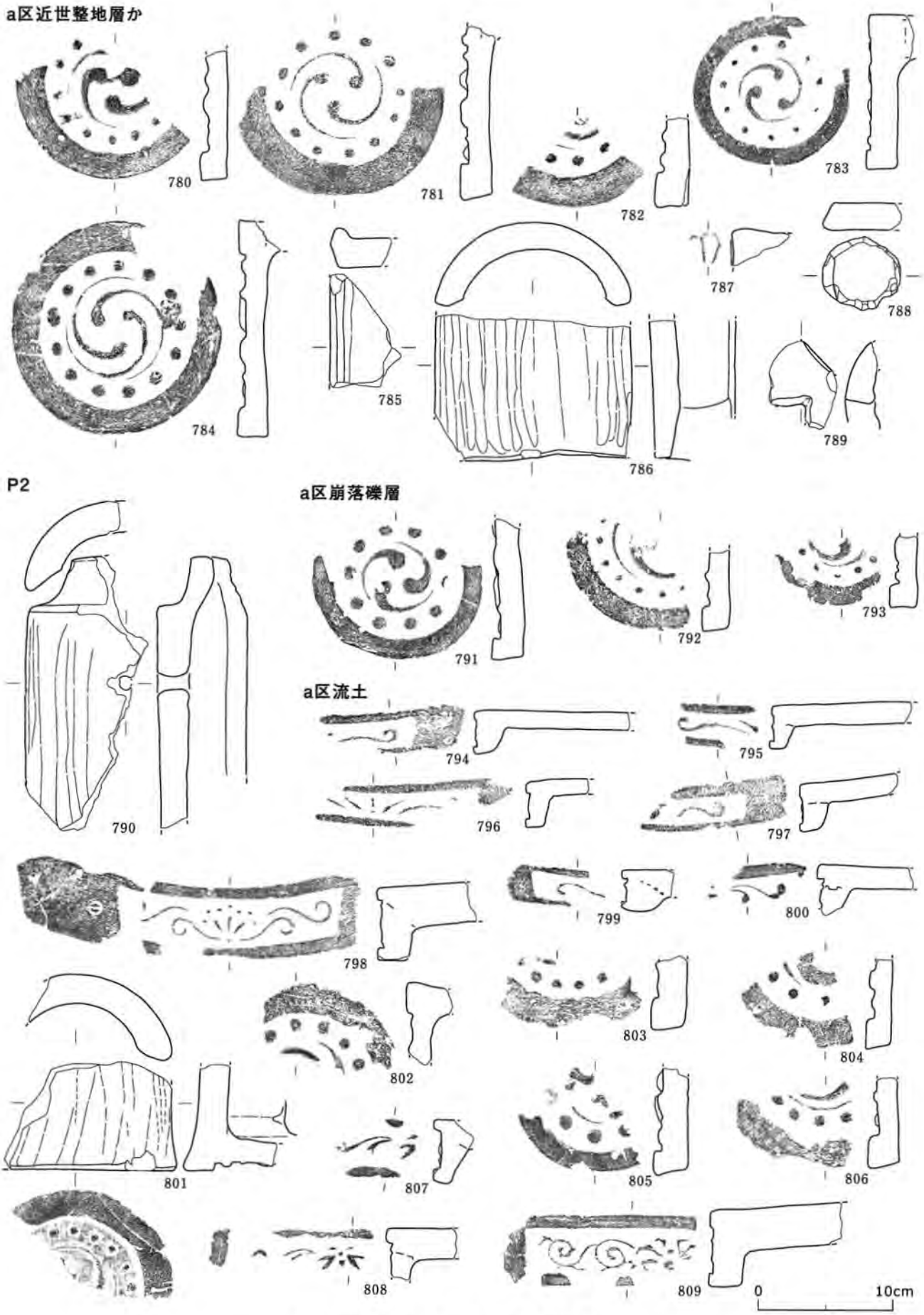
第74図　枡形内出土遺物実測図(4)



第75図　枡形内出土遺物実測図(5)

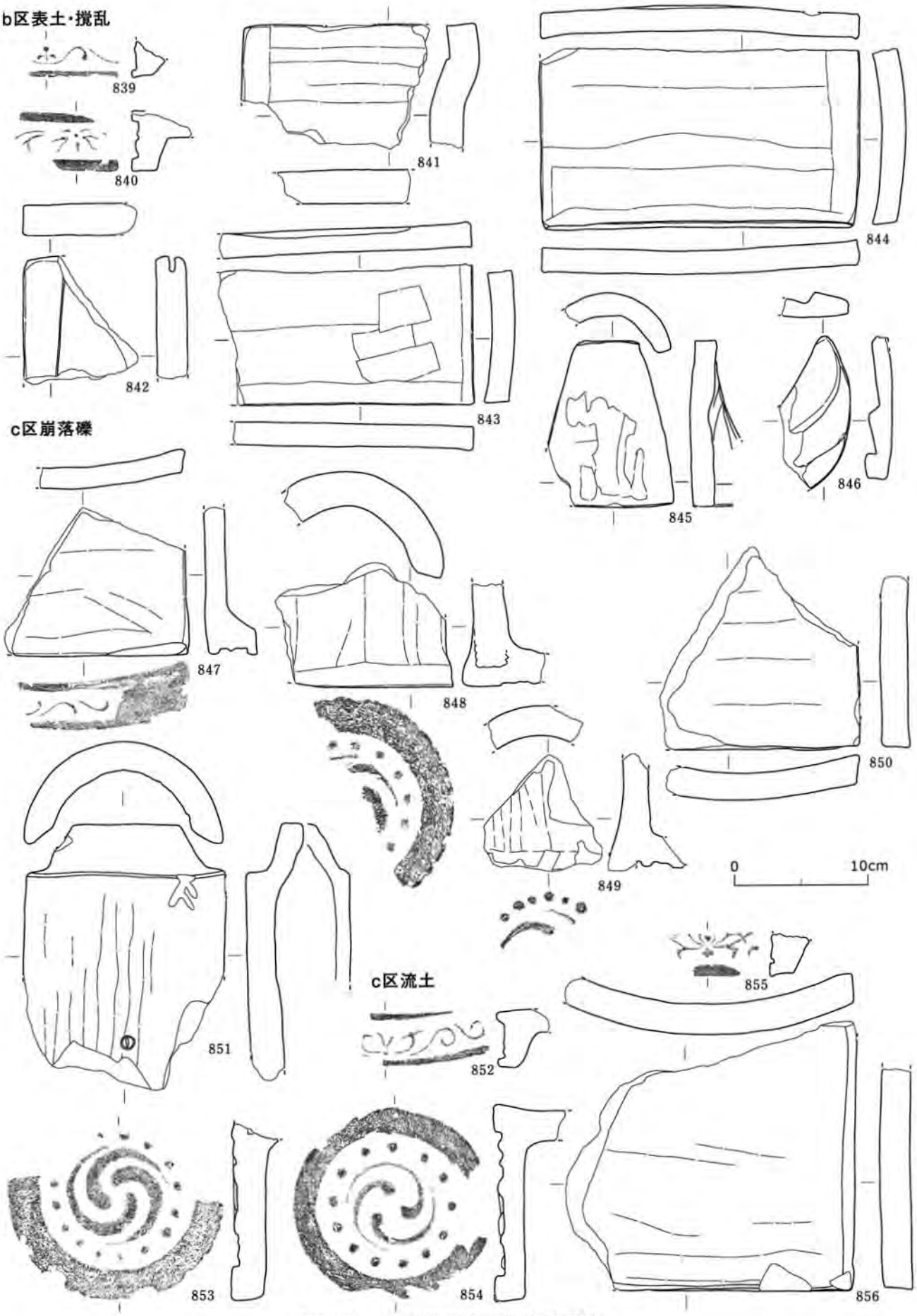


第76図　枡形内出土遺物実測図(6)

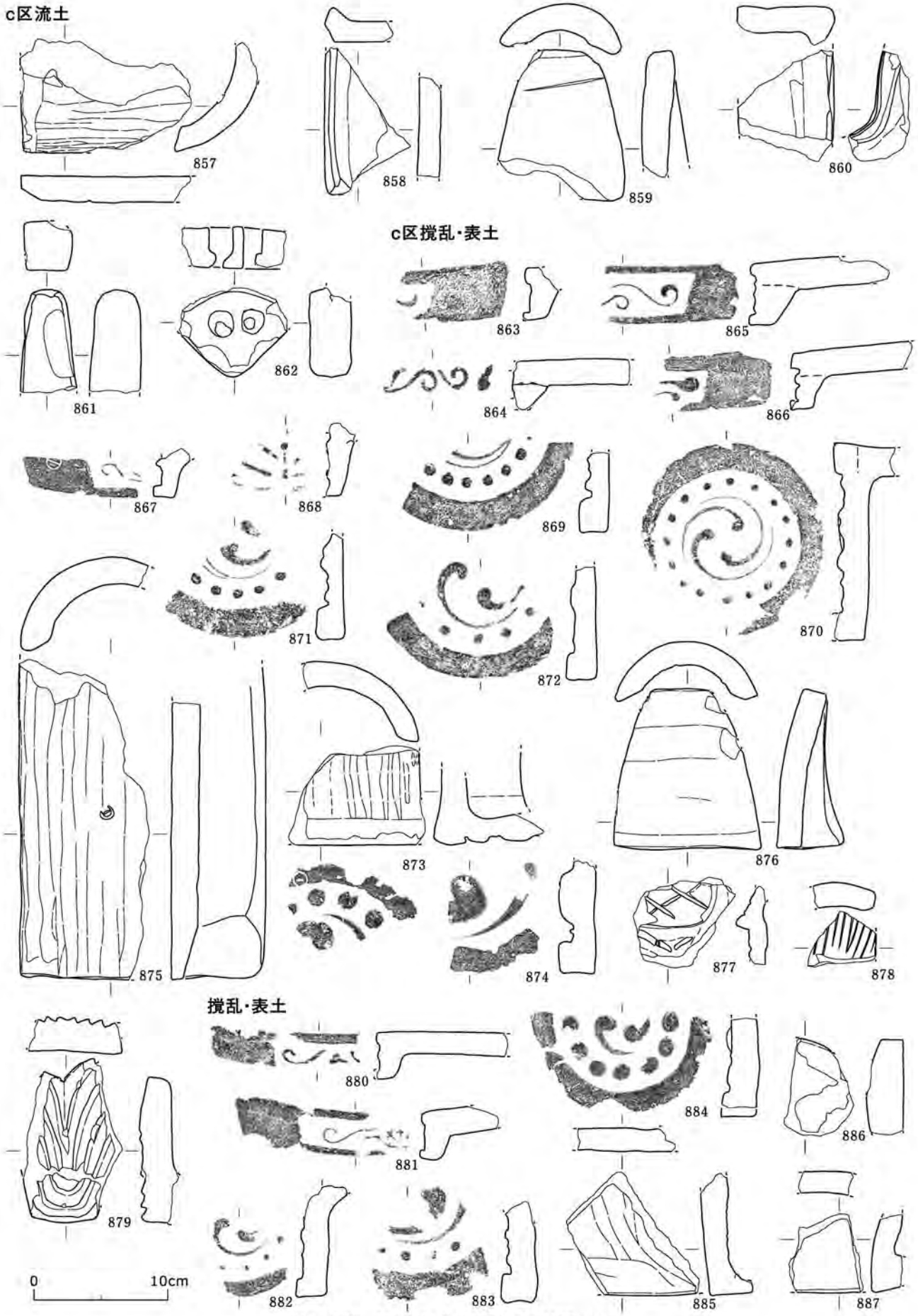


第77図　枡形内出土遺物実測図(7)

第78図　枡形内出土遺物実測図(8)

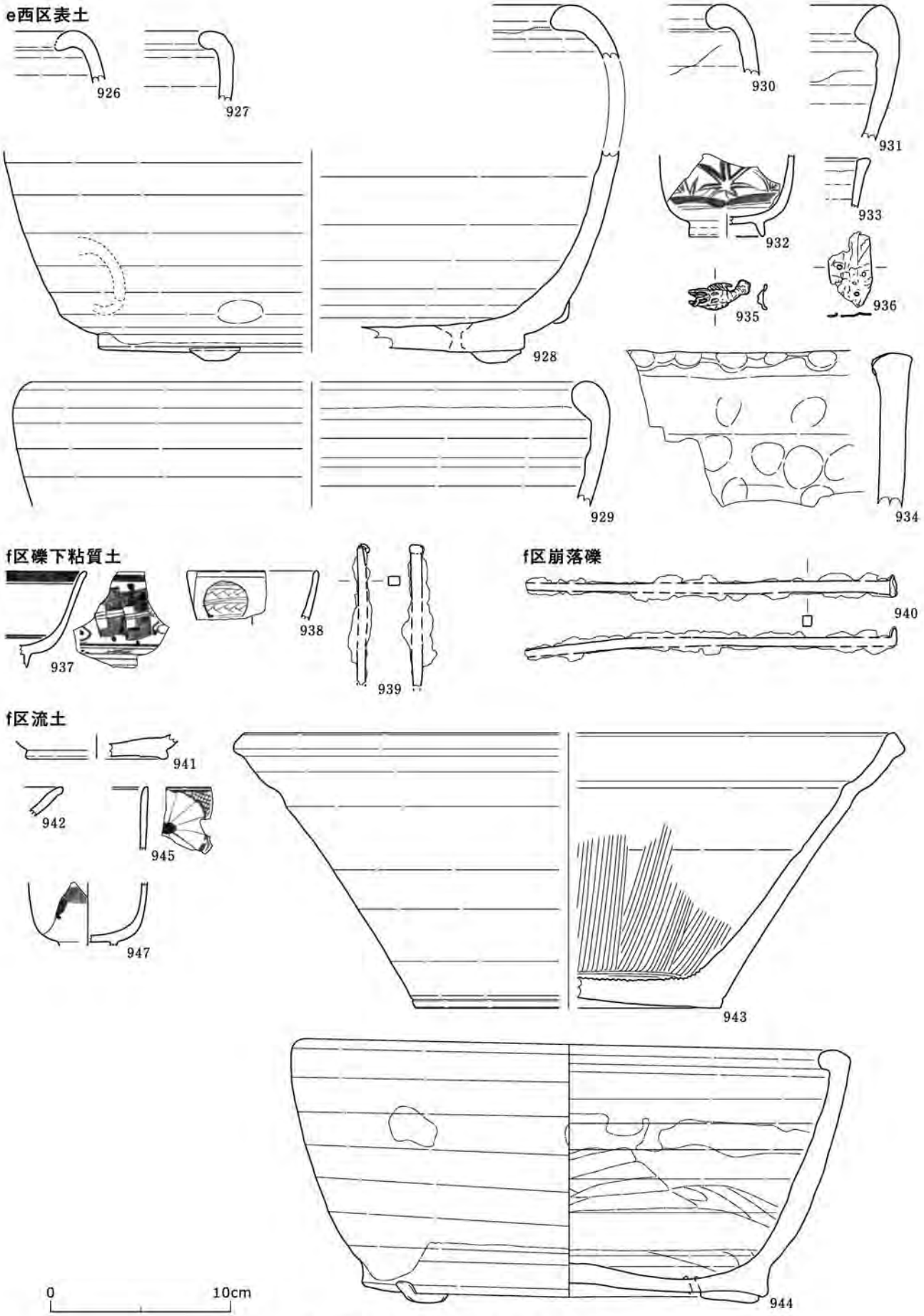


第79図　枡形内出土遺物実測図(9)

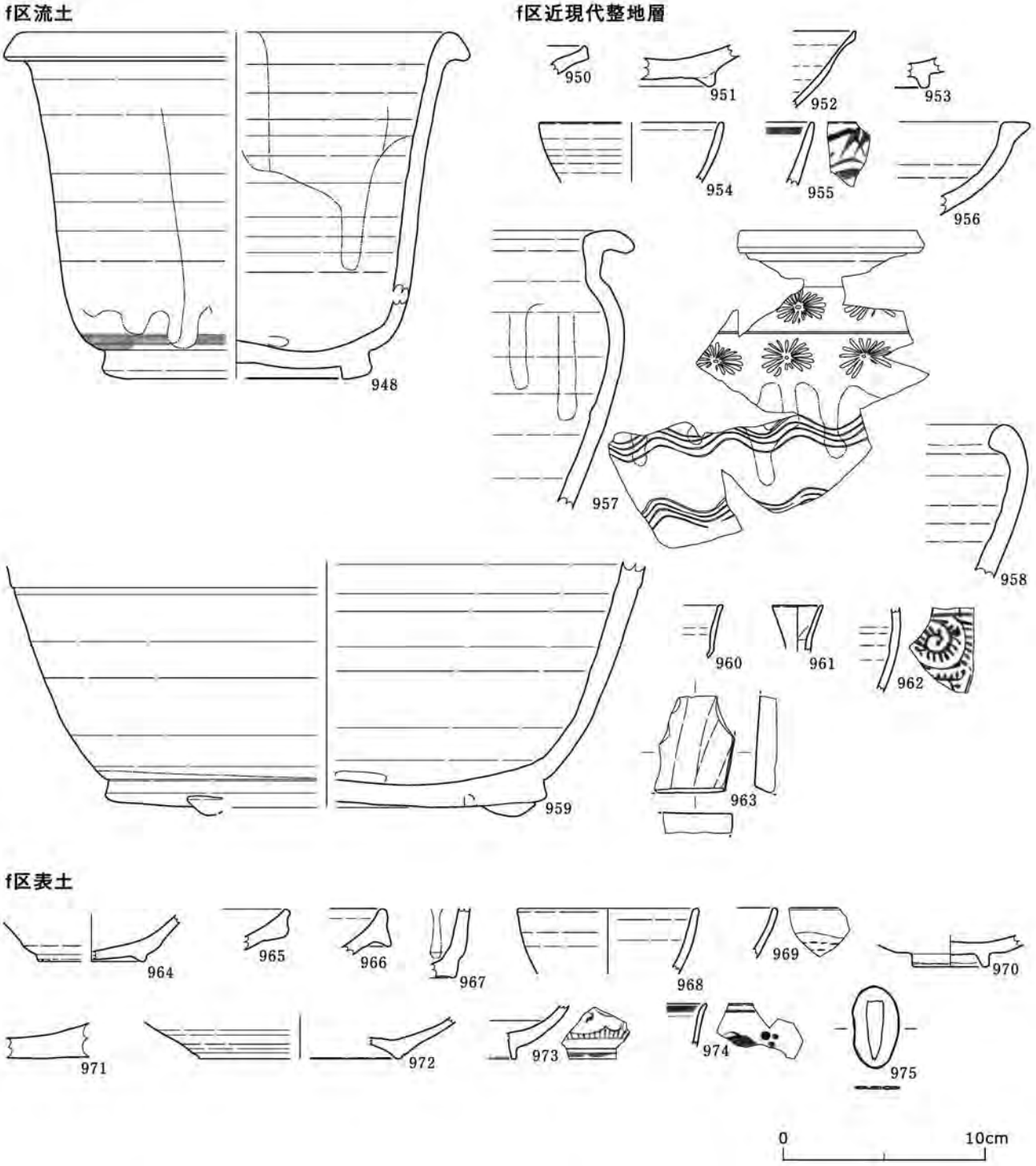


第80図　枡形内出土遺物実測図(10)

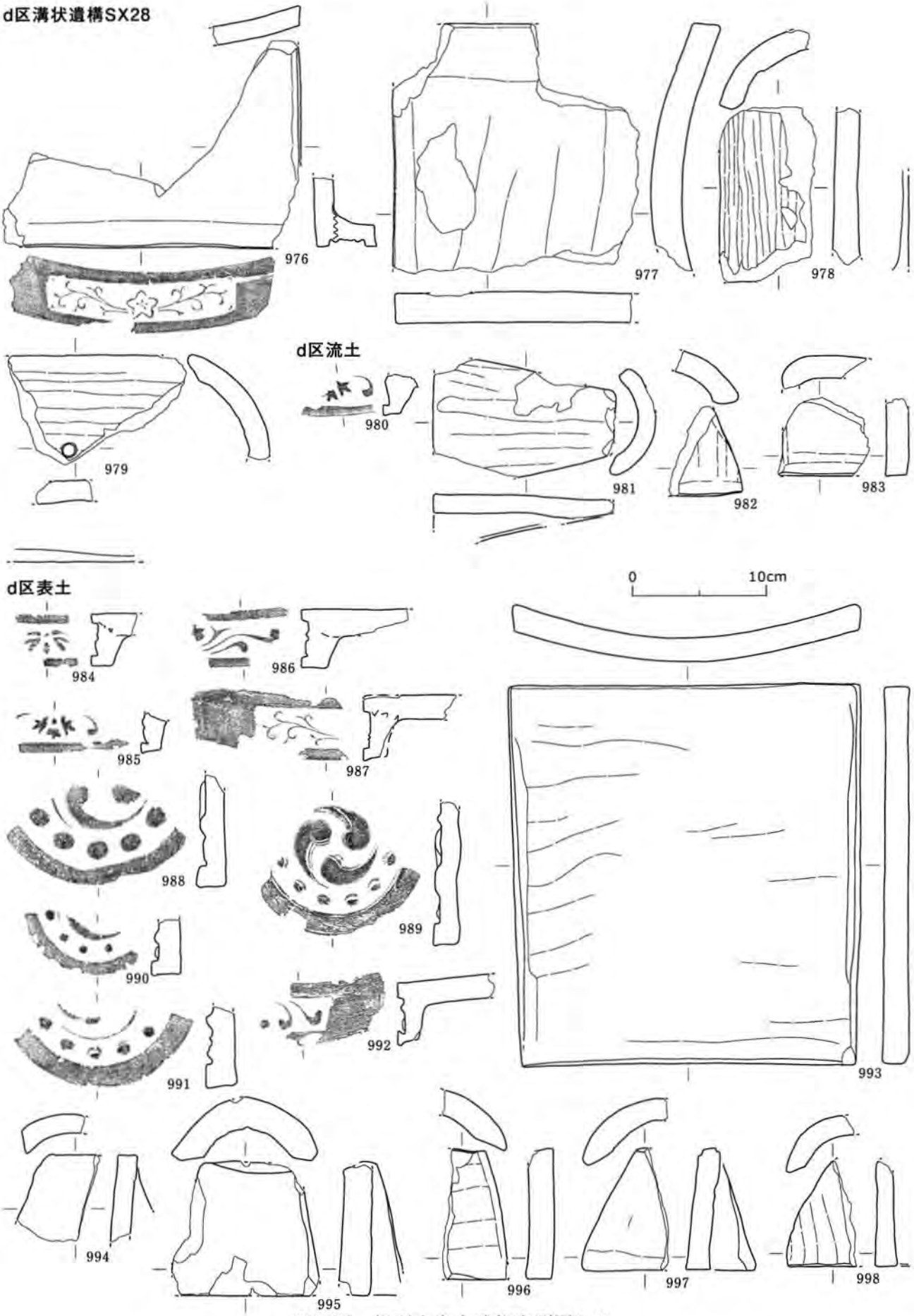
第81図　枡形内出土遺物実測図(11)



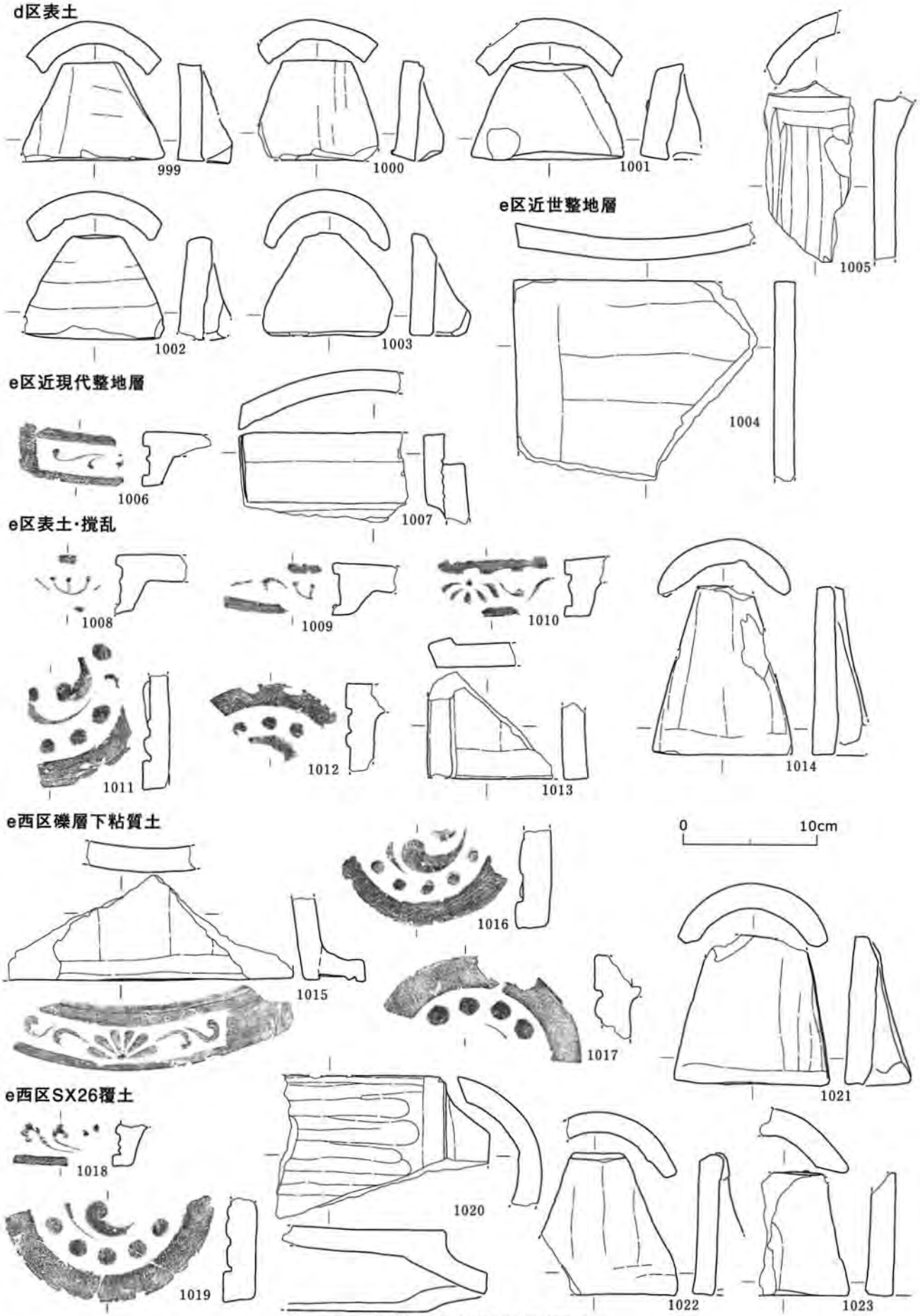
第82図　枡形内出土遺物実測図(12)



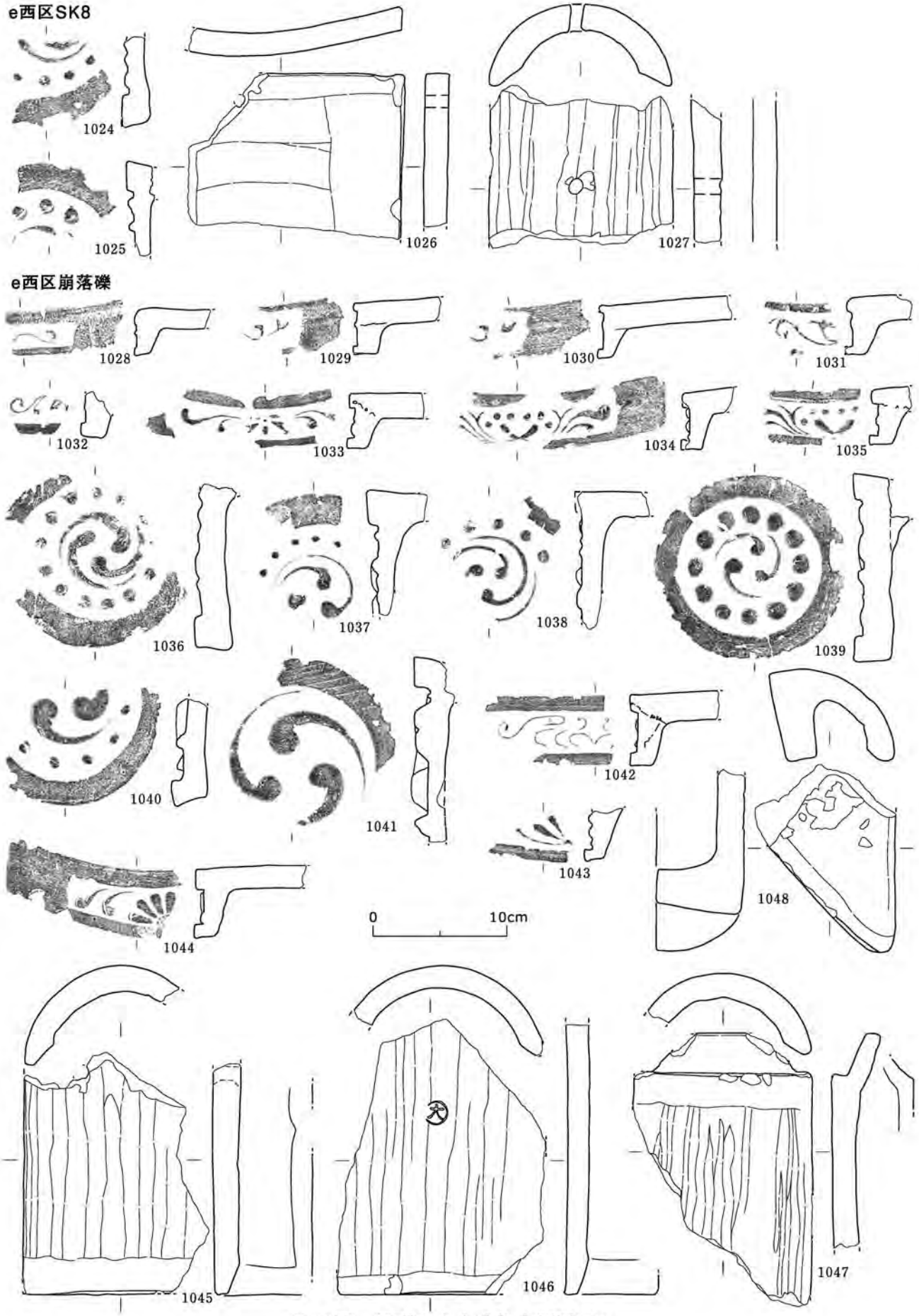
第83図　枡形内出土遺物実測図(13)



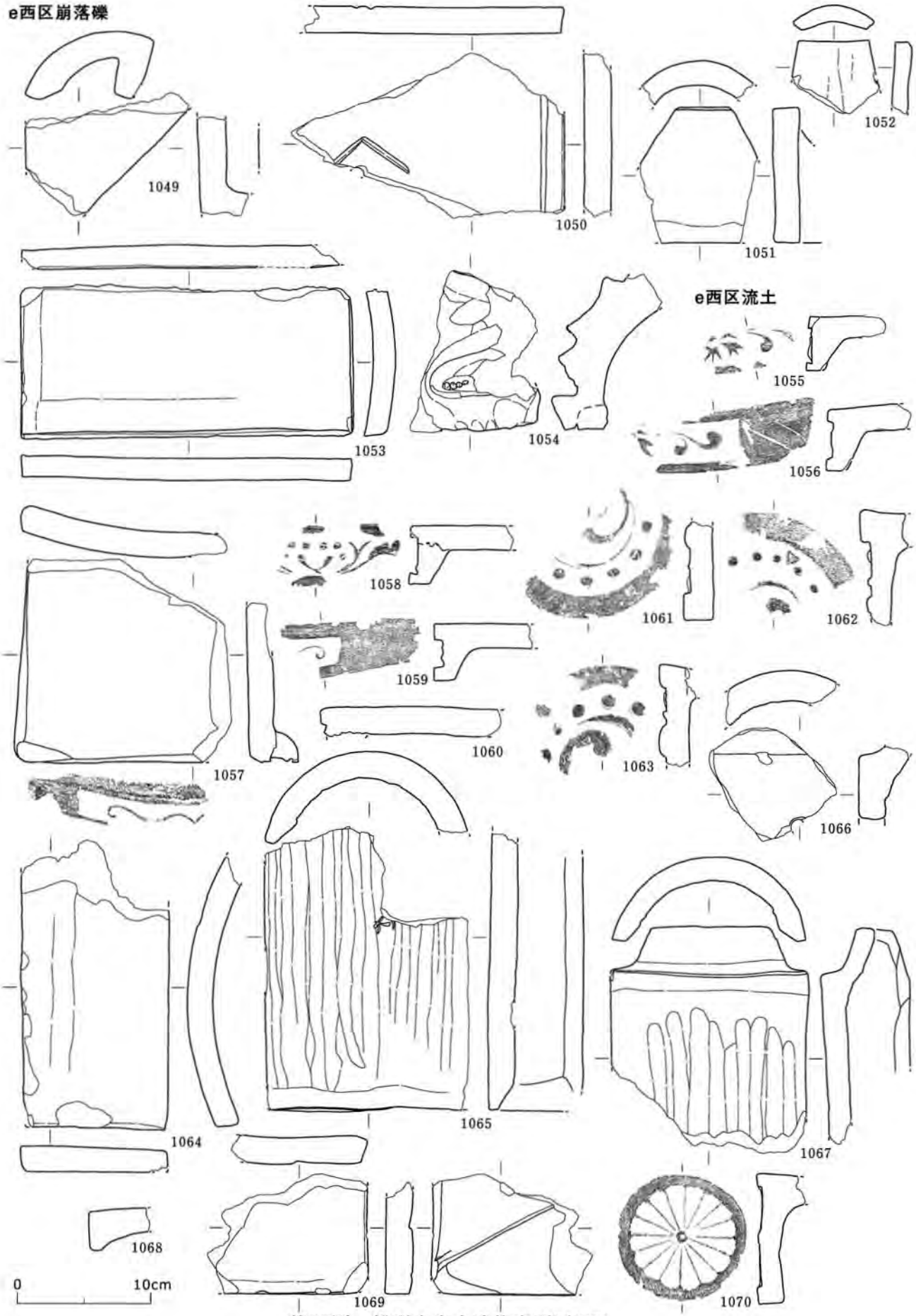
第84図　枡形内出土遺物実測図(14)



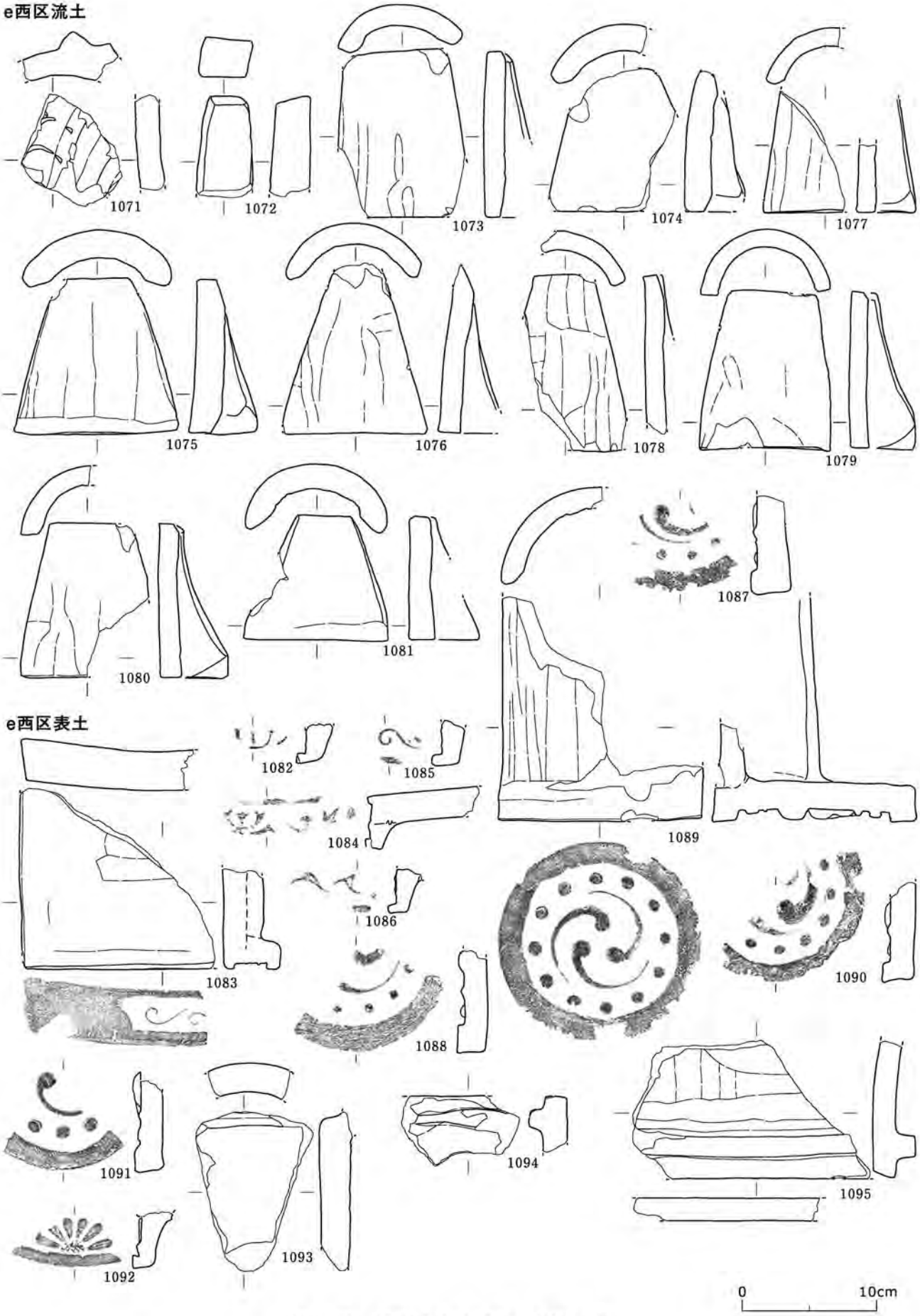
第85図　枡形内出土遺物実測図(15)



第86図　枡形内出土遺物実測図(16)



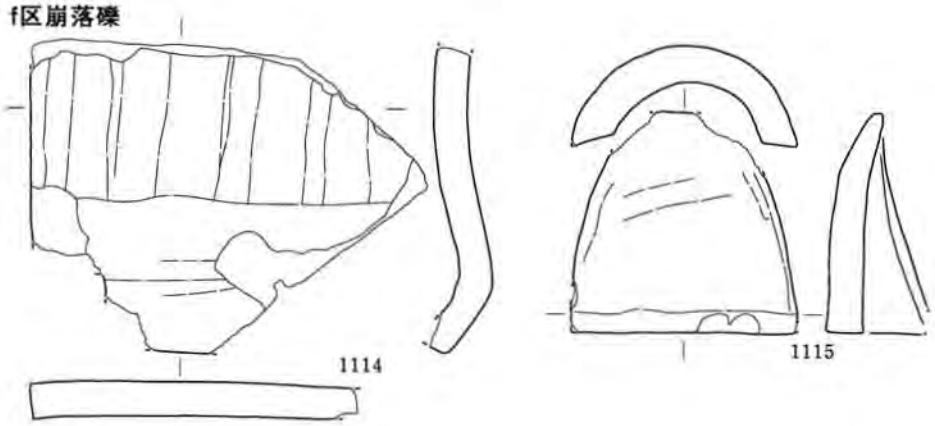
第87図　枡形内出土遺物実測図(17)



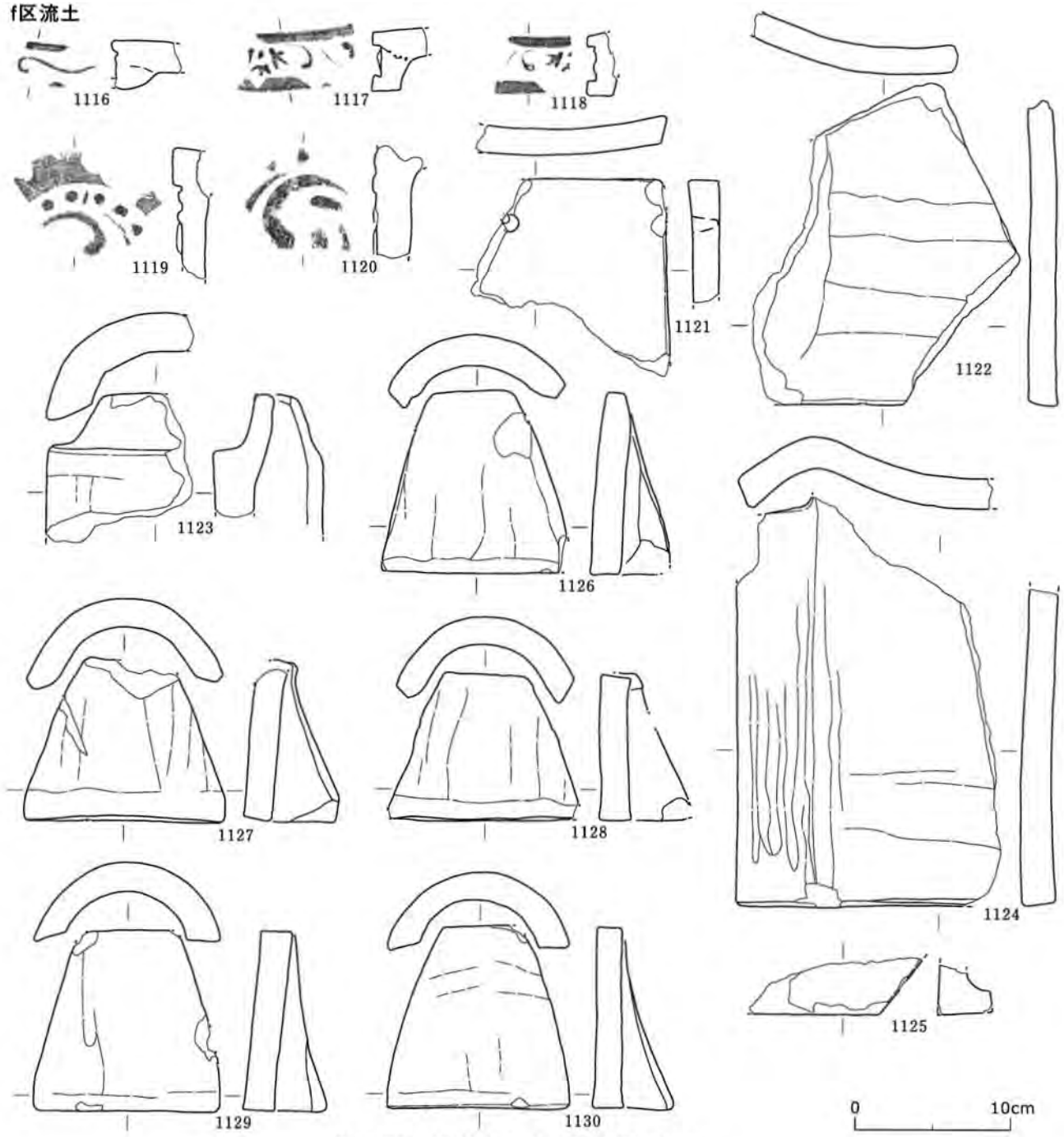
第88図　枡形内出土遺物実測図(18)

第89図　枡形内出土遺物実測図(19)

f区崩落礫

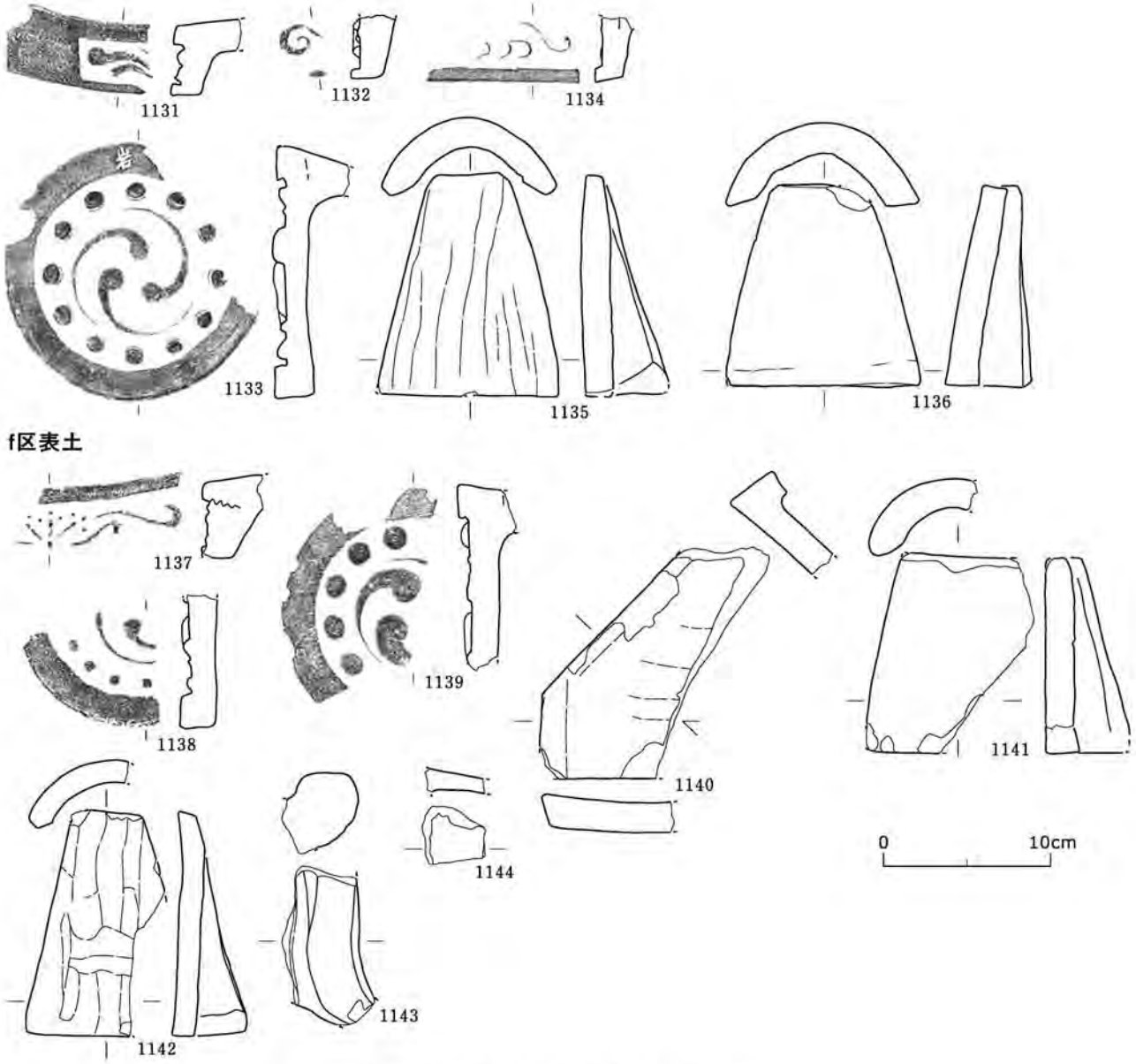


f区流土



第90図　枡形内出土遺物実測図(20)

f区近現代整地層



第91図　枡形内出土遺物実測図(21)

遺 物 観 察 表

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	調査区	遺構・層位	種類	器種	分類・年代	外面	内面	口径	器高	その他　法量	備考
1		78	11次	Bw	Ⅲ4	土師器	甕							
2		77	11次	Bw	Ⅲ4a	灰釉陶器	椀							
3	3	80	11次	Bw	Ⅲ4	山茶碗(東濃型)	碗	丸石3						
4	3	79	11次	Bw	Ⅲ4	山茶碗(東濃型)	碗	明和					高台径5.0	
5		81	11次	Bw	Ⅲ4	陶器(古瀬戸)	擂鉢	後期Ⅳ段階新	錆釉	錆釉				
6		84	11次	Bw	Ⅲ4	土師器	皿	B類						内面に油痕
7	4	83	11次	Bw	Ⅲ4	土師器	皿	C2						
8	4	82	11次	Bw	Ⅲ4	陶器(瀬戸)	徳利	連房第5～6小期	うのふ釉	飴釉				
9		140	11次	Cw	Ⅲ4	土師器	内耳鍋							
10	1	168	11次		Ⅲ4	銅製品	銭貨	「元豊通寶」					径2.6	
11	1	167	11次		Ⅲ4	銅製品	銭貨	-						6枚が錆で付着
12	1	170	11次		Ⅲ4	木製品	下駄	-						
13		90	11次	Bw	Ⅲ3a	須恵器	蓋	美濃須衛Ⅳ3					つまみ径2.7	
14		94	11次	Bw	Ⅲ3a	須恵器	杯	美濃須衛						
15	3	91	11次	Bw	Ⅲ3a	須恵器	鉢	美濃須衛Ⅳ2～3						
16		93	11次	Bw	Ⅲ3a	須恵器	有台杯	美濃須衛Ⅳ3					高台径11.0	
17		92	11次	Bw	Ⅲ3a	須恵器	甕	猿投・奈良時代						
18		96	11次	Bw	Ⅲ3a	灰釉陶器	皿				11.6			
19	3	89	11次	B9	Ⅲ3a	灰釉陶器	瓶類						底径9.6	
20	3	85	11次	B9	Ⅲ3a	山茶碗(尾張型)	碗	6型式					高台径7.2	
21		97	11次	Bw	Ⅲ3a	山茶碗(尾張型)	碗	6型式						
22	3	98	11次	Bw	Ⅲ3a	山茶碗(東濃型)	皿	生田						
23	3	95	11次	Bw	Ⅲ3a	土師器	鍋	伊勢型						
24		87	11次	B9	Ⅲ3a	土師器	皿	M類?						
25		104	11次	Bw	Ⅲ3a	陶器(古瀬戸)	折縁深皿	中期Ⅳ段階						
26		101	11次	Bw	Ⅲ3a	陶器(古瀬戸)	腰折皿	後期Ⅳ段階新	灰釉	灰釉				
27		102	11次	Bw	Ⅲ3a	陶器(古瀬戸)	擂鉢	後期Ⅳ段階新	錆釉	錆釉				
28		100	11次	Bw	Ⅲ3a	陶器(大窯)	縁釉挟皿	大窯1段階	灰釉	灰釉				
29	4	99	11次	Bw	Ⅲ3a	陶器(大窯)	天目茶碗	大窯3段階	鉄釉	鉄釉				
30	4	103	11次	Bw	Ⅲ3a	陶器(大窯)	小壺(茶入)	大窯	鉄釉	鉄釉				
31		106	11次	Bw	Ⅲ3a	土師器	皿	B1						
32		107	11次	Bw	Ⅲ3a	土師器	皿	B2a						
33	4	108	11次	Bw	Ⅲ3a	土師器	皿	B2b						
34		109	11次	Bw	Ⅲ3a	土師器	皿	C2						
35		88	11次	B9	Ⅲ3a	土師器	皿							
36		105	11次	Bw	Ⅲ3a	陶製品	陶錘	-					長5.7,径3.5	刻印(　)
37		112	11次	Bw	Ⅲ3	須恵器	蓋	美濃須衛7C後葉						
38		136	11次	B9	Ⅲ3	須恵器	蓋	美濃須衛Ⅳ2-3						
39		8	9次		Ⅲ3	須恵器	碗						底径7.1	
40		111	11次	Bw	Ⅲ3	須恵器	有台杯	8C代						
41		137	11次	B9	Ⅲ3	須恵器	有台杯	猿投・8C後半～9C					高台径8.0	
42		113	11次	Bw	Ⅲ3	須恵器	有台杯	猿投?・8C代					高台径7.8	
43		10	9次		Ⅲ3	須恵器	鉢	美濃須衛Ⅲ3						
44		54	10次		Ⅲ3	須恵器	鉢	美濃須衛Ⅳ2新～3						
45	3	135	11次	B9	Ⅲ3	須恵器	短頸壺	7C後半			10.0			
46	3	9	9次		Ⅲ3	灰釉陶器	皿						底径(7.6)	
47		12	9次		Ⅲ3	灰釉陶器	皿						底径(6.4)	
48		11	9次		Ⅲ3	山茶碗(尾張型)	鉢	6形式						
49		114	11次	Bw	Ⅲ3	山茶碗(尾張型)	碗	6型式						
50	3	115	11次	Bw	Ⅲ3	山茶碗(尾張型)	鉢	6型式					高台径9.8	
51	3	118	11次	Bw	Ⅲ3	山茶碗(東濃型)	碗	白土原						
52		13	9次		Ⅲ3	山茶碗(東濃型)	碗	明和					底径(5.8)	
53		138	11次	B9	Ⅲ3	山茶碗(東濃型)	碗	大洞東or脇之島						
54		116	11次	Bw	Ⅲ3	山茶碗(東濃型)	碗	生田					高台径5.2	
55	3	117	11次	Bw	Ⅲ3	山茶碗(東濃型)	碗	生田						
56		120	11次	Bw	Ⅲ3	陶器(古瀬戸)	腰折皿	後期Ⅳ段階新	灰釉	灰釉				
57	4	122	11次	Bw	Ⅲ3	陶器(古瀬戸)	縁釉小皿	後期Ⅳ段階新	灰釉	灰釉				
58	4	123	11次	Bw	Ⅲ3	陶器(古瀬戸)	擂鉢	後期Ⅳ段階新	錆釉	錆釉				

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	調査区	遺構・層位	種類	器種	分類・年代	外面	内面	口径	器高	その他　法量	備考
59		124	11次	Bw	Ⅲ3	陶器(古瀬戸)	盤類	後期Ⅳ段階	無釉	無釉			底径10.5	
60	4	125	11次	Bw	Ⅲ3	陶器(大窯)	擂鉢	大窯1段階	錆釉	錆釉				
61		121	11次	Bw	Ⅲ3	陶器(大窯)	稜皿	大窯2段階	鉄釉	鉄釉				
62		127	11次	Bw	Ⅲ3	土師器	皿	B1						
63		133	11次	Be	Ⅲ3	土師器	皿	B1						
64	4	60	10次		SX16	土師器	皿	B1						
65	4	130	11次	Bw	Ⅲ3	土師器	皿	B2a						
66	4	131	11次	Bw	Ⅲ3	土師器	皿	B2a						
67	4	129	11次	Bw	Ⅲ3	土師器	皿	B2a			(16.0)			
68	4	134	11次	Be	Ⅲ3	土師器	皿	B2a			(18.0)			
69	4	132	11次	Bw	Ⅲ3	土師器	皿	B2b			9.5	1.7		
70	4	128	11次	Bw	Ⅲ3	土師器	皿	C2			(6.0)	1.8		
71		126	11次	Bw	Ⅲ3	土師器	皿	ロクロ			10.6	2.5		
72		119	11次	Bw	Ⅲ3	土師器	内耳鍋							
73	1	17	9次		Ⅲ3	磁器(肥前)	青磁(鉢)	17C中葉～後葉					高台径9.2	
74		176	9次		SX14	木製品	こけら板	-						
75		177	9次		SX14	木製品	こけら板	-						
76		178	9次		SX14	木製品	こけら板	-						
77	1		10次		SX16	木製品	漆器椀	-						
78	6	7	9次		SX13	土師器	皿	C2(近世)			(8.0)	1.5		口縁内外タール
79		53	10次		SX20	山茶碗(東濃型)	碗	白土原						
80	3	18	9次		Ⅲ2	須恵器	長頸瓶	Ⅳ3～Ⅴ					底径(5.6)	
81	3	56	10次		Ⅲ2	灰釉陶器	皿	6新～7古						
82	4	153	11次	Be	Ⅲ2	土師器	皿	C2			6.4	1.2		
83		57	10次		Ⅲ2(SX3下)	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	連房第1～2小期	鉄釉(高台部露胎)	鉄釉				
84	4	152	11次	Be	Ⅲ2	陶器(美濃)	灯明台	連房第3～4小期	(口)鉄釉(体)錆	鉄釉	14.4	2.3	高台径8.8	体部外面タール痕
85	1	155	11次		Ⅲ2	磁器(肥前)	染付碗	18C前半	(二重)網目文	網目文	9.6	5.1	高台径3.6	
86		154	11次	Cw	Ⅲ2	磁器(瀬戸美濃)	皿				11.2	2.3	高台径6.6	
87	6	148	11次	Bw	Ⅲ2	陶器(不明)	(鉢)	-					高台径5.8	
88	6	19	9次		Ⅲ2	土師器	皿	C2(近世)						
89		150	11次	Bw	Ⅲ2	土師器	皿	ロクロ					底径6.1	内外タール痕
90		151	11次	Bw	Ⅲ2	土師器	皿	ロクロ					底径6.0	
91		149	11次	Bw	Ⅲ2	土師器	皿	C2			11.0	2.1		
92	7	141	11次	Bw	Ⅲ2	陶製品	陶錘	-					長5.3,径3.6	刻印○
93	7	142	11次	Bw	Ⅲ2	陶製品	陶錘	-					長6.1,径3.6	刻印○○・常滑風
94	7	143	11次	Bw	Ⅲ2	陶製品	陶錘	-					長5.4,径3.3	刻印(　)
95	7	144	11次	Bw	Ⅲ2	陶製品	陶錘	-					長5.7,径3.7	刻印
96	7	145	11次	Bw	Ⅲ2	陶製品	陶錘	-					長6.0,径4.0	刻印無
97	7	147	11次	Bw	Ⅲ2	陶製品	陶錘	-					長5.9,径3.3	線刻
98	7	146	11次	Bw	Ⅲ2	陶製品	陶錘	-					長4.8,径3.6	線刻
99	1	172	11次		Ⅲ2	銅製品	銭貨	「永楽通寶」						
100	7	171	11次		Ⅲ2	鉄製品	鉄釘	-						
101	3	30	9次	A	Ⅳ	灰釉陶器	椀						底径(7.8)	
102		31	9次	A	Ⅳ	磁器(中国)	白磁皿				5.1	1.0	底径(2.5)	
103		26	9次	D	Ⅳ?	磁器(中国)	白磁皿							内染付
104	6	27	9次	A	Ⅳ?	磁器(瀬戸)	染付碗	19C					底径(3.9)	
105		28	9次	A	Ⅳ?	陶器(不明)	急須	-			(2.7)			
106		29	9次	A	Ⅳ?	土師器	皿	C2(近世)						薄手
107		22	9次		Ⅲ1	須恵器	無台杯	美濃須衛Ⅲ3～Ⅳ						
108	3	165	11次	Bw	Ⅲ1	須恵器	鉢	美濃須衛Ⅲ3						
109	3	21	9次		Ⅲ1	山茶碗(東濃型)	碗	白土原						
110		23	9次		Ⅲ1	山茶碗(東濃型)	碗	生田						
111		67	10次		Ⅲ	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	後期Ⅳ段階	鉄釉	鉄釉				
112	1	66	10次		Ⅲ	陶器(大窯)	稜皿	大窯3段階前半	錆釉(口縁部鉄釉)	錆釉(口縁部鉄釉)	10.0	2.4	底径6.0	
113	1	52	9次		Ⅲ1	陶器(美濃)	向付(御深井皿)	連房第2小期	錆釉	錆釉			長径14.2,高4.2	
114	4	20	9次	B	Ⅲ1	陶器(美濃)	不明	連房第7～8小期	灰釉	灰釉				
115		161	11次	Bw	Ⅲ1	土師器	皿	C2(近世)			11.8	2.3		

第5表　遺物観察表(土器類2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	調査区	遺構・層位	種類	器種	分類・年代	外面	内面	口径	器高	その他　法量	備考
116	6	162	11次	Bw	Ⅲ1	土師器	皿	C2(近世)						
117	1	159	11次	Bw	Ⅲ1	土師器	皿	ロクロ			10.8	2.5	底径7.0	口縁部内外面タール痕
118		160	11次	Bw	Ⅲ1	土師器	皿	ロクロ			10.8	2.3	底径7.0	
119	1	25	9次		Ⅲ1	磁器(肥前)	染付蓋	18C第3四半期			9.6	3.1	つまみ径3.8	
120		166	11次	Be	Ⅲ1	陶器(京信)	(皿)						高台径5.6	
121	1	163	11次	Be	Ⅲ1	陶器(京信?)	碗				13.0	4.9	底径4.2	高台内に「仁清」
122	7	63	10次		Ⅲ	鉄製品	鉄釘	–					残長14.6	頭欠
123	7	64	10次		Ⅲ	鉄製品	鉄釘	–					残長14.3	頭欠
124		65	10次		Ⅲ	鉄製品	鉄釘	–					残長14.0	先欠
125	1	175	11次		Ⅲ	銅製品	灯明具	–					径(9.0)、高(1.9)	
126		164	11次	Be	Ⅲ1	陶器(常滑)	甕							
127	1	156	11次	Bw	Ⅲ1	陶器(美濃)	徳利	連房第11小期	灰釉	(口)灰釉	3.4	(22.2)	底径(12.6)	
128		157	11次	Bw	Ⅲ1	陶器(美濃)	徳利	連房第10～11小期	灰釉				底径12.4	
129		158	11次	Bw	Ⅲ1	陶器(美濃)	徳利	連房第10～11小期	灰釉				底径12.6	
130	3	33	9次	B	Ⅱ	須恵器	高杯	尾張7C中						
131		46	9次		Ⅱ	灰釉陶器	皿							
132	3	45	9次	-	Ⅱ	灰釉陶器	椀	7古±1					底径(6.5)	
133	3	59	10次		Ⅱ2	山茶碗(東濃型)	碗	白土原						
134		32	9次	B	Ⅱ	山茶碗(東濃型)	碗	生田						
135	4	55	10次		Ⅱ1	陶器(瀬戸)	天目茶碗	連房第5～6小期	鉄釉(高台部露胎)	鉄釉				
136	4	36	9次	B	Ⅱ	陶器(瀬戸)	擂鉢	連房第6小期	錆釉	錆釉				
137	4	35	9次	B	Ⅱ	陶器(美濃)	丸碗	連房第7小期	灰釉(高台部露胎)	灰釉			底径(4.6)	
138		40	9次	C	Ⅱ	陶器(美濃)	湯呑	連房第8小期	高台部露胎	鉄釉・灰釉			底径(4.3)	
139		34	9次	B	Ⅱ	陶器(美濃)	志野碗	連房	長石釉	長石釉	6.6			
140	4	47	9次		Ⅱ	陶器(美濃)	黄瀬戸鉢(加工円盤)	連房第1～4小期						
141		44	9次	D	Ⅱ	磁器(中国)	天目茶碗		鉄釉(高台部露胎)	鉄釉				
142		48	9次		Ⅱ	磁器(肥前)	染付碗	17C末～18C前半						胎土が灰色
143	6	41	9次	C	Ⅱ	磁器(瀬戸)	染付碗	19C						
144	6	49	9次		Ⅱ	磁器(瀬戸)	染付碗	19C						
145	6	38	9次	B	Ⅱ	土師器	皿	C2(近世)			(10.0)			
146		39	9次	B	Ⅱ	陶製品	陶錘	–					径(2.6)	
149		51	9次	D	Ⅰ	山茶碗(尾張型)	皿	6型式			(7.8)			
150	4	69	10次	D	Ⅰ	陶器(常滑)	甕		灰釉					スタンプ
151	4	4	9次	-	-	陶器(古瀬戸)	仏花瓶	後期Ⅳ段階	錆釉	錆釉			頸径3.8	
152	4	71	10次	D	Ⅰ	陶器(美濃)	湯呑	連房第8～9小期	灰釉	灰釉			底径3.5	
153	1	70	10次	D	Ⅰ	陶器(瀬戸)	秉燭	連房第9小期	鉄釉	鉄釉				
154	4	61	10次		Ⅰ	陶器(瀬戸美濃)	行平鍋	連房第10～11小期	無釉	灰釉				
155		72	10次	D	Ⅰ	陶器(肥前)	皿	17C中葉	灰釉(高台部露胎)	灰釉			底径4.0	
156		74	10次	D	Ⅰ	磁器(肥前)	染付碗	18C前半	(二重)網目文	網目文				
157		5	9次	-	-	磁器(瀬戸)	染付碗					(4.1)		
158		6	9次	-	-	磁器(不明)	青磁皿					(0.9)		
159	6	73	10次	D	Ⅰ	磁器(瀬戸)	染付碗						底径4.2	
160	3	62	10次		Ⅰ	土師器	内耳鍋							外スス付着
161		50	9次		Ⅰ・Ⅱ	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	近世	錆釉	錆釉				クシ目細かい
162		76	10次	D	Ⅰ	陶器(不明)	不明	–						
163		75	10次	石垣前	表土	銅製品	不明	–						内側に鉄錆
164		2	試掘	本丸北堀南T	5層	土師器	皿	B1			(2.1)			
165	2	1	試掘	本丸北堀		磁器(瀬戸?)	染付碗	19C			7.8	(5.7)		
408		62	12次	A	近世整地層(上)	灰釉陶器	椀	6新～7中						
409		61	12次	A	近世整地層(上)	陶器(瀬戸美濃)	香炉?	不明	灰釉?	無釉			底径8.8	
410		63	12次	A	近世整地層(上)	鉄製品	鉄釘	–						
411		64	12次	A	近世整地層	磁器(中国)	染付鉢							
412		65	12次	A	近世整地層	鉄製品	鉄釘	–						
413		123	12次	A	近世整地層	鉄製品	鉄釘	–						
414		124	12次	A	近世整地層	鉄製品	鉄釘	–						

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	調査区	遺構・層位	種類	器種	分類・年代	外面	内面	口径	器高	その他　法量	備考
415	3	122	12次	A	近現代整地層	土師器	甕?							
416	3	120	12次	A	近現代整地層	須恵器	杯身	美濃須衛Ⅲ3						
417		116	12次	A	近現代整地層	須恵器	有台杯	Ⅳ						
418		101	12次	A	近現代整地層	須恵器	高杯orはそう	美濃須衛7C						
419		111	12次	A	近現代整地層	灰釉陶器	椀?							
420	3	100	12次	A	近現代整地層	灰釉陶器	Ⅲ	7中～新						
421		94	12次	A	近現代整地層	山茶碗(尾張型)	鉢	5型式					底径7.4	内面摩耗
422		86	12次	A	近現代整地層	山茶碗(尾張型)	碗	6型式						
423		102	12次	A	近現代整地層	山茶碗(尾張型)	鉢	6型式						
424		72	12次	A	近現代整地層	山茶碗(東濃型)	碗	大洞東or脇之島						
425		70	12次	A	近現代整地層	山茶碗(東濃型)	碗	生田						
426	3	89	12次	A	近現代整地層	山茶碗(東濃型)	碗	生田						
427		66	12次	A	近現代整地層	陶器(古瀬戸)	緑釉小皿	後期Ⅰ段階	灰釉(腰下無釉)	灰釉				
428		68	12次	A	近現代整地層	陶器(古瀬戸)	擂鉢	後期Ⅳ段階新	錆釉	錆釉				
429	4	84	12次	A	近現代整地層	陶器(大窯)	茶入	大窯1～2段階	鉄釉(腰下錆釉)	鉄釉			底径3.0	
430	4	75	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	B1			12.0	1.6		
431	4	85	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	B1						
432	4	81	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	B1			11.8	1.6		
433	4	76	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	B2a						赤彩?
434	4	80	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	B2a			15.0	2.1		
435	4	83	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	B2b						体部穿孔
436	5	108	12次	A	近現代整地層	陶器(大窯)	天目茶碗	大窯4段階後半						
437		71	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	丸Ⅲ	連房第1小期	長石釉	長石釉				
438		79	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	丸Ⅲ	連房第1～2小期	長石釉	長石釉				
439		88	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	反Ⅲ	連房第1～2小期	灰釉	灰釉			底径6.2	
440	5	78	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	鉄絵Ⅲ	連房第1～2小期	灰釉	灰釉(鉄絵)				
441	5	112	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	折縁鉄絵鉢	連房第1～2小期		鉄絵				
442		82	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	連房第1～2小期	錆釉	錆釉			底径10.2	
443	5	104	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	黄瀬戸鉢	連房第2小期	灰釉	灰釉(緑釉で絵)				
444	5	90	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	鉄絵鉢	連房第2小期						
445	5	117	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	連房第2小期	錆釉	錆釉				
446	5	77	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	連房第2小期	錆釉	錆釉				
447	5	121	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	香炉?	不明	灰釉?	無釉				409と同一?
448		67	12次	A	近現代整地層	陶器(瀬戸美濃)	香炉?	不明	灰釉?	灰釉?				409と同一
449		69	12次	A	近現代整地層	陶器(不明)	(碗)	-					底径6.6	
450		107	12次	A	近現代整地層	磁器(中国)	染付鉢							
451		91	12次	A	近現代整地層	磁器(肥前?)	染付猪口	17C後半?					底径3.6	
452		98	12次	A	近現代整地層	磁器(瀬戸)	染付碗							
453		106	12次	A	近現代整地層	磁器(瀬戸美濃)	染付小杯							
455		119	12次	A	近現代整地層	磁器(瀬戸美濃)	染付碗							
456		109	12次	A	近現代整地層	磁器(瀬戸美濃)	白磁小杯							
457		110	12次	A	近現代整地層	磁器(瀬戸美濃)	白磁小杯							
458		118	12次	A	近現代整地層	磁器(瀬戸美濃)	白磁小杯		絵		5.2			
459		96	12次	A	近現代整地層	磁器(瀬戸美濃)	白磁碗							
461		92	12次	A	近現代整地層	陶器(常滑)	(甕)							
462		73	12次	A	近現代整地層	陶器(不明)	小Ⅲ							被熱
463		93	12次	A	近現代整地層	陶器(不明)	鉢?		緑釉?	緑釉?				
464		113	12次	A	近現代整地層	焼塩壺	焼塩壺							
465		115	12次	A	近現代整地層	焼塩壺	焼塩壺							
466		97	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	C2(近世)						
467		99	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	C2(近世)						
468		103	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	C2(近世)			8.0			
469	6	105	12次	A	近現代整地層	土師器	Ⅲ	C2(近世)			(10.0)			
470	3	74	12次	A	近現代整地層	土師器	不明							
471		114	12次	A	近現代整地層	土製品	土錘	-						
472		16	12次	A	鉄塔攪乱	土師器	Ⅲ	B2a						小法量
473		17	12次	A	鉄塔攪乱	土師器	Ⅲ	B2a						小法量
474		18	12次	A	鉄塔攪乱	土師器	Ⅲ	B2a						大法量

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	調査区	遺構・層位	種類	器種	分類・年代	外面	内面	口径	器高	その他　法量	備考
475		19	12次	A	鉄塔攪乱	土師器	皿	B2a						大法量
476		20	12次	A	鉄塔攪乱	土師器	皿	B2b						
477		40	12次	A	東端攪乱	山茶碗(尾張型)	碗	6型式						
478		46	12次	A	東端攪乱(鉄塔)	山茶碗(尾張型)	碗	6型式						
479		41	12次	A	東端攪乱	山茶碗(東濃型)	碗	生田						
480	4	37	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B1						
481		38	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B1						
482		39	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B1						
483	4	33	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B2a						
484		34	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B2a						大法量
485		35	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B2a						大法量
486		36	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B2a						
487		47	12次	A	東端攪乱(鉄塔)	土師器	皿	B2a						大法量
488		48	12次	A	東端攪乱(鉄塔)	土師器	皿	B2a						大法量
489	4	31	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B2a			9.5	1.6		
490		32	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B2a			(16.0)			
491		49	12次	A	東端攪乱(鉄塔)	土師器	皿	B2b						
492	4	30	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	B2b						大法量
493		29	12次	A	東端攪乱	土師器	皿	C2						
494	5	45	12次	A	東端攪乱	陶器(瀬戸美濃)	黄瀬戸鉢	連房第1小期	灰釉	灰釉				
495	5	51	12次	A	東端攪乱	陶器(信楽)	(甕)		飴釉	飴釉				
496		42	12次	A	東端攪乱	磁器(中国)	青磁(鉢)							
497		43	12次	A	東端攪乱	磁器(肥前)	染付蓋	19C前半		松竹梅			高台径2.7	
498		44	12次	A	東端攪乱	磁器(瀬戸美濃)	白磁小杯							
499	3	60	12次	A	攪乱	土師器	壺							
500		52	12次	A	攪乱	山茶碗(東濃型)	碗	生田						
501		50	12次	A	攪乱	陶器(古瀬戸)	天目茶碗	後期Ⅳ段階新	鉄釉	鉄釉				
502	4	53	12次	A	攪乱	陶器(大窯)	天目茶碗	大窯1段階						
503		58	12次	A	攪乱	陶器(大窯)	擂鉢	大窯2～3段階						
504		59	12次	A	攪乱	陶器(不明)	壺		鉄釉	鉄釉				
505		21	12次	A	攪乱	土師器	皿	B1						
506		23	12次	A	攪乱	土師器	皿	B2a			(14.0)			大法量
507		24	12次	A	攪乱	土師器	皿	B2a						
508		55	12次	A	攪乱	土師器	皿	B2a						大法量
509		56	12次	A	攪乱	土師器	皿	B2a						大法量
510		57	12次	A	攪乱	土師器	皿	B2a						大法量
511		22	12次	A	攪乱	土師器	皿	B2b						
512	4	25	12次	A	攪乱	土師器	皿	B2b						
513	5	26	12次	A	攪乱	陶器(大窯)	鉢	大窯4段階後半	長石釉	長石釉				鼠志野
514	5	27	12次	A	攪乱	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	連房第1小期	鉄釉	鉄釉				
515		54	12次	A	攪乱	磁器(中国)	染付碗	16C末～17C初						
516		28	12次	A	攪乱	土製品	土鈴	-						
517	3	128	12次	B	SX21	山茶碗(尾張型)	碗	5型式						
518	3	127	12次	B	攪乱	灰釉陶器	深椀?	7古～新		灰釉				
519		132	12次	B	攪乱	灰釉陶器	椀	6新～7古						
520	4	125	12次	B	攪乱	陶器(古瀬戸)	腰折皿	後期Ⅳ段階新	無釉	灰釉				
521	5	130	12次	B	攪乱	陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	連房第1小期	錆釉	錆釉				
522	4	131	12次	B		陶器(古瀬戸)	擂鉢	後期Ⅳ段階新	錆釉	錆釉				
523		126	12次	B		陶器(瀬戸美濃)	擂鉢	連房第1小期						
524	6	129	12次	B		磁器(中国)	染付小杯	16C末～17C初						
593		158	13次	a	近世整地層	須恵器	有台杯	尾張?						
594	3	159	13次	a	近世整地層	山茶碗(東濃型)	碗	生田						
595		166	13次	a東	近世整地層	陶器(古瀬戸)	擂鉢	後期Ⅳ段階新	錆釉	錆釉				
596		148	13次	a東	近世整地層	陶器(大窯)	丸皿	大窯2段階	灰釉	灰釉	10.5			
597	5	147	13次	a東	近世整地層	陶器(美濃)	壺	連房第1～4小期	鉄釉(腰下無釉)	鉄釉				598と同一か
598	5	2	13次	a	近世整地層	陶器(美濃)	壺	連房第1～4小期	鉄釉	鉄釉				597と同一か
599		14	13次	a	近世整地層	陶器(不明)	不明	-						
600		146	13次	a東	近世整地層	磁器(中国)	天目茶碗		鉄釉(口灰釉)	鉄釉(口灰釉)				被熱

第8表　遺物観察表(土器類5)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	調査区	遺構・層位	種類	器種	分類・年代	外面	内面	口径	器高	その他　法量	備考
601		135	13次	a東	近世整地層	鉄製品	鉄釘	-					残長3.1, 体0.6×0.5, 頭2.4×2.2	
602		136	13次	a東	近世整地層	鉄製品	鉄釘	-					残長5.5, 体0.9×0.7	
603		9	13次	a	近現代整地層	土師器	Ⅲ	B1						
604		1	13次	a	近現代整地層	土師器	Ⅲ	B2a						
605	6	12	13次	a	近現代整地層	磁器(瀬戸)	染付碗	連房第10～11小期						
607		185	13次	a東	近現代整地層	陶器(常滑?)	甕		文様					
608		165	13次	a西	近現代整地層	鉄製品	鉄釘	-					残長7.3, 体0.7×0.6	
609		3	13次	a	表土	灰釉陶器	椀							
610		8	13次	a	表土	灰釉陶器	椀							
611		171	13次	a	表土	灰釉陶器	Ⅲ	7中～新						
612	3	164	13次	a西	清掃中	山茶碗(尾張型)	Ⅲ	5型式						
613	4	4	13次	a	表土	陶器(古瀬戸)	四耳壺	後期Ⅳ段階	灰釉					
614	5	172	13次	a	表土	陶器(瀬戸)	瓶掛	連房第8小期	錆釉	錆釉				
615	6	5	13次	a	表土	磁器(肥前)	染付Ⅲ	18C前半						
616		173	13次	a	表土	磁器(肥前系)	染付碗	19C						
617		167	13次	a東	表土	磁器(中国?)	染付Ⅲ							
618		150	13次	b	SA12東裾崩落礫層	須恵器	甕	猿投?Ⅳ?	タタキ	当具痕磨消				
619		133	13次	b	SA12東裾崩落礫層	陶器(不明)	不明	-						
620	3	149	13次	b	SA12東裾流土	土師器	壺						底径2.6	
621		134	13次	b	SA12東裾流土	鉄製品	鉄釘	-					残長10.6, 体1.2×1.0	
622	6	151	13次	b	SA12東裾表土	磁器(肥前)	染付碗	18C後半～19C					底径3.6	波佐見窯
623		179	13次	b	SA12東撹乱	土師器	Ⅲ	C2						
624		178	13次	b	SA12東撹乱	土製品	不明	-						
625	3	144	13次	b	SA12北裾黄色粘質土	山茶碗(東濃型)	碗	大洞東or脇之島						
626		139	13次	c	SA12北裾黄色粘質土	鉄製品	鉄釘	-					残長4.7, 体0.7×0.6, 頭2.4×1.6	
627	7	140	13次	c	SA12北裾黄色粘質土	鉄製品	鉄板	-					残長2.4, 幅2.9,厚0.2	
628	7	141	13次	c	SA12北裾黄色粘質土	鉄製品	鉄板	-					残長2.3, 幅2.9,厚0.1	釘2個付着
629	7	142	13次	c	SA12北裾黄色粘質土	鉄製品	鉄釘	-					長5.5, 体0.6×0.5, 頭2.6×2.3	
630	7	143	13次	c	SA12北裾黄色粘質土	鉄製品	鉄釘	-					長5.9, 体0.8×0.6	
631		170	13次	c	SA12北裾礎石覆土	鉄製品	円板	-					径1.9,厚0.5	
632		162	13次	c	SV20,21抜取痕	須恵器	碗?	Ⅴ1						
633	3	163	13次	c	SV20,21抜取痕	灰釉陶器	椀						底径6.8	
634		174	13次	c	SA12北裾流土	灰釉陶器	椀	6新～7中						
635	4	145	13次	b	SA12北裾流土	陶器(古瀬戸)	腰折Ⅲ	後期Ⅳ段階新	灰釉	灰釉				
636		157	13次	c	SA12北裾流土	磁器(肥前)	染付湯呑	18C	鶴文					コンニャク印判?
637	5	154	13次	c	SA12北裾表土	陶器(瀬戸)	擂鉢	連房第5小期	錆釉	錆釉				
638		169	13次	c	SA12北撹乱	陶器(不明)	(Ⅲ)	-	錆釉	錆釉				焼締
639	5	7	13次	c	SX24	陶器(美濃)	火鉢	連房第8～11小期	鉄釉	錆釉				
640		155	13次	c	SX24覆土	須恵器	蓋	Ⅴ						
641		156	13次	c	SX24覆土	磁器(瀬戸)	染付端反湯呑	連房第9小期						
642		10	13次	c	SA12崩落礫	山茶碗(尾張型)	碗	5型式						
643	3	153	13次	c	SA12西裾崩落礫層	山茶碗(尾張型)	碗	4型式						内外面黒色付着物
644		152	13次	c	SA12西裾崩落礫層	陶器(瀬戸)	擂鉢	連房第5～7小期	錆釉	錆釉				
645	3	175	13次	c	SA12西裾流土	須恵器	蓋	戦内系4-5						
646		161	13次	c	SA12西裾流土	土師器	Ⅲ	B1						
647		180	13次	c	SA12西裾流土	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	連房第1小期	鉄釉	鉄釉				

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	調査区	遺構・層位	種類	器種	分類・年代	外面	内面	口径	器高	その他　法量	備考
648		11	13次	c	SA12流土	磁器(肥前)	広東碗	18C末～19C初						
649		160	13次	c	SA12西裾流土	磁器(肥前)	青磁碗	17C後半～18C前半						
650	7	137	13次	c	SA12西裾流土	銅製品	銅釘	–					残長2.5, 体0.6×0.3, 頭0.9×0.6	
651		138	13次	c	SA12西裾流土	鉄製品	鉄釘	–					残長7.8, 体0.7×0.7	
652		181	13次	c拡	流土	須恵器	有台盤	Ⅳ3						
653		182	13次	c拡	流土	須恵器	有台盤	Ⅳ3						
654		168	13次	b,c	流土	山茶碗(東濃型)	皿	5型式併行						
655	5	13	13次	c	流土	陶器(美濃)	丸皿	連房第3～4小期	鉄釉	鉄釉				
656		177	13次	c拡	流土	磁器(中国)	白磁						底径3.9	
657		183	13次	c	表土	陶器(美濃)	丸碗	連房第5～9小期	灰釉	灰釉				
658	5	6	13次	c	表土	陶器(美濃)	土瓶	連房第8～11小期		錆釉				
659		184	13次	c	攪乱	石製品	砥石	–						
888	6	27	14次	d北	流土	焼塩壺	焼塩壺				5.2			
889		25	14次	d	表土	陶器(古瀬戸)	擂鉢	後期Ⅳ段階新	錆釉	錆釉				
890	5	24	14次	d	表土	陶器(美濃)	小碗	連房第8～9小期	灰釉(高台無釉)	灰釉			高台径3.3	
891	3	28	14次	e	近現代整地層	山茶碗(尾張型)	鉢	4型式						
892	5	29	14次	e	近現代整地層	陶器(瀬戸)	擂鉢	連房第5小期	鉄釉	鉄釉				
893	5	30	14次	e	近現代整地層	陶器(京信)	碗		灰釉(鉄絵)	灰釉				
894		31	14次	e	近現代整地層	土製品	土錘	–					長4.1,径0.8	
895	7	32	14次	e	近現代整地層	鉄製品	鉄釘	–					長13.6, 体1.0×0.9	
896	3	33	14次	e	攪乱	灰釉陶器	皿	6新～7古						
897		37	14次	e	攪乱	陶器(美濃)	小碗	連房第8～9小期	灰釉(高台無釉)	灰釉			高台径3.9	
898		16	14次	e西	SK8	鉄製品	鉄釘	–					長8.5, 体0.6×0.5	
899	6	14	14次	e西	崩落礫	磁器(瀬戸美濃)	染付小杯	明治以降						
900	3	15	14次	e西	SX26覆土	須恵器	甕	猿投7C代						
901	5	21	14次	e西	SX26覆土	陶器(瀬戸美濃)	染付皿	連房第11小期					高台径5.1	
902		20	14次	e西	SX26覆土	鉛製品	銃弾	–					長2.5,径1.4	
903	5	9	14次	e西	流土	陶器(瀬戸美濃)	練鉢	連房第8～9小期	灰釉	灰釉				
904	5	11	14次	e西	流土	陶器(美濃)	土瓶	連房第10～11小期	鉄釉	灰釉				
905	6	42	14次	e西	流土(ⅡB2)	陶器(瀬戸)	瓶掛	連房第9小期	錆釉 (緑釉・上野釉流し)	錆釉 (緑釉・上野釉流し)				
906	5	10	14次	e西	流土	陶器(瀬戸)	瓶掛	連房第9小期	?	?				
907	6	50	14次	e西	流土(ⅡB1)	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第10～11小期	鉄釉	鉄釉				
908	6	69	14次	e西	流土(ⅡB2)	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第8～11小期	錆釉	鉄釉				
909	2	12	14次	e西	流土	陶器(不明)	染付碗	–						
910	2	13	14次	e西	流土	磁器(瀬戸美濃)	染付蓋							
911	3	1	14次	e西	表土	土師器	壺	柳ヶ坪						
912		4	14次	e西	表土	陶器(古瀬戸)	釜	後期Ⅳ段階	錆釉(スス付着)	無釉				
913		71	14次	e西	表土	陶器(大窯)	祖母懐壺	大窯	鉄釉	鉄釉(スス付着)				内面にスス付着
914	4	3	14次	e西	表土	土師器	皿	B2b						
915	5	72	14次	e西	表土	陶器(美濃)	丸碗	連房第5～6小期	灰釉(腰下無釉)	灰釉			高台径5.3	
916	5	80	14次	e西	表土	陶器(美濃)	小碗	連房第8～9小期	灰釉	灰釉	9.1			
917		73	14次	e西	表土	陶器(美濃)	小碗	連房第8～9小期	灰釉	灰釉	9.4	4.8	高台径4.1	被熱?
918		74	14次	e西	表土	陶器(美濃)	小碗	連房第8～9小期	灰釉	灰釉				被熱?
919		75	14次	e西	表土	陶器(美濃?)	碗	連房		灰釉				
920		76	14次	e西	表土	陶器(美濃)	灯明皿	連房第10～11小期		灰釉				
921		6	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	擂鉢	連房第5～7小期	錆釉	錆釉				
922	5	70	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	擂鉢	連房第10～11小期	錆釉	錆釉				
923	5	5	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	半胴	連房第8～9小期	鉄釉	鉄釉				
924	2	41	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	瓶掛	連房第8小期	錆釉(上野釉流し)	錆釉(口縁上野釉)	30.6			
925	2	43	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	瓶掛	連房第9小期	緑釉	錆釉(緑釉流し)				
926	6	53	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第8小期	鉄釉	鉄釉				
927	6	52	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第8小期	鉄釉	鉄釉				

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	調査区	遺構・層位	種類	器種	分類・年代	外面	内面	口径	器高	その他　法量	備考
928		45	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第9小期	鉄釉(底無釉)	飴釉			底径23.6	
929	6	47	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第9小期	鉄釉	錆釉(口縁鉄釉)	30.6			
930	6	51	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第9小期	鉄釉	鉄釉(鉄釉流し)				
931	6	48	14次	e西	表土	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第10～11小期	鉄釉	錆釉流し				
932	2	7	14次	e西	表土	磁器(瀬戸)	染付湯呑	19C						
933	6	8	14次	e西	表土	磁器(肥前?)	鉢(・火入)		瑠璃釉	無釉				
934		77	14次	e西	表土	陶器(常滑)	甕							「赤物」
935		17	14次	e西	表土	銅製品	飾り金具	-					長3.5, 幅1.6,厚0.5	
936		18	14次	e西	表土	銅製品	不明	-					長4.2, 幅2.5,厚0.1	
937	2	38	14次	f	サブトレ黄色粘質土	磁器(瀬戸)	染付端反湯呑	連房第10小期				5.3		
938	6	39	14次	f	サブトレ黄色粘質土	磁器(瀬戸)	染付湯呑	19C			7.0			
939		40	14次	f	サブトレ黄色粘質土	鉄製品	鉄釘	-					残長7.8, 体0.6×0.5	
940		99	14次	f	崩落礫	鉄製品	鉄釘	-					長20.7, 体0.6×0.5	
941	3	62	14次	f	流土(Ⅱ1)	山茶碗(尾張型)	碗	6型式					高台径7.5	
942	4	68	14次	f	流土(Ⅱ1)	陶器(古瀬戸)	緑釉小皿	後期Ⅳ段階	口縁灰釉	口縁灰釉				
943	2	54	14次	f	流土(Ⅱ1)	陶器(瀬戸)	擂鉢	連房第9小期	錆釉	錆釉	36.0	15.3	底径16.8	
944	2	44	14次	f北	流土(Ⅱ2)	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第10～11小期	鉄釉(底無釉)	錆釉ハケ塗り後上半鉄釉	29.5	14.4	底径22.5	
945	6	88	14次	f北	流土(Ⅱ2)	磁器(瀬戸)	染付湯呑	18C末						
947	6	87	14次	f北	流土(Ⅱ2)	磁器(不明)	染付湯呑	19C						焼成不良
948	5	79	14次	f	流土(Ⅱ)	陶器(美濃)	水鉢	連房第10～11小期	腰下錆釉→上半灰釉→うのふ釉・上野釉流し	灰釉	21.6	17.2	高台径13.2	
950	3	56	14次	f	近現代整地層	土師器	甕							
951		61	14次	f	近現代整地層	山茶碗(尾張型)	碗	5型式						
952	3	64	14次	f	近現代整地層	山茶碗(東濃型)	碗	明和						
953		67	14次	f	近現代整地層	陶器(瀬戸)	丸碗	連房第8小期	緑釉	灰釉				
954		81	14次	f	近現代整地層	陶器(美濃)	小碗	連房第8～9小期	灰釉	灰釉	8.9			
955	5	90	14次	f	近現代整地層	陶器(美濃)	広東碗	連房第10小期						
956	5	85	14次	f	近現代整地層	陶器(瀬戸)	大皿	連房第11小期	灰釉	灰釉				焼成不良
957	2	55	14次	e西,f	表土+近現代整地層	陶器(瀬戸)	瓶掛	連房第8小期	錆釉(緑釉流し)	錆釉(緑釉流し)				
958	6	49	14次	f	表土+近現代整地層	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第10～11小期	鉄釉	錆釉(口縁鉄釉)				
959		46	14次	e西,f	表土+近現代整地層	陶器(瀬戸)	火鉢	連房第8～11小期	鉄釉(底無釉)	錆釉ハケ塗り			底径21.8	
960		95	14次	f	近現代整地層	陶器(京信)	不明		灰釉	灰釉				
961		96	14次	f	近現代整地層	陶器(不明)	急須	-						
962		92	14次	f	近現代整地層	磁器(肥前)	染付徳利	19C前半						
963		97	14次	f	近現代整地層	石製品	砥石	-						
964	3	63	14次	f	表土	山茶碗(東濃型)	碗	窯洞					高台径5.2	
965	4	65	14次	f	表土	陶器(大窯)	擂鉢	大窯1段階	錆釉	錆釉				
966	4	60	14次	f	表土	陶器(大窯)	擂鉢	大窯3段階前半	錆釉	錆釉				
967		66	14次	f	表土	陶器(美濃)	徳利	連房第7～8小期		灰釉				
968		82	14次	-	-	陶器(美濃)	小碗	連房第8～9小期	灰釉	灰釉	8.8			
969	5	94	14次	f	表土	陶器(美濃)	鎧湯呑	連房第8～9小期	鉄釉(上半)・灰釉(下半)	鉄釉				
970	5	83	14次	f	表土	陶器(瀬戸)	碗?	連房第8～9小期	長石釉	長石釉			高台径3.8	
971		86	14次	f	表土	陶器(美濃)	鉢	連房	長石釉	長石釉				
972		84	14次	f	表土	陶器(不明)	土瓶	-	無釉	錆釉後灰釉			底径10.0	
973	6	89	14次	f	表土	磁器(瀬戸美濃)	染付小碗	19C						
974		93	14次	f	表土	磁器(瀬戸)	染付端反湯呑	連房第10小期						
975	2	98	14次	f	表土	銅製品	切羽	-					長4.1, 幅2.3,厚0.1	

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	瓦当	焼成	胎土
166	20	410	11次	Bw	Ⅲ3a層	軒平	E1	砂		
167		405	11次	Bw	Ⅲ3a層	軒平	B1	砂		
171	20	391	11次		Ⅲ3層(北西集中部)	軒平	B1	砂		
172		394	11次		Ⅲ3層(北西集中部)	軒平	B1	砂		
173	20	393	11次		Ⅲ3層(北西集中部)	軒平	E1	砂	不良	
183		100	9次		SX14	軒平	C1	砂	不良	
184		381	11次		SX14	軒平	BorC	砂		
185		163	10次		SX14	軒平	E1	砂	不良	
186	20	162	10次		SX14	軒平	B3	砂		
187	21	102	9次		SX14	軒平	S1	砂		
188		98	9次		SX14	軒平	S1	砂		
211		266	10次		SX16	軒平	C1	砂		
215		270	10次		SX17	軒平	B1	砂		
217		214	10次		SX18	軒平	B1	砂		
218	20	213	10次		SX18	軒平	B1	砂		
219		210	10次		SX18	軒平	C1	砂		
233		264	10次		SX20	軒平	B1	砂		
234		263	10次		SX20	軒平	B3	砂		
235		265	10次		SX20	軒平	S1	砂		
239		364	11次		SX13	軒平	B1	砂		
240	20	90	9次		SX13	軒平	C1	砂		
241	20	367	11次		SX13	軒平	F2	砂		
242	21	91	9次		SX13	軒平	J4	砂		
243	20	92	9次		SX13	軒平	F3	砂		雲母多混
244	21	93	9次		SX13	軒平	新?	(砂)		
245		365	11次		SX13	軒平	E1	砂	不良	
263		343	10次	D	Ⅳ層	軒平	J4	砂		
268		320	10次		Ⅲ2層(SX15下)	軒平	B1	砂		
269		73	9次	B	Ⅲ2層	軒平	C1	砂		
270	20	423	11次	Be	Ⅲ2層	軒平	D2	砂		雲母・気泡多混
271	20	413	11次	Be	Ⅲ2層	軒平	G3	砂		
272	20	70	9次		Ⅲ2層	軒平	J1	砂		
273		74	9次	C	Ⅲ2層	軒平	S1	砂		
274	21	69	9次		Ⅲ2層	軒平	K7	キラコ		
284		424	11次	Bw	Ⅲ2層	軒塀	C	キラコ		
287	20	206	10次		SX15	軒平	G4	砂		
288		198	10次		SX15	軒平	J4	砂	不良	
289	20	207	10次		SX15	軒平	H2	砂		
290	21	205	10次		SX15	軒平	Q3	砂	不良	
291	21	199	10次		SX15	軒平	K11	キラコ		
308	21	384	11次		SX19d	軒平	O3	砂(雲母混)		
309		380	11次		SX19	軒平	B1	砂		
313	22	487	11次		SX19	軒塀	C			
316	20	429	11次	Bw	Ⅲ1層	軒平	G5	砂		
317		430	11次	Bw	Ⅲ1層	軒平	K5	キラコ		
318		21	9次		Ⅲ1層	軒平	K7	キラコ		マーブル状
319	21	24	9次		Ⅲ1層	軒平	R1	キラコ		K類似
320		432	11次	Ce	Ⅲ1層	軒平	N3	キラコ		
321	21	427	11次	Be	Ⅲ1層	軒平	N1	キラコ		
322	21	428	11次	Be	Ⅲ1層	軒平	N6	キラコ		白粒混
323	21	245	10次		Ⅲ層	軒平	N3	キラコ		
341	22	20	9次		Ⅲ1層	軒塀	C	キラコ		軒平K類似
342		433	11次	Ce	Ⅲ1層	軒塀	G	(キラコ)		
343		22	9次		Ⅲ1層	軒塀	G	キラコ		

第12表　遺物観察表(軒平瓦1-1)

報告番号	瓦当幅	瓦当高	瓦当厚	文様幅	文様高	瓦厚	面取	接合部調整	接合	刻印	備考
166	21.9	3.8	1.9	16.6	2.1	2.1	無	b	-		W22.1
167	-	3.3	1.5	-	2.0	1.4	無	a	2		
171	22.8	3.3	1.3	16.3	1.9	1.4	無	a	-		完形・被熱・L25.4,W22.8
172	22.8	3.3	1.2	16.2	2.0	1.2	無	b	-		完形・被熱・L25.1,W23.1
173	23.4	4.2	1.7	16.8	2.6	2.0	A	c	-		完形・L27.9,W23.7
183	-	3.9	1.1	-	2.0	1.8	無	a	3		
184	-	3.7	1.5	-	2.0	1.9	無	b	2		
185	-	4.0	2.2			1.8	A	c	-		
186	-	3.6	1.6	-	2.3	2.4	A	c	3		
187	25.4	3.2	1.9	17.8	1.7	2.0	A'	a	3		被熱・W25.5
188	-	3.0	2.1	-	1.8	2.1	A'	a	2		
211	-	3.9	1.1	-	1.9	1.7	無	a	2		
215	-	3.7	1.4	-	2.0	1.6	A	a	2		
217	23.0	3.5	1.9	16.8	2.1	1.8	無	b	-		L26.0,W23.2,H4.2
218	21.7	3.8	1.3	16.0	2.0	1.8	A	a	-		L25.5,W22.0,H4.2
219	-	3.5	1.7	-	1.9	1.6	C	b	2		W22.3,H4.1
233	-	3.9	1.4	-	2.0	1.8	A	a	2		
234	-	-	1.4	-	-	1.8	A	c	2		
235	-	3.0	1.5	-	1.7	1.9	A'	b	3		
239	22.4	3.2	1.6	15.7	1.8	1.8	A	a	2		L25.5,W22.5
240	21.6	3.4	1.7	15.2	1.7	1.5	A	b	-		L23.0,W21.6
241	-	4.4	1.8	19.1	2.3	1.7	A	c	-		W25.6
242	-	3.7	1.8	-	2.4	1.9	A	b	3	有	L27.5,W(25.6)
243	-	3.3	1.7	-	1.9	2.0	A	c	3		L29.2
244	-	3.1	2.0	-	1.7	1.8	A'	b	2		L28.4
245	-	4.2	1.3	-	2.7	2.1	A	c	3		
263	-	3.8	1.9	-	2.3	-	(B)	-	3		
268	-	3.3	1.4	-	2.0	1.6	A	a	-		
269	22.5	3.7	1.8	16.2	1.9	2.0	-	a	3		
270	-	4.1	1.6	16.6	2.6	1.9	無	a	2		軽量・L27.3,W(26.6)
271	-	-	2.7	-	-	2.0	A	c	2		
272	-	-	-	-	3.2	2.0	A	c	3		
273	-	2.9	-	-	1.7	2.0	A'	a	特殊		被熱
274	25.2	-	1.8	15.2	2.7	1.7	C	b	-		L27.5,W25.2
284	-	4.7	1.7	-	2.6	2.0	C	b	2		
287	-	3.9	1.5	-	2.2	1.8	B	b	3		
288	-	-	1.4	-	-	-	-	-	2	○−	
289	-	3.9	1.5	-	2.5	1.7	C	b	3		
290	-	4.1	-	-	2.5	1.7	無	b	3		
291	-	-	1.8	-	-	-	-	-	3		
308	24.0	4.3	1.7	14.7	2.0	2.1	AorC	c	3		
309	-	3.3	1.5	-	2.0	1.5	無	b	3		
313											
316	-	3.7	1.5	-	2.2	1.8	B	b	2		
317	-	4.1	1.5	-	2.3	1.8	C	b	2		
318	-	3.7	1.1	14.8	2.5	1.6	D	b	3		
319	-	4.2	1.6	-	2.9	1.9	(D)	b	3		
320	-	-	1.5	-	-	-	-	-	-		
321	23.9	4.5	1.6	14.9	2.8	1.7	C	b	-		L26.8,W25.3
322	23.7	3.8	2.5	14.8	2.1	1.7	A	c	-		W24.6
323	-	4.5	1.1	-	2.8	1.6	D	b	2		
341	-	4.4	1.6	-	2.7	2.1	C	b	-		
342	-	-	-	-	-	-	-	-	3		
343	-	-	-	-	-	2.5	CorD	b	3		

第13表　遺物観察表(軒平瓦1-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	瓦当	焼成	胎土
361		45	9次	B	Ⅱ層	軒平	B3	砂	不良	
362		457	11次	Bw	Ⅱ層	軒平	J1	砂		
363	20	286	10次		Ⅱ1層	軒平	G5	砂		
364	20	55	9次	C	Ⅱ層	軒平	F4	キラコ		
365	21	39	9次	B	Ⅱ層	軒平	K4	キラコ		マーブル状
386		41	9次	B	Ⅱ層	軒塀	(A)	砂(雲母混)		気泡多混
387		453	11次	Ce	Ⅱ2層	軒塀	G	(キラコ)		
388		458	11次	Be	Ⅱ層	軒塀	I	キラコ		
389	22	56	9次	C	Ⅱ層	軒塀	F	キラコ		
401		340	10次	D	Ⅰ層	軒塀	(H)	キラコ		
402	22	9	9次		Ⅰ・Ⅱ層	軒塀	G	キラコ		
403		6	9次		Ⅰ層	軒塀	G	砂	不良	
404		8	9次		Ⅰ層	軒桟				
405		1	9次		Ⅰ層	軒桟				
406		7	9次		Ⅰ層	軒桟				
407		107	試掘	北堀		軒平	J5	砂		黒粒混
534		82	12次	A	Ⅱ4層	軒平	E1	砂		
535		92	12次	A	Ⅱ5層	軒平	J7	砂		
536		91	12次	A	Ⅱ5層	軒平	I1	砂		
537		80	12次	A	Ⅱ4層	軒平	(K8)	(砂)		
540	20	17	12次	B	SX22	軒平	G2	砂		
541		15	12次	B	SX22	軒平	G2	砂		
542		16	12次	B	SX22	軒平	J	(砂)		
547		7	12次	B	SX21	軒平	(J)	砂		
548		5	12次	B	SX21	軒平	I2	砂		
549		8	12次	B	SX21	軒平	I2	砂		
550		6	12次	B	SX21	軒平	K8	キラコ		
554		9	12次	B	SX21	軒(平)	V1	キラコ		
568		50	12次	Be	撹乱6	軒平	A2	不明		雲母多混
569		21	12次	Bw	撹乱5	軒平	B1	砂		
570		23	12次	Bw	撹乱5	軒平	C1	砂		
571		28	12次	Bw	撹乱4	軒平	D	砂		
572		49	12次	Be	撹乱6	軒平	D	砂		雲母多混
573		59	12次	Be	Ⅰ2層	軒平	G4	砂		
574		33	12次	Bw	撹乱3	軒平	I1	不明		
575		68	12次	Be	Ⅰ1層	軒平	I2	砂		
576	21	32	12次	Bw	撹乱3	軒平	J3	砂		
577		43	12次	B	撹乱2	軒平	(J4)	砂		
578		69	12次	Be	Ⅰ1層	軒平	J新	砂		
579		29	12次	Bw	撹乱4	軒平	K7	キラコ		
591		30	12次	Bw	撹乱4	軒塀	A	砂		
663		80	13次	SA12北	礫石覆土	軒(桟)		キラコ		
664		88	13次	SA12北	崩落礫	軒平	D2	砂		雲母多混
665		92	13次	SA12北	崩落礫	軒平	E1	砂		
667		97	13次	SA12北	流土	軒平	C2	砂		
668	20	119	13次	SA12北	流土	軒平	B4	砂		
669	20	118	13次	SA12北	流土	軒平	D4	砂(粗)		
670		93	13次	SA12北	流土	軒平	(J)	(砂)	不良	
671		95	13次	SA12北	流土	軒平	J4	砂		
672		117	13次	SA12北	流土	軒塀	A	砂		
673		94	13次	SA12北	流土	軒(桟)		(キラコ)		
675		87	13次	SA12北	表土	軒平	D1	砂		雲母多混
676		86	13次	SA12北	表土	軒平	J4	砂		
680		175	13次	SA12東	崩落礫	軒平	(B1)	砂		

第14表　遺物観察表(軒平瓦2-1)

報告番号	瓦当幅	瓦当高	瓦当厚	文様幅	文様高	瓦厚	面取	接合部調整	接合	刻印	備考
361	-	3.5	1.4	-	(2.5)	1.8	-	a	2		
362	-	4.6	1.5	-	2.8	-	B	-	3		
363	-	4.0	1.5	-	2.3	2.1	B	b	-		
364	-	3.8	1.7	-	2.3	2.0	無	c	3		
365	24.4	3.9	1.2	15.0	2.5	1.7	C	b	3		
386	-	4.0	1.7	-	2.4	2.1	-	b	(3)		やや軽量
387	-	5.3	2.0	-	3.4	-	-	-	3	○*(瓦当)	
388	-	5.1	1.5	-	3.2	2.0	C	-	3		
389	-	4.8	1.6	-	3.3	1.8	D	b	2		
401	-	5.8	2.2	-	3.4	2.8	-				
402	-	-	2.1	-	-	-	-	-	(3)	○米	
403	-	-	2.0	-	-	-	-	-	2		
404	-	4.6	1.6	-	1.8	1.7	D	b	2	○九	
405	-	-	-	-	-				-		
406	-	5.5	1.8	-	-	1.8	D	b	3		被熱
407	-	3.7	1.8	-	2.2	2.2	無	b	2		
534	-	4.0	2.2	-	2.3	-	A	c	3		
535	-	(3.7)	-	-	(2.2)	2.2	無	b	-		
536	-	4.5	1.8	-	2.8	-	(A)	-	3		
537	-	-	1.5	-	-	-	-	-	-		
540	-	4.2	1.8	15.2	2.2	1.9	無	b	-		被熱
541	-	4.5	1.6	-	2.3	1.9	A	b	3		
542	-	4.4	1.9	-	2.5	2.0	無	b	3		
547	-	4.3	1.6	-	2.7	-	無	-	3		
548	-	-	1.7	-	-	-	-	-	-		
549	-	3.6	-	-	2.5	-	A	b	3		548と同一個体?
550	-	4.4	1.5	-	2.7	-	C	c	3		
554	-	5.0	2.0	-	2.9	1.7	C	b	-		
568	-	-	1.7	-	-	-	-	-	-		
569	-	3.8	1.6	-	1.9	-	無	-	2		
570	-	3.4	1.6	-	1.8	-	無	b	-		
571	-	-	-	-	-	1.9	-	a	-		被熱
572	-	-	1.7	-	2.2	1.5	無	a	3		
573	-	3.8	1.4	-	2.3	1.9	A	b	3		
574	-	4.2	-	-	2.8	1.7	無	b	2		
575	-	3.7	-	-	2.4	1.9	-	a	2		
576	-	4.4	1.8	-	2.7	2.0	無	b	3		
577	-	4.7	1.8	-	2.6	1.8	A	b	-		
578	-	4.2	1.4	-	2.5	-	無	b	3		
579	-	4.2	1.4	-	2.7	1.7	無	c	3		
591	-	3.6	-	-	(2.0)	-	無	b	-		
663	-	-	1.8	-	-	-	-	-	(3)		
664	-	3.7	1.5	-	2.3	-	(B)	-	1		被熱
665	-	4.3	-	-	2.4	-	A	c	2		
667	-	3.1	2.4	-	2.1	-	-	c	2		顎部特殊
668	-	(3.2)	(1.5)	-	(2.1)	-	(B)	-	-		
669	-	4.2	-	-	2.1	-	A	b	-		
670	-	3.8	1.3	-	-	1.7	無	b	2		
671	-	4.0	1.5	-	2.5	-	-	-	2		
672	-	-	1.8	-	-	-	-	-	(3)		
673	-	4.6	1.8	-	2.6	1.6	D	b	2		
675	-	4.1	-	-	2.3	-	無	-	-		
676	-	4.5	-	-	2.7	1.7	B	c	3		
680	-	3.4	1.5	-	1.7	1.6	A	c	-		

第15表　遺物観察表(軒平瓦2-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	瓦当	焼成	胎土
681	20	174	13次	SA12東	崩落礫	軒平	C2	砂		
682		204	13次	SA12東	崩落礫	軒平	D2	砂		雲母多混
683	20	205	13次	SA12東	崩落礫	軒平	D2	砂		雲母多混
684		206	13次	SA12東	崩落礫	軒平	F1	砂	不良	
692	22	203	13次	SA12東	崩落礫	軒塀	B	砂		
715	20	155	13次	SA12東	流土	軒平	C3	砂	不良	
716	20	200	13次	SA12東	流土	軒平	F1	砂		
717		163	13次	SA12東	流土	軒平	G2	砂		
718		152	13次	SA12東	流土	軒平	J2	砂		
719		159	13次	SA12東	流土	軒平	J2	砂		
720		157	13次	SA12東	流土	軒平	K7	キラコ		
721	21	158	13次	SA12東	流土	軒平	K12	キラコ		
722		153	13次	SA12東	流土	軒平	不明	キラコ		
729		199	13次	SA12東	流土	軒塀	C	キラコ		
744		217	13次	SA12東	表土	軒平	B1	砂		
745		216	13次	SA12東	表土	軒平	F1	砂	不良	
746		215	13次	SA12東	表土	軒平	J2	砂		
747		286	13次	SA12東	撹乱	軒平	(I)	砂		
757		129	13次	SA12西	崩落礫	軒平	G4	砂		
758		128	13次	SA12西	崩落礫	軒平	G5	砂		
759		130	13次	SA12西	崩落礫	軒平	J3	砂		
760		127	13次	SA12西	崩落礫	軒平	R1	砂		
761		145	13次	SA12西	崩落礫	軒平	(S1)	砂		雲母多混
774		107	13次	SA12西	流土	軒平	S1	砂		
775		105	13次	SA12西	流土	軒平	K10	キラコ		
794		2	13次	a東	流土	軒平	B1	砂	不良	
795		5	13次	a東	流土	軒平	B1	砂		
796		9	13次	a東	流土	軒平	B1	砂		
797		1	13次	a東	流土	軒平	C1	砂	不良	
798	21	8	13次	a東	流土	軒平	J8	キラコ		
799		4	13次	a東	流土	軒平	S1	砂		
800		10	13次	a東	流土	軒平	K5	キラコ		
807		57	13次	a東	流土	軒塀	C	キラコ		
808		56	13次	a東	流土	軒塀	C	キラコ	不良	
809	22	7	13次	a東	流土	軒塀	G	キラコ		
810		3	13次	a東	流土	軒塀	G	キラコ		
814		42	13次	a東	近現代整地層	軒平	(J2)	砂		
815		40	13次	a東	近現代整地層	軒平	I2	砂		
824		73	13次	a西	撹乱	軒平	G2	砂		
825		77	13次	a	表土	軒平	J1-4	砂		
826		61	13次	a東	表土	軒平	N	キラコ		
831		75	13次	a	表土	軒桟		不明		
833		236	13次	b	表土・撹乱	軒平	D1	砂		雲母多混
839		238	13次	b	表土・撹乱	軒塀	A	砂		
840		237	13次	b	表土・撹乱	軒塀	C	キラコ		
847		249	13次	c拡	崩落礫	軒平	D1	砂		
852	20	263	13次	c	流土	軒平	I2	砂	不良	
855		264	13次	c	流土	軒塀	G	砂		
863		273	13次	c	鉄管撹乱2	軒平	D	砂	不良?	
864		254	13次	c	表土	軒平	I2	(砂)		
865		281	13次	c	鉄管撹乱2	軒平	J1	砂		
866		255	13次	c	表土	軒平	N2	キラコ		
867		280	13次	c	鉄管撹乱2	軒平	N3	キラコ		
868	21	274	13次	c	鉄管撹乱2	軒平	T1	キラコ		

第16表　遺物観察表(軒平瓦3-1)

報告番号	瓦当幅	瓦当高	瓦当厚	文様幅	文様高	瓦厚	面取	接合部調整	接合	刻印	備考
681	-	3.1	1.6	-	1.8	1.8	無	c	2		
682	-	4.0	-	-	2.5	1.9	(A)	a	-		被熱
683	-	4.2	-	-	2.6	1.8	無	a	(3)		
684	-	4.3	1.3	-	2.4	-	A	c	-		
692	-	3.8	1.9	-	2.4	2.3	無	b	3		
715	-	3.0	1.8	-	1.8	1.6	無	a	3		
716	-	4.4	1.3	-	2.4	-	-	-	3		
717	-	4.5	1.6	-	2.1	2.0	A	b	3		
718	-	3.9	2.0	-	2.7	2.0	(B)	c	2		
719	-	-	1.1	-	2.7	-	-	a	3		
720	-	-	1.5	-	-	-	-	-	3		
721	-	4.4	1.6	-	2.9	-	無	-	2		
722	-	4.1	-	-	2.5	1.6	無	b	3		
729	-	(4.5)	-	-	(2.8)	2.0	-	b	3		
744	-	3.6	1.7	-	2.0	1.7	無	a	2		
745	-	4.3	1.3	-	2.3	-	無	-	-		
746	-	-	-	-	-	-	無	a	3		
747	-	-	-	-	-	-	-	a	2		瓦当接合部やや強いナデ
757	-	3.9	1.8	-	2.4	1.9	(B)	c	(4)		
758	-	-	1.6	-	-	-	-	b	2		
759	-	-	-	-	-	2.1	A	c	3		
760	-	-	1.7	-	-	-	-	b	2		
761	-	-	-	-	-	1.9	A'	a	3		被熱・平瓦部のみ
774	-	3.2	1.5	-	1.9	2.4	A'	a	-		
775	-	-	2.0	-	1.5	-	-	c	3		
794	-	3.1	1.5	-	2.0	1.3	無	a	2		
795	-	3.1	1.2	-	2.0	1.6	無	b	2		
796	-	3.3	1.4	-	1.9	1.4	A	a	-		上辺面取
797	-	3.4	1.6	-	1.8	1.4	無	a	2		
798	-	5.4	2.2		3.3	2.3	無	b	-	○-	
799	-	2.8	2.0	-	1.7	1.8	A'	-	3		被熱
800	-	-	-	-	-	-	CorD	b	2		
807	-	4.4	1.3	-	2.9	-	C	-	3		
808	-	-	-	-	-	2.3	-	b	3		
809	-			-			C	b			
810	-	-	-	-	-	-	-	-	3		
814	-	-	1.5	-	-	-	-	-	(2)		被熱
815	-	4.2	2.0	-	2.8	2.0	(B)	b	3		
824	-	-	1.4	-	2.1	1.8	-	a	2		被熱?
825	-	-	-	-	-	-	-	(b)	2		
826	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
831	-	-	(1.7)	-	(1.7)	-	D	-	2		
833	-	4.0	1.8	-	2.5	2.0	無	b	-		
839	-	-	1.3	-	-	-	-	-	3		
840	-	4.5	1.7	-	2.8	-	D	c	3		
847	-	3.5	1.9	-	1.9	1.6	A'	b	2		
852	-	4.0	1.7	-	2.7	1.7	B	c	3		
855	-	-	1.8	-	-	-	-	-	3		
863	-	-	-	-	2.3	1.6	無	b	3		被熱?
864	-	(3.7)	-	-	(2.3)	1.9	-	c	2		
865	-	4.5	1.9	-	3.0	2.2	B	a	3		
866	-	4.1	1.6	-	2.4	1.9	(C)	b	2		
867	-	-	1.7	-	-	-	-	b	-	○-(瓦当)	
868	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

第17表　遺物観察表(軒平瓦3-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	瓦当	焼成	胎土
880		224	13次		表土・攪乱	軒平	D4	砂		
881		227	13次		表土・攪乱	軒平	F3	砂		
976	21	52	14次	d	SX28	軒平	U1	キラコ		
980		164	14次	d南	流土	軒平	K9	キラコ		
984		45	14次	d	表土	軒平	K7	キラコ		
985		46	14次	d	表土	軒平	K9	キラコ		
986		43	14次	d	表土	軒平	R1	キラコ		
987		42	14次	d	表土	軒平	U1	キラコ		
992		44	14次	d	表土	軒(桟)		キラコ		
1006		172	14次	e	近現代整地層	軒平	K5	キラコ		
1008		171	14次	e	攪乱	軒平	D2	砂		
1009		129	14次	e	攪乱	軒平	D2	砂		雲母・気泡混
1010	21	130	14次	e	攪乱	軒平	L2	キラコ		
1015	22	118	14次	e西	礫層下粘質土	軒(平)	V1	キラコ		
1018		57	14次	e西	SX26覆土	軒平	N3	キラコ		
1028		166	14次	e西	崩落礫	軒平	C1	砂		
1029	20	165	14次	e西	崩落礫	軒平	H1	砂		
1030		168	14次	e西	崩落礫	軒平	H2	砂		
1031		60	14次	e西	崩落礫	軒平	I2	砂		
1032	21	167	14次	e西	崩落礫	軒平	K1	砂		
1033	21	63	14次	e西	崩落礫	軒平	K8	キラコ		
1034	21	64	14次	e西	崩落礫	軒平	N2	キラコ		白粒混
1035		62	14次	e西	崩落礫	軒平	N2	キラコ		白粒混
1042	22	66	14次	e西	崩落礫	軒塀	I			
1043		61	14次	e西	崩落礫	軒桟		キラコ		
1044		65	14次	e西	崩落礫	軒桟	A			
1055	21	83	14次	e西	流土	軒平	K3	キラコ		
1056		84	14次	e西	流土	軒平	K8	キラコ		マーブル状
1057		81	14次	e西	流土	軒平	S1	砂		
1058		82	14次	e西	流土	軒平	N1	キラコ		白粒混
1059		169	14次	e西	流土	軒平	(L3)	キラコ		
1060		91	14次	e西	流土	軒平	不明			
1082		100	14次	e西	表土	軒平	D	砂		
1083		98	14次	e西	表土	軒平	G4	砂		
1084		99	14次	e西	表土	軒平	H2	不明		気泡・雲母混
1085		102	14次	e西	表土	軒平	J3	砂		
1086	21	101	14次	e西	表土	軒平	新	砂		
1092		103	14次	e西	表土	軒桟		キラコ		
1105		134	14次	f	崩落礫	軒平	B1	砂		
1106		135	14次	f	崩落礫	軒平	K	キラコ		
1116		144	14次	f	流土	軒平	S1	砂		
1117	21	143	14次	f	流土	軒平	K9	キラコ		
1118		174	14次	f	流土	軒平	K9	キラコ		
1131		173	14次	f	近現代整地層	軒平	N2	キラコ		
1132		153	14次	f	近現代整地層	軒平	不明	キラコ		
1134		155	14次	f	近現代整地層	軒塀	I	キラコ		
1137	20	157	14次	f	表土	軒平	J2	砂		

第18表　遺物観察表(軒平瓦4-1)

報告番号	瓦当幅	瓦当高	瓦当厚	文様幅	文様高	瓦厚	面取	接合部調整	接合	刻印	備考
880	-	3.5	-	-	2.0	1.7	無	b	-		
881	-	3.4	1.4	-	2.0	1.9	無	c	2		被熱?
976	-	4.6	1.6	14.1	2.7	1.5	C	b	2		
980	-	-	1.2	-	-	-	-	-	3		
984	-	3.8	1.6	-	2.4	-	無	b	3		
985	-	-	1.3	-	-	-	-	-	3		
986	-	4.3	2.0	-	2.8	1.9	無	b	3		
987	-	(4.9)	1.8	-	2.7	1.7	-	b	3		
992	-	4.7	1.5	-	2.5	1.7	無	b	-		
1006	-	4.1	1.3	-	2.3	-	C	a	(3)		
1008	-	4.3	-	-	3.0	2.0	-	b	2		胎土中に雲母多
1009	-	4.0	1.5	-	2.3	2.0	無	c	2		被熱
1010	-	4.2	1.9	-	2.4	-	C	b	3		
1015	-	4.6	1.6	-	2.7	1.8	D	b	3		
1018	-	-	1.3	-	-	-	-	-	3		
1028	-	3.3	1.2	-	1.8	1.4	A	a	-		
1029	-	3.8	1.7	-	2.7	1.7	無	b	2		瓦当接合部強いナデ
1030	-	3.9	1.1	-	2.7	1.7	無	b	2		
1031	-	4.2	1.6	-	2.6	1.8	-	b	3		
1032	-	-	1.7	-	-	-	-	-	3		
1033	-	4.0	1.4	-	2.3	1.8	C	c	3		
1034	-	4.2	1.6	-	2.5	1.7	無	b	-		
1035	-	4.1	1.7	-	2.4	-	無	-	3		
1042	-	5.2	1.7	-	3.2	2.0	無	b	3		
1043	-	-	1.3	-	-	-	-	-	-		
1044	-	5.2	1.7	-	2.7	1.6	無	b	2		
1055	-	-	1.3	-	-	1.5	-	b	-		
1056	-	4.5	1.5	-	2.8	1.8	無	b	-		
1057	-	3.6	1.2	-	1.7	1.9	A	a	2		
1058	-	4.5	1.5	-	2.9	1.8	C	b	3		
1059	-	-	1.5	-	-	1.8	D	b	-		
1060	-	-	-	-	-	1.5	-	-	-		被熱
1082	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
1083	-	4.2	1.9	-	2.2	2.8	C	a	-		
1084	-	3.9	-	-	2.6	2.2	-	b	2		
1085	-	-	1.8	-	-	-	-	-	3		被熱?
1086	-	-	1.4	-	-	-	-	-	3		
1092	-	-	1.6	-	-	-	-	-	-		
1105	-	3.4	-	-	2.0	-	無	-	2		
1106	-	4.1	1.3	-	2.3	1.6	C	a	3		
1116	-	2.9	-	-	1.8	-	A	a	3		被熱
1117	-	3.9	1.8	-	2.1	1.8	C	b	3		
1118	-	3.8	1.7	-	2.2	-	無	-	-		
1131	-	4.2	1.6	-	2.4	1.8	D	b	-		
1132	-	-	1.9	-	-	-	-	-	2		
1134	-	-	1.6	-	-	-	-	-	-		
1137	-	4.4	-	-	2.7	-	A	-	3		

第19表　遺物観察表(軒平瓦4-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	分類	瓦当	焼成	胎土
168		408	11次	B9	Ⅲ3a層	R15-1	砂	硬質	黒粒多混・気泡混
169		409	11次	B9	Ⅲ3a層	R15-1	砂	やや軟質	気泡混
170		407	11次	Bw	Ⅲ3a層	L(13-6)	砂	やや軟質	雲母・気泡混
174		387	11次		Ⅲ3層(北西集中部)	L13-6	砂	やや軟質	黒粒混
175		78	9次	B	Ⅲ3層	R(16-1)	砂	標準	雲母混
176		259	10次		Ⅲ3層	L12-6	砂	標準	気泡混
177		390	11次		Ⅲ3層(北東集中部)	L16-7	砂	やや硬質	
178		76	9次	B	Ⅲ3層	R15-1	砂	標準	黒粒・気泡混
179		388	11次		Ⅲ3層(北西集中部)	R14-1	砂	標準	雲母混
180		75	9次		Ⅲ3層	L16-3	砂		
189		96	9次		SX14	L13-6	砂	やや硬質	黒粒多混
190		166	10次		SX14	L13-6	砂	やや軟質	雲母混・気泡多混
191	25	95	9次		SX14	L12-b	砂		
192		382	11次		SX14w	L	砂	やや軟質	雲母・気泡混
212	23	267	10次		SX16	L13-6(古)	砂	やや軟質	気泡多混
213		268	10次		SX16	L13-6	砂	やや硬質	気泡混
214		269	10次		SX16	L13-6	砂	やや硬質	気泡混
216		271	10次		SX17	L13-6	砂	標準	雲母・気泡混
220		218	10次		SX18	L13-6	砂	標準	気泡混
221		236	10次		SX18	L13-6	砂	標準	
222	23	219	10次		SX18	L13-6	砂	標準	
223	22	237	10次		SX18	L16-5	砂	やや軟質	
236		261	10次		SX20	L12-4	砂	やや軟質	気泡混
237		262	10次		SX20	L(13-6)	砂	やや軟質	
238		260	10次		SX20	L	(砂)	やや軟質	気泡混
246		373	11次		SX13	L13-6	砂	やや硬質	気泡混
247	26	372	11次		SX13	R15-1	砂	標準	黒粒多混・気泡混
248	24	369	11次		SX13	L12-6	砂	やや硬質	雲母混
249	24	371	11次		SX13	L12-7	砂(雲母混)	やや硬質	
250		89	9次		SX13	L12-b	砂		
251	25	370	11次		SX13	L12-i	砂	やや硬質	気泡混
264		83	9次	A	Ⅳ層?	L11-(1)	砂		
265		81	9次	A	Ⅳ層	L12-(16)	キラコ		
266		342	10次	D	Ⅳ1層	R16-3	不明	硬質	黒粒多混
267		80	9次	A	Ⅳ層	L12-10	キラコ	やや硬質	白粒混・気泡多混
275	22	416	11次	Be	Ⅲ2層	L16-4	砂	やや硬質	
276		315	10次		Ⅲ2(SX15下)	L13-6	砂	やや軟質	気泡混
277		314	10次		Ⅲ2(SX15下)	R16-1	砂	やや硬質	雲母・気泡多混
278		417	11次	Be	Ⅲ2層	R15-1	砂	やや軟質	雲母・気泡混
279	22	67	9次		Ⅲ2層	L16-2	砂(雲母混)		
280		313	10次		Ⅲ2層	L(16-7)	砂	標準	
281		421	11次	Be	Ⅲ2層	L12-10	キラコ	硬質	気泡混
282		72	9次	B	Ⅲ2層	L12-12	キラコ		
283		255	10次		Ⅲ2(SX15下)	L12-10	キラコ	やや硬質	黒粒・雲母混
292		174	10次		SX15	L16-4	砂	やや硬質	
293		191	10次		SX15	L13-a	(砂)	標準	黒粒混・雲母・気泡多混
294	23	175	10次		SX15	L13-9	砂	やや硬質	黒粒多混・気泡混
295	22	189	10次		SX15	L16-7	砂	硬質	
296		165	10次		SX15	L16-7	砂	標準	気泡多混
297	24	188	10次		SX15	L12-3	砂	やや硬質	
298		173	10次		SX15	L(13-9)	キラコ	標準	
299	25	187	10次		SX15	L12-c	キラコ	標準	雲母混
300	26	190	10次		SX15	R14-2	キラコ	硬質	黒粒多混
301		192	10次		SX15	-	キラコ	やや硬質	黒粒・雲母多混

第20表　遺物観察表(軒丸瓦1-1)

報告番号	瓦当径	文様径	瓦当厚	瓦厚	珠文径	珠文間	面取幅	接合	長さ	幅	高さ	備考
168	14.0	10.0	–	1.9	1.0	0.5-1.0	無	1				
169	14.5	11.0	2.0	–	0.9	0.9	無					
170	14.5	10.5	1.7	–	1.0	0.8	無					
174	14.5	10.5	1.9	–	1.1	0.8	無					
175	17.0	12.0	2.6	–	1.0	0.8	無	1				軽量
176	14.5	11.0	2.0	–	1.1	1.1	0.4	–				
177	16.0	11.5	2.1	–	0.7	0.9	0.5					
178	15.0	10.5	1.7	2.5	1.0	0.9	無	–				いびつ
179	14.5	11.0	1.8	–	1.2	0.6	無					
180	15.0	11.0	1.9	–	0.9	0.8	0.3	1				
189	14.0	10.0	1.6	1.7	1.1	0.8	無	–				
190	16.0	10.5	–	2.2	1.1	0.8	無	1		15.6	7.0	
191	14.0	10.0	–	–	1.0	1.3	無	1				
192	(14.0)	(10.5)	–	–	0.8	1.5	無					
212	15.5	10.5	2.1	2.4	1.0	1.0	無	–		15.8		
213	15.0	10.0	–	2.3	1.2	1.2	無	1	29.1	15.3	8.3	
214	15.5	10.5	–	2.6	1.2	0.8	無	–	28.1	15.6	8.3	
216	14.5	10.5	2.1	–	1.1	0.8	無	1				
220	14.5	10.0	1.8	1.8	1.0	1.0	無	–	25.9	14.5	6.9	
221	13.5	10.5	1.8	1.7	1.0	0.8	無	1				被熱
222	15.0	10.5	2.0	1.9	1.0	0.8	無	–	25.6	14.7	7.5	
223	15.0	11.0	1.9	1.8	0.9	0.9	無	–				
236	–	–	–	–	–	–	–	–				
237	–	–	–	–	1.1	0.9	–	1				
238	–	–	–	–	–	–	–	–				
246	14.5	10.0	1.9	1.9	1.0	0.8	無		25.2	14.2		完形・珠文一部貼り付け
247	15.0	10.5	2.0	2.6	1.0	0.9	無	–	29.7	15.2		完形
248	14.5	11.0	2.3	–	0.9	1.2	0.4	1				被熱
249	15.5	11.0	1.8	2.1	1.2	1.2	–	–	29.3	15.5		
250	14.0	10.0	2.6	–	1.0	1.3	無	1				
251	15.0	10.5	1.8	–	0.9	1.4	0.2	1				
264	13.5	10.0	2.2	–	1.2	1.1	0.3	–				
265	14.5	10.0	–	–	1.3	0.7	0.3	2				
266	15.0	11.0	1.8	–	1.3	0.3	無	–				
267	15.5	11.5	(2.0)	1.7	1.6	0.7	無	–	31.3	14.8		やや軽量
275	(15.0)	10.5	1.8	2.3	1.1	0.6	0.3	1	29.4	-15.4		完形
276	13.5	10.0	–	1.7	0.9	1.2	無	–				被熱
277	(16.0)	(12.0)	2.5	–	0.9	0.8	無	–				いびつ
278	15.0	11.0	2.2	–	1.0	1.0	無	1				いびつ
279	15.5	11.0	2.3	–	0.8	0.9	0.4	1				刻印○ー
280	15.0	10.0	–	1.8	0.9	0.9	0.4	1				
281	15.0	11.0	1.7	–	1.6	0.7	無	–				
282	16.0	12.0	–	–	1.2	1.3	無	–				
283	15.5	11.0	2.0	1.6	1.6	0.6	0.2	2				
292	15.5	11.0	1.8	–	0.8	0.7	0.3	2				
293	15.0	11.0	–	1.5	1.1	1.0	0.1	–		15.0		
294	14.0	10.5	2.0	1.9	0.9	0.9	0.3	–		14.6	6.6	
295	15.0	10.5	2.4	–	0.8	0.8	0.3	1				刻印○ー
296	15.5	11.0	–	2.0	0.8	0.8	0.5	2		14.9	6.9	
297	16.0	11.0	2.5	2.2	0.8	1.2	0.4	–				
298	13.0	9.5	2.2	–	1.3	0.5	0.3	–				
299	15.5	11.5	2.0	–	0.7	1.3	無	1				
300	15.5	12.0	2.0	1.7	1.5	0.5	0.3	–				
301	15.0	10.5	–	1.7	1.6	0.6	0.3	–	28.5	15.2	4.8	

第21表　遺物観察表(軒丸瓦1-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	分類	瓦当	焼成	胎土
302		182	10次		SX15	R16-3	キラコ	標準	
303		193	10次		SX15	-	不明	やや硬質	黒粒混
310		385	11次		SX19d	L(16-7)	砂	標準	黒粒混
311		386	11次		SX19d	R(10-1)	砂	標準	黒粒多混
324	22	18	9次		Ⅲ1層	L16-1	砂		灰色・雲母・気泡多混
325		84	9次		Ⅲ層	L16-2	砂	やや硬質	雲母多混
326	22	88	9次		Ⅲ層	L16-3	砂	やや硬質	
327		246	10次		Ⅲ層	L13-6(古)	砂	やや硬質	気泡混
328	26	86	9次		Ⅲ層	R16-1	砂	標準	雲母多混
329		438	11次	Bw	Ⅲ1層	L(13-9)	砂	やや硬質	黒粒・雲母混
330	23	443	11次	Bw	Ⅲ1層	L16-8	(キラコ)	硬質	
331	23	14	9次		Ⅲ1層	L16-a	不明		
332	26	440	11次	Bw	Ⅲ1層	L9-a	キラコ	やや硬質	黒粒・雲母混
333		444	11次	Be	Ⅲ1層	L16-8	キラコ	硬質	
334	27	441	11次	Be	Ⅲ1層	L(11)	キラコ	やや硬質	雲母混
335	24	445	11次	Bw	Ⅲ1層	L12-10	キラコ	硬質	黒粒・気泡混
336		439	11次	Be	Ⅲ1層	L12-12	キラコ	やや硬質	
337	26	303	10次		Ⅲ層	R13-1	キラコ	やや硬質	黒粒多混
338		13	9次		Ⅲ1層	R16-3	キラコ		マーブル状・雲母・黒粒混
339		436	11次	Bw	Ⅲ1層	R13-1	キラコ	やや硬質	黒粒・気泡混
340		435	11次	Bw	Ⅲ1層	R14-2	キラコ	標準	黒粒・雲母・気泡混
366	22	52	9次	C	Ⅱ層	L24-a	砂		
367		27	9次	B	Ⅱ層	L16-3	砂		小石混
368		242	10次		Ⅱ層	L16-2	砂	標準	雲母混
369		463	11次	Bw	Ⅱ層	L12-(b)	砂	やや軟質	雲母多混
370		38	9次	B	Ⅱ層	L16-3	砂	標準	雲母・気泡多混
371		36	9次	B	Ⅱ層	L16-7	砂		茶粒混
372		34	9次	B	Ⅱ層	L13-b	砂		
373		37	9次	B	Ⅱ層	L12	砂		
374		285	10次		Ⅱ1層	R16-2	砂	やや軟質	気泡混
375	23	464	11次	Be	Ⅱ層	L13-9	キラコ	標準	雲母・気泡混
376		28	9次	B	Ⅱ層	L12-12	キラコ		灰色・黒粒混
377		465	11次	Bw	Ⅱ層	L11-1	キラコ	硬質	
378	24	293	10次		Ⅱ2層	L12-15	キラコ	やや硬質	黒粒多混
379	25	460	11次	Bw	Ⅱ層	L12-d	キラコ	やや硬質	黒粒多混・雲母・気泡混
380	25	26	9次	B	Ⅱ層	L12-f	キラコ		
381	27	48	9次	C	Ⅱ層	L11-1	キラコ		
382		462	11次	Be	Ⅱ層	R14-2	キラコ	標準	黒粒混
383	27	31	9次	B	Ⅱ層	L10-3	キラコ		
384	26	243	10次		Ⅱ2層	R16-3	キラコ	硬質	黒粒多混
385	26	47	9次	C	Ⅱ層	R12-a	キラコ		
395		61	9次	D	Ⅰ層	L(16-5)	砂		黒粒混
396		469	11次		Ⅰ層	L13-7	砂	やや硬質	黒粒混・雲母多混
397	26	2	9次		Ⅰ層	R16-2	砂		雲母・気泡多混
398	24	10	9次		Ⅰ・Ⅱ層	L12-8	キラコ		
399	25	330	10次	D	Ⅰ層	L10-2	不明	標準	
400	25	241	10次		Ⅰ層	L12-16	キラコ	硬質	気泡混
525		110	12次	A	Ⅲ1	R(16)	砂		
538		76	12次	A	Ⅱ4	L(16)	(キラコ)		
539		89	12次	A	Ⅱ5	L12	砂		
543	23	13	12次	B	SX22	L13-8	(砂)		
544		14	12次	B	SX22	L13-8	砂		砂多混
551		1	12次	B	SX21	L16-7	砂		
552		4	12次	B	SX21	L16-4	砂		

第22表　遺物観察表(軒丸瓦2-1)

報告番号	瓦当径	文様径	瓦当厚	瓦厚	珠文径	珠文間	面取幅	接合	長さ	幅	高さ	備考
302	14.0	10.0	-	1.7	1.3	0.6	0.3	1				
303	-	-	-	2.0	-	-	-	-	27.7	14.7	6.6	
310	14.5	10.0	2.0	-	0.8	0.7	0.5					
311	-	-	-	-	0.8	2.1	-					
324	(17.0)	(12.0)	-	-	0.8	0.8	無	-				軽量
325	15.5	11.0	-	(2.4)	0.8	1.1	0.6	2	30.0	14.5		
326	16.0	11.0	2.5	(2.1)	0.8	0.8	0.5	-		16.0		
327	15.0	10.5	1.9	-	1.0	1.0	無	-				中央笵キズ無し
328	15.5	11.0	2.0	(2.0)	0.8	0.7	無	1	32.5	16.0		
329	14.0	10.5	-	1.8	1.2	0.9	0.3	-		14.2		
330	12.0	9.0	2.2	1.8	1.0	0.3	無	-		12.1		刻印「上」(瓦当)
331	15.5	11.0	2.3	-	1.3	0.4	0.4	-				木目・文様凸部に布目
332	11.0	8.0	2.0	-	1.1	0.7	0.1					
333	12.0	9.5	2.6	-	1.1	0.3	無	-				刻印「○上」(瓦当)
334	11.5	8.5	1.8	-	0.8	1.2	0.2	-				
335	15.5	11.5	2.0	1.9	1.7	0.7	0.2	-				
336	15.0	11.5	2.3	-	1.2	1.2	無	-				
337	14.5	11.0	2.1	-	1.2	0.7	0.2	-				
338	15.5	11.5	2.0	-	1.2	0.3	無	1				
339	14.5	11.0	-	1.8	1.2	0.9	0.2	2	29.4	14.4		釘穴2(1つは焼成後)
340	(16.0)	(12.0)	-	2.0	1.5	0.5	無	-	32.5	16.1		釘穴2
366	15.0	11.5	2.3	-	0.8	0.3	無	-				珠文の形状が交互に異なる
367	15.0	11.0	2.5	-	0.8	0.9	無	-				
368	15.5	11.0	2.0	-	0.7	0.9	0.4	1				被熱?
369	16.0	10.5	-	-	1.1	0.8	無	1				
370	15.0	10.5	2.4	2.0	0.8	0.9	0.4	-				
371	15.0	11.0	-	2.0	0.8	0.8	無	1				木目
372	16.0	12.0	2.1	-	1.0	1.2	無	-				
373	16.0	10.5	-	2.0	1.1	1.1	0.4	1				
374	15.0	11.0	2.2	-	1.0	0.7	無	-				
375	14.0	11.0	-	-	1.3	0.7	無	1				
376	15.0	11.0	3.0	-	1.1	1.2	無	-				
377	15.0	11.0	-	-	1.2	1.6	無	1				
378	15.0	11.5	-	1.7	1.0	1.4	無	-		15.0	6.5	
379	16.4	12.0	2.0	1.7	2.1	0.2	0.4	-				刻印○－(瓦当)
380	14.0	10.5	2.0	-	1.2	1.1	無	1				
381	15.0	11.0	1.8	-	1.2	1.3	無	2				
382	16.5	12.5	-	1.6	1.6	0.7	0.3					
383	14.5	10.0	2.1	-	1.2	1.1	無	-				
384	15.0	11.0	-	1.7	1.3	0.5	無	-				
385	13.0	9.0	2.3	-	0.8	1.0	0.3	1				
395	15.0	11.0	-	1.5	0.7	0.8	0.3	-				
396	-	-	2.1	-	1.0	1.0	0.3	1				いびつ
397	16.0	11.2	2.0	-	1.0	0.7	0.4	1				
398	12.8	8.2	2.0	-	0.6	1.2	0.3	-				
399	14.0	10.0	1.8	-	1.2	1.2	無	1				
400	14.5	10.5	-	-	1.7	0.3	無	2				
525	(15.0)	(11.0)	-	1.9	1.0	0.9	無	1				
538	15.0	11.5	-	-	1.2	0.7	無	-				
539	14.0	10.5	-	-	0.8	1.3	0.2	-				
543	15.5	10.5	2.0	-	1.3	0.8	0.3	-				
544	16.0	10.5	2.9	-	1.4	0.8	無	-				
551	15.0	10.5	2.3	-	0.8	0.8	0.5	-				
552	-	-	1.8	-	0.9	0.6	無	-				

第23表　遺物観察表(軒丸瓦2-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	分類	瓦当	焼成	胎土
553		3	12次	B	SX21	L13-(3)	砂		
580	27	26	12次	Bw	撹乱4	L17-1	砂		
581		39	12次	B	撹乱2	L16-1	砂		
582		65	12次	Be	I 1	L16-2	砂		
583		20	12次	Bw	撹乱5	L16-3	砂		
584		42	12次	B	撹乱2	L16-5	不明		
585		31	12次	Bw	撹乱3	L16-7	砂		
586		41	12次	B	撹乱2	L13-8	砂		
587		18	12次	Bw	撹乱5	L12-6	砂		
588		48	12次	Be	撹乱6	L11-(1)	キラコ		
589	27	63	12次	Be	I 1	L(13)	砂		雲母多混
590		19	12次	Bw	撹乱5	R15-1	砂		
674	23	98	13次	SA12北	流土	L13-2	砂		
677		85	13次	SA12北	表土	L16-7	砂(雲母混)		
685	24	177	13次	SA12東	崩落礫	L13-b	砂	不良	
686		178	13次	SA12東	崩落礫	L12-8	砂		
687		212	13次	SA12東	崩落礫	L10-1	砂		
688		211	13次	SA12東	崩落礫	R16-1	砂		
689		179	13次	SA12東	崩落礫	R(16)	砂		
690		213	13次	SA12東	崩落礫	R15-1	砂		
691		180	13次	SA12東	崩落礫	不明	砂		
723		147	13次	SA12東	流土	L13-6	砂		
724	25	196	13次	SA12東	流土	L12-f	砂		
725		148	13次	SA12東	流土	R(17)	砂(粗)		
726		197	13次	SA12東	流土	L(13-9)	キラコ		
727		146	13次	SA12東	流土	L12-e	キラコ		
748		218	13次	SA12東	表土	L11-2	砂		
762		123	13次	SA12西	崩落礫	R(12)	(砂)	不良	
776		102	13次	SA12西	流土	L13-6	砂		
777		103	13次	SA12西	流土	L13-8	砂		
778		111	13次	SA12西	流土	L(11)	キラコ		
780		69	13次	a東	近世整地層か	L13-6	砂		
781		14	13次	a東	近世整地層か	L12-3	砂		砂多混
782		16	13次	a東	近世整地層か	L12-4	砂	不良	
783	25	15	13次	a東	近世整地層か	L11-2	砂		
784	26	13	13次	a東	近世整地層か	R13-a	砂		雲母多混
791	25	24	13次	a東	崩落礫	L10-1	砂		
792		25	13次	a東	崩落礫	L16-(5)	砂		
793		65	13次	a東	崩落礫	R	キラコ		
801		12	13次	a東	流土	L16-7	砂		
802		53	13次	a東	流土	L13-(6)	砂	不良	
803		28	13次	a東	流土	(L)18	砂		雲母・気泡多混
804	27	27	13次	a東	流土	L	砂		
805		29	13次	a東	流土	L10	砂		
806		54	13次	a東	流土	R16-2	砂		
816		35	13次	a東	近現代整地層	R16-1	砂		雲母多混
817	26	21	13次	a東	近現代整地層	R16-a	砂	不良	
818		22	13次	a東	近現代整地層	R新	砂		
819		70	13次	a中	近現代整地層	R(12-1)	キラコ		
827		72	13次	a西	撹乱	L12-e	キラコ		
828	27	74	13次	a	表土	L12-h	(砂)		
834		235	13次	b	表土・撹乱	R16-1	砂		雲母・砂多混
835		246	13次	b	SA12東撹乱	L12-9	砂		
836	23	245	13次	b	SA12東撹乱	L13-1	砂		

第24表　遺物観察表(軒丸瓦3-1)

報告番号	瓦当径	文様径	瓦当厚	瓦厚	珠文径	珠文間	面取幅	接合	長さ	幅	高さ	備考
553	15.5	11.5	2.3	–	1.2	0.8	無	–				
580	17.0	12.5	2.1	–	1.0	0.4	0.4	–				
581	–	–	–	–	0.8	–	–	–				
582	14.5	10.0	2.5	–	0.9	0.8	0.3	–				
583	16.5	11.5	2.2	–	0.8	0.8	無	–				
584	15.0	10.5	–	–	0.7	0.8	無	1				
585	15.5	11.0	2.0	–	0.8	0.7	0.4	1				
586	(16.0)	(11.0)	1.9	–	1.3	0.8	無	1				被熱?
587	15.0	11.5	2.4	–	0.9	1.2	0.3	–				
588	13.5	10.0	1.8	–	1.2	1.2	無	–				
589	(15.0)	(11.0)	2.7	–	0.8	1.4	無	–				
590	(15.0)	(11.0)	2.1	–	0.9	0.8	無	–				
674	15.0	12.0	2.2	–	1.0	1.0	無	–				
677	15.5	11.0	2.1	–	0.8	0.8	0.4	–				刻印○－(巴脇)
685	15.0	10.0	2.2	–	1.1	0.9	無	1				
686	16.0	11.0	2.3	–	1.3	0.6	無	2				1295と同笵か
687	14.0	9.5	2.1	–	1.2	1.2	0.2	–				
688	17.0	12.5	1.9	–	0.9	1.0	無	1				
689	15.0	10.5	–	–	1.1	0.6	無	1				
690	14.5	10.5	2.3	–	0.8	0.7	無	1				いびつ
691	–	–	2.0	–	1.1	0.9	無	1				被熱・(L13-9,L12-6,L12-7)
723	14.5	10.0	1.9	–	0.9	0.9	無	1				木目
724	14.0	10.5	2.4	–	1.2	1.1	無	2				
725	15.5	11.0	2.3	–	1.2	0.5	無	1				巴頭間に笵キズ
726	14.0	10.5	–	–	1.1	0.5	無	1				
727	14.0	10.5	2.7	–	1.7	0.3	無	1				
748	(11.0)	(9.0)	1.9	–	0.6	1.5	無	–				
762	12.0	9.0	–	–	0.9	0.9	無	2				
776	14.0	10.5	2.0	–	0.9	0.9	無	–				
777	15.0	10.5	–	–	1.3	0.7	0.3	1				
778	14.0	10.5	1.9	–	1.1	1.1	無	–				
780	14.0	10.0	1.8	–	0.9	1.0	無	1				
781	16.0	10.5	2.3	–	1.1	1.1	0.4	1				いびつ・周縁幅広
782	(16.0)	(10.0)	2.5	–	1.0	1.1	0.4	–				
783	12.0	9.0	2.2	–	0.7	1.2	無	2				いびつ
784	16.0	11.5	2.2	–	1.2	1.0	無	2				
791	12.5	9.5	2.2	–	1.2	1.1	0.2	–				
792	14.0	10.0	1.9	–	0.8	0.8	無	1				
793	(11.0)	(8.0)	2.0	–	0.7	0.8	無	–				
801	15.0	10.5	–	2.1	0.7	0.9	0.3	1				
802	14.0	10.0	1.8	–	1.0	0.8	無	–				
803	–	–	2.5	–	0.9	0.7	無	–				
804	15.0	11.0	1.8	–	0.9	1.2	無	–				
805	13.0	9.5	2.2	–	1.3	1.0	0.2	–				
806	(16.0)	12.0	2.3	–	1.1	0.7	(0.3)	–				
816	–	–	–	–	–	–	–	–				被熱?
817	17.5	13.0	2.3	–	1.1	0.9	0.5	–				
818	14.0	10.5	2.0	–	1.1	0.4	無	–				
819	(12.0)	(10.0)	2.1	–	1.1	1.0	0.2	–				
827	13.0	10.5	2.5	–	1.7	0.2	無	–				
828	11.0	8.0	–	–	1.0	0.7	無	2				
834	–	12.0	2.4	–	0.9	0.7	無	–				
835	(10.5)	(8.0)	–	–	0.8	0.8	無	1				木目・230と同笵
836	15.0	10.0	1.6	–	1.1	1.0	無	1				被熱

第25表　遺物観察表(軒丸瓦3-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	分類	瓦当	焼成	胎土
837		234	13次	b	表土・撹乱	L13-11	キラコ		
838	23	244	13次	b	土管撹乱	L13-11	キラコ		
848		251	13次	c拡	崩落礫	R16-1	不明		雲母・気泡多混
849	22	283	13次	c拡	崩落礫	L24-a	砂		
853		266	13次	c	流土	R16-1	砂	不良	雲母多混
854	23	267	13次	c	流土	L13-7	砂		
869	27	282	13次	c	鉄管撹乱2	L17-1	砂		
870		275	13次	c	鉄管撹乱2	L16-3	砂		
871		259	13次	c	表土	L16-(3)	砂	不良	
872		257	13次	c	表土	L12	砂	不良	
873		258	13次	c	表土	L12-14	キラコ		
874		256	13次	c	表土	R0-1	キラコ		
882	24	230	13次		表土・撹乱	L(12-9)	砂		
883		284	13次		表土・撹乱	R16-2	砂		雲母多混
884		229	13次		表土・撹乱	L12-e	キラコ		
988	24	48	14次	d	表土	L12-14	砂		
989		47	14次	d	表土	L12-f	(砂)		
990		50	14次	d	表土	L12-h	砂		
991		49	14次	d	表土	R(13-1)	砂		
1011		131	14次	e	撹乱	L12-10	キラコ		
1012		132	14次	e	撹乱	L12	キラコ		
1016		119	14次	e西	礫層下粘質土	L12-f	キラコ		
1017		120	14次	e西	礫層下粘質土	L12orL13	キラコ		
1019	24	58	14次	e西	SX26覆土	L12-14	キラコ		
1024		121	14次	e西	SK8	L13orL14	砂		
1025		122	14次	e西	SK8	L12-15	キラコ		
1036		67	14次	e西	崩落礫	L13-8	砂		
1037		68	14次	e西	崩落礫	L16-5or7	砂		
1038		71	14次	e西	崩落礫	L13-9	キラコ		
1039	25	69	14次	e西	崩落礫	L12-e	キラコ		
1040	24	70	14次	e西	崩落礫	L12-11	キラコ		
1041	26	72	14次	e西	崩落礫	R0-1	キラコ		
1061	23	86	14次	e西	流土	L13-a	砂		
1062		85	14次	e西	流土	R(16-2)	砂		
1063		87	14次	e西	流土	L13-11	キラコ		
1087		107	14次	e西	表土	L13	砂		
1088		108	14次	e西	表土	L12orL13	砂		
1089	24	109	14次	e西	表土	L12-12	キラコ		
1090		105	14次	e西	表土	L12-f	キラコ		
1091		106	14次	e西	表土	L(13)	キラコ		
1107		136	14次	f	崩落礫	L16-4	砂		
1108		138	14次	f	崩落礫	R15-1	砂		
1109	26	137	14次	f	崩落礫	R14-1	砂		
1110		139	14次	f	崩落礫	L12-e	キラコ		
1111	25	140	14次	f	崩落礫	L12-g	キラコ		
1119	22	146	14次	f	流土	L16-6	砂		
1120		147	14次	f	流土	R16-1	砂		
1133		154	14次	f	近現代整地層	L12-12	キラコ		
1138		158	14次	f	表土	L16-3	砂		
1139		159	14次	f	表土	L13-11	キラコ		

第26表　遺物観察表(軒丸瓦4-1)

報告番号	瓦当径	文様径	瓦当厚	瓦厚	珠文径	珠文間	面取幅	接合	長さ	幅	高さ	備考
837	15.0	11.5	2.1	–	1.3	0.9	無	2				
838	15.0	11.5	2.1	–	1.3	0.9	0.2	2				
848	16.0	11.0	–	2.3	1.0	1.0	無	1				
849	–	–	–	–	0.9	0.3	–	1				珠文の形状が交互に異なる
853	16.0	11.5	2.3	–	1.0	0.7	無	1				
854	15.0	11.0	2.2	2.1	1.1	1.1	無	–				被熱
869	16.0	11.5	2.2	–	1.2	0.4	無	–				被熱?
870	14.5	10.5	2.3	–	0.8	0.8	無	1				
871	15.0	11.0	2.0	–	0.9	0.8	無	–				
872	16.0	12.0	2.2	–	1.0	1.4	無	–				
873	16.0	12.0	–	1.9	1.5	0.8	–	1				刻印○
874	–	–	2.5	–	–	–	無	–				
882	11.0	8.0	2.1	–	0.5	1.1	無	1				木目・246と同笵
883	–	–	2.4	–	1.0	0.9	–	–				被熱
884	13.5	10.0	2.5	–	1.7	0.3	無	–				230とは別
988	16.0	12.5	2.0	–	1.6	0.8	無	–				
989	13.5	11.0	–	–	1.1	0.9	無	–				
990	10.5	8.5	2.1	–	1.0	0.9	無	–				
991	15.0	11.0	2.3	–	1.2	0.9	0.2	–				
1011	15.0	11.0	1.9	–	1.6	0.7	無	–				
1012	15.0	11.5	2.4	–	1.2	0.9	無	–				
1016	14.0	10.0	2.3	–	1.2	0.9	0.4	–				105と同笵
1017	16.0	11.5	–	–	1.9	0.3	0.3	2				
1019	15.5	11.5	2.3	–	1.6	0.8	無	–				
1024	(16.0)	(11.0)	–	–	1.4	0.6	無	–				
1025	15.0	11.0	–	–	1.3	0.7	無	2				
1036	15.0	10.5	2.7	–	1.3	0.7	無	1				
1037	16.0	11.0	–	–	0.8	0.8	無	1				
1038	13.5	10.5	–	1.7	1.2	0.9	無	–				
1039	14.5	10.5	2.7	–	1.7	0.2	無	2				
1040	14.0	11.0	2.5	–	1.0	1.5	無	–				
1041	16.0	12.0	–	–	–	–	無	2				
1061	14.5	10.5	2.2	–	1.2	1.0	無	1				
1062	15.0	11.0	–	–	1.0	0.8	–	2				笵に△陽刻有り
1063	14.5	11.0	–	–	1.3	1.0	無	2				
1087	15.0	11.5	2.8	–	1.0	1.3	無	–				
1088	14.5	11.0	1.9	–	1.0	1.3	無	–				
1089	15.0	11.5	2.7	1.7	1.1	1.3	無	1.5				104と同笵
1090	13.5	10.5	2.2	–	1.1	1.1	無	–				119と同笵
1091	14.0	10.5	2.0	–	1.1	1.1	無	–				
1107	15.0	10.5	–	2.1	1.1	0.7	無	–				
1108	(15.0)	11.0	–	–	1.0	0.9	無	1				
1109	15.0	11.0	1.7	–	1.4	0.4	無	1				
1110	14.0	10.5	3.0	–	1.9	0.2	無	2				
1111	12.0	9.0	1.6	–	1.6	0.1	無	1				
1119	14.0	9.0	–	–	1.0	0.5	無	1				珠文間に笵キズ
1120	–	–	–	–	1.0	1.0	–	1				被熱?
1133	16.0	12.0	2.5	–	1.2	1.2	無	2				刻印「岩」
1138	14.0	10.0	2.0	–	0.7	0.8	0.5	–				新
1139	15.5	11.5	1.8	–	1.6	0.7	無	2				

第27表　遺物観察表(軒丸瓦4-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	瓦当	焼成	胎土	布	刺子	吊紐
178		76	9次	B	Ⅲ3層	軒丸	R15-1	砂	標準	黒粒・気泡混		2	有
181		471	11次	Bw	Ⅲ3a層	丸			硬質	黒粒多混・気泡混		2	
189		96	9次		SX14	軒丸	L13-6	砂	やや硬質	黒粒多混	細	1	
190		166	10次		SX14	軒丸	L13-6	砂	やや軟質	雲母混・気泡多混		1	有
203		143	9次		SX14	丸			やや硬質		細	3	有
204	28	150	9次		SX14	丸			硬質	黒粒・気泡混	粗	3	
205	28	141	9次		SX14	丸			硬質		粗	1	
206	28	137	9次		SX14	丸			やや硬質		やや粗	2	有
207		142	9次		SX14	丸			やや硬質	黒粒・気泡多混		1	有
208		140	9次		SX14	丸			やや軟質	気泡多混			有
209		138	9次		SX14	丸			硬質		粗	2	有
210		153	9次		SX14	丸			やや硬質	黒粒多混	細	2	有
212	23	267	10次		SX16	軒丸	L13-6(古)	砂	やや軟質	気泡多混	粗	2	
213		268	10次		SX16	軒丸	L13-6	砂	やや硬質	気泡混		2	有
214		269	10次		SX16	軒丸	L13-6	砂	やや硬質	気泡混	やや粗	1	有
220		218	10次		SX18	軒丸	L13-6	砂	標準	気泡混	粗	2	
221		236	10次		SX18	軒丸	L13-6	砂	標準		やや粗		
222	23	219	10次		SX18	軒丸	L13-6	砂	標準		粗	3	
223	22	237	10次		SX18	軒丸	L16-5	砂	やや軟質				
227		239	10次		SX18(砂礫)	丸			硬質		やや粗	2	
228		232	10次		SX18	丸			やや硬質		やや粗	2	
229		226	10次		SX18	丸			やや硬質	気泡混	粗	2	
230		229	10次		SX18	丸			硬質		やや粗	2	
246		373	11次		SX13	軒丸	L13-6	砂	やや硬質	気泡混	粗	2	
247	26	372	11次		SX13	軒丸	R15-1	砂	標準	黒粒多混・気泡混			有
249	24	371	11次		SX13	軒丸	L12-7	砂(雲母混)	やや硬質			4	
254		108	9次		SX13	丸			やや硬質	気泡混	細	1	
255		116	9次		SX13	丸			硬質		細	3	
256		110	9次		SX13	丸			標準	雲母混・気泡多混		3	
257		109	9次		SX13	丸			標準	気泡多混	細	3	
258		118	9次		SX13	丸			標準		細	2	有
267		80	9次	A	Ⅳ層	軒丸	L12-10	キラコ	やや硬質	白粒混・気泡多混		6	
275	22	416	11次	Be	Ⅲ2層	軒丸	L16-4	砂	やや硬質			6	
280		313	10次		Ⅲ2層	軒丸	(L16-7)	砂	標準			5	
293		191	10次		SX15	軒丸	L13-a	(砂)	標準	黒粒混・雲母・気泡多混	細	3	
294	23	175	10次		SX15	軒丸	L13-9	砂	やや硬質	黒粒多混・気泡混	細	7	
295	22	189	10次		SX15	軒丸	L16-7	砂	硬質				
296		165	10次		SX15	軒丸	L16-7	砂	標準	気泡多混	細	5	
297	24	188	10次		SX15	軒丸	L12-3	砂	やや硬質				
300	26	190	10次		SX15	軒丸	R14-2	キラコ	硬質	黒粒多混			
301		192	10次		SX15	軒丸	–	キラコ	やや硬質	黒粒・雲母多混	細	2	
302		182	10次		SX15	軒丸	R16-3	キラコ	標準				
303		193	10次		SX15	軒丸	-	-	やや硬質	黒粒混		8	
304		195	10次		SX15	丸			やや軟質	黒粒混・気泡多混	細	5	
305		172	10次		SX15	丸			やや硬質	気泡混	細	7	
306		171	10次		SX15	丸			やや硬質	黒粒・気泡混	細		
312		490	11次		SX19	丸			硬質		細	5	長
325		84	9次		Ⅲ層	軒丸	L16-2	砂	やや硬質	雲母多混		5	
326	22	88	9次		Ⅲ層	軒丸	L16-3	砂	やや硬質			7	
328	26	86	9次		Ⅲ層	軒丸	R16-1	砂	標準	雲母多混		5	
329		438	11次	Bw	Ⅲ1層	軒丸	L(13-9)	砂	やや硬質	黒粒・雲母混		3	
330	23	443	11次	Bw	Ⅲ1層	軒丸	L16-8	(キラコ)	硬質			3	
335	24	445	11次	Bw	Ⅲ1層	軒丸	L12-10	キラコ	硬質	黒粒・気泡混			
339		436	11次	Bw	Ⅲ1層	軒丸	R13-1	キラコ	やや硬質	黒粒・気泡混		4	
340		435	11次	Bw	Ⅲ1層	軒丸	R14-2	キラコ	標準	黒粒・雲母・気泡混		2	
344		254	10次		Ⅲ層	丸							
345		472	11次	Ce	Ⅲ1層	丸			やや硬質	黒粒・気泡混		2	
346		473	11次	Bw	Ⅲ1層	丸			硬質		細	6	
370		38	9次	B	Ⅱ層	軒丸	L16-3	砂	標準	雲母・気泡多混		6	
371		36	9次	B	Ⅱ層	軒丸	L16-7	砂		茶粒混			
373		37	9次	B	Ⅱ層	軒丸	L12	砂					
378	24	293	10次		Ⅱ2層	軒丸	L12-15	キラコ	やや硬質	黒粒多混	細	4	

第28表　遺物観察表(丸瓦1-1)

報告番号	内タタキ	刻印	長さ	幅	高さ	玉縁長さ	玉縁広幅	玉縁狭幅	厚さ	サイズ	タテナデ	前ヨコナデ	後ヨコナデ	外面調整	備考
178				15.3					2.3		2	1	-		
181			27.0	15.3	7.9	3.6	13.0	-	2.4						
189				19.1					1.8						
190															
203			28.8	15.1	7.4	4.0	12.4	8.2	2.1	9.5寸	1	0	0	1a	
204	短		25.5	13.2	6.7	3.6	11.4	-	1.8	8.5寸	1	0	0	1a	
205			24.1	14.7	6.6	3.5	11.0	9.4	2.0	8寸	1	1	0	1b	
206			25.5	14.4	7.6	3.3	10.4	7.5	2.2	8.5寸	1	1	1	1c	
207			28.8	15.1	7.4	2.9	12.2	10.2	1.9	9.5寸	2	0	0	2a	
208			26.6	15.2	7.0	3.7	-	-	2.2	8.5寸	2	1	0	2b	
209			28.2	15.3	7.1	3.9	11.1	-	2.1	9寸	2	1	1	2c	
210			25.9	14.0	7.3	3.4	11.1	7.5	1.9	8.5寸	3	0	1	3d	
212				15.8							2	1	-		
213			29.1	15.3	8.3						2	1	1	2c	
214	長		28.1	15.6	8.3						1	1	0	1b	
220			25.9	14.5	6.9						1	1	0	1b	
221											2	1	-		被熱
222			25.6	14.7	7.5						2	1	1	2c	
223											2	1	-		
227			25.6	14.4	7.1	3.4	11.5	9.0	2.0	8.5寸	1	0	0	1a	
228			24.3	13.4	6.9	3.5	10.3	-	1.5	8寸	1	0	0	1a	
229			24.9	13.9	6.9	3.5	11.0	8.8	1.8	8寸	1	1	1	1c	
230			26.4	15.0	7.2	3.9	11.9	-	2.0	8.5寸	2	1	1	2c	
246			25.2	14.2							1	1	0	1b	
247			29.7	15.2							2	1	0	2b	
249			29.3	15.5							2	0	1	2d	
254			25.8	14.2	6.6	3.1	11.5	-	1.9	8.5寸	1	0	0	1a	
255			-	14.1	7.1	3.6	10.7	8.3	1.9		1	1	0	1b	
256			28.7	15.4	7.0	4.2	-	-	2.5	9.5寸	2	0	0	2a	
257			24.8	14.3	7.0	3.3	11.0	7.2	2.4	8寸	2	1	0	2b	
258	短		-	15.0	7.1	-	-	-	2.1		2	1	1	2c	
267	長		31.3	14.8							2	1	1	2c	
275			29.4	(15.4)							2	0	0	2a	
280															
293				15.0							2	1	-		
294	長			14.6	6.6						3	1	1	3c	
295											2	0	-		
296				14.9	6.9						2	0	-		
297											2	0	-		
300											2	1	-		
301	長		28.5	15.2	4.8						2	1	0	2b	
302											-	-	-		
303	長		27.7	14.7	6.6						2	0	1	2d	
304		△・	-	-	-	-	-	-	2.1						
305	短	○	-	-	-	-	-	-	1.7		2	1	0	2b	
306	長	C	-	-	-	-	-	-	1.8		2	-	0		
312			27.3	14.9	6.1	2.6	12.0	-	1.9						
325	短		30.0	14.5							2	0	0	2a	
326				16.0							2	0	0	2a	
328			32.5	16.0							2	0	0	2a	
329	長			14.2							1	0	-		
330				12.1							1	1	-		
335											2	1	-		
339	長		29.4	14.4							3	0	0	3a	
340	長		32.5	16.1							2	1	1	2c	
344		○大	-	-	-	-	-	-	1.8						
345	短		-	13.6	6.0	-	-	-	1.7						
346	長		26.7	14.4	6.9	3.5	12.2	8.6	1.9						
370											1	1	0	1b	
371											2	1	-		
373											2	0	-		
378	長			15.0	6.5										

第29表　遺物観察表(丸瓦1-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	瓦当	焼成	胎土	布	刺子	吊紐
379	25	460	11次	Bw	Ⅱ層	軒丸	L12-d	キラコ	やや硬質	黒粒多混・雲母・気泡混			
382		462	11次	Be	Ⅱ層	軒丸	R14-2	キラコ	標準	黒粒混		0	
384	26	243	10次		Ⅱ2層	軒丸	R16-3	キラコ	硬質	黒粒多混	細	4	
390		294	10次		Ⅱ2層	丸			やや硬質		細	4	
391		295	10次		Ⅱ2層	丸			硬質	黒粒多混	細	4	
528		113	12次	A	Ⅲ1層	丸				灰色・黒粒混			有
545		109	12次	B	SX22	丸							
546		119	12次	B	Ⅲ1層	丸				灰色・黒粒混			
557		105	12次	B	SX21	丸				雲母多混			有
558	28	104	12次	B	SX21	丸							
559		106	12次	B	SX21	丸							
660		83	13次	SA12北	礎石覆土	丸							
696		181	13次	SA12東	崩落礫	丸							
697		201	13次	SA12東	崩落礫	丸							
698		182	13次	SA12東	崩落礫	丸							
732		150	13次	SA12東	流土	丸				砂多混			
733		149	13次	SA12東	流土	丸				雲母多混			
734		151	13次	SA12東	流土	丸							
735		164	13次	SA12東	流土	丸							
749		287	13次	SA12東	撹乱	丸				雲母多混			
765		116	13次	SA12西	崩落礫	丸				雲母多混			
786		68	13次	a東	近世整地層か	丸							
790		78	13次	a西	P2	丸							
820		51	13次	a東	近現代整地層	丸							
821		33	13次	a東	近現代整地層	丸				雲母多混			
829		60	13次	a東	表土	丸				雲母多混			
851		252	13次	c拡	崩落礫	丸							
857		268	13次	c	流土	丸							
875		260	13次	c	表土	丸							
978		54	14次	d	SX28	丸							
979		55	14次	d	SX28	丸							
1005		117	14次	e	近世整地層	丸							
1020		59	14次	e西	SX26覆土	丸							
1027		124	14次	e西	SK8	丸							
1045		74	14次	e西	崩落礫	丸							
1046		125	14次	e西	SV24南 砂 礫＋粘質土	丸							
1047		73	14次	e西	崩落礫	丸							
1065		88	14次	e西	流土	丸							
1066		90	14次	e西	流土	丸							
1067		89	14次	e西	流土	丸							
1093		110	14次	e西	表土	丸							
1123		149	14次	f	流土	丸							

第30表　遺物観察表（丸瓦2-1）

報告番号	内タタキ	刻印	長さ	幅	高さ	玉縁長さ	玉縁広幅	玉縁狭幅	厚さ	サイズ	タテナデ	前ヨコナデ	後ヨコナデ	外面調整	備考
379	長														
382	長										2	1	-		
384	長										2	0	-		
390	長		-	15.3	6.0	-	-	-	1.8						
391	短		-	15.1	6.6	2.9	12.4	-	1.8						
528			-	-	-	-	-	-	2.0						
545			-	15.9	7.5	3.7	13.3	9.5	2.4						
546			-	-	-	4.1	-	-	2.5						
557			-	-	-	3.6	-	-	2.0						
558	有		25.7	14.1	6.7	3.5	-	-	2.1	8.5寸					被熱
559	有		28.8	-	-	-	-	-	1.7	9.5寸					
660			-	14.9	7.7	4.0	-	-	2.0						
696			26.0	15.3	6.6	4.6	12.0	7.1	2.4	8.5寸					
697			-	14.9	7.1	3.9	9.7	-	2.3						
698			24.0	-	-	2.9	-	-	1.7	8寸					
732			-	-	-	-	-	-	2.7						焼成不良
733			-	-	-	3.8	-	-	2.3						
734			-	14.4	7.7	-	-	-	2.4						
735			-	-	-	-	-	-	1.8						行基式
749			-	-	-	-	-	-	2.0						被熱
765			-	-	-	-	-	-	2.3						被熱
786			-	14.7	6.2	-	-	-	2.0						
790			-	-	-	3.5	-	-	2.3						
820			-	14.6	5.9	2.3	11.1	6.9	1.6						
821			-	-	-	-	-	-	2.0						行基式
829			-	-	-	-	-	-	2.1						被熱
851		○一	-	15.1	7.7	3.5	12.1	8.4	2.2						
857			-	-	-	-	-	-	1.9						端部の面取特徴的
875			-	-	-	-	-	-	2.1						
978			-	-	-	-	-	-	1.8						
979			-	-	6.1	-	-	-	1.5						
1005			-	-	-	-	-	-	1.6						
1020			-	-	6.3	3.1	-	-	1.6						
1027			-	-	6.1	-	-	-	2.1						
1045			-	-	7.4	-	-	-	1.9						吊紐→タタキ
1046			-	-	6.8	-	-	-	1.6						
1047			-	-	6.1	3.2	10.7	-	1.8						
1065			-	-	7.0	-	-	-	2.0						
1066			-	-	-	-	-	-	2.2						
1067			-	-	6.3	3.0	12.0	9.2	1.8						
1093			-	-	-	-	-	-	2.2						被熱
1123			-	-	6.9	3.4	-	-	2.5						被熱

第31表　遺物観察表(丸瓦2-2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	胎土	長さ	広端幅	狭端幅	厚さ	備考
193	19	161	9次		SX14	平		27.8	(25.7)	22.7	2.1	「天下一」刻印
194		476	9次		SX14	平		27.9	24.7	22.7	1.9	
195		477	9次		SX14	平		28.9	26.0	23.9	2.5	
196		481	9次		SX14	平		28.5	-	23.6	1.7	
197	19	479	9次		SX14	平		30.0	26.0	24.9	2.5	
198		482	9次		SX14	平		28.9	-	23.6	2.3	
199	19	478	9次		SX14	平		26.3	(23.4)	21.7	1.5	
200	19	480	9次		SX14	平		27.1	22.2	-	2.0	
201		484	9次		SX14	平		27.4	(23.5)	-	1.7	
202	19	483	9次		SX14	平		26.5	23.9	22.7	1.9	
224		347	10次		SX18	平		26.2	21.5	20.4	1.9	
225		348	10次		SX18	平		25.3	21.4	20.1	1.8	
226		350	10次		SX18	平		26.2	22.0	20.1	2.4	
252		120	9次		SX13	平		28.3	25.6	-	2.0	
253		123	9次		SX13	平		27.6	-	21.9	1.9	
286	19	485	9次		Ⅲ2層	平		25.4	-	19.5	2.0	
526		111	12次	A	Ⅲ1層	平		-	-	-	1.5	
527		112	12次	A	Ⅲ1層	平		-	-	-	1.9	
555		107	12次	B	SX21	平		27.9	-	-	1.7	
556		108	12次	B	SX21	平		-	-	-	1.8	孔有り
693		202	13次	SA12東	崩落礫	平		-	-	-	2.4	
694		176	13次	SA12東	崩落礫	平	砂多混	-	-	-	2.0	
730		195	13次	SA12東	流土	平		-	-	-	2.0	
731		160	13次	SA12東	流土	平		-	-	-	1.8	
763		132	13次	SA12西	崩落礫	平		-	-	-	2.0	
764		133	13次	SA12西	崩落礫	平		-	-	-	2.0	
832		253	13次	b深掘T	近世土坑?	平		-	-	-	2.0	
850		250	13次	c拡	崩落礫	平	雲母多混	-	-	-	2.0	
856		265	13次	c	流土	平		-	-	-	2.3	
977		53	14次	d	SX28	平		-	-	-	2.3	
993		41	14次	d	表土	平		28.7	26.5	25.2	1.8	
1004		116	14次	e	近世整地層	平		-	-	-	1.5	
1026		123	14次	e西	SK8	平		-	-	-	1.8	
1103		151	14次	f上サブトレ	土塁盛土?	平		-	-	-	2.0	
1112		141	14次	f	崩落礫	平		30.6	-	-	2.1	
1121		148	14次	f	流土	平		-	-	-	1.7	穿孔
1122		175	14次	f	流土	平		-	-	-	1.7	不等辺四角形に加工

第32表　遺物観察表(平瓦)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	長さ	幅	高さ	厚さ	備考
182		486	9次		Ⅲ3層	鯱						
231	30	224	10次		SX18	輪違	I1	8.4	11.4		1.5	
232	30	222	10次		SX18	輪違	I2	6.8	11.4		1.8	
259		368	11次		SX13	塀		-	-	1.9		
260		124	9次		SX13	輪違	G1	11.4	11.4		1.9	
261		132	9次		SX13	輪違	G1	11.2	11.4		1.7	
262		133	9次		SX13	輪違	G1	12.4	11.9		1.5	
285		359	9次		Ⅲ2層	塀						
307		197	10次		SX15	輪違	B	13.6	-		2.0	
314		488	11次		SX19	塀						
315		489	11次		SX19	塀(桟)						
347		474	11次	Bw	Ⅲ1層	二の平						
348		475	11次	Bw	Ⅲ1層	二の平						
349		363	10次		Ⅲ層	塀						
350		448	11次	Be	Ⅲ1層	熨斗or伏間		-	-	1.8		
351		360	9次		Ⅲ1層	熨斗		-	-	1.8		凹面に切り込み
352		446	11次	Be	Ⅲ1層	熨斗		-	-	1.8		
353		447	11次	Be	Ⅲ1層	熨斗		-	-	1.7		
354		307	10次		Ⅲ層	輪違	G1	10.4	12.3		1.9	
355		306	10次		Ⅲ層	輪違	G1	-	-		1.6	
356		309	10次		Ⅲ層	輪違	-	9.8	-		1.8	
357		310	10次		Ⅲ層	輪違	-	9.0	-		1.3	
358		450	11次	Be	Ⅲ1層	桟		-	-	1.7		○上(端部)
359		449	11次	Be	Ⅲ1層	桟		-	-	1.8		
360		451	11次	Be	Ⅲ1層	桟		-	-	1.8		
392		467	11次	Bw	Ⅱ層	熨斗		24.7	11.0	1.7		
393		301	10次		Ⅱ2層	輪違	B	13.1	13.0		1.8	
529		114	12次	A	Ⅲ1層	熨斗						
530		115	12次	A	Ⅲ1層	熨斗						
531		118	12次	A	Ⅲ1層	輪違	-				2.0	被熱
532		117	12次	A	Ⅲ1層	輪違	-				2.1	
533		116	12次	A	Ⅲ1層	輪違	-					
560	29	103	12次	B	SX21	鯱						
561	29	102	12次	B	SX21	鯱						
562		96	12次	B	SX21	輪違	A					被熱
563		97	12次	B	SX21	輪違	(B)	12.3	-	4.6	1.5	
564		98	12次	B	SX21	輪違	D2	13.1	9.7	5.4	1.4	
565		99	12次	B	SX21	輪違	E1	-	12.3	5.8	1.5	
566		100	12次	B	SX21	輪違	G1	9.7	11.6	-	1.8	
567		101	12次	B	SX21	輪違	G2	10.1	11.4	4.7	1.9	
592		95	12次	Be	Ⅰ2層	伏間						
661		82	13次	SA12北	礎石覆土	面戸					1.7	
662		81	13次	SA12北	礎石覆土	面戸					1.8	
666	30	89	13次	SA12北	崩落礫	輪違	D2	13.3	11.3	4.5	1.6	
678		84	13次	SA12北	表土	輪違	E1	10.6	11.1	5.0	1.4	
679	29	101	13次	SA12北	表土	鬼						近現代?
695		184	13次	SA12東	崩落礫	二の平					1.8	
699	27	186	13次	SA12東	崩落礫	谷丸					2.1	
700		183	13次	SA12東	崩落礫	塀					2.1	
701		185	13次	SA12東	崩落礫	塀					2.2	
702	27	190	13次	SA12東	崩落礫	菊丸	C					径8.0,文様区径6.0
703		191	13次	SA12東	崩落礫	菊丸	B					径7.5
704		193	13次	SA12東	崩落礫	菊丸	B					径8.0
705		192	13次	SA12東	崩落礫	菊丸	B					径7.5
706		188	13次	SA12東	崩落礫	輪違	-	12.3	-	3.7	1.3	
707	29	214	13次	SA12東	崩落礫	鬼						
708	29	210	13次	SA12東	崩落礫	鬼						頂部
709	29	207	13次	SA12東	崩落礫	鯱						耳周辺・ウロコはスタンプで木目と細布目あり
710	27	194	13次	SA12東	崩落礫	不明						
711	27	208	13次	SA12東	崩落礫	鯱						鰭・裏面に「以?介」
712	29	209	13次	SA12東	崩落礫	鯱						鰭
713	29	189	13次	SA12東	崩落礫	鯱						
714	29	187	13次	SA12東	崩落礫	不明						
728	28	198	13次	SA12東	流土	軒隅	不明(Kか)					
736		161	13次	SA12東	流土	塀		-	-	-	1.8	
737		166	13次	SA12東	流土	輪違	(A)				1.8	

第33表　遺物観察表(その他の瓦1)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	長さ	幅	高さ	厚さ	備考
738		165	13次	SA12東	流土	輪違	-				1.8	厚手・縦断面丸い・コビキ痕強い
739	29	169	13次	SA12東	流土	鯱						
740	29	171	13次	SA12東	流土	鯱						
741	29	172	13次	SA12東	流土	不明					1.6	
742	29	167	13次	SA12東	流土	(鬼)						軽量
743	29	168	13次	SA12東	流土	不明						
750		222	13次	SA12東	撹乱	菊丸	B					径8.0
751	27	219	13次	SA12東	表土	菊丸	B					径7.5
752	29	221	13次	SA12東	撹乱	鬼						
753	29	223	13次	SA12東	撹乱	鯱						(胸)鰭(右)
754	29	220	13次	SA12東	表土	鯱						鰭
755	29	113	13次	SA12西	SX24覆土	(鬼)					11.3	
756	29	112	13次	SA12西	SX24覆土	不明			7.2		1.8	
766		134	13次	SA12西	崩落礫	塀		-	-	-	1.8	
767		141	13次	SA12西	崩落礫	面戸						
768		142	13次	SA12西	崩落礫	面戸						
769		135	13次	SA12西	崩落礫	輪違	D2	11.3	8.6	4.0	1.4	
770		139	13次	SA12西	崩落礫	輪違	E1				1.6	
771		143	13次	SA12西	崩落礫	鯱						
772	29	144	13次	SA12西	崩落礫	鯱						
773		131	13次	SA12西	崩落礫	せんor塀					3.4	
779		110	13次	SA12西	流土	輪違	D2	12.1	-	-	1.4	
785		17	13次	a東	近世整地層か	二の平				3.0	2.1	
787		19	13次	a東	近世整地層か	菊丸	B					
788		18	13次	a東	近世整地層か	(熨斗)		5.8	5.5		2.0	円形に加工
789	29	20	13次	a東	近世整地層か	不明						
811		11	13次	a東	流土	塀					2.8	三角形に加工・釘穴に釘残
812		30	13次	a東	流土	塀				5.3	2.8	
813		59	13次	a東	流土	桟						
822		71	13次	a西東	近現代整地層	菊丸	C					被熱・径8.0,文様区径6.0
823		49	13次	a東	近現代整地層	輪違	-					吊紐
830	29	32	13次	a東	表土	鯱					1.6	
841		239	13次	b	表土・撹乱	塀					2.5	
842		240	13次	b	表土・撹乱	塀					2.3	
843		241	13次	b	表土・撹乱	熨斗						凹面の方が綺麗で平瓦の作り・切目を入れただけ
844		242	13次	b	表土・撹乱	熨斗						
845		243	13次	b	表土・撹乱	輪違	-	12.5	-	-	1.6	
846	29	247	13次	b	SA12東撹乱下掘り込み	鯱						
858		269	13次	c	流土	二の平					1.6	
859		248	13次	c拡	流土	輪違	(A)	11.3	-	-	2.0	被熱?
860	29	270	13次	c	流土	(鬼)						
861		272	13次	c	流土	(鯱)						
862	29	271	13次	c	流土	不明						
876		261	13次	c	表土	輪違	-	12.0	11.0		1.8	
877	29	277	13次	c	鉄管撹乱2	鯱						
878		262	13次	c	表土	(鯱)						内面；粗布・刺子?
879	29	278	13次	c	鉄管撹乱?	鯱						鰭
885	29	231	13次		表土・撹乱	不明						
886	29	232	13次		表土・撹乱	不明						
887		233	13次		表土・撹乱	隅丸?						
981		12	14次	d南	黄色粘質土上	輪違	D1	13.8	-		1.3	
982		22	14次	d南	黄色粘質土上	輪違	E1	-	-		-	
983	29	56	14次	d南	流土	不明					1.6	
994		21	14次	d	表土	輪違	E1	-	-		1.5	
995		29	14次	d	表土	輪違	G1	10.0	-		2.2	
996		31	14次	d	表土	輪違	G1	9.8	-		1.9	
997		33	14次	d	表土	輪違	G2	9.3	-		1.6	
998		36	14次	d	表土	輪違	-	-	-		1.5	
999	30	38	14次	d	表土	輪違	H1	7.3	-		1.7	

第34表　遺物観察表(その他の瓦2)

報告番号	写真図版	実測番号	調査次数	区	遺構・土層	種類	分類	長さ	幅	高さ	厚さ	備考
1000		39	14次	d	表土	輪違	H2	7.5	-		1.6	
1001	30	40	14次	d	表土	輪違	H2	7.3	11.4		2.0	
1002		177	14次	d	表土	輪違	H2	7.8	-		1.9	
1003	30	178	14次	d	表土	輪違	H3	7.7	9.6		1.7	
1007		126	14次	e	近現代整地層	棟						
1013		128	14次	e	表土	隅						
1014		133	14次	e	攪乱	輪違	-					
1021		6	14次	e西	SX26覆土	輪違	B	15.6	11.6		1.9	
1022		20	14次	e西	SX26覆土	輪違	E1	10.6	-		1.5	
1023		30	14次	e西	SX26覆土	輪違	G1	9.3	-		1.9	
1048		77	14次	e西	崩落礫	谷丸						
1049		78	14次	e西	崩落礫	谷丸						
1050		75	14次	e西	崩落礫	塀						
1051		79	14次	e西	崩落礫	輪違	E1					
1052		37	14次	e西	崩落礫	輪違	-	-	-		1.2	
1053		76	14次	e西	崩落礫	熨斗						
1054	29	80	14次	e西	崩落礫	鯱						
1064		93	14次	e西	流土	(平)						
1068	29	97	14次	e西	流土	不明						
1069	28	96	14次	e西	流土	飾?						
1070	27	92	14次	e西	流土	菊丸	A					
1071	29	94	14次	e西	流土	鯱						
1072		95	14次	e西	流土	鯱						
1073		1	14次	e西	SA流土	輪違	A	12.6	-		1.6	
1074		3	14次	e西	SA流土	輪違	B	10.7	-		1.9	
1075	30	5	14次	e西	SA流土	輪違	B	11.7	12.3		2.1	
1076	30	8	14次	e西	SA流土＋ SX26覆土	輪違	C2	(12.9)	10.8		1.6	
1077		10	14次	e西	SA流土	輪違	D1	-	-		1.3	
1078		14	14次	e西	SA流土	輪違	D2	13.1	-		1.3	
1079	30	16	14次	e西	SA流土	輪違	D3	12.0	9.8		1.3	
1080		17	14次	e西	SA流土	輪違	D3	11.5	-		1.5	
1081	30	32	14次	e西	SA流土	輪違	G2	9.4	10.7		1.7	
1094		112	14次	e西	表土	二の平						
1095		111	14次	e西	表土	二の平						
1096		113	14次	e西	表土	塀隅						
1097		114	14次	e西	表土	面戸						
1098		11	14次	e西	SA表土	輪違	D1	-	-		1.3	
1099	30	13	14次	e西	SA表土	輪違	D2	-	10.3		1.3	
1100	30	23	14次	e西	SA表土	輪違	E2	8.6	-		1.5	
1101		34	14次	e西	SA表土	輪違	G2	9.5	-		2.0	
1102		35	14次	e西	SA表土	輪違	G	9.5	-		1.8	
1104		152	14次	f上サブトレ	土塁盛土?	(輪違)						
1113		142	14次	f	崩落礫	桟						
1115	30	27	14次	f	崩落礫	輪違	F3	11.8	12.0		1.8	
1124	28	163	14次	f	流土	桟						
1125		150	14次	f	流土	隅						
1126	30	4	14次	f	礫層上粘質土	輪違	B	11.8	-		1.9	
1127		18	14次	f	礫層上粘質土	輪違	E1	10.6	12.9		1.8	
1128	30	19	14次	f	礫層上粘質土	輪違	E1	9.6	-		1.8	
1129		24	14次	f	礫層上粘質土	輪違	F1	11.7	12.0		1.9	
1130	30	26	14次	f	礫層上粘質土	輪違	F2	11.9	11.7		1.7	
1135	30	7	14次	f	近現代整地層	輪違	C1	13.3	10.8		1.7	
1136	30	25	14次	f南	近現代整地層	輪違	F1	12.1	11.6		1.8	
1140		160	14次	f	表土	二の平隅						
1141	30	2	14次	f	表土	輪違	A	12.0	-		1.7	被熱
1142	30	9	14次	f	表土	輪違	D1	13.6	-		1.3	
1143	29	161	14次	f	表土	鬼						
1144	29	162	14次	f	表土	不明						

第35表　遺物観察表（その他の瓦3）

3. 自然科学分析

3-1. 本丸大手北堀出土の大型植物化石

新山雅広(パレオ・ラボ)

試料と方法

大型植物化石群集の検討は、加納城本丸の堀埋土(9次調査)より採取された合計1試料について行った。試料採取地点は、大きく4層(上位よりⅠ層～Ⅳ層)に層位区分され、Ⅰ層は昭和の埋め立て土、Ⅱ層は明治以降の埋め立て土、Ⅲ層は堀埋土、Ⅳ層は地山(砂礫層)である。堀埋土であるⅢ層は、更に4つの土層(上位よりⅢ1～Ⅲ4層)に細分され、試料が採取されたのは、Ⅲ2層(第8図11層)である。11層は、黄灰色泥炭質粘土で草本遺体を含み、ヒシ属果実が密集する。なお、11層は、花粉化石群集の検討も行われた。

大型植物化石の採集方法は、堆積物試料約200ccを0.25mm目の篩を用いて水洗篩い分けを行い、残渣から実体顕微鏡下で拾い上げた。また、これとは別に比較的大型の種実類を採集する目的で1mm、2mm目の篩を用いて約1500ccを処理した。

出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の分類群名・部位(個数)は、以下の通りである。

木本(3分類群)：マツ属複維管束亜属・葉(破片5個)、スギ・雄花(完形3個)、不明・芽(破片6個)

草本(4分類群)：ナデシコ科・種子(完形1個)、カタバミ属・種子(完形2個)、ヒメビシ・果実(完形79個、半分ないし破片10個)、イヌコウジュ属・果実(完形1個)

考　察

検討した結果、同定されたのは、針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ、草本のナデシコ科、カタバミ属、ヒメビシ、イヌコウジュ属であった。マツ属複維管束亜属、スギは、花粉化石群集の検討で森林を構成する主要な要素と考えられたが、堀の付近に見られたと考えられる。ヒメビシは、非常に多産したが、現地でも密集して堆積していた。花粉化石では、1%未満の出現率でしかないが、少なくとも試料採取地点付近においては、ヒメビシは相当多く見られたであろう。ナデシコ科、カタバミ属、イヌコウジュ属は、堀周辺の日当たりの良い乾き気味の草地を構成していたであろう。

主な大型植物化石の形態記載

ヒメビシ　*Trapa incisa* Sieb. et Zucc.　果実

倒三角形で刺状の突起(角)が4本ある。刺の部分も含めた大きさは20～30mm前後で小さい。

ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

扁平な円形で表面には、尖り気味な円錐状の突起が多数ある。ハコベもしくはミドリハコベに類似する。

イヌコウジュ属　*Mosla*　果実

果実は黄褐色で側面観は円形、上面観は楕円形。表面は網目紋。大きさ0.9mm程度。

3-2. 本丸大手北堀の花粉化石群集

新山雅広(パレオ・ラボ)

堆積物の記載と試料

花粉化石群集の検討は、加納城本丸の堀埋土(9次調査)より採取された合計3試料について行った。試料が採取されたのは、Ⅲ1(第8図10層)、Ⅲ2(第8図11層)、Ⅲ4(第8図31層)層である。Ⅲ1層は、オリーブ黒色泥炭質粘土で草本遺体を含む。Ⅲ2層は、黄灰色泥炭質粘土で草本遺体を含み、ヒシ属果実が密集する。Ⅲ4層は、黒褐色粘土で砂、草本遺体を少し含む。なお、Ⅲ2層は、大型植物化石の検討も行われた。

方　法

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理･化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定･計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉･胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉38、草本花粉31、形態分類を含むシダ植物胞子3である。堀埋土の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

Ⅰ帯(Ⅲ4層)：樹木花粉の占める割合は、約26%と低率である。最も高率であるのは、コナラ亜属(約20%)であり、次いでクマシデ属－アサダ属･アカガシ亜属(約12%)、マツ属複維管束亜属･ブナ属(約8%)、ハンノキ属(約7%)、イチイ科－イヌガヤ科-ヒノキ科･カバノキ属(約6%)の順に高率である。他では、フサザクラ属、センダン属、アカメガシワ属、ウルシ属などが低率で出現する。草本花粉では、イネ科が約34%と最も高率であり、ヨモギ属(約10%)、クワ科(約7%)も比較的高率である。若干目立つのは、カヤツリグサ科、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、アリノトウグサ属、他のキク亜科、タンポポ亜科であり、1～3%前後である。他は、いずれも1%以下の低率であり、ガマ属、ヒルムシロ属、ホシクサ属、ツユクサ属、ヒツジグサ属、カラマツソウ属、ミソハギ属、キカシグサ属、ガガブタなどや水生シダ植物のサンショウモなどが出現する。

Ⅱ帯(Ⅲ2層)：樹木花粉の占める割合は、約72%と急増する。最も高率であるのは、エノキ属-ムクノキ属(約34%)であり、次いでマツ属複維管束亜属(20%)、アカガシ亜属(約19%)、スギ属(約10%)の順

和名	学名	Ⅲ1層	Ⅲ2層	Ⅲ4層
樹木				
マキ属	Podocarpus	14		
モミ属	Abies	6		2
ツガ属	Tsuga		3	2
マツ属単維管束亜属	Pinus subgen. Haploxylon	5		
マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon	143	164	18
マツ属(不明)	Pinus (Unknown)	10	25	9
コウヤマキ属	Sciadopitys			2
スギ属	Cryptomeria	39	79	5
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.-C.	4	8	13
ヤナギ属	Salix		1	
ヤマモモ属	Myrica		1	
クルミ属	Juglans	1	1	
クマシデ属－アサダ属	Carpinus - Ostrya	1	15	26
ハシバミ属	Corylus			1
カバノキ属	Betula	1	6	13
ハンノキ属	Alnus	6	31	16
ブナ属	Fagus	1	16	17
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	33	24	44
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	39	152	26
クリ属	Castanea		4	5
シイノキ属	Castanopsis	3	4	6
ニレ属－ケヤキ属	Ulmus - Zelkova	1	1	
エノキ属－ムクノキ属	Celtis-Aphananthe	22	277	3
フサザクラ属	Euptelea			1
センダン属	Melia	2		1
ユズリハ属	Daphniphyllum		1	
アカメガシワ属	Mallotus		1	3
ウルシ属	Rhus		1	1
モチノキ属	Ilex	3		
ニシキギ科	Celastraceae		1	
カエデ属	Acer			1
トチノキ属	Aesculus			1
ブドウ属	Vitis			1
ツタ属	Parthenocissus	1		
ヒサカキ属近似種	cf. Eurya	1		
ウコギ科	Araliaceae		3	
エゴノキ属	Styrax		1	
ガマズミ属	Viburnum	1		
草本				
ガマ属	Typha		1	1
ヒルムシロ属	Potamogeton	1		2
オモダカ属	Sagittaria		1	
イネ科	Gramineae	11	109	280
カヤツリグサ科	Cyperaceae		11	24
ホシクサ属	Eriocaulon			1
ツユクサ属	Commelina			3
クワ科	Moraceae		102	60
ギシギシ属	Rumex	1	17	21
サナエタデ節－ウナギツカミ節	Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon			1
他のタデ属	other Polygonum		1	
ソバ属	Fagopyrum		2	14
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	15	11
ナデシコ科	Caryophyllaceae		1	2
ジュンサイ属	Brasenia	1	1	
ヒツジグサ属	Nymphaea			1
カラマツソウ属	Thalictrum			1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae		1	2
アブラナ科	Cruciferae	1	6	2
ミソハギ属	Lythrum			1
キカシグサ属	Rotala			1
ヒシ属	Trapa	2	2	
アリノトウグサ属	Haloragis		2	21
セリ科	Umbelliferae			8
ガガブタ	Nymphoides indica O.Kuntze		7	1
シソ科	Labiatae	1		
ナス属	Solanum			1
タヌキモ属	Utricularia	1		
ヨモギ属	Artemisia	1	21	86
他のキク亜科	other Tubuliflorae		1	20
タンポポ亜科	Liguliflorae		1	9
シダ植物				
サンショウモ	Salvinia natans	2		1
単条型胞子	Monolete spore	1	5	10
三条型胞子	Trilete spore	5	6	20
樹木花粉	Arboreal pollen	337	820	217
草本花粉	Nonarboreal pollen	21	302	574
シダ植物胞子	Spores	8	11	31
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	366	1133	822
不明花粉	Unknown pollen	7	25	57

T.-C.はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

第36表　花粉化石一覧表

に高率である。Ⅰ帯で最も高率であったコナラ亜属は、約3%と激減し、比較的高率であったイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属も大幅に減少する。他では、ヤナギ属、ヤマモモ属、ユズリハ属、アカメガシワ属、ウルシ属、エゴノキ属などが1%以下で出現する。草本花粉では、イネ科(約10%)、クワ科(約9%)の順に高率であるが、イネ科は大幅に減少する。他は、いずれも1%以下～2%未満の低率であり、ガマ属、オモダカ属、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ジュンサイ属、ヒシ属、アリノトウグサ属、ガガブタ、ヨモギ属などが出現する。

Ⅲ帯(Ⅲ1層)：樹木花粉の占める割合は、更に増加し、約92%と高率である。最も高率であるのは、更に増加するマツ属複維管束亜属(約42%)であり、次いでスギ属･アカガシ亜属(約12%)、コナラ亜属(約10%)、エノキ属-ムクノキ属(約7%)の順に高率である。若干目立つのは、マキ属、モミ属、マツ属単維管束亜属、ハンノキ属であり、2～4%前後である。他は、いずれも低率であり、センダン属、モチノキ属、ツタ属、ヒサカキ属近似種、ガマズミ属などが出現する。草本花粉では、イネ科が約3%であるほかは、いずれも1%以下の低率であり、ヒルムシロ属、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ジュンサイ属、アブラナ科、ヒシ属、タヌキモ属、ヨモギ属、サンショウモなどが出現する。

考　察

ここでは、上記した花粉化石群集帯に基づいて加納城周辺の植生変遷について述べる。

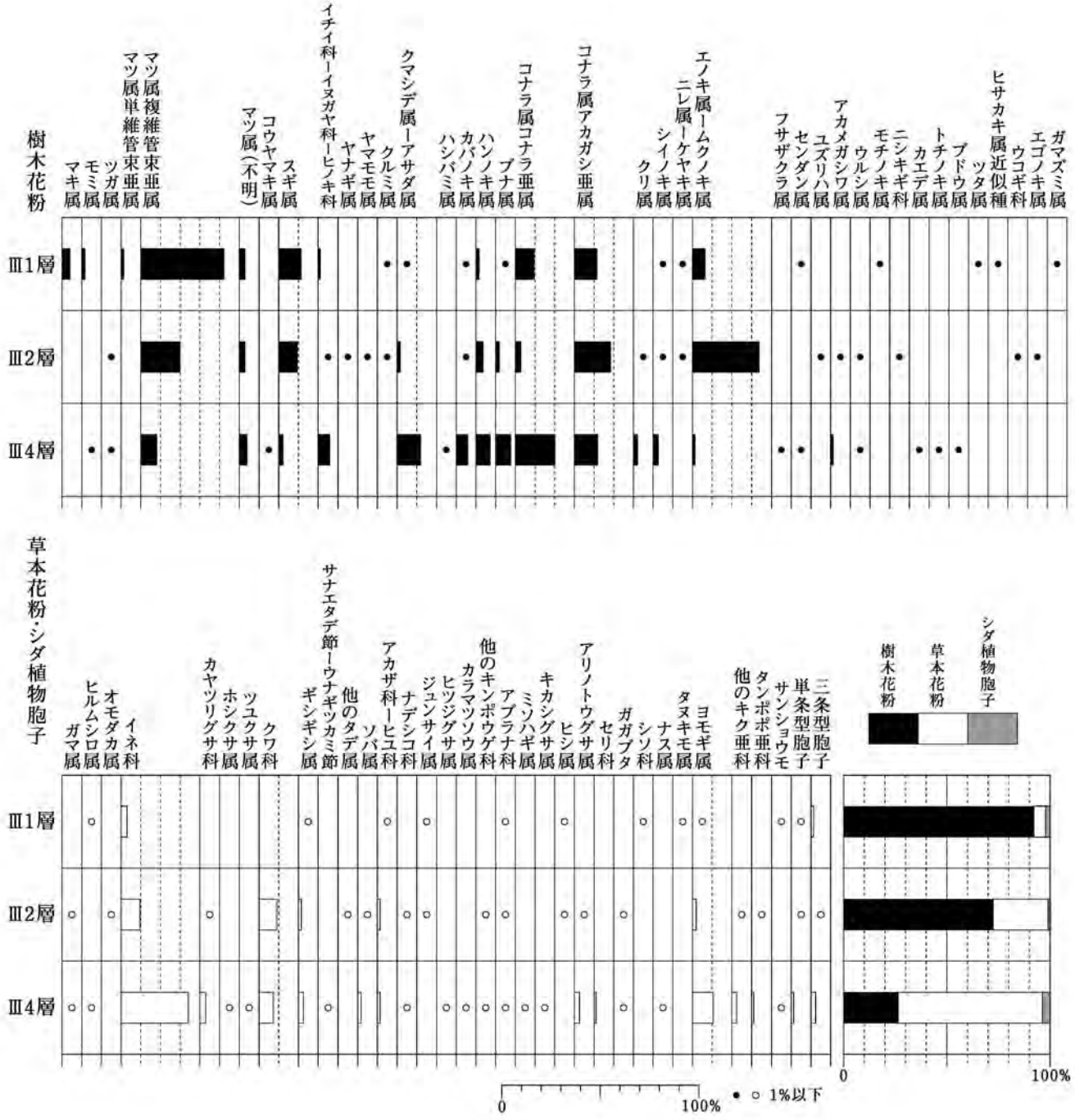
[Ⅰ帯(Ⅲ4層)の古植生]

森林植生については、コナラ亜属をはじめ、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属などの落葉広葉樹主体の森林が成立していたと予想される。他の主要な要素は、針葉樹ではマツ属複維管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、常緑広葉樹ではアカガシ亜属であっただろう。他では、僅かながらもフサザクラ属、センダン属、アカメガシワ属、ウルシ属などが見られたであろう。

堀の堆積環境については、池や沼などに生育する浮葉植物のヒルムシロ属、ヒツジグサ属、ガガブタの産出から、ある程度水深があり、ヒルムシロ属の産出から、幾分流れを伴う場所もあった可能性が考えられる。また、浅い場所には、抽水植物のガマ属、キカシグサ属、サンショウモなどが生育していたであろう。堀周辺には、クワ科、ヨモギ属をはじめ、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、アリノトウグサ属、タンポポ亜科などが混じる日当たりの良い乾き気味の草地が見られたであろう。また、ソバ属の産出からソバの栽培地の存在が予想され、草地構成種の一部は、そのような場所に雑草として生育していたとも考えられる。なお、多産するイネ科については、属まで絞り込むことは困難であるが、堀内にヨシが生育していたことや、草地優占種のススキ、シバを含む可能性が考えられる。また、イネ科は比較的高率であり、いわゆる水田雑草のキカシグサ属、サンショウモの随伴から、水田が存在していた可能性も考えられる。

[Ⅱ帯(Ⅲ2層)の古植生]

落葉のエノキ属-ムクノキ属、針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ属、常緑のアカガシ亜属が多く見られる森林が成立していたと予想される。Ⅰ帯の時期に主要な要素であったコナラ亜属をはじめとした落葉広葉樹やイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、大幅に減少したであろう。他に、僅かながらもシイノキ属、ヤマモモ属、ユズリハ属などの照葉樹林要素やヤナギ属、アカメガシワ属、ウルシ属、エゴノキ



第92図　花粉化石分布図

属なども見られたであろう。

堀は、引き続き、ある程度水深があり、ジュンサイ属、ヒシ属、ガガブタが生育していたであろう。また、浅い場所には、ガマ属、オモダカ属なども見られたであろう。なお、ヒシ属については、大型植物化石の検討で全てがヒメビシであったことから、ヒメビシを起源とすると考えられる。堀周辺には、引き続き、クワ科などから成る草地やソバの栽培地が見られたが、草地構成種の多くは、出現率を下げることから、草地は幾分減少したのであろう。なお、イネ科は、大きく減少するが、草地構成種と呼応するように減少することから、ススキ、シバなどが減少した結果である可能性が考えられる。いわゆる水田雑草のオモダカ属の産出から、水田の存在の可能性も否定は出来ないが、水田が存在していたにしては、イネ科の出現率は低いように思われる。

[Ⅲ帯(Ⅲ1層)の古植生]

堀が埋まる直前は、マツ属複維管束亜属が大幅に増加して優占し、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ属を主要な要素とした森林が成立していたと予想される。エノキ属-ムクノキ属は、主要な要素ではあったが、Ⅱ帯の時期に比べて大幅に減少したようである。他には、僅かながらもマキ属、モミ属、マツ属単維管束亜属、ハンノキ属、センダン属、蔓性のツタ属、ガマズミ属のほか、モチノキ属、ヒサカキ属近似種などの照葉樹林要素も見られたであろう。

堀は、引き続き、ある程度水深があり、ヒルムシロ属、ジュンサイ属、ヒシ属、タヌキモ属、サンショウモが生育していたであろう。堀周辺の草地は、更に狭まり、僅かに見られる程度であっただろう。構成種は、クワ科は見られなくなり、イネ科、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などであっただろう。また、ソバの栽培地もなくなったと予想される。

おわりに

加納城本丸の堀埋土の花粉化石群集を検討した結果、以下のような変遷が予想された。

Ⅰ帯(Ⅲ4層)の時期は、コナラ亜属をはじめとした落葉広葉樹主体の森林が成立していたと予想された。堀は、ある程度水深があり、ヒルムシロ属、ヒツジグサ属、ガガブタなどが生育していた。堀周辺には、クワ科、ヨモギ属をはじめとした草地やソバの栽培地が存在していた。

Ⅱ帯(Ⅲ2層)の時期は、エノキ属-ムクノキ属、マツ属複維管束亜属、アカガシ亜属が多く見られる森林が成立していた。堀は、引き続き、ある程度水深があり、ジュンサイ属、ヒシ属(ヒメビシ)、ガガブタなどが生育していた。堀周辺には、イネ科、クワ科などから成る草地やソバの栽培地が見られたが、草地は幾分減少した。

堀が埋まる直前のⅢ帯(Ⅲ1層)の時期は、マツ属複維管束亜属の優占する森林が成立していた。堀は、引き続き、ある程度水深があり、ヒルムシロ属、ジュンサイ属、ヒシ属、タヌキモ属、サンショウモが生育していた。堀周辺の草地は、クワ科が見られなくなって更に狭まり、ソバの栽培地もなくなった。

3-3. 本丸大手北堀出土木材の樹種同定

植田弥生(パレオ・ラボ)

はじめに

ここでは、加納城跡本丸の堀内(9次調査)から出土した木材22点の樹種同定結果を報告する。これらの木材は、共伴する瓦の形式から江戸時代前半と見られ、瓦や木材の一部に被熱の跡がある事から17世紀終末の元禄の大火または享保の大火により被災した建築物を投棄した一部ではないかと推定されている。

試料と方法

主に薄い板材が瓦と共に混在して出土していた。方向性がそれぞれ異なる板材から材の一部破片を採取した。この各破片から、材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用いて薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート(材組織標本)を作製した。そして光学顕微鏡を用いてこの材組織を40～400倍に拡大して観察を行った。

同定した材組織標本はパレオ・ラボに保管されている。

結　果

同定結果の一覧を、第37表に示した。

検出された分類群は、アカマツ(14点)・マツ属複維管束亜属(2点)・モミ属(3点)・ツガ属(3点)で、すべて針葉樹材であった。マツ属複維管束亜属は、材組織の保存が悪いためアカマツとクロマツの識別が困難であった試料である。

試料1は、約3.5cm×5.0cmの板目取りの角材で、樹種はモミ属であった。そのほかの試料は、厚みが3mm前後で幅は5cm前後で、ほとんどが板目取りの薄い板状であった。試料22は幅が8cmとやや広い。これらの薄い板材は、アカマツ(14点)が最も多く、モミ属(2点)やツガ属(3点)も使われていた。なおいずれの樹種の板目取りの薄い板材には、1～2多くて3年輪が含まれていた。

以下に同定された樹種の材組織を、分類配列順に記載する。

モミ属　*Abies*　マツ科　図版35　1a-1c(試料№12)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚がある。分野壁孔は小型のスギ型やヒノキ型で、1分野に1～6個で配置は不規則である。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

ツガ属　*Tsuga sieboldii* Carr.　マツ科　図版35　2a-2c(試料№14)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。前述のモミ属と同様に、放射柔細胞の接線壁に数珠状肥厚があるが、ツガ属には放射組織の主に上下端に有縁壁孔を持つ放射仮道管が存在する。

ツガ属には本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコメツガがあるが、材組織からは2種を区別することはできない。材は重硬で割裂性も大きく耐久性もよい。

アカマツ　*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.　マツ科　図版35　3a-3c(試料№2)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った鋸歯状肥厚がある。放射仮道管内壁の肥厚が顕著であることからアカマツと同定した。

なお、細胞壁が不朽していて放射仮道管の鋸歯状肥厚の特徴が充分に観察できない試料は、マツ属複維管束亜属の同定レベルに留めた。

まとめ

発掘状況からこれらの薄い板材は、瓦の下に葺板として使われていたのではないかと想像された。屋根に使われる柿板は、桧葺きがよく知られておりヒノキの板材が敷かれる。また柿板にはサワラも良く使用されるそうである。従ってこれらの板材の樹種も、ヒノキやサワラなどヒノキ科で、材質の滑らかな点からもヒノキ科の材と予想された。しかし樹種同定の結果は、ヒノキやサワラは検出されず、アカマツがほとんどで、モミ属とツガ属が混じる樹種構成であった。一枚の板材の厚みは3mm前後と非常に薄かった。アカマツやモミ属は、年輪幅が比較的広く、晩材部と早材部の硬さに差があり晩材部が目立つ傾向がある。しかし、これらの板材の横断面は非常に滑らかで、一般的なアカマツやモミ属の横断面とは異なっていた。このような薄い板材を加工するのに適した材質のアカマツやモミ属・ツガ属の材を厳選して加工したようである。樹種同定結果から、柿板以外の用途も考える必要があるのかも知れない。

試料№	形　状	樹　種
1	角材	モミ属
2	薄い板目板状	アカマツ
3	薄い板目板状	マツ属複維管束亜属
4	薄い板目板状	アカマツ
5	薄い板目板状	アカマツ
6	斜め板目板状	アカマツ
7	薄い板目板状	アカマツ
8	薄い板目板状	アカマツ
9	薄い板目板状	アカマツ
10	薄い板目板状	アカマツ
11	薄い板目板状	アカマツ
12	薄い板目板状	モミ属
13	薄い板目板状	モミ属
14	薄い板目板状	ツガ属
15	薄い板目板状	ツガ属
16	薄い板目板状	アカマツ
17	薄い板目板状	アカマツ
18	薄い板目板状	マツ属複維管束亜属
19	薄い板目板状	アカマツ
20	薄い板目板状	アカマツ
21	薄い板目板状	ツガ属
22	板目板状	アカマツ

第37表　本丸大手北堀SX14出土木材の樹種同定結果

3-4. 本丸大手北堀出土漆器の塗膜分析及び樹種同定

(株)吉田生物研究所

3-4-1. 塗膜分析

はじめに

加納城跡から出土(10次調査・SX16)した漆器1点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

調査資料

調査した資料は、下表に示す近世の漆器1点である。

No.	保存処理No.	品名	樹種	概要
1	1	漆器椀	トチノキ	内外面とも黒色で無文の碗。

調査方法

上表の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作成した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

断面観察結果

塗膜断面の観察結果を下表に示す。

No.	器種	部位	写真No.	塗膜構造(下層から)		
				下地		漆層構造
				膠着剤	混和材	
1	椀	内面	1	柿渋	木炭粉	透明漆1層
		外面	2	柿渋	木炭粉	透明漆1層

塗膜構造：下層から下地、漆層という構造をとる。

下地：内外両面とも、茶褐色の柿渋に木炭粉を混和した渋下地が施されている。漆層との境界から、垂直方向の亀裂が多数入る。

漆層：内外両面とも黄褐色の透明漆層が1層観察された。この透明漆層の層厚は、ほとんど10μmに満たない極めて薄い層である。この層には特に何も混和物は認められない。

摘　要

岐阜市に所在する加納城跡から出土した、近世の漆器椀の塗膜構造を観察した。

トチノキの木地の上に、内外両面とも柿渋に木炭粉を混和した渋下地、特に何も混和しない透明漆層が1層重なる様子が観察された。このような比較的単純な塗膜構造は、中世から近世の漆器の塗膜構造としてよく見られる。

3-4-2. 樹種同定

試　料

試料は加納城跡から出土した容器1点である。

観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製

した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

結　果

樹種同定結果(広葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

トチノキ科トチノキ属トチノキ(*Aesculus turbinate Blume*)

(遺物No.1)(図版36)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～80μm)が単独かあるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数共に年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている。(上下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は単列で大半が高さ～300μmとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

〈参考文献〉
島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版　1988
島地　謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社　1982
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所　1999
北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社　1979
深澤和三「樹体の解剖」海青社　1997
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」1985
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」1985

3-5. 本丸大手北堀出土下駄の樹種同定

(株)吉田生物研究所

1. 試料

試料は岐阜市加納城跡から出土した服飾具1点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1)ヒノキ科ヒノキ属(*Chamaecyparis* sp.)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

〈参考文献〉
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」 地球社(1982)
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所(1999)
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社(1979)
深澤和三「樹体の解剖」海青社 (1997)
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)
〈使用顕微鏡〉
Nikon DS-Fi1

No.	品名	樹　種
1	下駄	ヒノキ科ヒノキ属

4. 総　括

4-1. 近世加納城

4-1-1. 石垣

現存する石垣は本丸全周、二の丸北面、三の丸北面の一部で、その他厩曲輪西面に一部が残存する。また調査で、二の丸東面の14地点(第3図・以下同)・27地点、二の丸西面の23地点、三の丸南面の8地点で、石垣が検出されている。

石材は基本的にチャートの自然石を用いており、ごく一部に硬質の砂岩があるが、現存する三の丸北面の箇所は砂岩の割合が大きい。特徴的なのは、主たる石材が自然石のため、生じる空隙に拳大程度の円礫を詰め込んでいることである。石材の大きさは、縦36cm、横56cmを平均として(註1)、表面積の偏差が比較的小さく、横長に使用するのが圧倒的である(註2)。控は現存のものを観察する限り、縦横いずれのサイズよりも大きいようである。隅角部は直方体を交互に積み重なる算木積み風であるが、完全なものではない。自然石の使用のため、制約が生じているものと思われる。

23地点では基礎部分が良好に残存していたため、地山の砂礫層直上に礫混じりの粘土層で石垣の基礎固めをし、その上に石材を据えている構造が判明した。粘土層は石垣の前面に延び、堀のテラス面を覆っていることも分かった。全ての箇所でこのような構築方法が明らかとなったわけではないが、14・27地点でも粘土層が石垣基礎周辺で観察された。

本丸の堀での調査では、石垣の基礎部分を検出しているが、いずれも地山を2m程度掘り込み、直接砂礫層に根石を設置していることが確認された。前述の粘土層による基礎や胴木などは見られない。根石は隅角を除く他の石材よりやや大きく、また石垣の面より10～20cm程度前に置かれている。裏込め礫は地山の砂礫層より得られる、円礫を用いており、9・28地点では、裏込め層と背後の盛土が、クサビ状の互層を形成している様子が確認された。

明治半ばの地籍図が作成された時点では、石垣は完全に埋没していなかったようで、図中に石垣らしき表記が見られる。調査で見つかる場所とも完全に一致するため、地籍図の正確性を裏付けるものとして、縄張り復元作業においても信頼に値すると見られる。

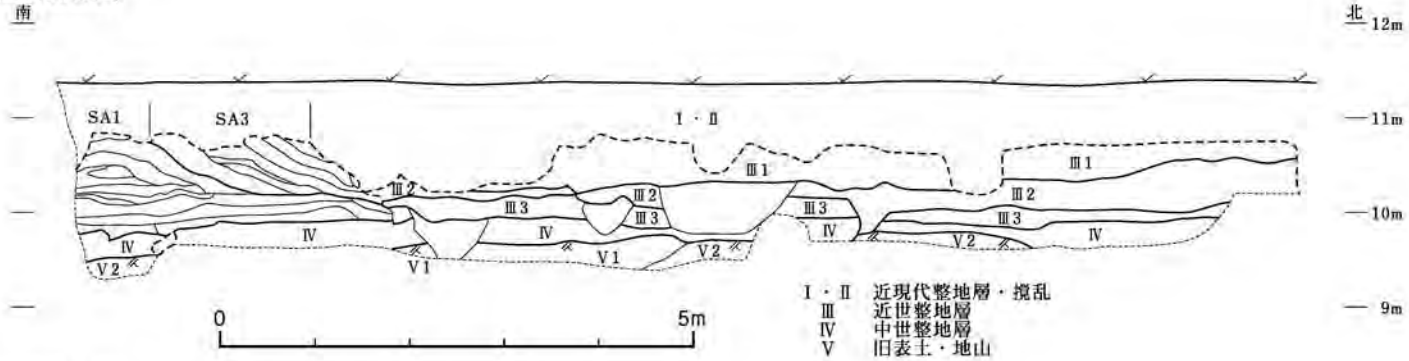
(註1)SV2の場合。発掘調査で検出した他の石垣の平均値は、2次調査のSV6で縦39cm、横59cm、SV7で縦43cm、横60cmと、近似している。
(註2)内堀信雄「美濃地域戦国～近世初頭城郭石垣変遷-加納城城郭石垣への道-」『史跡加納城跡』2003　岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団

4-1-2. 土塁

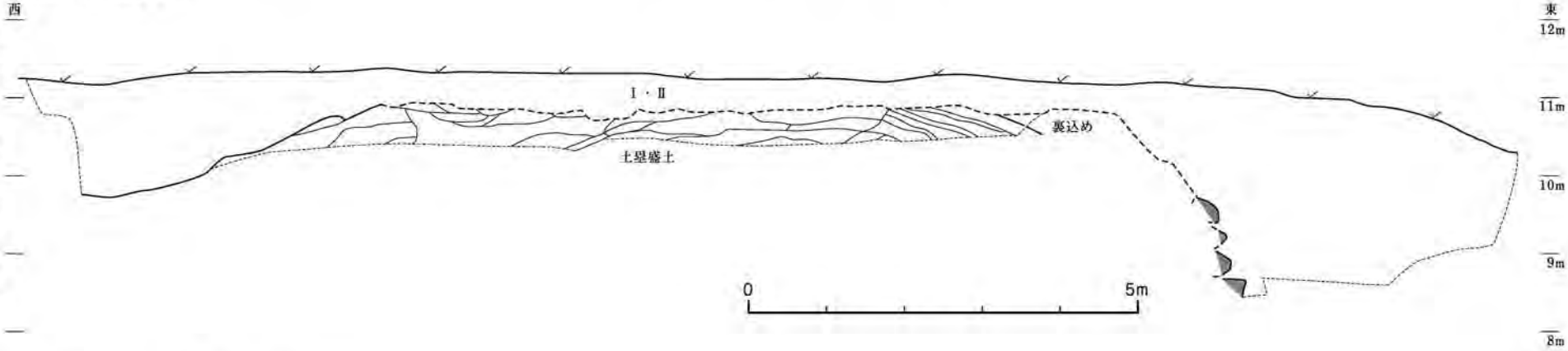
現存する土塁は本丸の全周と三の丸北辺の一部分のみである。また二の丸北東に位置する気象台の敷地は周囲よりかなり高く、土塁の名残ということができよう。

調査で土塁が確認されたのは、本丸南門内枡形部分の9地点、三の丸北辺の10地点・28地点・20地点、二の丸東辺で22地点・27地点・14地点、二の丸南辺で14地点である。三の丸では土塁の推定範囲も調査を行っているが、後世の削平により、全く残存していない。

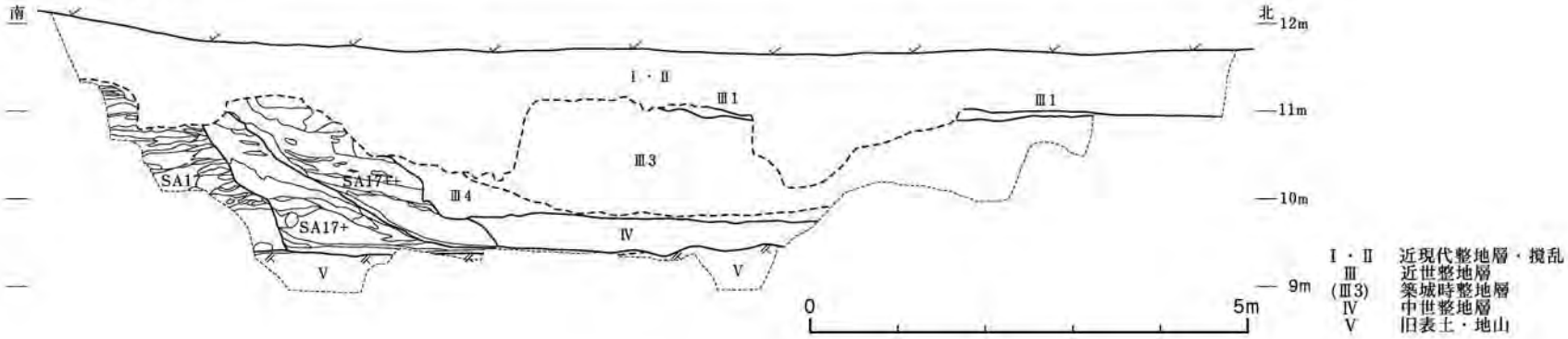
14地点（二の丸南辺）



27地点（二の丸東辺）



9地点（中世加納城土塁・本丸南辺）



第93図　加納城土塁断面図

土塁の構成土は基本的に砂礫で、堀掘削に際して排出される地山の砂礫層を積み上げているものと思われる。土塁盛土の砂礫層中からは、須恵器・灰釉陶器・戦国期の土師器皿など、戦国期までの遺物が少なからず出土する。28地点は石垣の背後を調査し、裏込め礫層と土塁盛土がくさび形に互層を成していることが分かった。22地点では土塁の盛土中に瓦が包含され、土質も粘質土であることから、改修が行われていると推定される。また10地点では土塁内側の裾部分に石列が設置されていると考えられる。14地点南端では暗褐色系の砂質土から成る土塁の上に、砂礫層から成る土塁が重なっており、中世加納城の土塁を巨大化するように近世加納城の土塁を構築していることが判明した。同様の状況は9地点の本丸6次調査でも確認された。

二の丸東辺の石垣は地籍図と調査の成果から、図のようなカギ型をしていると推測されるが、土塁も同様な形状をしている可能性が高いことが、平成15年度に行ったレーダー探査で判明した(註3)。

9地点の土塁は現在全く姿を留めない内枡形を構成するもので、石垣の根石、その裏込め礫、土塁の盛土がわずかに検出することができた。

本書に掲載した調査では土塁の断割を行っていないが、36地点では、ある時期に土塁を改修している状況が確認された。

(註3)『平成15・16年度市内遺跡発掘調査報告書』2005　岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団

4-1-3. 堀

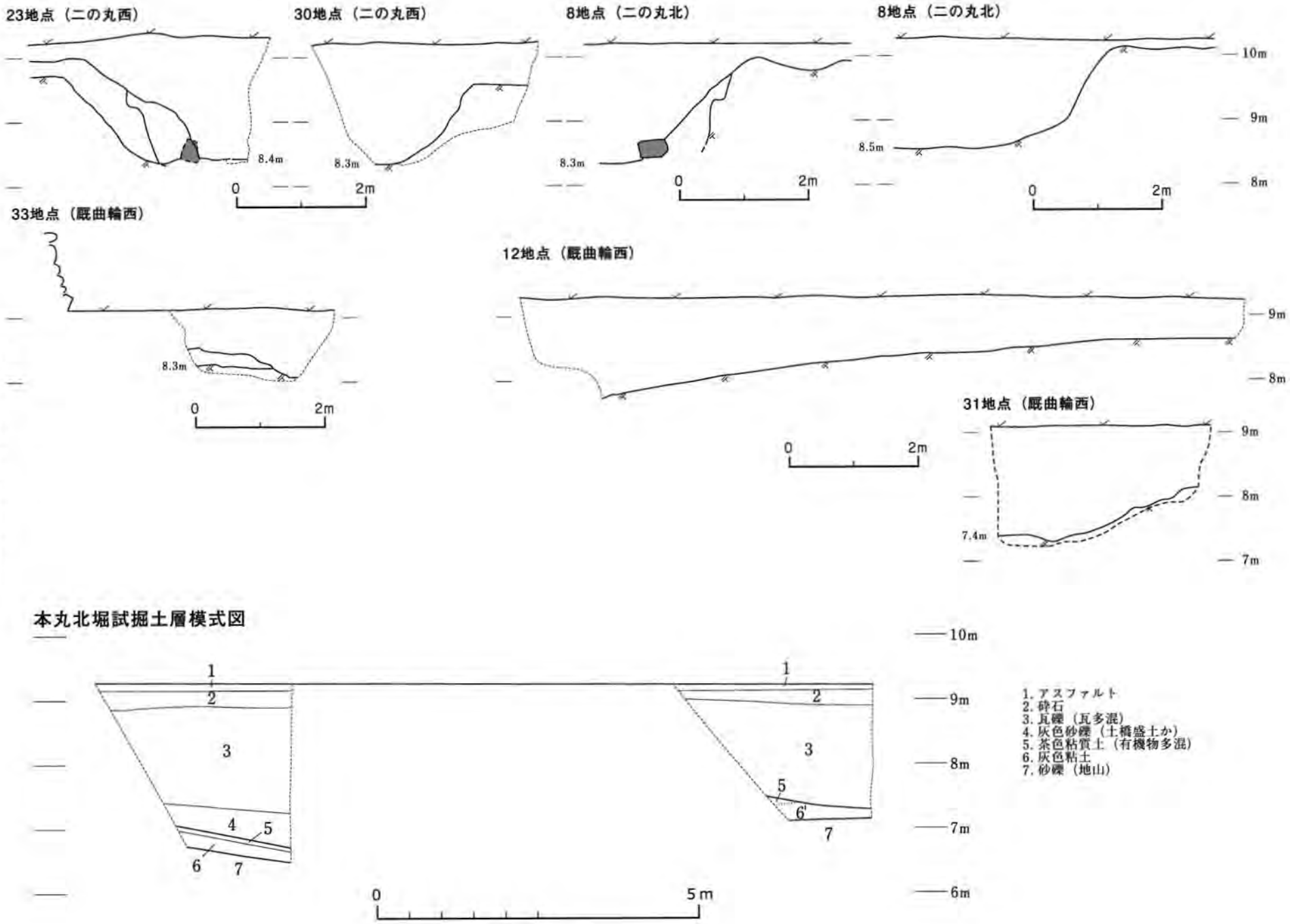
本丸周囲の堀は昭和50年度以降7度の本格的な調査が行われており、データとしては十分なものが得られたと考えられていた。ところが32地点の本丸10次調査で、障子堀構造のものであることが判明した。本丸を巡る堀は全て障子堀である可能性が高いことは、前述したとおりであるが、今一度堀の特徴を挙げておく。

まず1つ目は石垣の前に幅3m程度の平坦面があるということである。平坦面は地山である砂礫層の削平面で、レベルはおよそ8m、これをベースに石垣が構築されている。地山が崩れやすい砂礫層であることから、石垣の崩落を防ぐための構造であろうと思われるが、後述するように二の丸の堀、川岸においても同様な状況が見受けられ、加納城の特徴の一つと考えられる。堀内の水性堆積層のレベルから見て、この平坦面の高さ位まで常時滞水していたと考えられる。逆に言うとこの平坦面は通常露出していた可能性が高い。

2つ目は、全ての地点で顕著に表れるわけではないが、平坦面周辺で粘質土等による地盤の補強が施されることである。石垣崩落の予防策であるとともに、堀の肩の崩落を防ぐためとも考えられる。

最後に堀中央部分で堀の向きに併行する畝状の高まりが見られることがある。これが障子堀の畝を表していると考えられる。

本丸以外では、二の丸周囲の堀について23地点・8地点・30地点の成果が大きい。いずれの調査地点でも堀底は水平で、レベルは8.3～8.5mと近似している。23地点では堀底に粘土が敷かれているが、他は地山が露出している。いわゆる高石垣が二の丸側にしか無かったことに因ると思われる。全体の堀の断面形状は未調査のため不明であるが、堀中央部分での工事立会では堀底が急激に深くなることが確認されているため、確認された水平な堀底は、本丸同様の石垣前の平坦面であると考える。



第94図　近世加納城堀断面図

厩曲輪の西堀では4箇所で試掘調査が実施されている。厩曲輪側にあたる33地点はレベル8.3m付近で地山が平坦になっており、その上に粘土層が敷かれていることが分かった。石垣との関係が不明であるが、二の丸の状況を考えると、厩曲輪西面にも石垣が設置されていた可能性が高い。現況でも、現代に構築された川原石による玉石垣下に、チャートの石垣が部分的に観察することができる。一方対岸にあたる12地点・35地点では、堀底の地山砂礫層は極めて緩やかな傾斜であることが分かり、対岸の堀の肩すら明示することができない状況である。ところが31地点では急な落ち込みを見せ、7.4m付近でやや平坦な部分となる。このような状況の理由は現在のところ不明であるが、石垣が構築されていた可能性は低いと考えられる。

4-1-4. 整地

加納城は長良川扇状地上に立地しているため、地山は砂(円)礫層である。よって最も大規模な普請を行った築城時の整地層や土塁の盛土は砂礫である。これらの中からは須恵器・灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸製品・土師器皿など戦国期以前の遺物が少なからず出土する。築城の際、該期の遺構などを破壊したことによる混入と理解できる。

築城時遺構の整地においても、大規模なものは砂礫土などでかさ上げをし、最終工程で礫が混じらない均質な粘質土や砂質土で覆うことが多々ある。

層中に焼土や炭・瓦が混入することもあり、火災を契機とした改修工事ということがいえる。

場所によって異なるが、改修は何度も行っているようで、二の丸では築城時を除いて2回の整地が想定されている。

4-1-5. 火災の痕跡

火災の痕跡として認められる最も明確なのは二次被熱をした瓦であろう。本書のSX14やSX22・25・三の丸焼土層などのように、瓦が集中して出土する瓦集積として検出できることもある。この状況は、火災後廃棄物を処理し、復興する際に生じたものと理解するのが妥当と考える。

整地層中に二次被熱した瓦・焼土・炭が包含されることがある。これも火災後の整地と見ることができる。本丸内では、本書12次調査A区Ⅲ層が代表的な例で、二の丸でも確認することができた。

文献上、加納城内に最も被害が及んだ火災は、享保13年の大火で、二の丸・厩曲輪・三の丸に被害が及んだとされていた。しかし本丸が焼失した記録は今までのところ未確認で、今回の調査でSX14・22・25、12次A区Ⅲ層など本丸内にも火災が及んでいた状況が検出できたことは、新たな事実を示すものである。

4-1-6. 瓦集積

これまでの調査で17基の瓦集積が検出されている。以下列挙すると、本丸では2地点SX1、3地点SX4・SX5、9地点SX8・SX9、26・32・34地点SX13～19、36地点SX21・SX22、37地点SX24・25があり、他には二の丸14地点SX1、三の丸7・8地点焼土層がある。建物等の取り壊しに伴う一括廃棄と考えられ、当時使用されていた瓦のまとまった資料として重要である。

ほとんどが廃城時のものと考えられるが、7・8地点、26・32・34地点のSX15・19以外と36地点SX22、37地点のSX25は、改修に伴うものと考えており、加納城で使用された瓦の変遷を考えるにお

いて極めて重要な資料である。改修時の瓦集積には、二次被熱をしているものが含まれ、また瓦当面にキラコを使用したものが無い。近世前半の火災による廃棄であるが、陶磁器を伴わないため、詳細な時期は不明、なおかつ1度の火災か複数回かも現在のところ確証はない。

4-1-7. 建物

建物跡が検出されているのは、本報告の本丸大手櫓門の他、二の丸の調査で礎石が検出されている。13地点では1間間隔(東西約2.0m、南北約1.9m)で3個×3個の整然と配置されたものや周囲に数個の礎石が検出されており、24地点でも1個の礎石が確認された。二の丸内に御殿があったことは絵図等から見て間違いなく、13地点の礎石は御殿の一部であると思われる。礎石が検出される面は被熱をしており、焼失した可能性が高く、二の丸が火災にあったとされる享保13年(1728)が候補の一つとなる。14地点では数個の礎石が散見できたが、狭小のトレンチ調査であったため、建物の様子は明かでない。

本丸では、9地点の調査で掘立柱建物の柱穴2基が確認されているが、性格等は明かでない。37地点では櫓門の礎石2石が検出された。櫓門に接続する袖石垣も検出でき、その配置状況から東西6.6m、南北11.0mの大きさが推定される。また11地点では、推定櫓門に平行する溝が確認された。その位置から櫓門の雨落溝の可能性が考えられる。また11・38地点で確認した口字形の石組遺構SF1は、集水枡の可能性が高いと見られる。

本丸大手北堀の調査で、瓦集積に伴ってこけら板と見られる幅約5.0～5.5cm、厚さ約2～4mmのアカマツの板が出土している。出土状況から見て、屋根材の一部と見られるが、瓦と同時に出土していることから、瓦の下にこけら板を葺く土居葺きの建物が推定される。

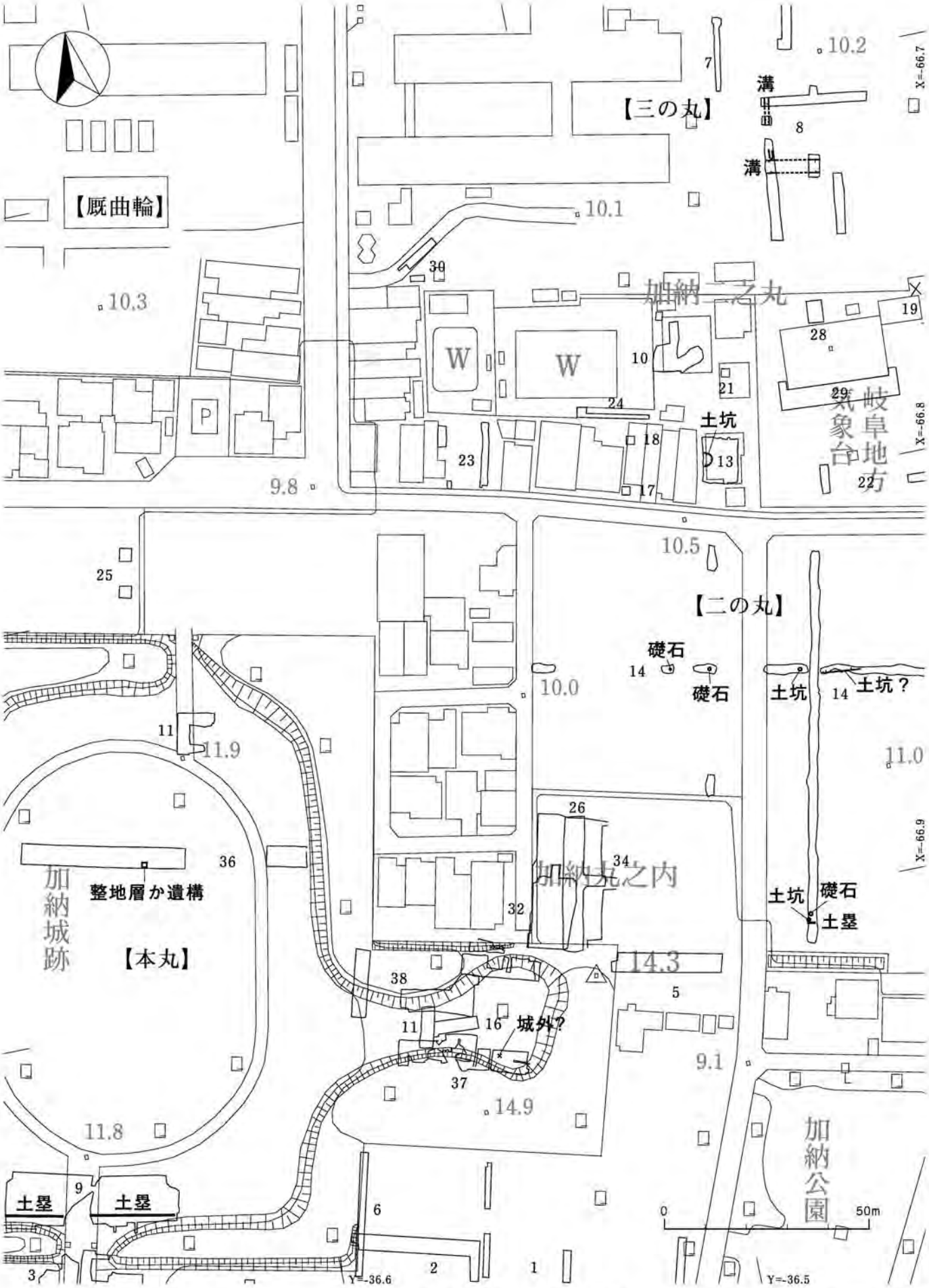
また調査は行っていないが、土塁上の南西角で櫓の礎石を現況でも観察することができる。

4-2. 中世加納城

戦国期の遺構が確認されているのは、3・8・9・13・14・36地点である。

9地点では戦国期の土塁の上に近世の土塁が造られていることが分かった。江戸時代の地誌類に、近世加納城は戦国期の加納城の跡地に築城されたという記事がある。発掘調査によってこれが裏付けられたと同時に、近世加納城の築城に際しては、中世加納城の遺構を最大限に利用している可能性が指摘できる。特に9地点の調査では戦国期に土塁を何度も拡幅し、さらに虎口をある時点で塞いでいる可能性が指摘されている。船田合戦に代表される守護、守護代などの緊迫した情勢を示唆するものである。城内に当たる土塁の北側には、整地層や遺構が確認されている。36地点の撹乱の壁面では、9地点の整地層上面とほぼ同レベルで、遺物が多量に包含される整地層あるいは遺構を確認している。少なくとも南北方向の大きさが90m以上あると見られる。ところが37地点では、整地層上面と同レベルで、地山上に堆積する旧表土と見られる粘質土しか検出されなかった。36・37地点の成果はごく狭い範囲での確認であるため断定することはできないが、近世本丸の外枡形部は、9地点の土塁に囲まれる城館外である可能性が考えられる。

9地点に隣接する3地点でも中世加納城と見られる面が検出されている。守護所移転先の「蝉土手城館」や「枝広館」の堀の規模は発掘調査により判明しているが、それらを参考にすると、近世の石垣・土塁の下に戦国期の堀が埋もれている可能性も考えられる。



第95図　中世加納城関連遺構平面図　（平成20年6月24日　承認番号第6号）

13・14地点では土坑や礎石が検出されている。特に14地点はどのトレンチでも戦国期の整地層が検出でき、広範囲の造成・利用が確認されている。14地点の南端では、9地点同様、近世土塁の下に中世土塁が検出された。他の部分は不明であるが、近世加納城本丸及び二の丸は中世加納城のレイアウトをかなり踏襲している可能性がある。

8地点では区画溝が検出されている。埋土中から遺物も多く出土しており、中世加納城の関連施設が展開していた可能性が高い。ところが近世本丸内・二の丸内の様相とは異なり、整地層が見られない。近世以降に削平された可能性もあるが、旧表土直上に近世整地層が堆積している様相が見られるなど、元々無かった可能性も考えられる。地形的にも二の丸と比べると、一段低く位置するため、本丸・二の丸範囲内の施設とは異なった印象を受ける。

出土遺物としては、遺構に伴ったものは少ないが、古瀬戸後期Ⅳ段階から大窯3段階まで継続期間と考えられ、伝承と概ね合致するようである。

4-3. 瓦

加納城の調査において、最も多く出土するのが瓦で、小規模な試掘調査などでは、瓦しか出土しないこともある。ここでは、各種瓦について、時期が推定できるような特徴を挙げ、今後の調査の参考になるようにまとめておきたい。

瓦当の文様による分類

平成14年度発行『史跡加納城跡』報告書(以下「前書」と略)で軒平瓦、軒丸瓦の瓦当文様による分類が行われた。さらに軒平瓦については、三の丸出土の一括資料、瓦当面に付着する素材などを観点に変遷が示された。

今回の調査では、新たな一括資料や文様の軒瓦が出土しており、前書の分類をふまえ、技法などによる分類を加味して、総括してみたい。

前書では、軒平瓦57種の笵を、中心飾り文様によって18種類(A～R類)に分類されている。今回は新たに4種類(S～V類)が出土し、笵の数も総計73種に達した。新類の笵は、B3・B4・C3・D4・F4・J8・O3・Q3・S1・K12・N6・T1・U1・V1類である。総数73種の内今回の調査で出土したのは52種である。

軒丸瓦は、前書で55種の笵を数えている。今回出土分を含めると73種となり、この内、今回の調査で出土したのは、60種であった。ひとまず前書の分類に倣い、巴の向き、珠文の数で分類し、笵の違いで枝番を付している。枝番が数字のものが前書で分類されたもの、小文字のアルファベットのものが今回新たに分類したものである。

軒平・軒丸とも笵の種類が偶然にも73種となったが、今回出土分の軒平52種、軒丸60種を出土点数で降順に並べ、グラフ化してみると(第102図)、軒平・軒丸とも同じような曲線を描くことがわかった。軒平ではB1類、軒丸ではL13-6類が他を凌駕して、圧倒的に多い。両者は堀Ⅲ3層から出土していることからも、築城時に主体となった瓦と想定することができよう。それ以外のものは、軒平・軒丸とも出土頻度が酷似している。それぞれ補修に使用された軒瓦の対応とも見られるが、絶対数が少なく、また2位以下の差が少ないため、単純には対応できないであろう。データ量が増えれば、軒平・軒丸のセッ

ト関係が明らかになる可能性がある。

詳細を見ると、軒平・軒丸ともに25%程度の高率を示すのが、軒平B1類と軒丸L13-6類である。以下は遷移的で区切るのが難しいが、軒平では10点・5%を超えるものS1・C1・E1類、軒丸では7点・4%を超えるものL16-7・R16-1・R15-1・L16-3・L12-12・L12-10類が比較的多い種類といえるかも知れない。この中で、瓦当面にキラコが付着するのは軒丸L12-12類とL12-10類で、あとは全て砂である。

出土層位と瓦集積の時期

今回の堀の調査では、一括資料と見られる瓦集積が出土した。堀内の層序については、前述したとおりであるが、まずは層と瓦集積との順序を整理しておく。堀埋土の最下層には粘土層のⅢ4層、その上に砂礫層のⅢ3層、その上に本丸側でSX14・16・17・18、二の丸側でSX13の瓦集積が形成される。これらを覆うⅢ2層があり、最上層にⅢ1層が確認できた。なお、Ⅲ3層・SX14・18には二次被熱した瓦が含まれている。

軒平・軒丸瓦の分類ごとに層・遺構の出土数を集計したものが、第38～40表である。まとめると下表のとおりであるが、併せて平成7・8年度実施の三の丸試掘調査で検出した焼土層出土遺物の様相を併記している。

層・遺構	時　期	軒平瓦	軒丸瓦
Ⅲ4層	連房第5～6小期	無し	無し
Ⅲ3層	17世紀中葉から後葉	B1・E1	L13-6・L16-3・L12-6 R16-1・R15-1・R14-1
SX14,16,17,18		上記以外 B3・C1・S1	上記以外 L16-5・L12-b
三の丸焼土層	17世紀後半から18世紀初頭	上記以外 D2・G3・F1	上記以外　L16-6・L13-1 L13-7・L12-8・R16-2

Ⅲ4層→Ⅲ3層→SX14・16・17・18と層位的な変遷は確認できるものの、共伴する陶磁器の年代観と併せて考えると、三の丸焼土層と同時期である可能性が高いと見られる。

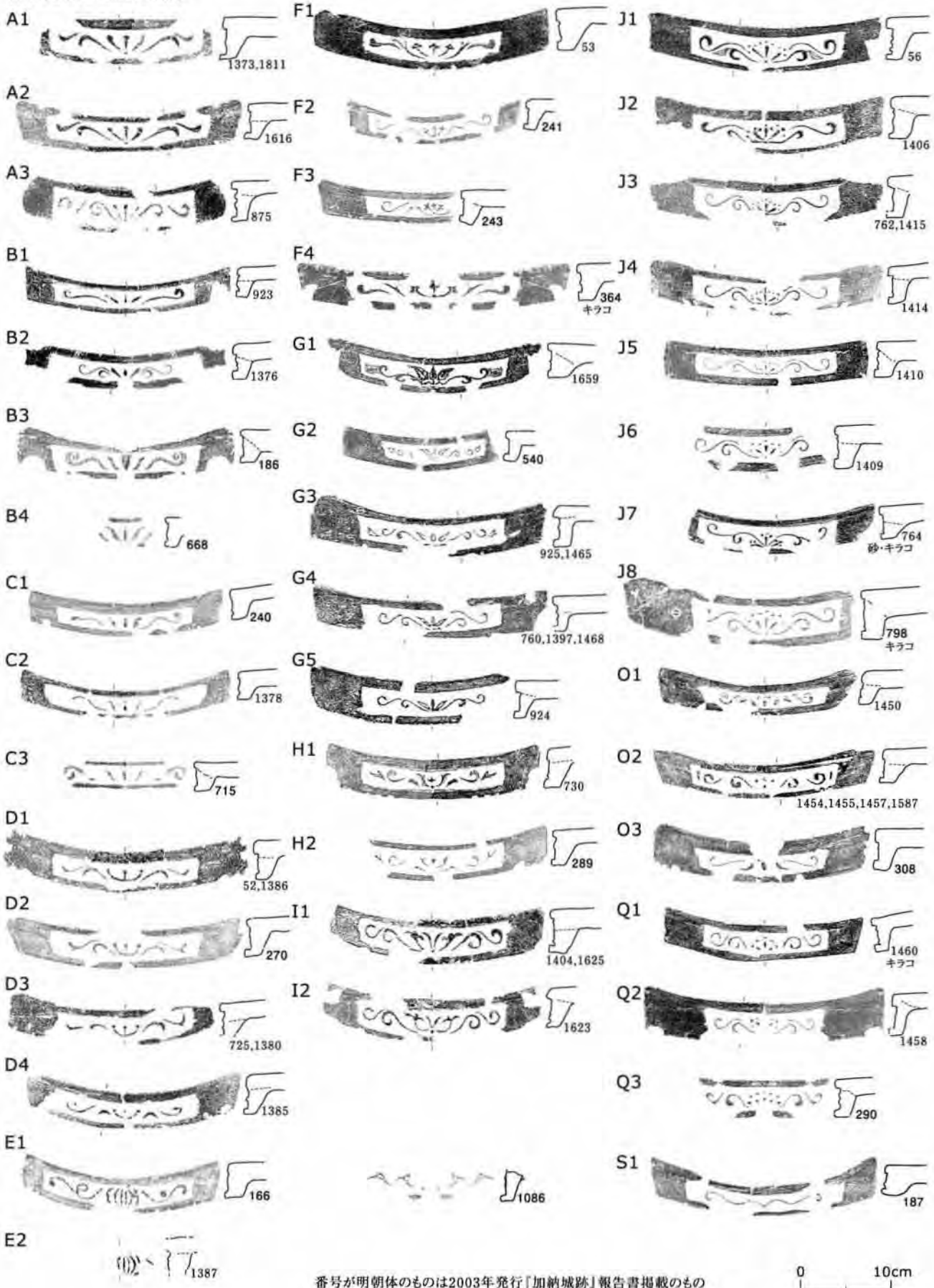
また、軒平瓦のB1・D2・E1・G2・S1類には二次被熱痕が確認でき、F3・J3類にもその可能性がある。軒丸瓦では、L13-1・L13-6・L13-7・L12-6・R16-2類に被熱痕があり、L17-1・L16-2・L13-8・R16-1類にもその可能性がある。これらを総合して、上表に掲げた種類は、概ね17世紀代の加納城に使用された軒瓦の様相を示しているものと考えられる。

軒瓦の技法

軒瓦製作時、粘土を笵から離し易くするために使用するものは、大きく砂とキラコの2種に分けられる。砂からキラコへ18世紀の後半頃移行するとされる。軒平瓦全73種のうち、砂は44種、キラコは28種、両方使用するものが1種を数える。軒丸瓦73種の内訳は、砂44種、キラコ24種、両方4種、不明1種である。二次被熱痕のあるものは、全て砂を使用したものである。

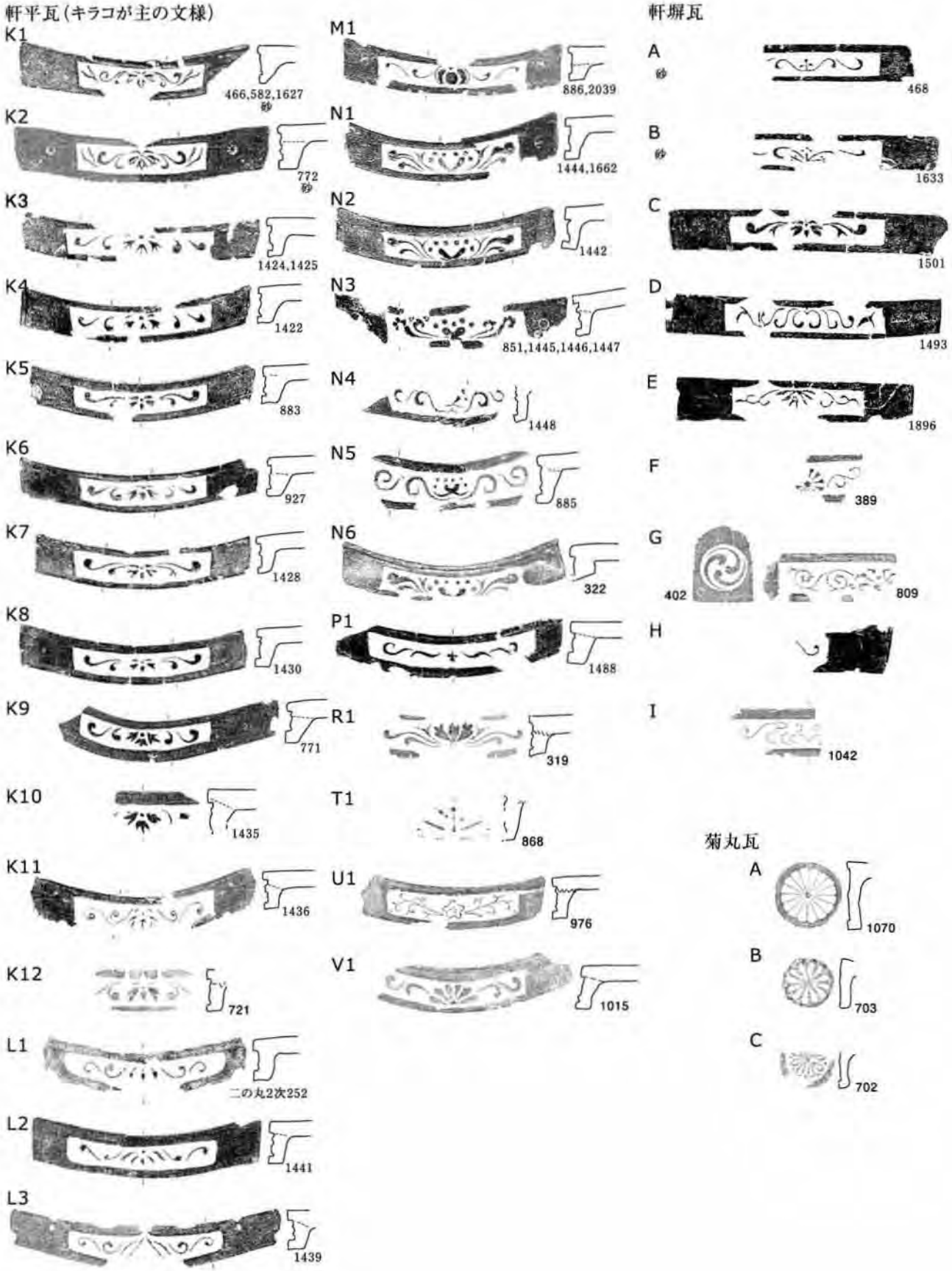
各遺構・層から出土した軒瓦を、瓦当表面に付着した剥離材の種別で集計したものが第41表①である。前項のSX14・16・17・18以前の様相は、軒平・軒丸とも混入と考えられるⅢ3層中の1点を除き、全て砂による。Ⅲ2層からキラコのもの(K7類・L13-11・L12-10・L12-12類)が含まれるが、比率的には未だ砂が多数を占める。Ⅲ1層以上になると砂：キラコは半々に近くなる。このことから砂→キラコの変

軒平瓦（砂が主の文様）



番号が明朝体のものは2003年発行『加納城跡』報告書掲載のもの
番号がゴシック体のものは本報告書掲載のもの

第96図　軒平瓦文様分類(1)

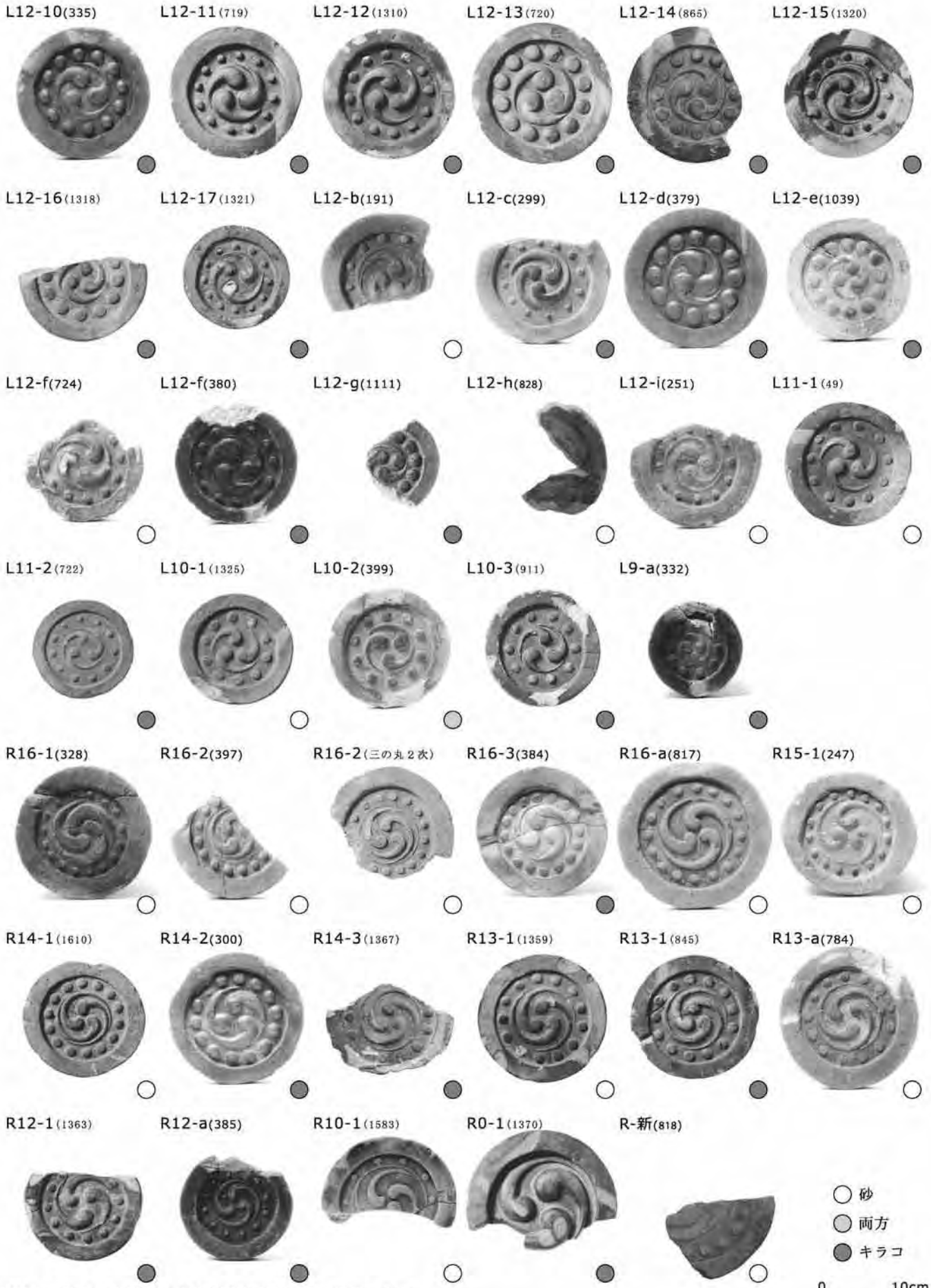


番号が明朝体のものは2003年発行『加納城跡』報告書掲載のもの
番号がゴシック体のものは本報告書掲載のもの

0 10cm

第97図 軒平瓦文様分類(2)・軒塀瓦・菊丸瓦文様分類

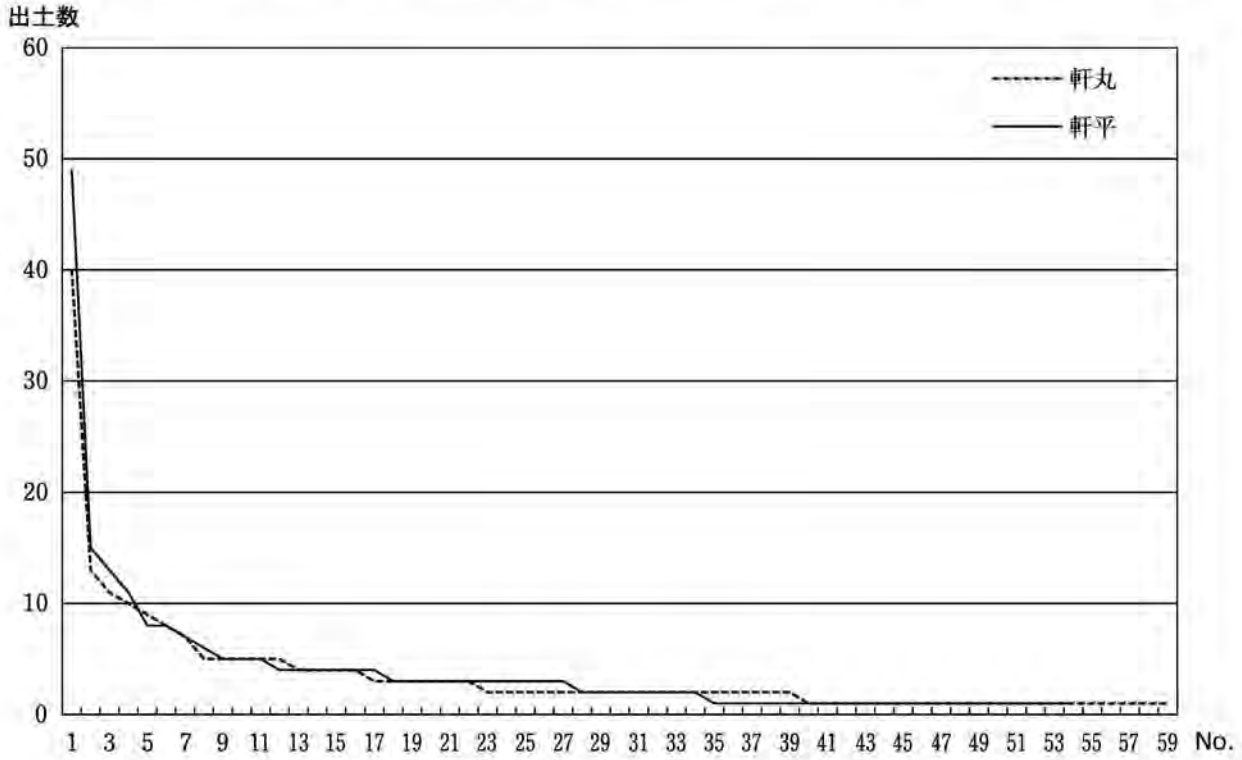
第98図 軒丸瓦文様分類図(1)



括弧内の数字で明朝体は『史跡加納城跡』2003掲載のもの

第99図　軒丸瓦文様分類図(2)

No.	軒平瓦			軒丸瓦			No.	軒平瓦			軒丸瓦		
	分類	出土数	割合	分類	出土数	割合		分類	出土数	割合	分類	出土数	割合
1	B1	49	25.5%	L13-6	40	23.1%	31	J8	2	1.0%	L13-7	2	1.2%
2	S1	15	7.8%	L16-7	13	7.5%	32	K4	2	1.0%	L13-a	2	1.2%
3	C1	13	6.8%	R16-1	11	6.4%	33	N1	2	1.0%	L13-b	2	1.2%
4	E1	11	5.7%	R15-1	10	5.8%	34	U1	2	1.0%	L16-1	2	1.2%
5	G2	8	4.2%	L16-3	9	5.2%	35	A2	1	0.5%	L16-5	2	1.2%
6	I2	8	4.2%	L12-12	8	4.6%	36	B4	1	0.5%	L16-8	2	1.2%
7	K7	7	3.6%	L12-10	7	4.0%	37	C3	1	0.5%	L17-1	2	1.2%
8	D2	6	3.1%	L12-e	5	2.9%	38	E	1	0.5%	L24-a	2	1.2%
9	D1	5	2.6%	L12-f	5	2.9%	39	F2	1	0.5%	R14-1	2	1.2%
10	J2	5	2.6%	L13-8	5	2.9%	40	F4	1	0.5%	L10-2	1	0.6%
11	K5	5	2.6%	R16-2	5	2.9%	41	H1	1	0.5%	L10-3	1	0.6%
12	D	4	2.1%	R16-3	5	2.9%	42	J5	1	0.5%	L12-11	1	0.6%
13	G4	4	2.1%	L13-11	4	2.3%	43	J7	1	0.5%	L12-16	1	0.6%
14	J4	4	2.1%	L16-2	4	2.3%	44	J新	1	0.5%	L12-7	1	0.6%
15	K9	4	2.1%	L16-4	4	2.3%	45	K1	1	0.5%	L12-9	1	0.6%
16	N2	4	2.1%	R14-2	4	2.3%	46	K10	1	0.5%	L12-c	1	0.6%
17	N3	4	2.1%	L11-1	3	1.7%	47	K11	1	0.5%	L12-d	1	0.6%
18	B3	3	1.6%	L12-14	3	1.7%	48	K12	1	0.5%	L12-g	1	0.6%
19	C2	3	1.6%	L12-6	3	1.7%	49	K3	1	0.5%	L12-i	1	0.6%
20	F1	3	1.6%	L13-9	3	1.7%	50	L2	1	0.5%	L13-1	1	0.6%
21	G3	3	1.6%	R0-1	3	1.7%	51	N6	1	0.5%	L13-2	1	0.6%
22	G5	3	1.6%	R13-1	3	1.7%	52	O3	1	0.5%	L13-3	1	0.6%
23	H2	3	1.6%	L10-1	2	1.2%	53	Q3	1	0.5%	L16-6	1	0.6%
24	J1	3	1.6%	L11-2	2	1.2%	54	T1	1	0.5%	L16-a	1	0.6%
25	J3	3	1.6%	L12-15	2	1.2%	55				L9-a	1	0.6%
26	K8	3	1.6%	L12-3	2	1.2%	56				R12-a	1	0.6%
27	R1	3	1.6%	L12-4	2	1.2%	57				R13-a	1	0.6%
28	D4	2	1.0%	L12-8	2	1.2%	58				R16-a	1	0.6%
29	F3	2	1.0%	L12-b	2	1.2%	59				R新	1	0.6%
30	I1	2	1.0%	L12-h	2	1.2%	計		192	100.0%		173	100.0%



第100図　軒平・軒丸瓦出土数グラフ

軒平	堀														枡形		城内			合計	三の丸焼土層
	Ⅲ3層	Ⅲ3層(北西集中部)	Ⅲ3層(北東集中部)	SX14,16,17	SX18	SX20	SX13	(SD1)	Ⅳ層	Ⅲ2層	SX15	SX19	Ⅲ1層	Ⅰ・Ⅱ層	明治以降	近現代	SX22	SX21	攪乱		
A2																			1	1	
B1	1	11		1	9	1	1			2		2	1	6	8	4			2	49	○
(B1)								1						4	1				3	9	
B3				1		1								1						3	
B4															1					1	
C1				4	1		1			1			1		2				3	13	
(C1)										1										1	
C2															2	1				3	
C3															1					1	
D1										1					1	3				5	
D1orD2																1				1	
D2															3	2			1	6	○
D4															1	1				2	
D																1			3	4	
E1	4	2		1			1								1	1			1	11	○
(E1)		1																		1	
E																			1	1	
F1															2	1				3	○
F2							1													1	
F3							1									1				2	
F4														1						1	
G2														1	3	1	2		1	8	
G3										1						2				3	○
G4											1				1	1			1	4	
G5													1	1	1					3	
(G)											1									1	
H1															1					1	
H2											1				1	1				3	
I1																			2	2	
I2															2	2		2	2	8	
(I)																1				1	
J1										1				1		1				3	
J1-4																1				1	
J2											1				2	2				5	
(J2)													1			1				2	
J3															1	1			1	3	
J4							1		1						1	1				4	
(J4)																			1	1	
(J6)													1							1	
J7																			1	1	
J8															2					2	
J新																			1	1	
J																	1			1	
(J)														1	2			1		4	
K1															1					1	
K3															1					1	
K4														2						2	
K5													1		1	1			1	4	
K7										1			1	2	1	1			1	7	
K8															2			1		3	
(K8)																			1	1	
K9															3	1				4	
K10															1					1	
K11											1									1	
K12															1					1	
K															1				1	2	
L2																1				1	
(L3)															1					1	
N1													1		1					2	
N2															2	2				4	
N3													2		1	1				4	
N(3)															1					1	
N6													1							1	
N																1				1	
O3												1								1	
Q3											1									1	
R1													1		1	1				3	
S1				6		1				2				1	5					15	
T1																1				1	
U1															1	1				2	
新																1				1	
合計	5	14		13	10	3	6	1	1	10	6	3	12	21	65	43	3	4	29	249	

太字は被熱しているもの

第38表　軒平瓦集計表

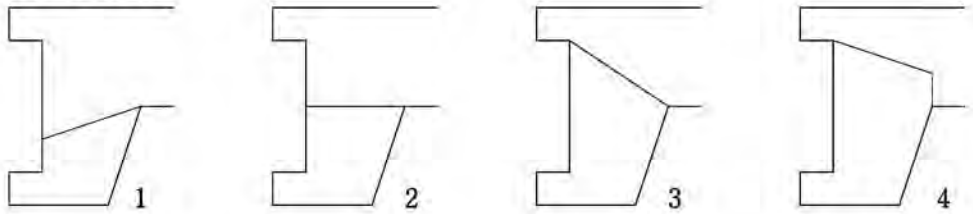
軒丸	堀														枡形				城内			合計
	Ⅲ3層	Ⅲ3層(北西集中部)	Ⅲ3層(北東集中部)	SX18	SX14,16,17	SX20	SX13	Ⅲ2層	(SD1)	Ⅳ層	SX19	SX15	Ⅲ1層	Ⅰ・Ⅱ層	近世整地層	SK8	明治以降	近現代	SX22	SX21	攪乱	
L24-a														1			1					2
L17-1																		1			1	2
L16-1													1								1	2
L(16-1)																					1	1
L16-2								1					1	1							1	4
L(16-2)								2														2
L16-3	1												1	4				2			1	9
L16-(3)																		1				1
L(16-3)													1									1
L16-4								1				1					1			1		4
L16-5				1																	1	2
L16-(5)																	1					1
L(16-5)														1								1
L16-5or7																	1					1
L16-6																	1					1
L16-7			1									5	1	2			1	1		1	1	13
L(16-7)								1			1	1										3
L16-8													2									2
L16-a													1									1
L13-1																		1				1
L13-2																	1					1
L13-3																				1		1
L13-(3)																				1		1
L13-6(古)					1								1									2
L13-6		2		6	6		3	5					1	8	1		3	2			1	38
L13-(6)																	2					2
L(13-6)	1					1																2
L13-7														1			1					2
L13-8																	2		2		1	5
L13-9												1		1			1					3
L(13-9)												1	1				1					3
L13-11																	1	3				4
L13-(12)														1								1
L13-a												1					1					2
L13-b														1			1					2
L12-3												1			1							2
L12-4						1									1							2
L12-6	1						1														1	3
L12-7							1															1
L12-8														1			1					2
L12-9																		1				1
L(12-9)																		1				1
L12-10								3		1			2					1				7
L12-11																	1					1
L12-12								1					2	1				3				7
L12-(12)														1								1
L(12-12)														1								1
L12-14																	1	2				3
L12-15														1		1						2
L12-16														1								1
L12-(16)										1												1
L(12-16)												1										1
L12-b					1		1															2
L12-(b)														1								1
L12-c												1										1
L12-d														1								1
L12-e																	3	2				5
L12-f														1			2	2				5
L12-g																	1					1
L12-h																		2				2
L12-i							1															1
L11-1									1					2								3
L11-(1)										1											1	2
L11-2															1			1				2
L10-1																	2					2
L10-1or2																		1				1
L10-2														1								1
L10-3														1								1
L9-a													1									1
R16-1								1					2	1			4	3				11
R(16-1)	1																					1
R16-2														2			1	1			1	5
R(16-2)																	1					1
R16-3										1		1	1	2								5

第39表　軒丸瓦集計表(1)

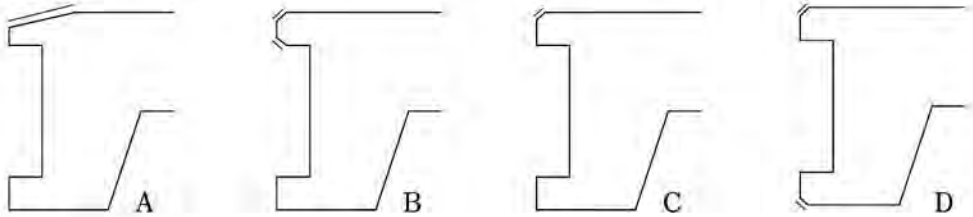
軒丸	堀														枡形				城内			合計
	Ⅲ3層	Ⅲ3層(北西集中部)	Ⅲ3層(北東集中部)	SX18	SX14,16,17	SX20	SX13	Ⅲ2層	(SD1)	Ⅳ層	SX19	SX15	Ⅲ1層	Ⅰ・Ⅱ層	近世整地層	SK8	明治以降	近現代	SX22	SX21	攪乱	
R16-a																		1				1
R15-1	4		1				1	1									2				1	10
R14-1		1															1					2
R14-2												1	2	1								4
R13-1													2	1								3
R(13-1)																		1				1
R13-a															1							1
R(12-1)																		1				1
R12-a														1								1
R(10-1)											1											1
R0-1																	2	1				3
R新																		1				1
	8	3	2	7	8	2	8	16	1	4	2	15	23	42	5	1	42	36	2	4	13	244

第40表　軒丸瓦集計表(2)

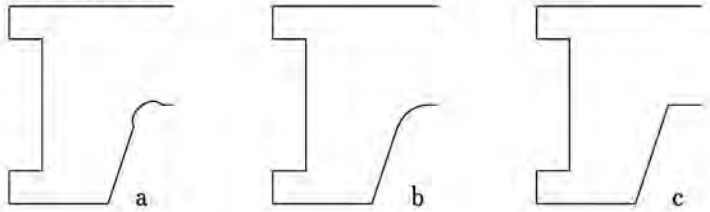
軒平瓦瓦当接合方法



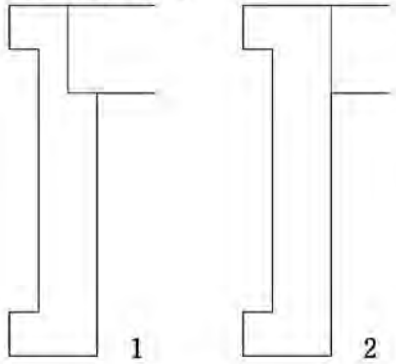
軒平瓦面取



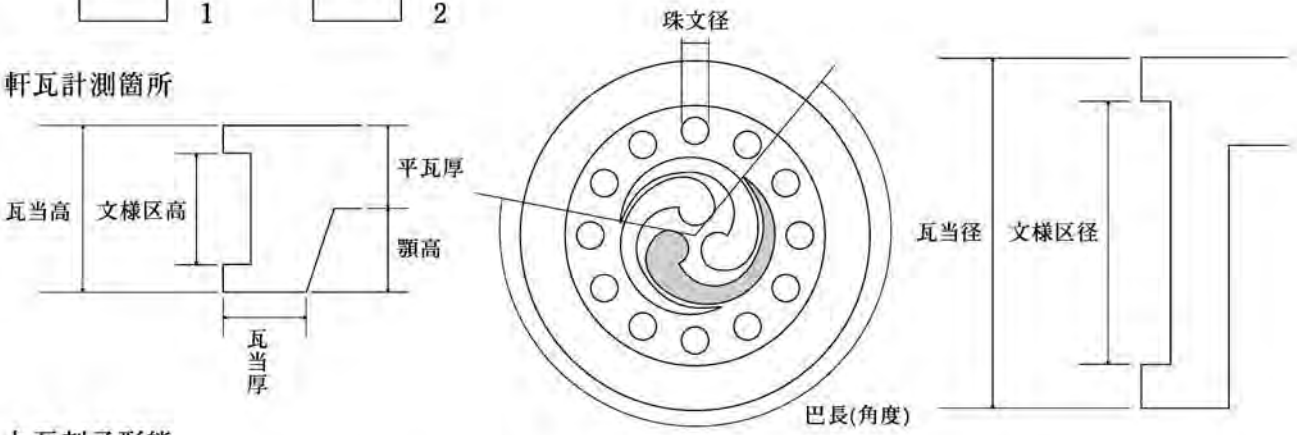
軒平瓦接合部調整



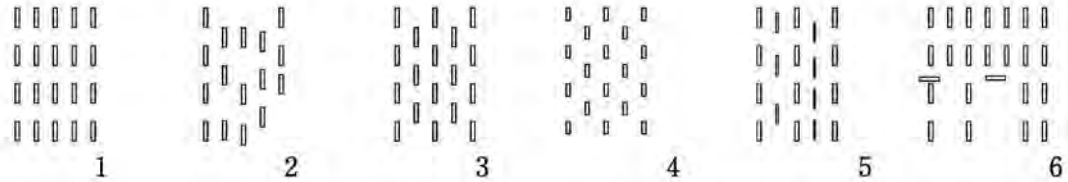
軒丸瓦瓦当接合方法



軒瓦計測箇所



丸瓦刺子形態



第101図　瓦技法分類模式図

①		軒平						軒丸						合計
		砂	(砂)	キラコ	(キラコ)	不明	計	砂	(砂)	キラコ	(キラコ)	不明	計	
堀	Ⅲ3層	5				1	6	8		1			9	15
	Ⅲ3層(北東集中部)						0	2					2	2
	Ⅲ3層(北西集中部)	14					14	3					3	17
	SX14,16,17	14					14	9					9	23
	SX18	10					10	8					8	18
	SX20	3					3	2	1				3	6
	SX13	7	1			1	9	8					8	17
	Ⅲ2層	9	1	2			12	14		4			18	30
	(SD1)	1					1			1			1	2
	Ⅳ層	1					1	3		2		2	7	8
	SX19	3					3	2					2	5
	SX15	7	1	1			9	11	1	8		2	22	31
	Ⅲ1層	4		12	1		17	15		13	1	5	34	51
	Ⅰ・Ⅱ層	19		11	1		31	35		20		3	58	89
枡形	**近世整地層**						0	5					5	5
	SK8						0	1		1			2	2
	明治以降	48	1	29	1	1	80	37	1	17		1	56	136
	近現代	31	1	16		2	50	24	2	17		2	45	95
城内	**SX22**	2	1				3	1	1				2	5
	土塁盛土	1					1	2					2	3
	SX21	3		2			5	7					7	12
	撹乱	26	2	3		4	35	29	3	5	1	2	40	75
合計		208	8	76	3	9	304	226	9	89	2	17	343	647
比率		68%	3%	25%	1%	3%	100%	66%	3%	26%	1%	5%	100%	

太字は砂のみ

軒平瓦

②

砂		瓦当厚			
		厚い	標準	薄い	計
顎高	低い		4	1	5
	低め	1	5	2	8
	標準		17		17
	高め	2	5		7
	高い		1		1
	計	3	32	3	38

キラコ		瓦当厚			
		厚い	標準	薄い	計
顎高	低い				
	低め		1		1
	標準	1	8	2	11
	高め		4	1	5
	高い	1	2		3
	計	2	15	3	20

軒丸瓦

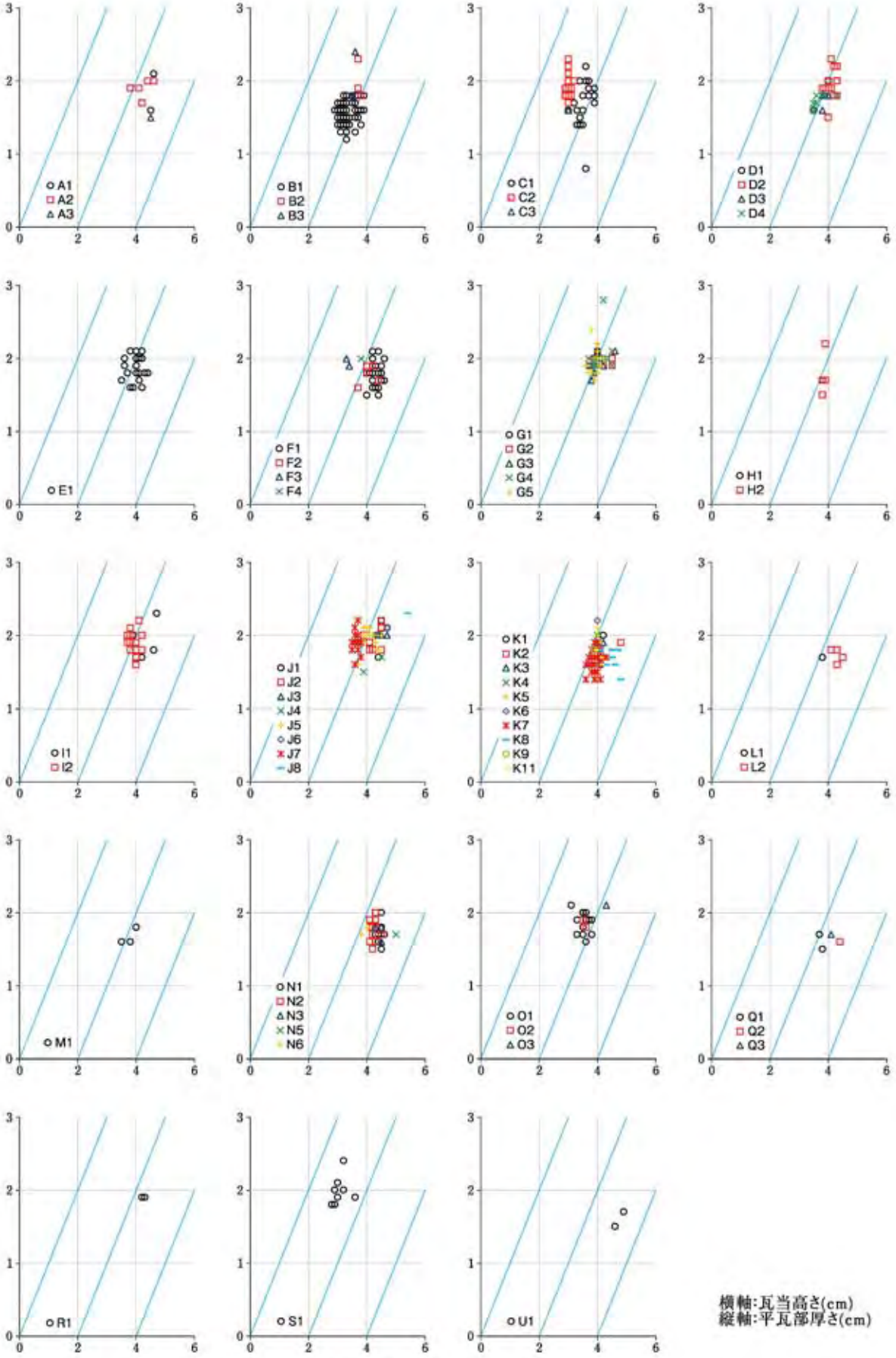
③	珠文数												
	24	23	17	16	15	14	13	12	11	10	9	0	総計
砂	1	1	1	12	1	2	11	11	1	2			43
両方							2	1	1	1			5
キラコ				1		2	2	15		1	1	1	23
不明								1					1
総計	1	1	1	13	1	4	15	28	2	4	1	1	72
珠文径平均(cm)	0.9		1.1	1.0	0.9	1.4	1.1	1.2	0.9	1.2	1.1		1.1
瓦当径平均(cm)	15.0		16.5	15.1	14.4	15.4	15.0	14.5	13.4	13.9	11.0	16.0	14.7

④	珠文径(cm)	瓦当径(cm)	文様径(cm)	巴長(度)
砂	1.0	15.0	10.8	210.2
両方	1.1	13.7	10.2	227.5
キラコ	1.3	14.4	10.7	194.1
平均	1.1	14.7	10.7	205.5

⑤	巴形状				接合方法				
	圏線状	半圏線状	尾部離れ	総計	1	両方	2	不明	総計
砂	15	7	20	43	16	4	3	20	43
両方			5	5	2	1	2		5
キラコ			23	23	4	2	4	13	23
不明			1	1				1	1
総計	15	7	56	72	22	7	9	16	72

⑥	面取幅							
	無し	1mm	2mm	3mm	4mm	5mm	不明	総計
砂	17	3	4	4	4	1	10	43
両方	2	2					1	5
キラコ	11	1	3	1	1		6	23
不明							1	1
総計	30	6	7	5	5	1	18	72

第41表　軒平・軒丸瓦集計表



第102図　軒平瓦法量グラフ

化は層位的にも明らかなので、これを基準に技法の変化を見てみたい。

軒瓦で見られる技法上の特徴から、第100図のような分類を試みた。これらを相互に比較した結果は次のとおりである。

・軒平瓦の瓦当接合方法では、傾向として砂には2が多く、キラコには3が多い。しかし砂であっても3のものは多数ある。

・接合部の調整では、aは砂に多く、キラコのものはほとんどがb・cである。キラコの内、N類やU・V類などはbのみである。

次に軒平瓦の断面形状について検討してみた。1次調査から14次調査までの全ての軒平瓦をデータ化し、文様毎に、瓦当高と瓦厚で散布図を描いたものが第103図である。グラフには、瓦当高-瓦厚で求められる顎高の0cm・2cm・4cmのラインを入れてある。グラフからは次のことが読み取れる。

・例外もあるものの、文様分類毎にデータはほぼまとまっており、規格性が高い。

・瓦厚の薄いものは、B1・K・N・Q・U類で、B1・K1・K2類を除きキラコを使用する。

・瓦当高はS1類が極端に低い、U1類が極端に高いことを除けば、余り差はない。

・顎高は2cm位を標準として、次のとおりである。顎高が低いものは砂、高いものはキラコという傾向は指摘できる。

顎高	砂	キラコ
低い	C2・S1類	
低め	B・C1・O類	
高め	F1・I1類	K・L・N類
高い		U1類

軒丸瓦については、砂の場合、1の接合方法が圧倒的多数を占めるが、2が無いわけではなく、キラコも両方が見られ、明瞭な傾向は窺われない(第41表⑤)。

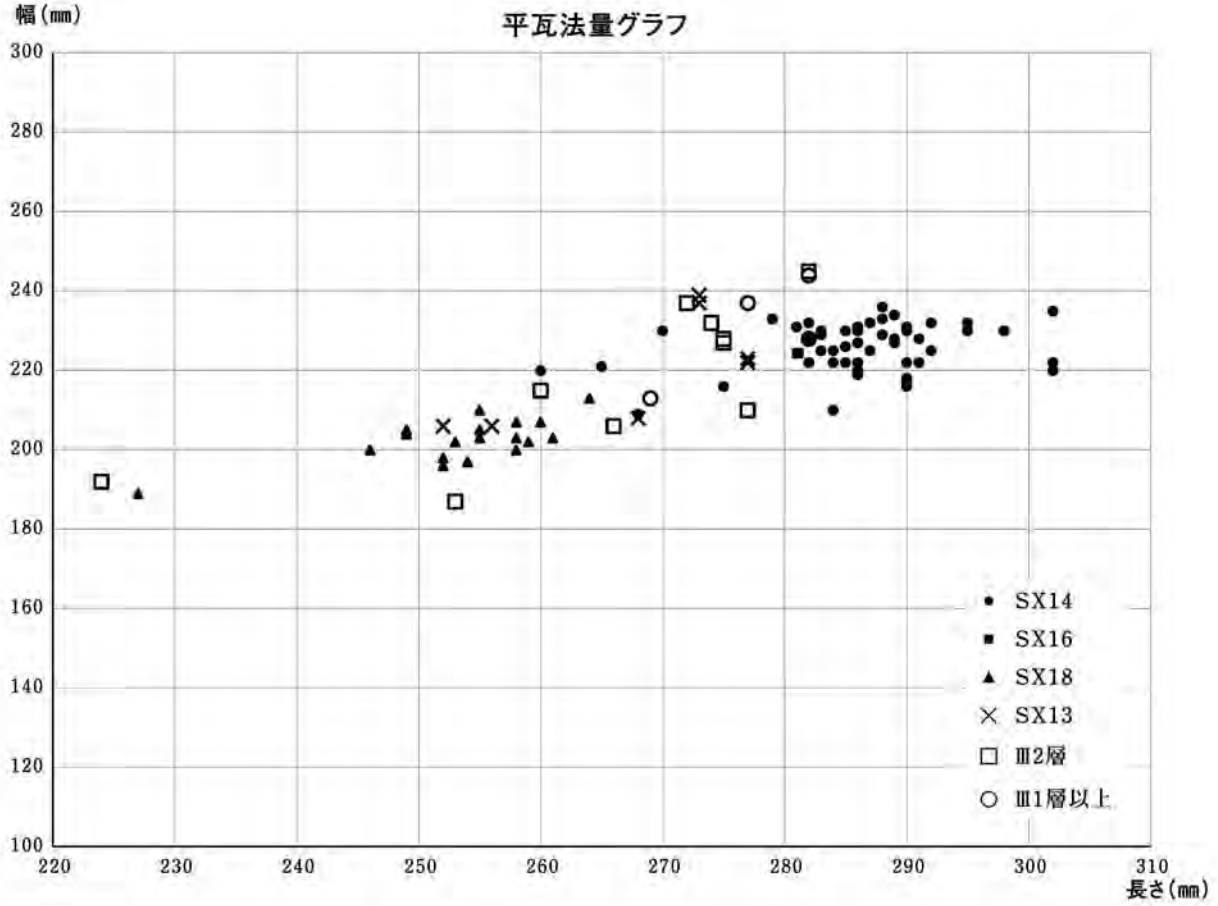
軒丸瓦の文様

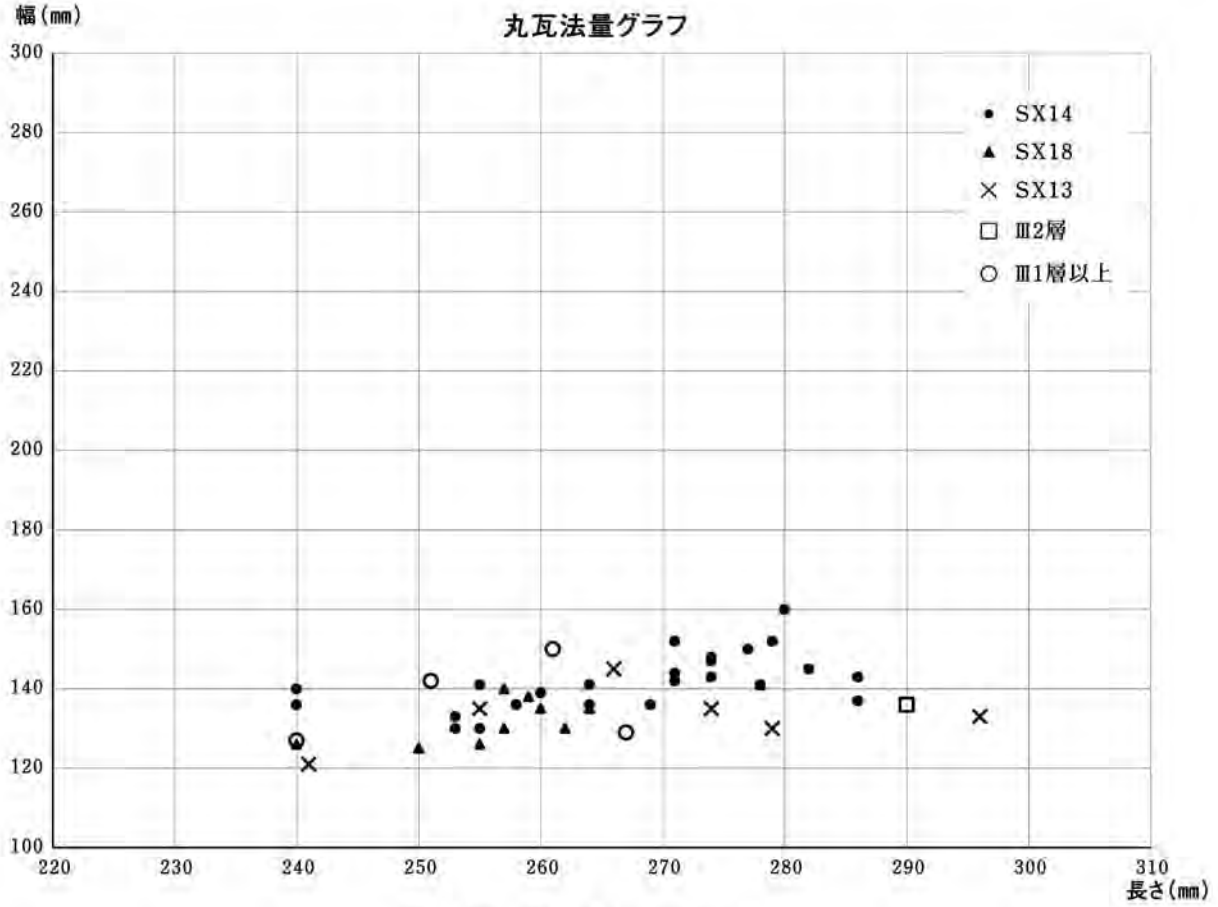
軒丸瓦は三つ巴のものしか出土していない。破片の場合、文様を同定するのは極めて難しい。ここでは、判断材料が増えるよう特徴を明らかとしておきたい。

まずは、基本的な法量として、瓦当径と文様径について検討する(第41表③)。砂の瓦当径は平均15.0cm、キラコは14.4cmを測り、わずかではあるがキラコの方が、径が小さい。これに対して、文様径は砂10.8cm、キラコ10.7cmとほぼ同じである。言い換えると周縁部の幅がキラコの方が小さいといえる。

第98・99図の分類は前書を踏襲し、巴の向きと珠文数で分類している。珠文数は多い方から順にし、砂とキラコの別を表してみると、珠文の数が多いものに砂が多く、少ないものにキラコが多いのに気付く。第41表③に改めて集計してみると、砂で多いのは珠文数16・13・12で、キラコは圧倒的に12が多い。どちらも珠文数12のものは多く、一概に減少傾向にあるというわけではないが、今のところ、17以上の珠文数を持つキラコのものは無いといえる。珠文の大きさは砂が平均1.0cmに対して、キラコは平均1.3cmと大きいものが多い。

珠文数と同様注目されるのは巴の形状と長さである。3つの巴全ての尾が別の巴に接合し、圏線状を成すもの、どれか1つ以上が離れている半圏線状のもの、3つとも離れているものの3種で集計したもの





第103図　平・丸瓦法量グラフ

が第41表⑤である。キラコのものは巴の尾部が離れているものしか見られない。このことと相関すると思われるが、巴の長さも砂が平均210度に対して、キラコは194度と短くなっている。

最後に文様というより技法上のものではあるが、周縁角に施される面取りについて検討する(第41表⑥)。砂・キラコとも面取りされないものが半数近くを占め、最も多い。面取りされるものに関しては、砂が1～4mmまでほぼ同数あるのに対し、キラコは2mmと幅の狭いところに偏っている。これも一概にいえるわけではないが、3mm以上の幅の広い面取りは、砂である可能性が高いといえる。

平　瓦

堀内から出土した平瓦の内、長さと狭端部幅が計測可能なものを、遺構・層位毎にグラフ化したものが第103図である。ばらつきが見られるものの、長さを基準として、大きく3グループに分けられそうである。

法量を個別に見れば、長さは、第104図にあるように、全体として、28.0cm～(9寸5分)を最大ピークとして、26.5cm～(9寸)、25.0cm～(8寸5分)で大きな山を形成している。それ以外のサイズはほとんど無い。出土遺構・層による内訳は明瞭で、9寸5分は87%をSX14・16が占め、8寸5分は55%をSX18が占めている。中間の9寸はSX13(30%)、SX14(26%)、Ⅲ2層(18%)、Ⅲ1層以上(16%)と分散している。数量は少ないものの、Ⅲ2層・Ⅲ1層以上のものは、9寸をピークとした山形に分布しており、時期差を示している可能性がある。

狭端部幅については、第103図を見ても、長さほど明確に表れていないが、第104図を見ると、弱いながらもSX14は22.0cm～(7寸5分)に圧倒的多数、SX18は19.0cm～(6寸5分)、Ⅲ2層はその中間の20.5cm～(7寸)に多い傾向がある。

広端部幅は、SX14が23.5cm～(8寸)と25.0cm～(8寸5分)にピーク、SX18は20.5cm～(7寸)にピークがあるのは、長さ、狭端部幅と同様である。Ⅲ2層以上は、8寸と8寸5分に数値が分散しており、SX14と傾向が同じである。

厚さに関しては、SX18が1.6mmにピークを有し、他のもの比べ薄いという以外、傾向性は読み取れない。

全体的にSX18出土の平瓦は小さく、SX14は大きい。その他はその中間的サイズということがいえそうであるが、SX14・18以外、サイズを計測できるものが少ないのがデータ的に弱い。

SX14とSX18は、いずれも本丸の建物を撤去した際、廃棄されたもので、層位的に見てほぼ同時期と考えている。SX18が本丸大手正面に位置する場所であることから、門(枡形一の門)に使用されていた瓦、SX14は門の位置よりやや東に寄った所であることから、塀やその他の建物に使用されていたとも考えられる。このように、SX14とSX18の法量差は、使用された建築物の差を表しているか、建物の構築時期の差を反映していると考えられる。

丸　瓦

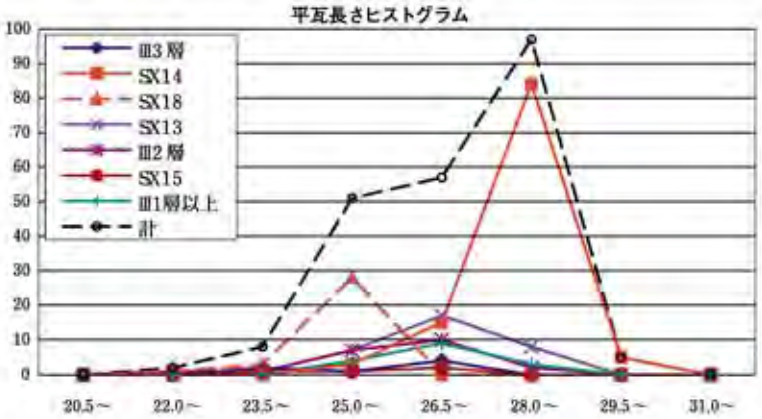
法量は、第103図のグラフを見ると長さ24cm位(小)、25～27cm(中)、27cm以上(大)の3グループに分けられそうである。出土遺構・層位毎で見ると、SX18は全て中グループに属する以外、偏りは見られない。この様相は平瓦と同じである。

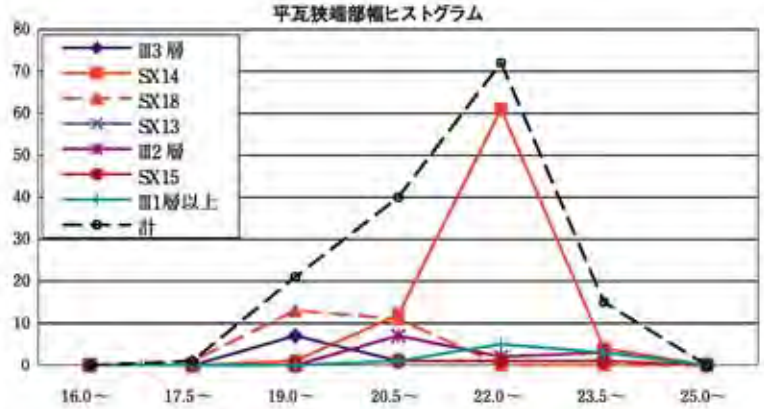
長さ(cm)	Ⅲ3層	SX14	SX18	SX13	Ⅲ2層	SX15	Ⅲ1層以上	計
11.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
13.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
14.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
16.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
17.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
19.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
20.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
22.0～	0	0	1	0	1	0	0	2
23.5～	2	0	3	1	1	1	0	8
25.0～	1	3	28	7	7	1	4	51
26.5～	4	15	0	17	10	2	9	57
28.0～	0	84	0	8	2	0	3	97
29.5～	0	5	0	0	0	0	0	5
31.0～	0	0	0	0	0	0	0	0

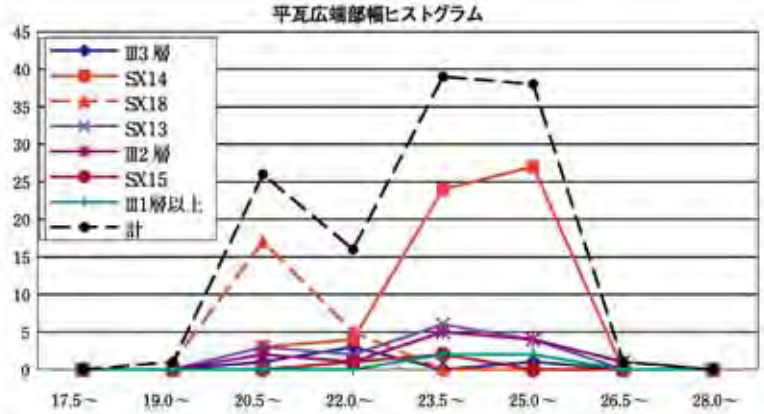
狭端部幅(cm)	Ⅲ3層	SX14	SX18	SX13	Ⅲ2層	SX15	Ⅲ1層以上	計
11.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
13.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
14.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
16.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
17.5～	0	0	1	0	0	0	0	1
19.0～	7	1	13	0	0	0	0	21
20.5～	1	12	11	7	7	1	1	40
22.0～	1	61	0	2	2	1	5	72
23.5～	1	4	0	3	3	1	3	15
25.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
26.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
28.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
29.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
31.0～	0	0	0	0	0	0	0	0

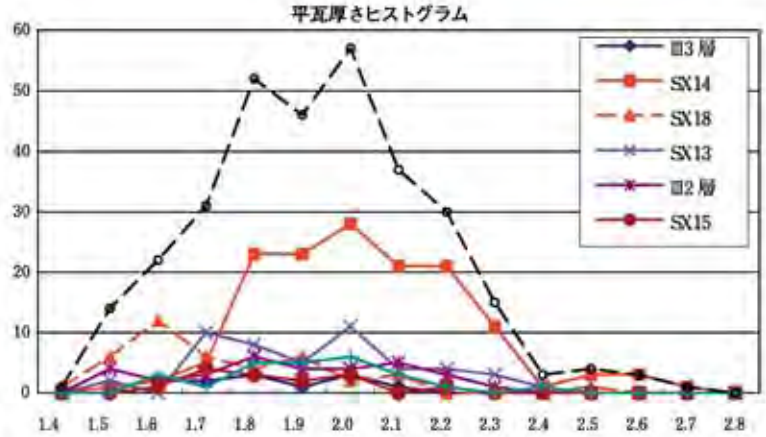
広端部幅(cm)	Ⅲ3層	SX14	SX18	SX13	Ⅲ2層	SX15	Ⅲ1層以上	計
11.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
13.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
14.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
16.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
17.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
19.0～	0	0	1	0	0	0	0	1
20.5～	1	3	17	3	2	0	0	26
22.0～	3	4	5	2	1	1	0	16
23.5～	0	24	0	6	5	2	2	39
25.0～	1	27	0	4	4	0	2	38
26.5～	0	0	0	0	1	0	0	1
28.0～	0	0	0	0	0	0	0	0
29.5～	0	0	0	0	0	0	0	0
31.0～	0	0	0	0	0	0	0	0

厚さ(cm)	Ⅲ3層	SX14	SX18	SX13	Ⅲ2層	SX15	Ⅲ1層以上	計
1.4	0	0	1	0	0	0	0	1
1.5	1	1	6	2	4	0	0	14
1.6	2	2	12	0	2	1	3	22
1.7	2	5	6	10	3	4	1	31
1.8	3	23	4	8	6	3	5	52
1.9	1	23	6	5	4	2	5	46
2.0	3	28	2	11	4	3	6	57
2.1	1	21	3	4	5	0	3	37
2.2	0	21	0	4	3	1	1	30
2.3	0	11	0	3	1	0	0	15
2.4	0	1	0	1	0	0	1	3
2.5	0	3	1	0	0	0	0	4
2.6	0	3	0	0	0	0	0	3
2.7	0	1	0	0	0	0	0	1
2.8	0	0	0	0	0	0	0	0









第104図　平瓦法量グラフ

		Ⅲ4層	Ⅲa層	Ⅲ3層	SX14・16・17	SX18	SX20	SX13	Ⅲ2層	SD1	Ⅳ層	SX15	SX19	Ⅲ1層	Ⅰ・Ⅱ層	計
		砂							キラコ							
吊紐	有	2	4	27	94		4	7	5		1		5	11	18	178
	無			6	45	16		23	12		1	3	14	45	11	176
タタキ	無			6	75	15		22	7				8	17	10	160
	超短			3					1							4
	短		1	7	12		1	5	4			6	9	25	6	76
	長			2	1	4			3	1	6	21	4	29	30	101
布目	粗		1	2	51	8	2	6	10	1		2	1	5	7	96
	粗-細				11	13	1	1	4		1	4		5	8	48
	細			6	18	3	3	14	6	4	5	36	4	31	38	168
	密			1												1
刺子形態	1(平行)		1		28	2	1	9	2		1	1	1	1	10	57
	2(バラ)		3	8	49	14	6	8	18		2	5	3	23	26	165
	3(二重)				6	7	2	3	2					3	10	33
	4(千鳥)	1	2	8	4			6	25	5	4	26	10	46	38	175
	5(小千鳥)			1	2	1						1	2	6	2	15
	6(間引)										2	1	3	3		9
	その他(斜行)							1								1
刺子密度(本/cm)	無								1			3		2	1	7
	～1		2	1	49	3	1	8	1		1	1	3	2	4	76
	～2	2	3	29	89	20	5	13	20		2	4	9	27	30	253
	～3		1	9	11	2	2	8	16	4	2	3	7	20	26	111
	～4			3	3		2	3	10		3	11	3	30	21	89
	～5		1	3		1		1	12			11	2	15	17	63
	～6			1	1				4	1	1	3	1	11	7	30
	～7			2	2				2			4	2	8	1	21
	～8			1								1		1		3
	～4mm				4											4
刺子糸太さ	～3.5mm				1											1
	～3.0mm			1	20		1						1	1	4	28
	～2.5mm		2	5	33	7	1	6	3			1	1	4	4	67
	～2.0mm		4	19	59	6	3	11	19	1	2	3	5	21	27	180
	～1.5mm	1		12	30	12	4	13	22	4	3	17	7	38	48	211
	～1.0mm		1	12	5			5	17		4	14	14	54	20	146
刺子糸目長さ	12.0mm超			1									1			2
	～12.0mm				5			3	1					2		11
	～10.5mm			1	4	1		7	3		1			1		18
	～9.0mm		2	5	35	5	1	9	5		2	1	2	6	10	83
	～7.5mm			9	64	14	4	3	14	3	1	4	4	18	16	154
	～6.0mm	1	3	14	32	3	3	6	18		1	9	11	32	34	167
	～4.5mm		2	17	12	1	1	4	18	2	2	18	7	45	36	165
	～3.0mm			2	1			2	1		2	2	2	14	7	33
全長平均(cm)				27.1	26.8	25.8		27.0	27.6		31.3	28.5	27.5	28.8	26.4	
胴部長平均(cm)				23.6	23.1	22.3		23.1	23.5		28.2	25.6	23.7	24.6	22.7	
玉縁長平均(cm)		4.0		3.7	3.6	3.5	3.6	3.6	3.8		3.6	3.4	3.7	3.4	3.5	
前幅平均(cm)				14.8	14.4	13.3		13.6	13.6		14.8	14.6	14.2	14.1	14.4	
後幅平均(cm)				14.8	14.8	14.0		14.2	15.0			15.0	15.0	14.4	14.6	
玉縁幅平均(cm)				8.1	8.5	8.5		8.0				8.0		8.2	7.2	
厚さ平均(cm)		2.3	2.1	2.2	2.1	1.8	2.0	1.9	2.0	1.8	1.9	1.9	2.0	1.9	1.9	
内前ケズリ平均(cm)		4.2	2.9	3.7	3.4	2.3		2.9	3.0	3.8	2.4	2.8	3.0	2.8	3.1	

第42表　丸瓦集計表

第42表は、堀の出土層毎に丸瓦内面に見られる製作技法の痕跡を集計したものである。砂が主体の下層とキラコが主体の上層に区分して傾向を見ていきたい。

吊紐痕は、Ⅲ4～Ⅲ3層・SX14・16・17出土のもので高率で見られるのに対し、Ⅲ2層以上では比率が逆転する。上層には下層のものが包含される得ることを考えると、実質上層には使用されない技法の可能性が高い。

タタキ痕は、丸瓦内面に見られる棒状あるいは板状の器具による圧痕である。丸瓦先端部から玉縁に至る長いものと、器具の角のみ使用した短いものがある。タタキ痕自体はⅢ3層から見られるが、下層では、無いものが主流で、有っても短いものが多い。逆に上層では、長いものが多くなる。よって吊紐痕と逆の推移を示す技法といえる。

布目痕は、感覚的ではあるが、下層は比較的粗いものが多いのに対し、上層では細かい布目が多い。ただSX13の比率は上層のものに近い。

布に施される刺子状の糸については次のとおりである。糸の形態については第101図のように分類した。傾向を把握するのは難しいが、下層では形態2、上層では形態3が多いようである。密度は1cmあたりの本数で計測し、下層が1～2本の比較的粗なものが多いのに対し、上層は2～4本を主体としつつ、それ以上に密なものが多い傾向がある。実際上層の時期と見られる丸瓦には、刺子状の糸が密すぎて、布目が観察しにくいような個体もある。糸の太さ、糸目の長さは上層、下層で傾向の違いは見られない。その他、外面のナデ調整で特徴的なものとして、幅が狭く、間隔の空くケズリに近い調整がある。長い内タタキとセットになるケースが多く、これも上層の技法といえるかも知れない。

燻しの入り方、焼成具合などは下層から上層までほぼ同じ状況であるが、感覚的な印象として、キラコの瓦当が硬質であるように、上層の方が固く焼き締まったものが多いようである。胎土中の混入物に関しても、一定方向の推移は見られない。

輪違瓦

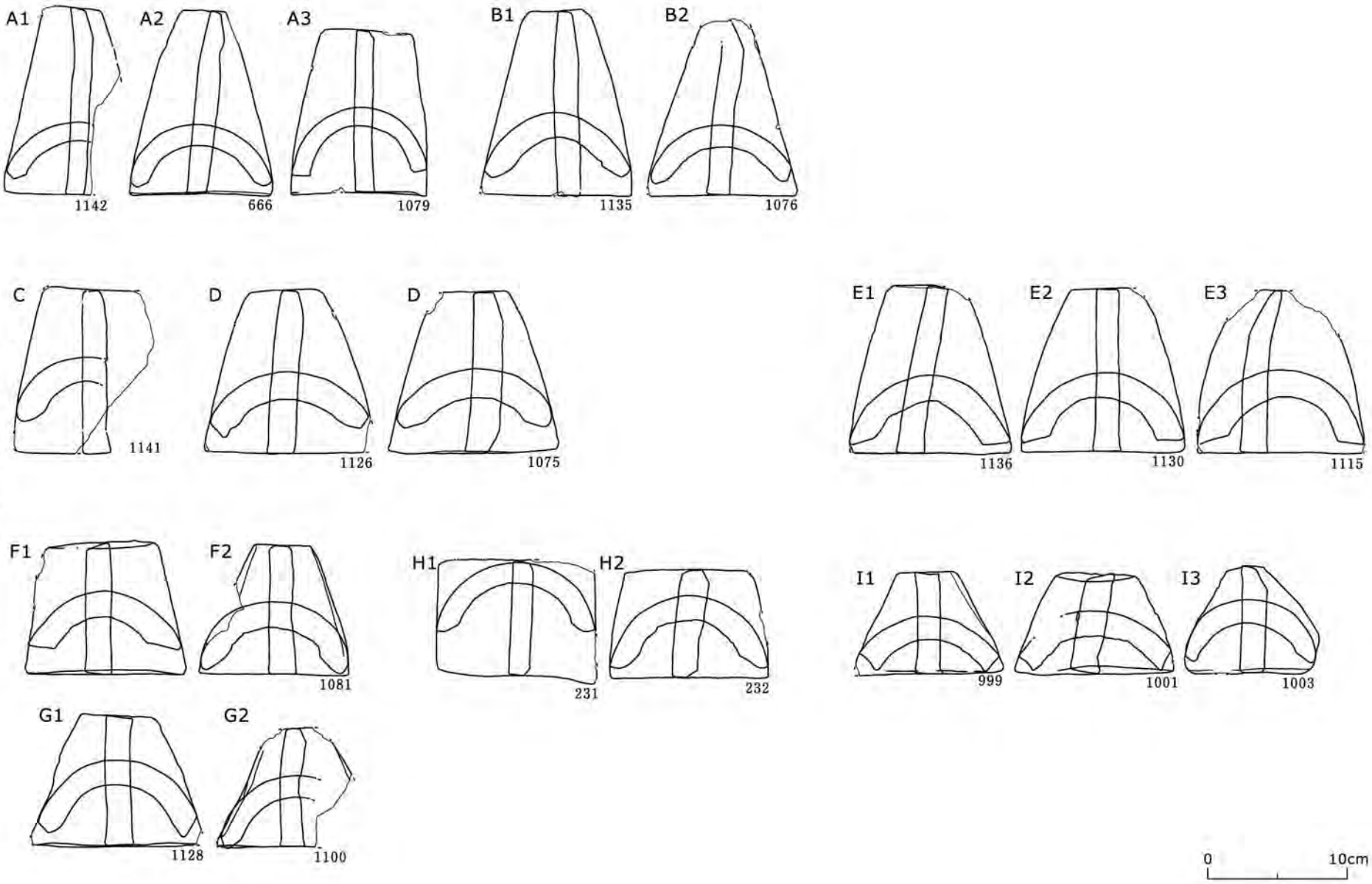
輪違瓦は長さによって3法量に分けることができる(第105図)。A・B類は長さ約12～14cm、C・D・E類は11～12cm、F・G・H・I類は7～11cmである。さらに各法量で、平面形、厚さ、側辺端部の調整でA～I類の9種に分類した。さらに細部の形状・調整等で細分している。

A・B類は最も長さが大きいもので、平面形状は三角形に近い。薄手のA類と厚手のB類に分けた。A類は出土点数が最も多いが、被熱しているものは無い。

中法量のものは、全てが厚手である。台形状のC類、三角形に近いD類、側辺端部に面取りを施さないE類に分けた。C類には二次被熱しているものが数点あり、古い段階で使用されていた可能性が高い。E類は硬質で、銀色に近い色調を呈する。新しい段階のものと見られる。

小法量のものはF類のほか、各辺の面取りが丁寧で、内面に何の痕跡も見えないG類、長方形のH類、最も長さの短いI類に分けた。I類はD類同様、側辺端部に面取りを施さず、硬質・銀色近似の色調である。

H類はSX18、I類はd区からのみの出土である。この地点が枡形一の門周辺であり、出土場所が限定されることから高麗門に使用されていた可能性がある。輪違瓦の長さは棟の大きさに関連する可能性がある。両類の短さは、一般的に櫓・櫓門より小さい高麗門の使用を想起させるものである。



第105図　輪違瓦分類図

5. 加納城跡を活用したまちづくり活動の記録

〈平成17年度〉

5月24日～

発掘調査成果パネル展示

10月15日

加納まちづくり会役員会で加納城跡の活用に関するワークショップ開催。

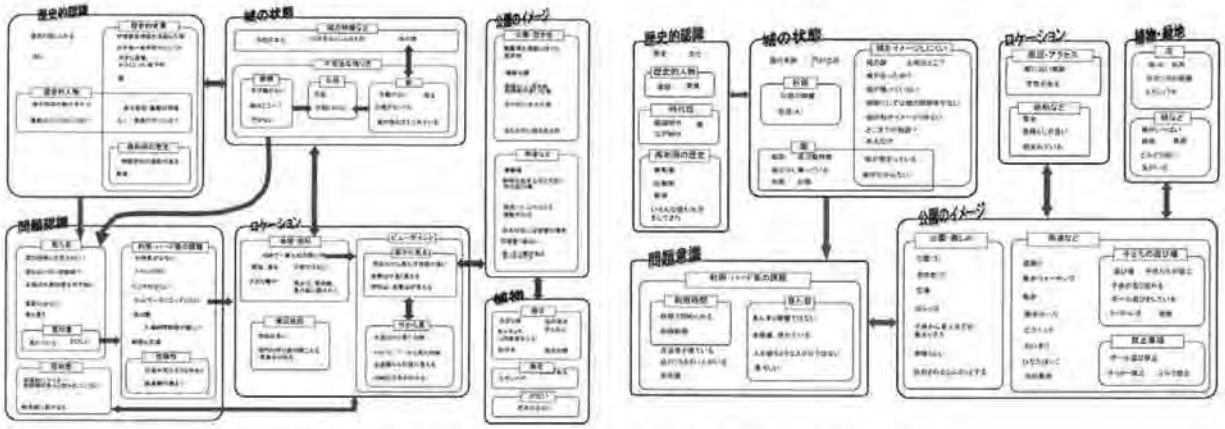
ワークショップ風景

11月19日

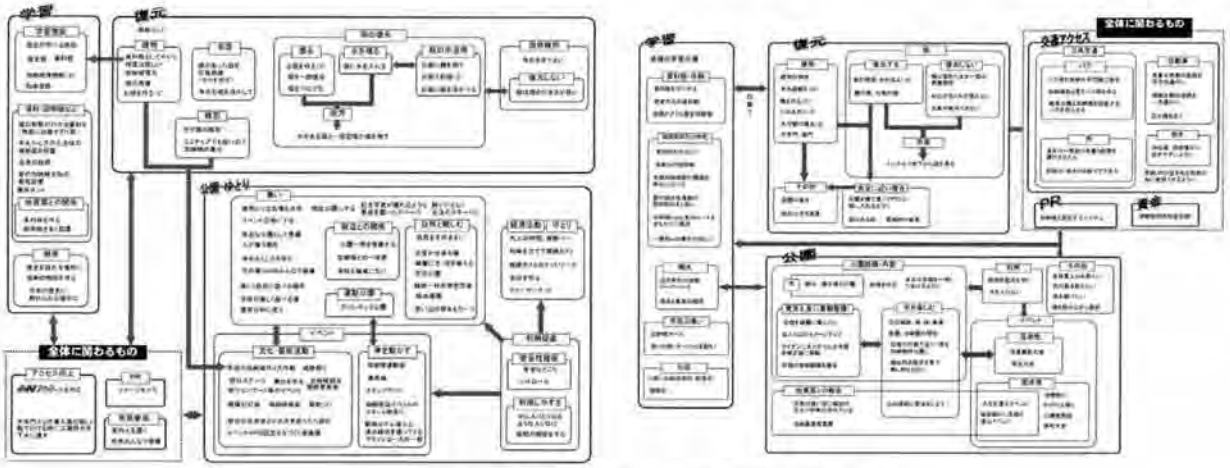
午前；加納城講座　加納の歴史・加納城の発掘報告

「加納まちづくり会」の取り組み（ワークショップ結果の発表）

午後；発掘現場見学会



ワークショップでのアイディア（加納城のイメージ）



ワークショップでのアイディア（加納城の活用）

12月9日～12月21日

加納まちづくり会会員宛、アイディア票(加納城の活用に向けて)を配布、回収

12月22日～1月17日

加納城跡出土遺物展開催

1月17日

加納まちづくり会役員会で加納城跡の活用に関するワークショップ開催

3月31日

小冊子「見直したい、伝えたい　加納」発行に協力。

〈平成18年度〉

5月～　パネル展示

～11月25日

加納城跡北門に案内板の設置を決定。作成に協力。

11月25日

「加納の日！―再び―」開催。

午前；加納城案内板除幕式・現場見学会

午後；加納講座「謎解き加納城(発掘編)」

1月中旬～

ヒアリング調査

案内板

パネル展示

〈平成19年度〉

5月18日～

発掘調査成果パネル展示

1月～

ヒアリング調査

3月8日

「加納の日」開催

午前；発掘現場見学会

午後；加納講座「加納城発掘から見えるもの」

ワークショップ「加納城の使い方をみんなで考えよう」

ワークショップ風景

〈平成20年度〉

5月～

発掘調査成果パネル・遺物展示

7月

パンフレット「加納城下町地図」発行

11月22日

「加納の日」開催

発掘現場見学会

発掘現場見学会

〈平成21年度〉

2月11日

「加納の日」開催

講座「20年間の加納城発掘からみたもの」

3月

冊子「加納城跡の発掘」発行

図　　版

図版1

本丸大手北堀完掘状況（北東から）

本丸大手北堀完掘状況（北西から）

本丸大手北堀完掘状況（東から）

本丸大手北堀完掘状況（北から）

図版2

本丸大手北堀完掘状況（東から）

本丸大手北堀完掘状況（北東から）

本丸大手北堀完掘状況（南西から）

本丸大手北堀完掘状況（南から）

本丸大手北堀完掘状況（南東から）

本丸大的北堀完掘状況（北から）

本丸大手北堀現地見学会

堀障子検出状況（西から）

堀障子検出状況（北西から・10次）

堀障子検出状況（北から・10次）

石垣SV2検出状況（北から）

石垣SV2検出状況（北東から）

図版4

瓦集積SX14検出状況（南から・9次）

瓦集積SX14検出状況（北から・9次）

瓦集積SX14検出状況（東から・11次）

瓦集積SX14検出状況（北から・11次）

瓦集積SX14柿状板材出土状況（北東から・9次）

瓦集積SX16,17検出状況（南から・10次）

瓦集積SX16漆器出土状況（10次）

瓦集積SX18検出状況（北から・10次）

瓦集積SX18検出状況（北東から・10次）

瓦集積SX13検出状況（南東から・9次）

瓦集積SX13検出状況（北から・9次）

瓦集積SX13検出状況（西から・11次）

瓦集積SX13検出状況（南から・11次）

瓦集積SX13検出状況（東から・11次）

図版6

瓦集積SX15検出状況（北から・10次）

瓦集積SX15取り上げ後状況（北西から・10次）

瓦集積SX19検出状況（南から）

Ⅲ3層陶錘出土状況（北東から）

9次調査完掘状況（北から）

本丸大手北堀土層堆積状況（北から・9次）

本丸大手北堀土層堆積状況（南から・9次）

本丸大手北堀土層堆積状況（二の丸側・9次）

本丸大手北堀土層堆積状況（堀中央堀障子部・9次）

本丸大手北堀土層堆積状況（本丸側・9次）

図版8

堀埋土堆積状況（10次西壁）

堀埋土堆積状況（10次西壁）

堀埋土堆積状況（10次西壁）

堀埋土堆積状況（10次北壁）

堀埋土堆積状況（11次西壁・二の丸側）

堀埋土堆積状況（11次西壁・二の丸側）

本丸北堀試掘南トレンチ土層状況（西壁）

本丸北堀試掘北トレンチ土層状況（西壁）

本丸内調査終了状況（東から・12次Aトレンチ）

本丸内土層堆積状況（北東から・12次Aトレンチ）

炭集積SX23検出状況（12次Aトレンチ）

鉄塔撹乱底土層状況（12次Aトレンチ）

本丸内調査終了状況（北西から・12次Bトレンチ）

瓦集積SX21検出状況（北西から・12次Bトレンチ）

本丸内土層堆積状況（南西から・12次Bトレンチ）

自衛隊駐屯期の石列（12次Bトレンチ）

図版10

本丸大手枡形内櫓門跡検出状況（北西から）

本丸大手枡形内石垣SV12埋没状況（北東から・調査前）

本丸大手枡形内土塁SA12埋没状況（北西から）

本丸大手枡形内石垣SV19埋没状況（南西から）

本丸大手枡形内瓦集積SX25検出状況（南東から）

石垣SV21・礎石検出状況（北から）

石垣SV20・瓦集積SX24検出状況（西から）

石垣SV22検出状況（東から）

石垣SV12検出状況（北西から）

石垣SV23検出状況（北東から）

石垣SV18検出状況（南東から）

石垣SV19検出状況（南西から）

枡形内b区深掘りトレンチ土層状況（南壁）

図版12

石垣SV18北・石列SV27検出状況（東から・d区）

石列SV27・礎石状円礫検出状況（南から）

石垣SV18南検出状況（北から・e区）

調査終了状況（東から・e区）

石垣SV24・階段状遺構SX26検出状況（南から）

石垣SV26検出状況（南から）

石垣SV24・階段状遺構SX26検出状況（西から）

10 11

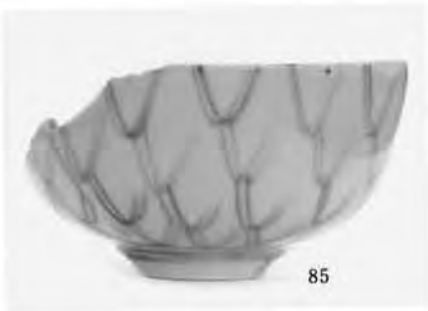
12

73

77

125

113


85

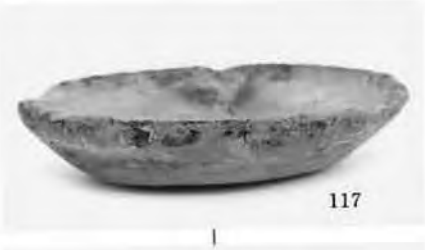
119

99

121

127

153


117

112

図版14

909

910

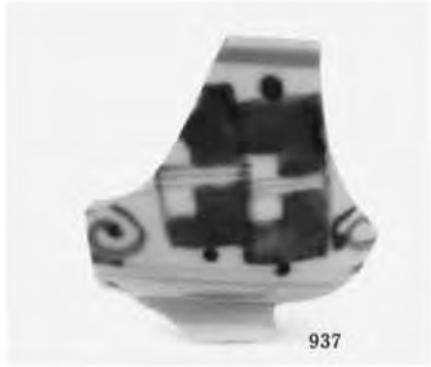
932

944

925

924

957


937

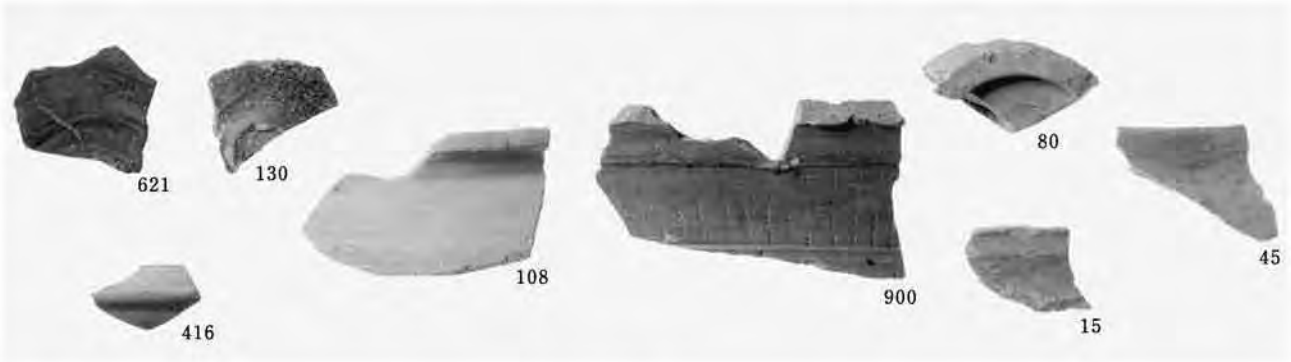
943

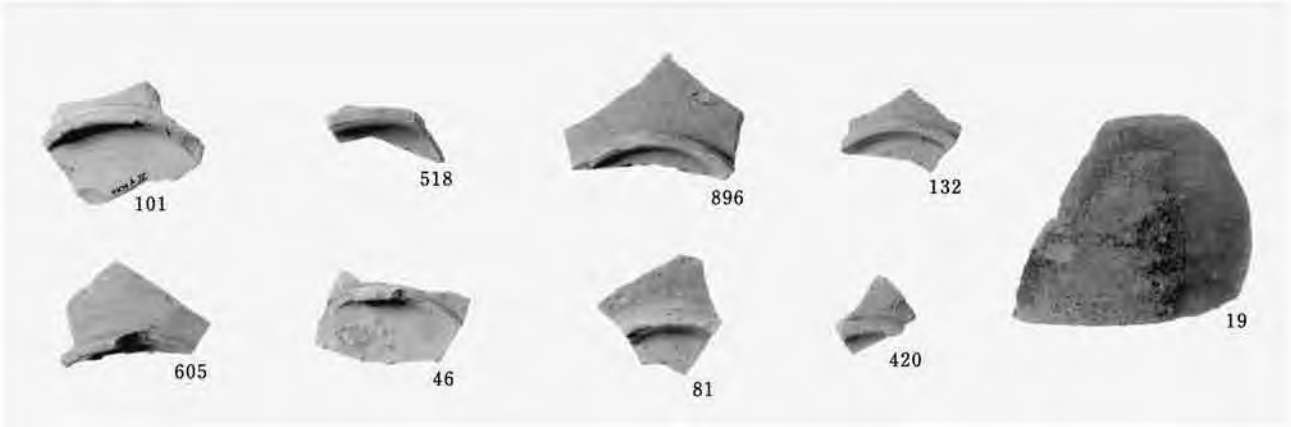
948

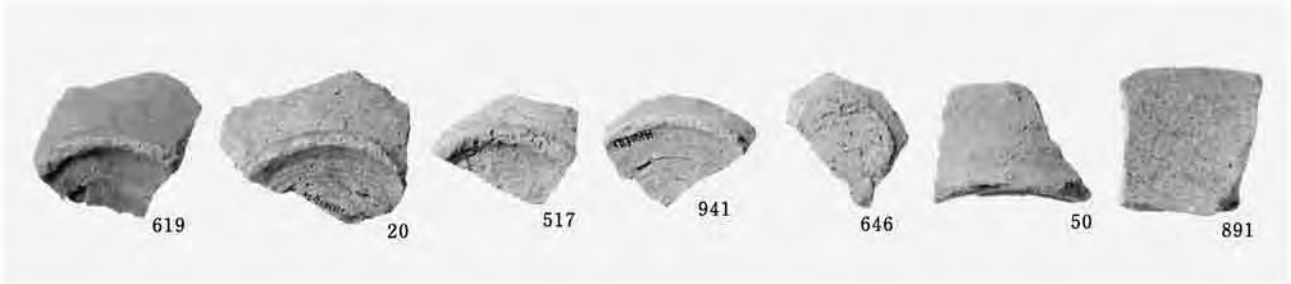
975

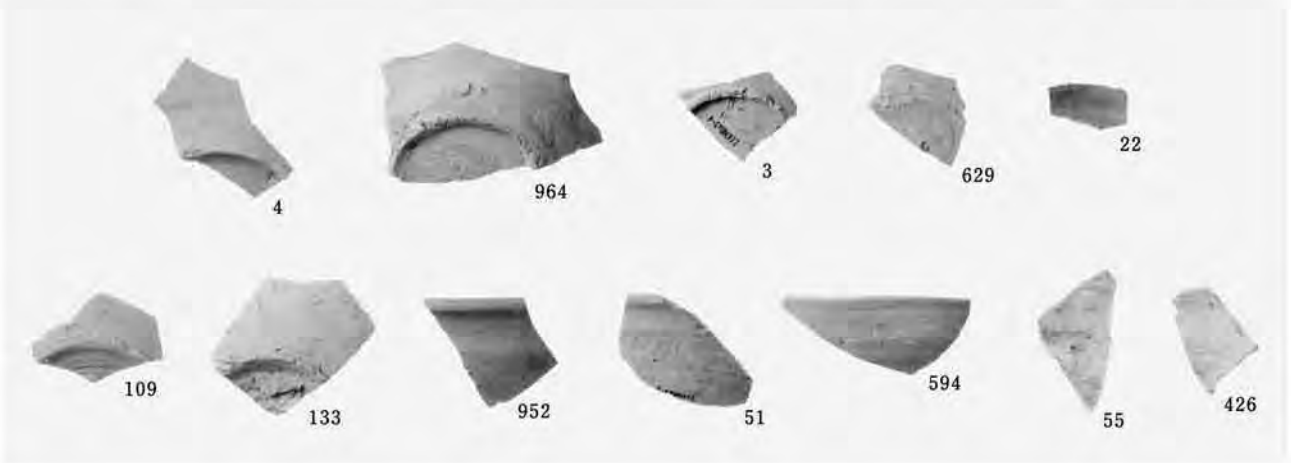
165

415
911
499
610
950
23
160
470

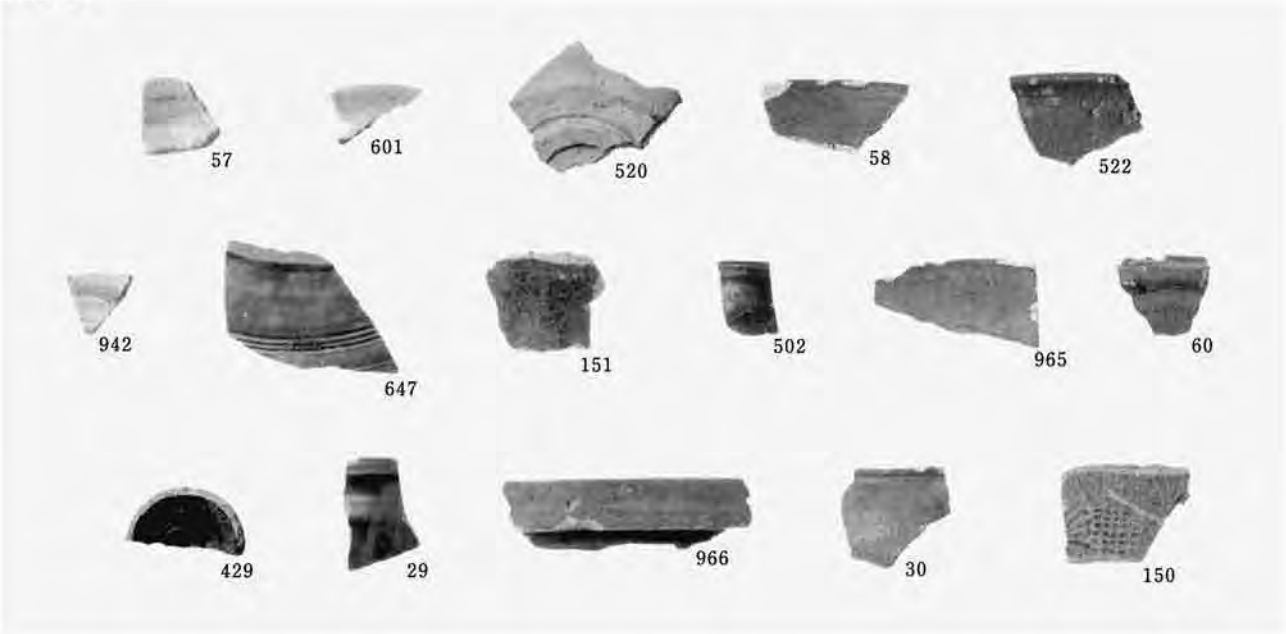

621
130
108
416
900
80
15
45

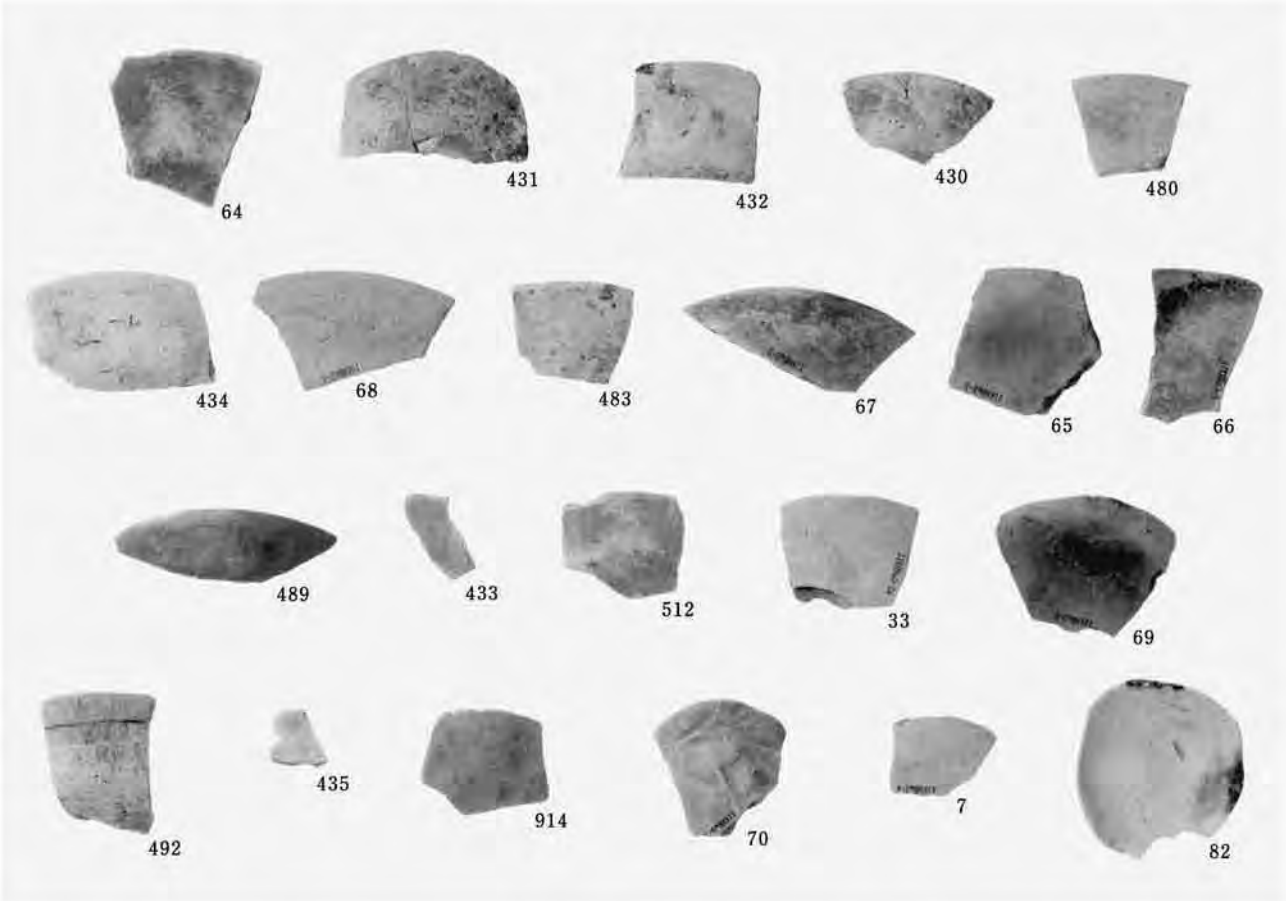

101
518
896
132
605
46
81
420
19

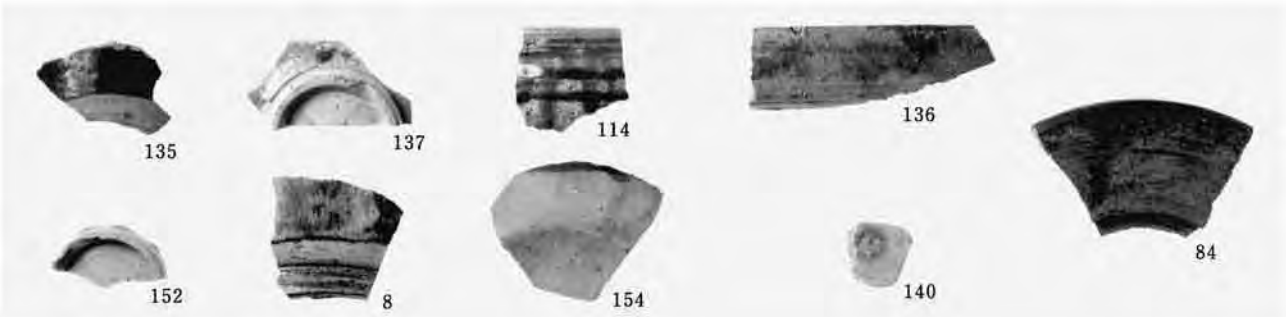

619
20
517
941
646
50
891

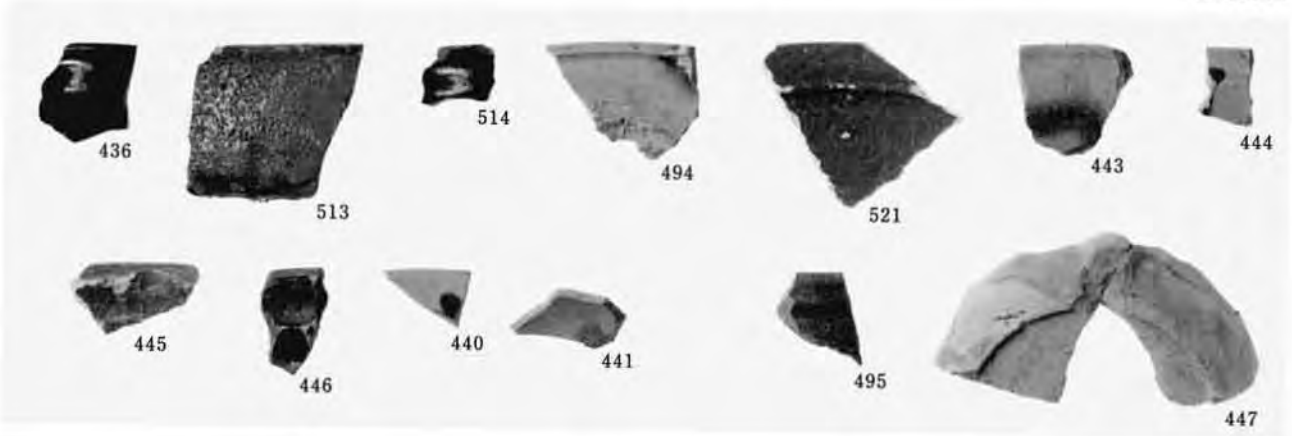

4
964
3
629
22
109
133
952
51
594
55
426

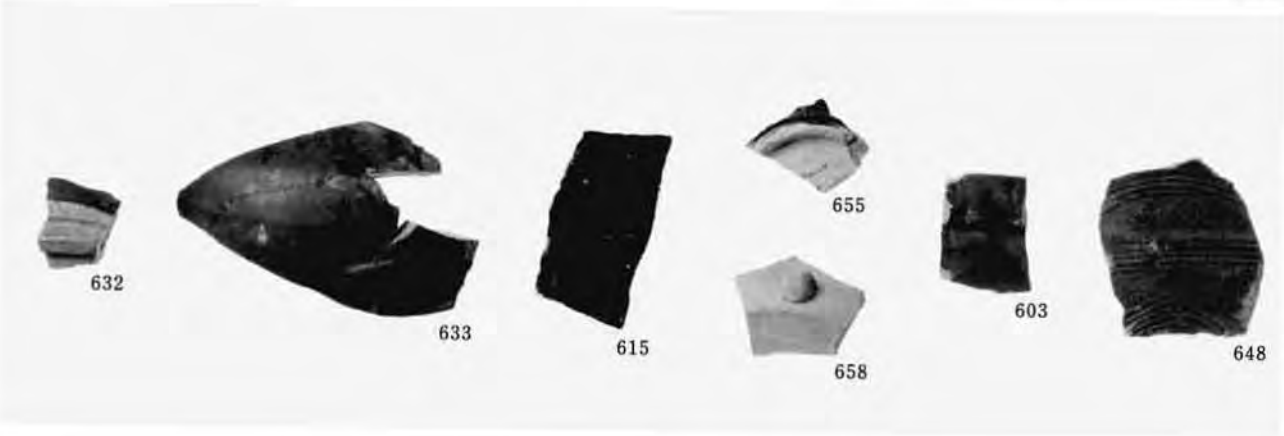
図版16

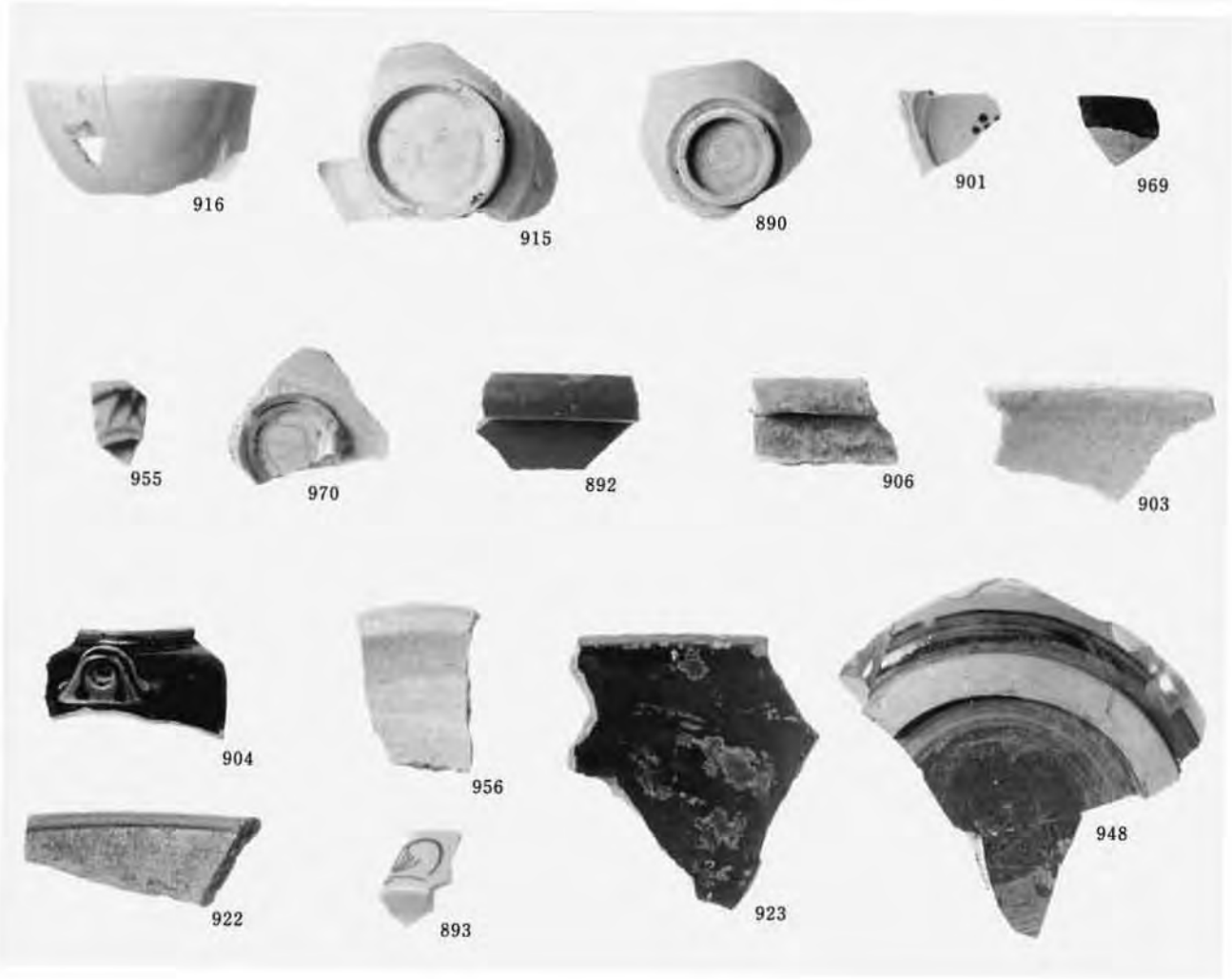

57
601
520
58
522
942
647
151
502
965
60
429
29
966
30
150


64
431
432
430
480
434
68
483
67
65
66
489
433
512
33
69
492
435
914
70
7
82

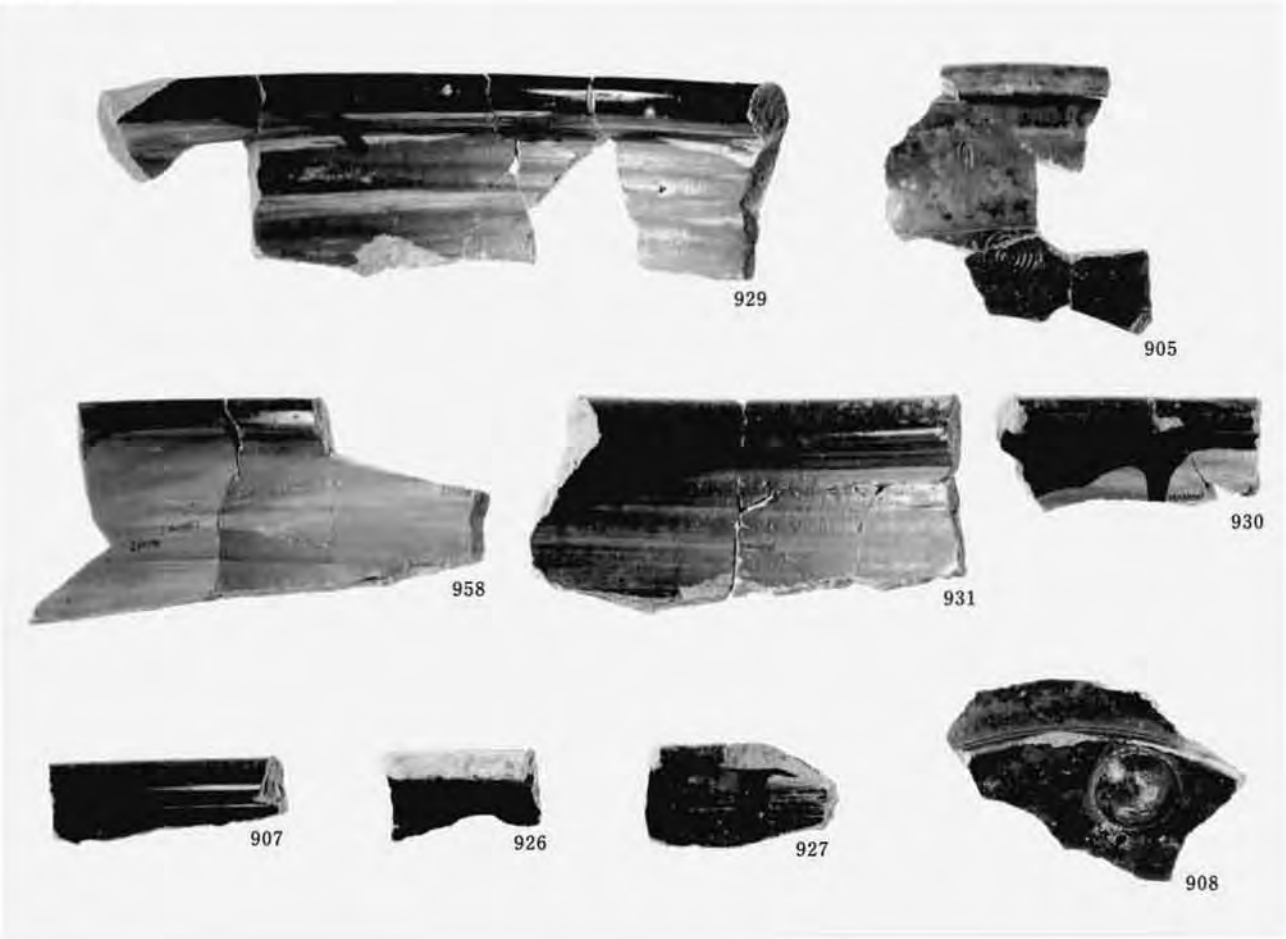

135
137
114
136
84
152
8
154
140


436
513
514
494
521
443
444
445
446
440
441
495
447

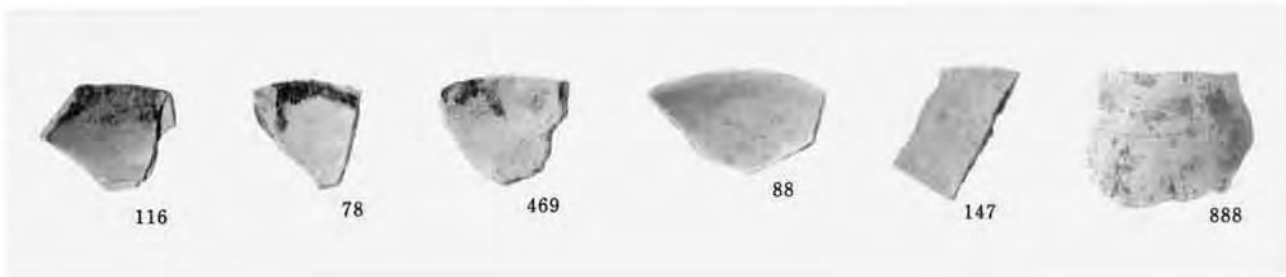

632
633
615
655
658
603
648

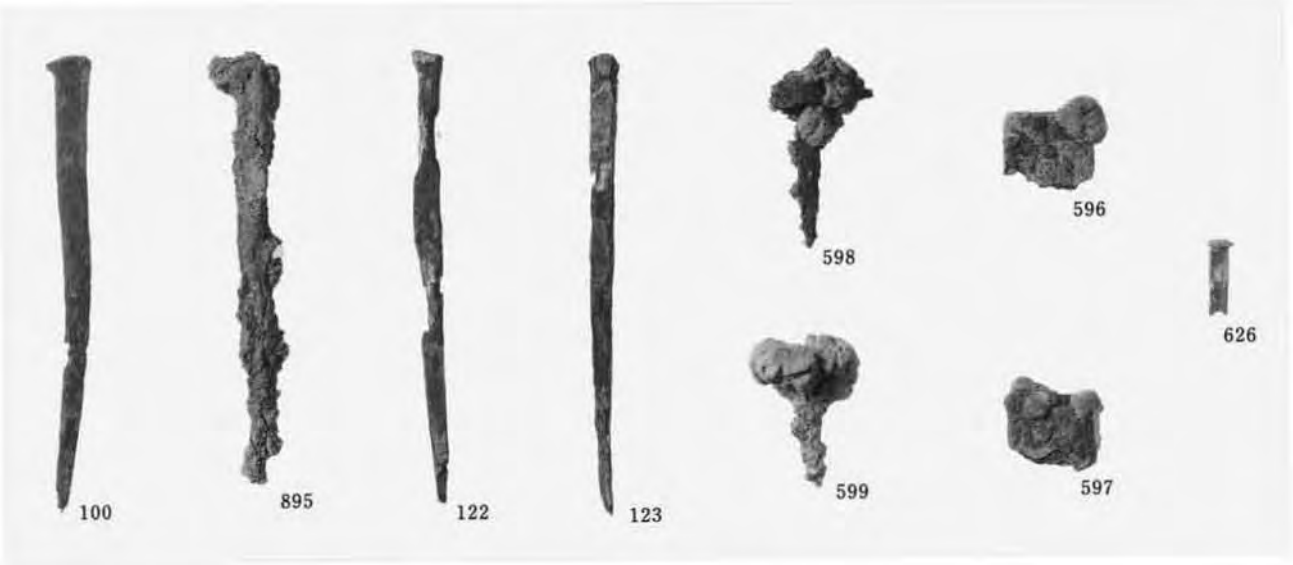

916
915
890
901
969
955
970
892
906
903
904
956
922
893
923
948

図版18

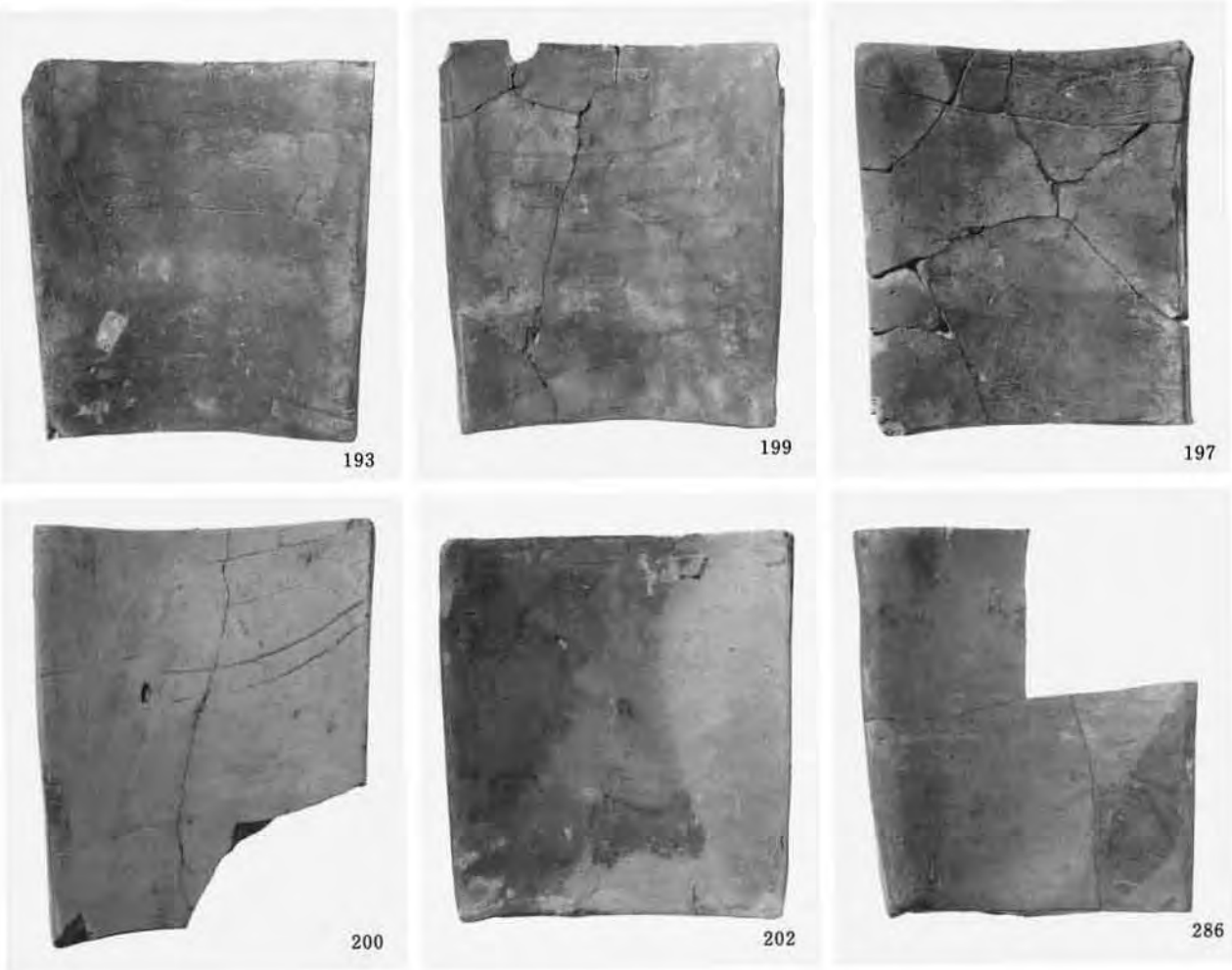

929
905
958
931
930
907
926
927
908

524
612
649
934
947
945
143
899
104
155
142
640
973
938
87


116
78
469
88
147
888


100
895
122
123
598
596
626
599
597

92
93
94
95
96
97
98


193
199
197
200
202
286

図版20

B1
218

B1
171

B3
186

B4
668

C1
240

C2
681

C3
715

D1
270

D2
683

D4
669

E1
173

E1
166

F1
716

F4
364

F2
241

F3
243

G2
540

G3
271

G4
287

G5
363

G5
316

H1
1029

I2
852

H2
289

J1
272

J2
1137

J3

576

J4

242

J8

798

K1

1032

K3

1055

K4

365

K7

274

K8

1033

K9

1117

K11

291

K12

721

L2

1010

N1

321

N2

1034

N6

322

N3

323

Q3

290

O3

308

R1

319

S1

187

T1

868

U1

976

1086

244

図版22

V1

1015

B

692

C

341

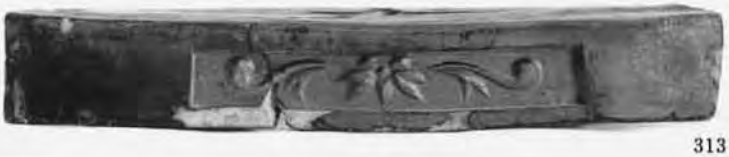
G

402

G

809

C



313

F

389

I

1042

L24-a

366

L24-a

849

L16-1

324

L16-2

279

L16-3

326

L16-4

275

L16-5

223

L16-6

1119

L16-7

295

L16-8

330

L16-a

331

L13-1

836

L13-2

674

L13-6(古)

212

L13-6

222

L13-7

854

L13-8

543

L13-9

294

L13-9

375

L13-11

838

L13-a

1061

図版24

L13-b

685

L12-3

297

L12-6

248

L12-7

249

L12-8

398

L(12-9)

882

L12-10

335

L12-11

1040

L12-12

1089

L12-14

988

L12-14

1019

L12-15

378

L12-16

400

L12-b

191

L12-c

299

L12-d

379

L12-e

1039

L12-f

380

L12-f

724

L12-g

1111

L12-i

251

L11-2

783

L10-1

791

L10-2

399

図版26

L9-a
332

R16-1
328

R16-2
397

R16-3
384

R16-a
817

R15-1
247

R14-1
1109

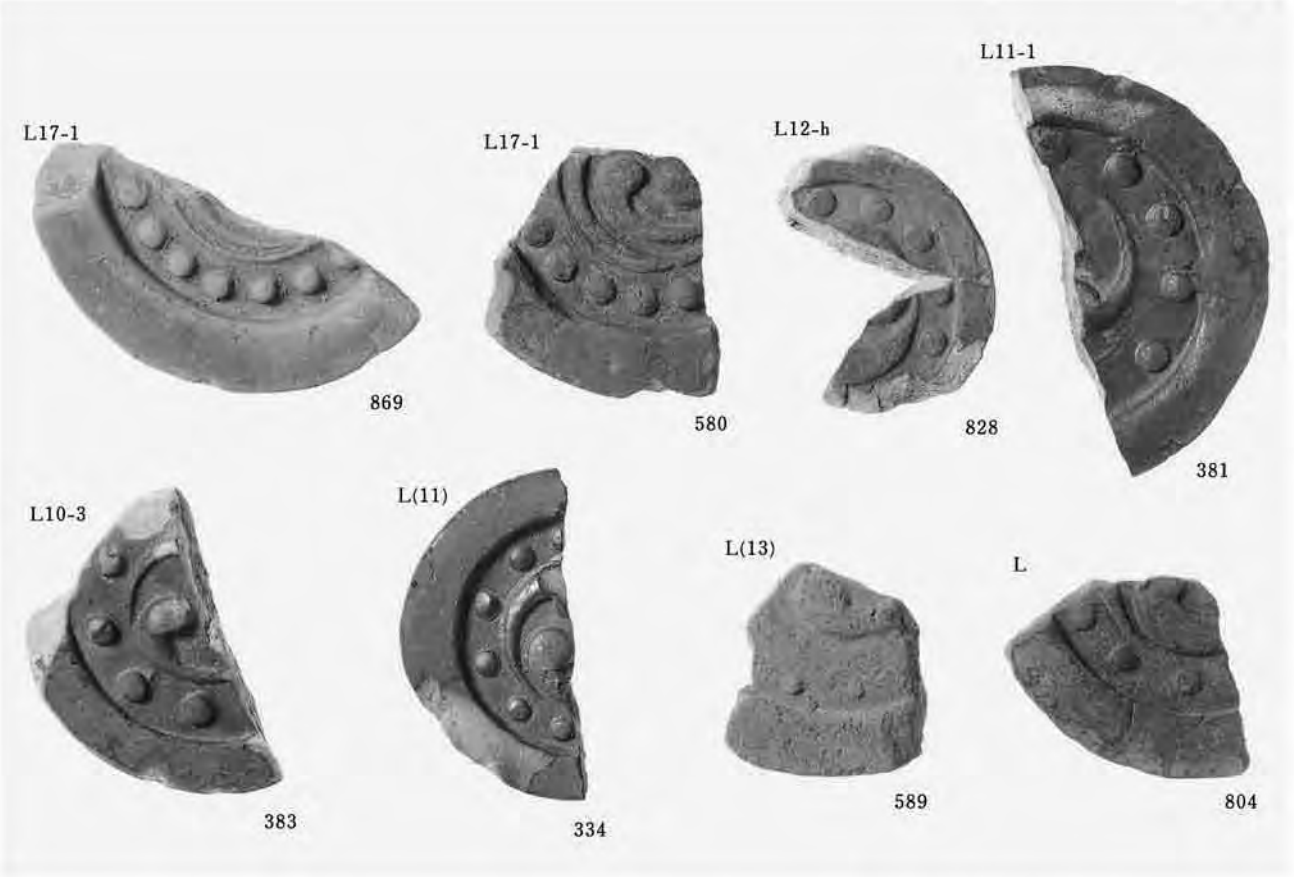
R14-2
300

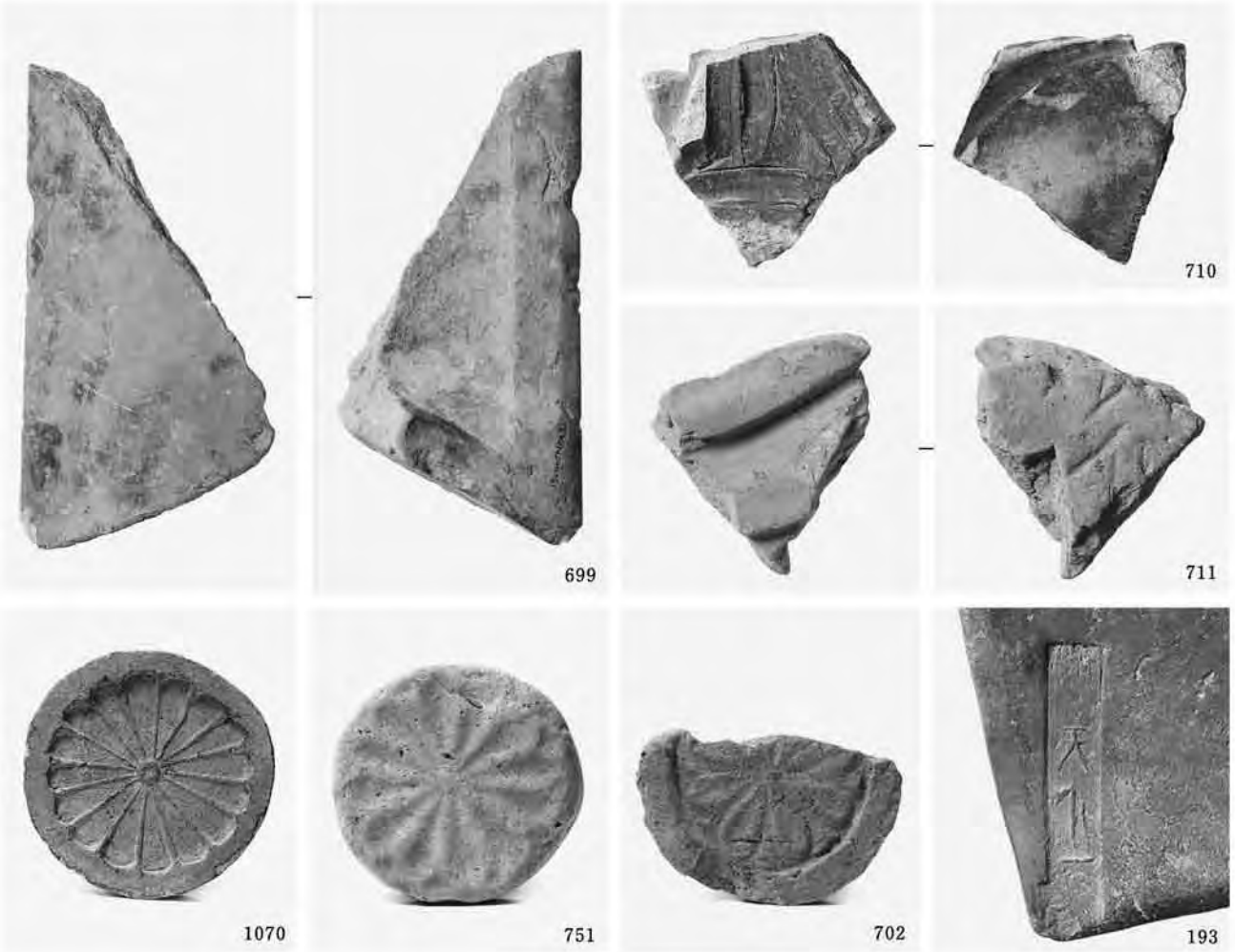
R13-1
337

R13-a
784

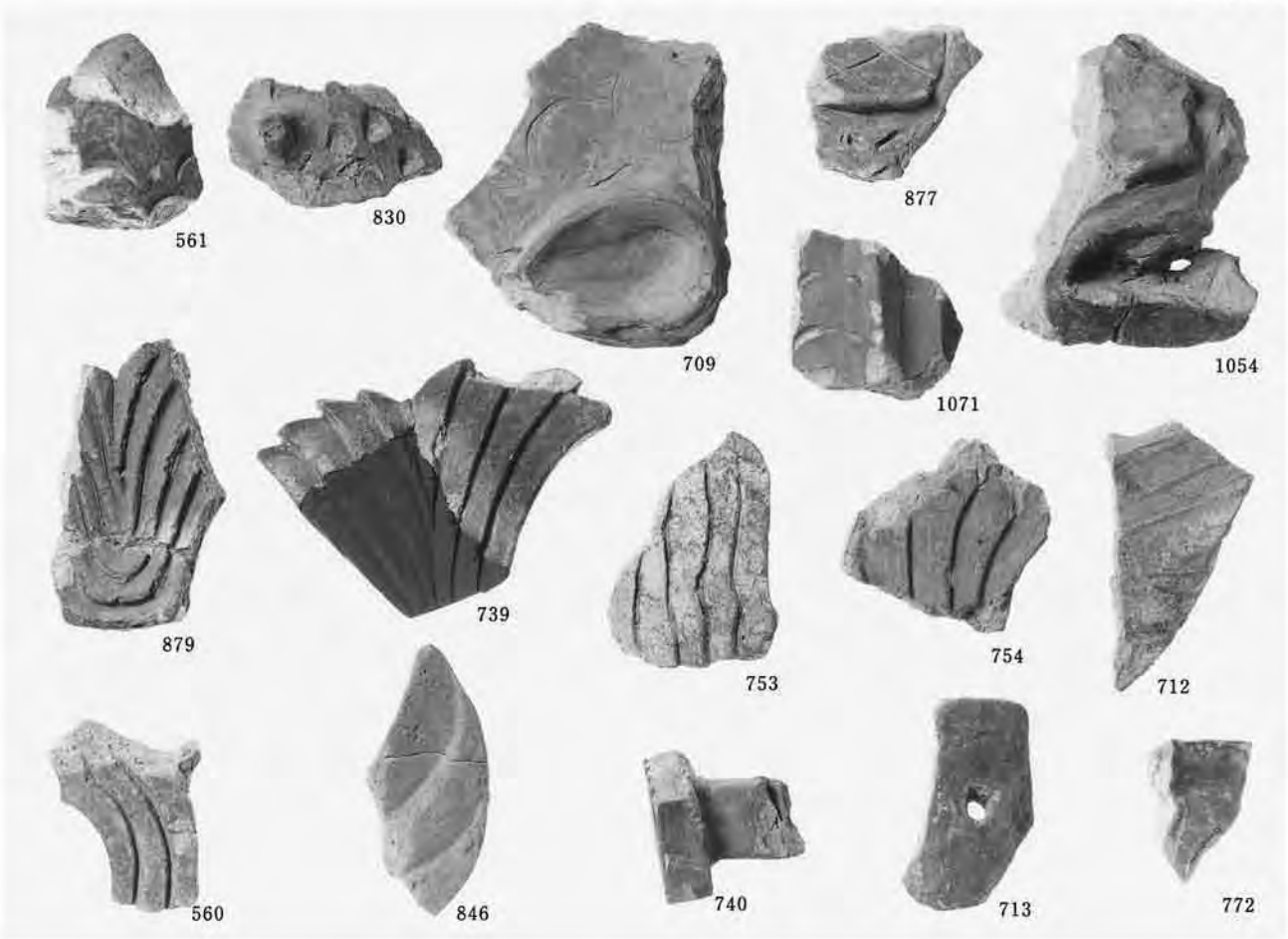
R12-a
385

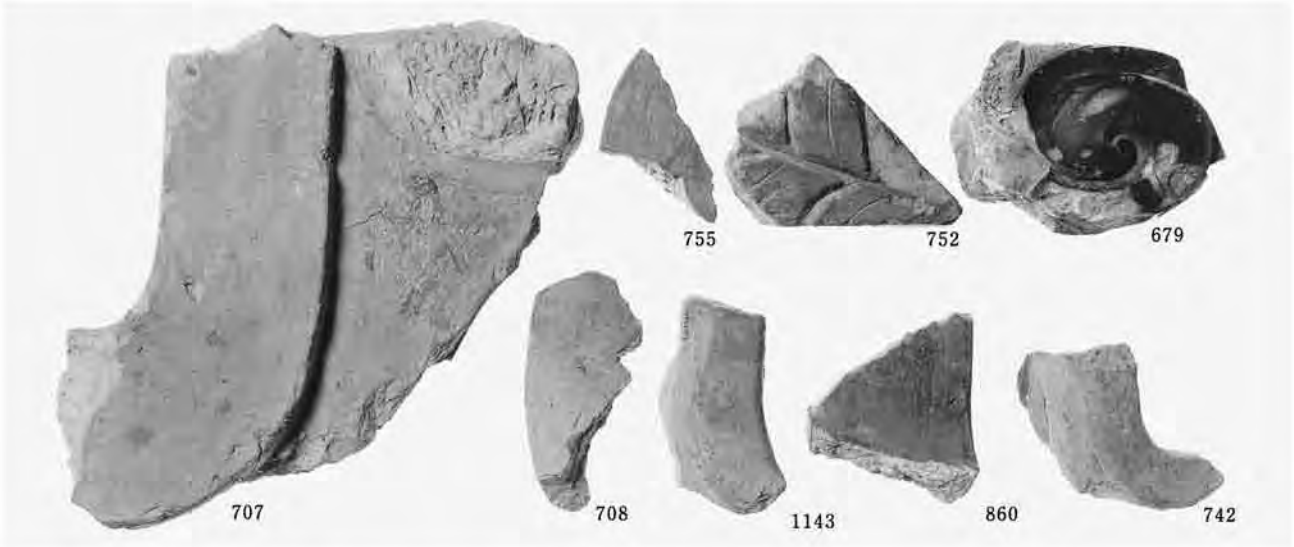
R0-1
1041


L17-1
869
L17-1
580
L12-h
828
L11-1
381
L10-3
383
L(11)
334
L(13)
589
L
804


699
710
711
1070
751
702
193

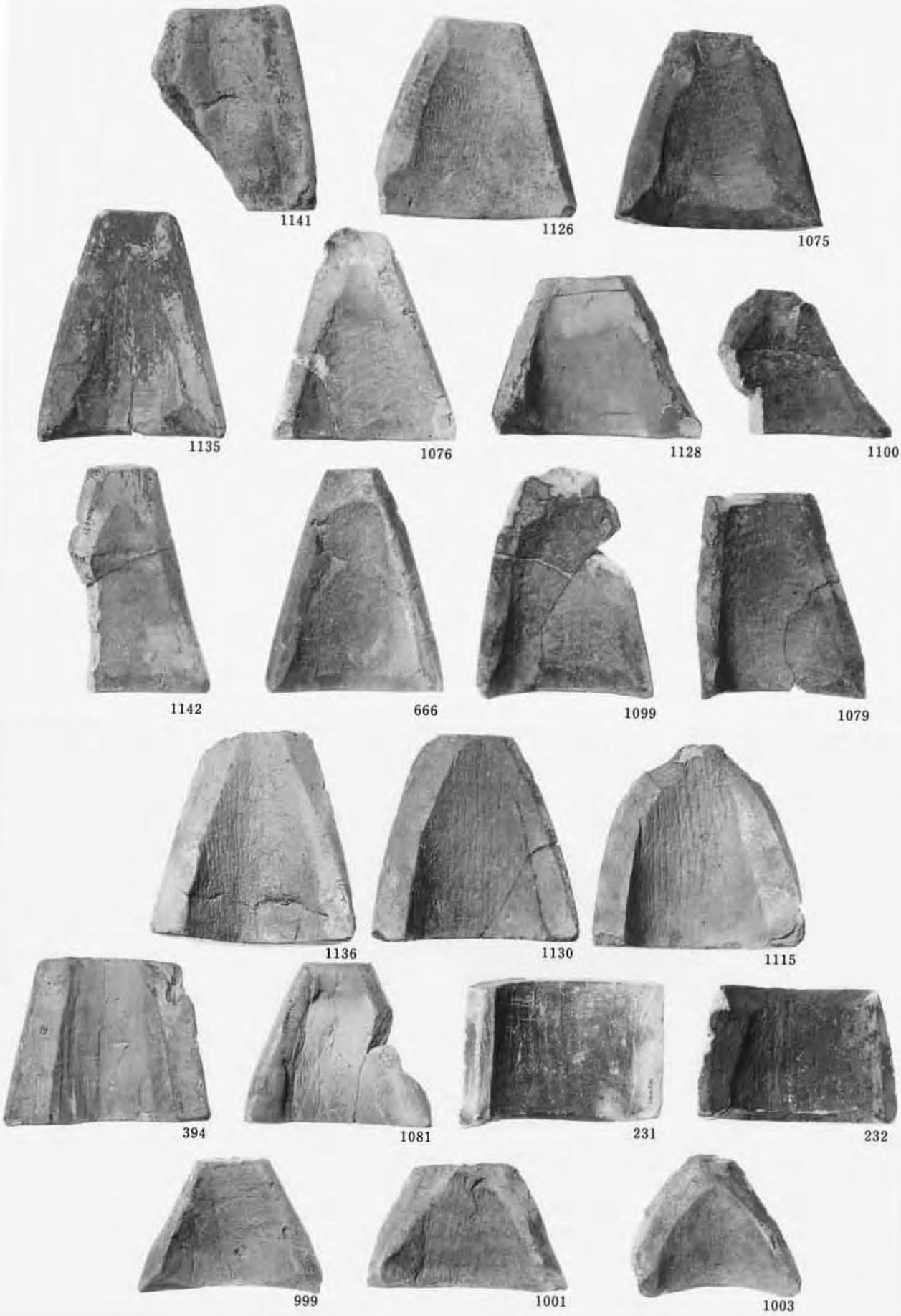
図版28

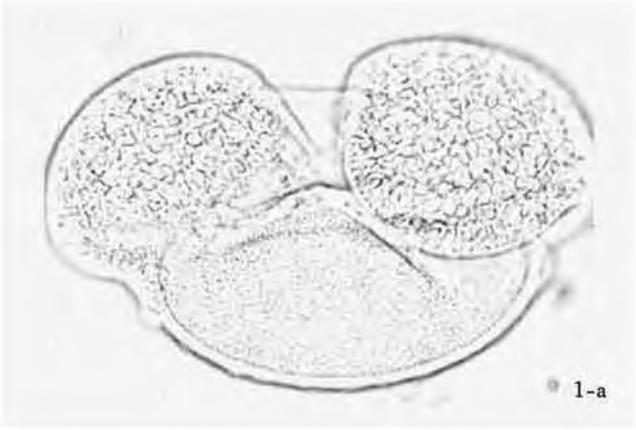

561
830
709
877
1071
1054
879
739
753
754
712
560
846
740
713
772

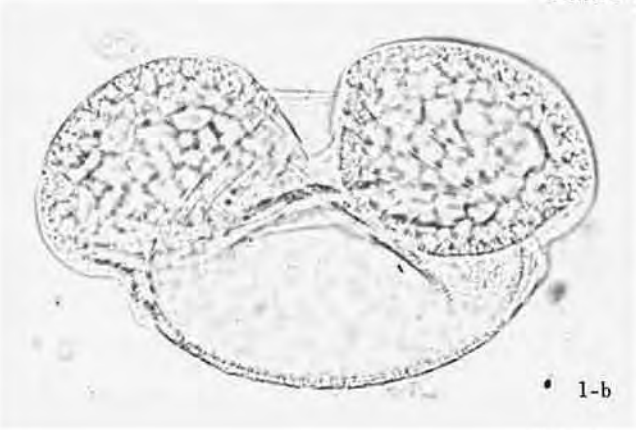

707
755
752
679
708
1143
860
742

714
741
743
789
862
1068
983
1144
886
756
885

図版30

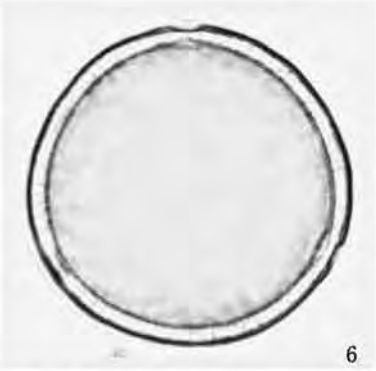

1141
1126
1075
1135
1076
1128
1100
1142
666
1099
1079
1136
1130
1115
394
1081
231
232
999
1001
1003





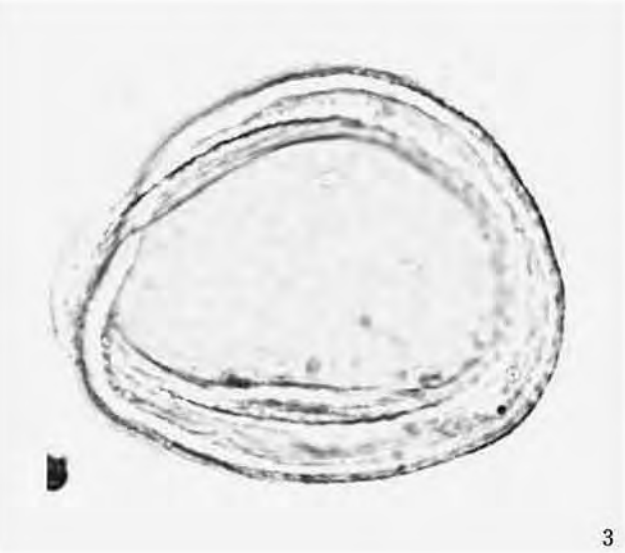
20um
(1)

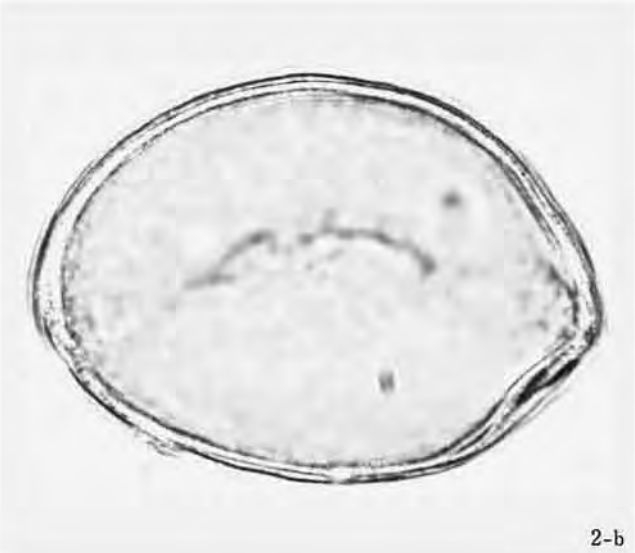
10um
(2-7)



産出された花粉化石
1.マツ属複維管束亜属(4-2層)　2.スギ属(4-2層)　3.クマシデ属ーアサダ属(4-6層)　4.コナラ属コナラ亜属(4-6層)
5.コナラ属アカガシ亜属(4-2層)　6.エノキ属ームクノキ属(4-2層)　7.オモダカ属(4-2層)

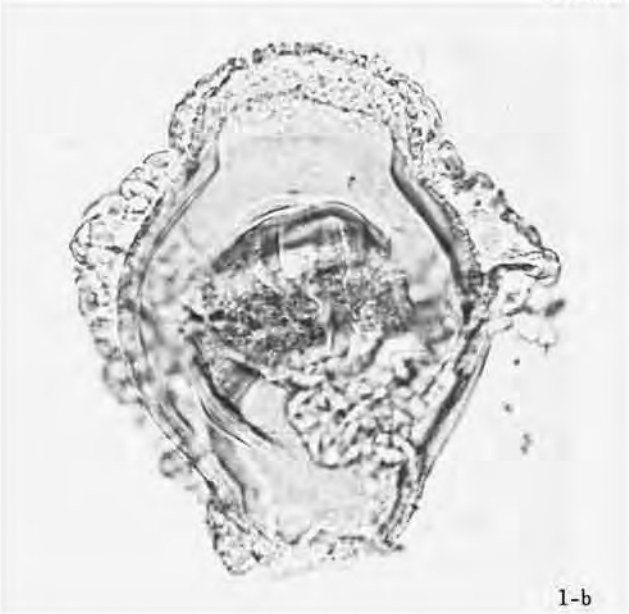
図版32



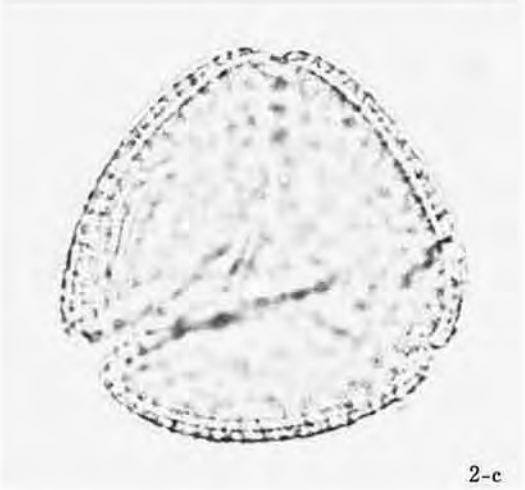


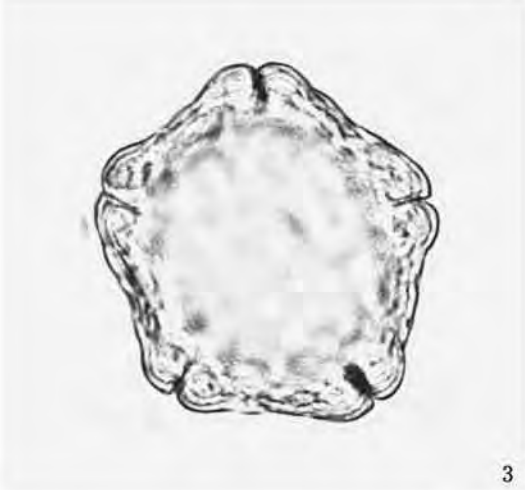
10um
(1-5)

産出された花粉化石
1.イネ科(4-6層)　2.ジュンサイ属(4-2層)　3.ヒツジグサ属(4-6層)
4.クワ科(4-2層)　5.ソバ属(4-6層)



20um
(1)



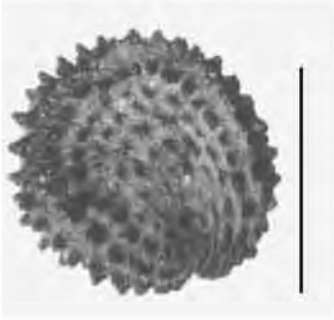


10um
(2-3)

産出された花粉化石
1.ヒシ属(4-1層)　2.ガガブタ(4-2層)　3.アリノトウグサ属(4-6層)

図版34

1



2

3

4

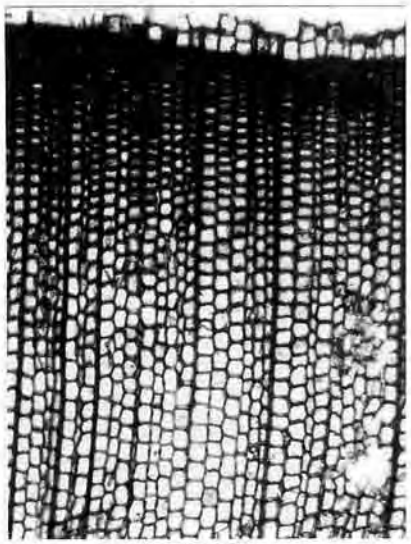
5

6

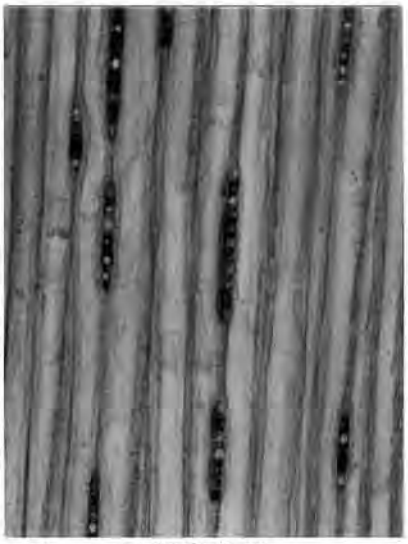
出土した大型植物化石
1.スギ　雄花　2.ナデシコ科　種子　3.カタバミ属　種子
4,5.ヒメビシ　果実　6.イヌコウジュ属　果実

Scale
1～3,6;　1mm
4,5;　1cm

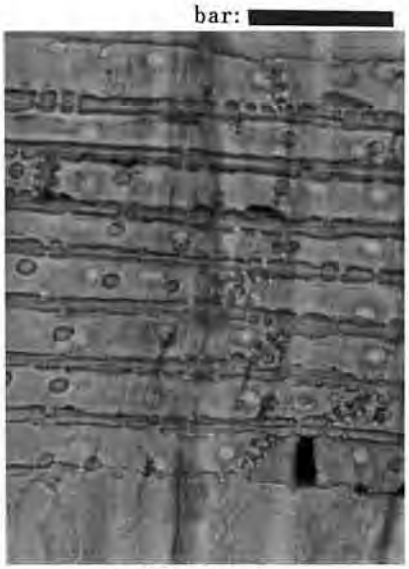
bar: ■



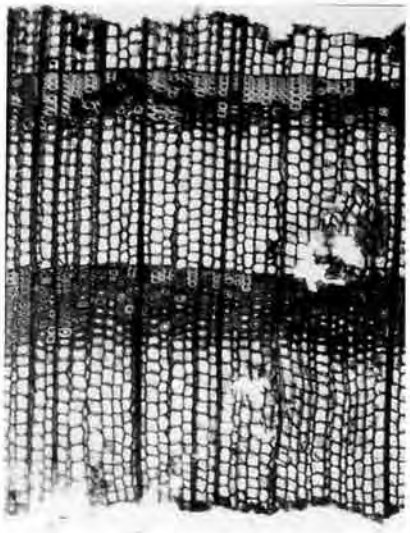
1a　モミ属（横断面）
試料No.12　bar:0.5mm



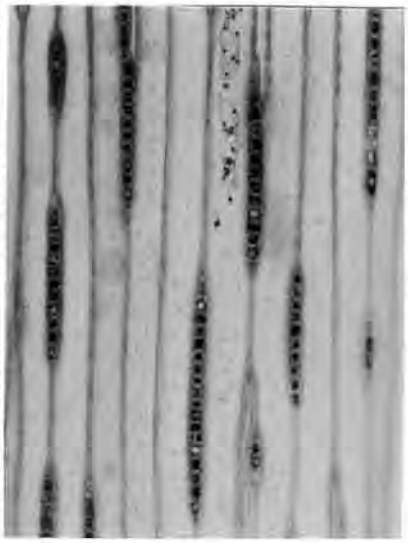
1b　モミ属（接線断面）
試料No.12　bar:0.2mm



1c　モミ属（放射断面）
試料No.12　bar:0.05mm

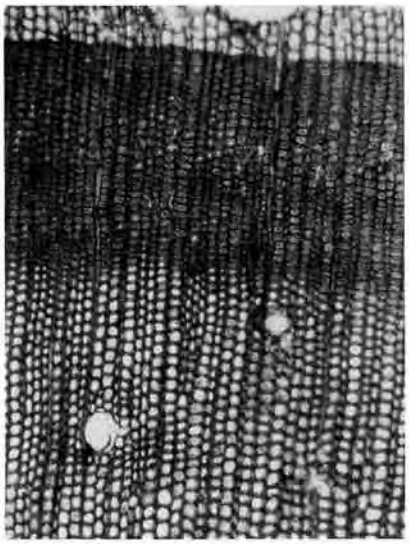


2a　ツガ属（横断面）
試料No.14　bar:0.5mm



2b　ツガ属（接線断面）
試料No.14　bar:0.2mm

2c　ツガ属（放射断面）
試料No.14　bar:0.05mm

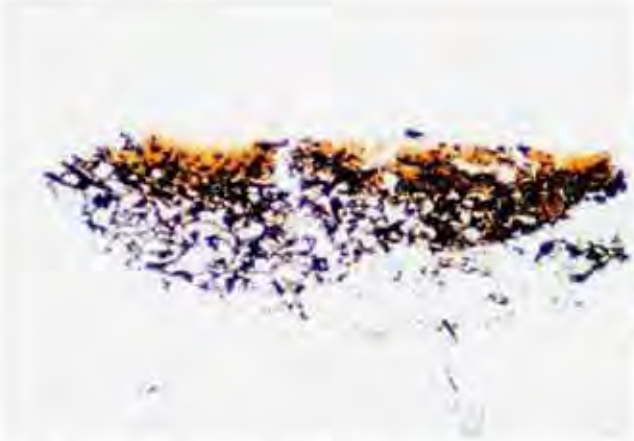


3a　アカマツ（横断面）
試料No.2　bar:0.5mm

3b　アカマツ（接線断面）
試料No.2　bar:0.2mm

3c　アカマツ（放射断面）
試料No.2　bar:0.05mm

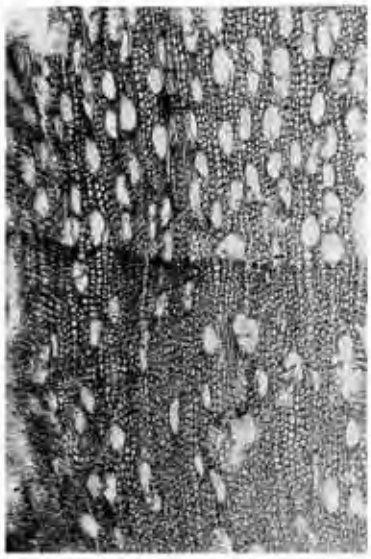
図版36



No.1　漆器内面の塗膜断面(×400)

No.2　漆器外面の塗膜断面(×400)

本丸大手北堀出土漆器(77)の塗膜分析



木口(×40)

柾目(×40)

板目(×40)

本丸大手北堀出土漆器(77)の樹種同定

木口

柾目

板目

本丸大手北堀出土下駄(12)の樹種同定

報告書抄録

フリガナ	しせき　かのうじょうあと
書名	史跡　加納城跡
副書名	
巻次	2
シリーズ名	(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書
シリーズ番号	第18集
編著者名	恩田裕之・新山雅弘・植田弥生・(株)吉田生物研究所
編集機関	財団法人　岐阜市教育文化振興事業団　埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒501-3133　岐阜市芥見南山3-10-1
発行年月日	平成22年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
加納城跡	岐阜市加納丸之内ほか	21201	03342	35°23'47"	136°45'48"	1,358㎡	20030722～20030827 20040924～20041108 20050926～20051216 20060922～20061228 20071126～20080317 20080616～20081212	史跡整備のため

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加納城跡	不明	古墳時代～中世		土師器・須恵器 灰釉陶器 山茶碗	
	城跡	戦国時代	整地層か	古瀬戸製品 山茶碗 土師器皿	撹乱の底で、中世加納城内と見られる整地層あるいは遺構を確認
	城跡	近世	堀 1 石垣 8 土塁 1 礎石 2 瓦集積 11	瓦 瀬戸美濃産陶磁器 (大窯・連房製品) 肥前産陶磁器	堀は障子堀であることを確認 本丸大手枡形櫓門の礎石を検出

要約

本丸内の撹乱では、中世加納城城内と推定される状況が確認された。本丸大手北堀にて障子堀を検出した。過去の調査結果を再検討し、本丸の堀は障子堀である可能性が高いことが推定される。本丸内の調査では、撹乱からの出土遺物が近世初頭の遺物群であることが判明し、該期に居住空間があった可能性が高まった。枡形内の調査では、櫓門の礎石・袖石垣を検出し、櫓門の位置と規模がほぼ特定された。

史跡加納城跡2
平成22年3月

発行　岐阜市教育委員会
岐阜市今沢町18番地
(財)岐阜市教育文化振興事業団
埋蔵文化財調査事務所
岐阜市芥見南山3－10－1